

第19図 堅穴住居跡1号出土遺物2

できた。住居跡の規模及び形状は完掘状況からの推定になるが、 $250 \times 186\text{cm}$ の隅丸方形を呈すると思われ、床面積は 3.62m^2 である。床面はⅧ層を掘り抜いてⅩ層に達している。主軸は堅穴住居跡2号とはほぼ同じ略東西方向である。埋土は粒状の黄色、白色バミスをやや多く含む硬質の黒色土である。同じ黒色土・黒褐色土の4号の埋土よりもやや明るくバミスの含量が多いことから、3号と4号の関係を確認することができた。4号が3号を切っている状況から、3号を廃棄後しばらくの期間を経過してから4号が掘られたと考えられる。床面からの出土ではないが埋土中から炭化物が出土し、C14年代測定の結果は、 $8,810 \pm 30\text{yrBP}$ である。床面から柱穴や硬化面は確認されなかった。

埋土中からは土器10点、磨石2点の総計12点の遺物が出土した。その中から、小片で残存状況が悪いものを除き、接合資料を含む土器2点を実測し、掲載した。20・21は胴部片である。20はやや外反して直線的に立ち上がり、胴部上位はやや内湾する。外面は貝殻刺突文を横位に3条、その下に斜位の貝殻刺突を施している。貝殻刺突文のみの施文であることからVI類の下洞峯式土器に相当する。21は直線的に立ち上がり、胴部下位の器壁が厚くなっていることから底部付近の部分であると思われる。やや赤い橙色の外面は丁寧なナデ調整の後、貝殻刺突文を斜位に施す。内面も丁寧なナデ調整で、胎土に金雲母を含む。20と同様に貝殻刺突文のみが施文されることからVI類の下洞峯式土器に相当する。20と21は文様や調整、胎土なども類似していることから、両者は同一個体の可能性が考えられる。

堅穴住居跡4号（第23図）

D - 21区、Ⅸ層上面で、西側の一部が堅穴住居跡3号と重複し検出された。前述したように、重複した床面には若干のレベル差があることからそれぞれの床面を明確に判断できた。

住居跡の形状は $401 \times 170\text{cm}$ の隅丸長方形を呈し、床面積は 4.58m^2 で、本遺跡で最大の堅穴住居跡である。検出当初は連なった2基の遺構として取り扱ったが、切り合ひ関係が見られず、遺構の連続性が確認されたので、1つの堅穴住居跡として判断し調査を行った。検出面からの深さは 26cm であり、床面は小さな凸凹が見られるが、ほぼ平坦である。主軸は3号と同じ略東西方向であるが、3号よりも南東方向へ約 30° ほど傾いている。埋土は粒状の黄色・白色バミスをやや多く含む硬質の黒色土・黒褐色土である。3号の埋土よりもやや暗く、黒色の割合が多い。柱穴や硬化面、炭化物は確認されなかつた。

埋土中からは、外面に斜位の貝殻刺突文を施す土器小片1点と、安山岩製の磨面が残る石皿縁部片1点の総計2点が出土したが、2点とも残存状況が悪いため掲載

には至らなかった。

堅穴住居跡5号（第24図）

C - 17・18区、東側へ緩やかに下っていく緩斜面のⅨ層上面より検出された。北側約4mに堅穴住居跡6号が、北西側約5mに土坑3号が位置している。

平面形状は $230 \times 125\text{cm}$ の隅丸長方形を呈し、床面積は 2.01m^2 である。主軸は略東西方向で、堅穴住居跡2号・3号とはほぼ同じ方向である。検出面からの深さは 24cm であった。埋土は細粒な黄色、白色バミスを含む硬質の暗褐色土で、床面近くの一部に明黄褐色土がプロック状に混在する。床面に硬化面は見られず、茶褐色土が筋状に入り安定した平坦面とはいえない。また地形の傾斜に合わせてやや東側に傾く。

埋土中からは、土器片が2点出土し、その内1点について実測し掲載したが、もう1点については小片のため図化しなかった。22は胴部片で、外開きに直線的に立ち上がるが、胴部上位はやや外反する。包含層遺物と接合しており、その接合距離は約 $2 \sim 23.5\text{ m}$ である。外面上位・中位・下位に2条単位の貝殻刺突文を横位に巡らせて区画し、その間に斜位の刺突文を密に施していることからVI類の下洞峯式土器と思われる。

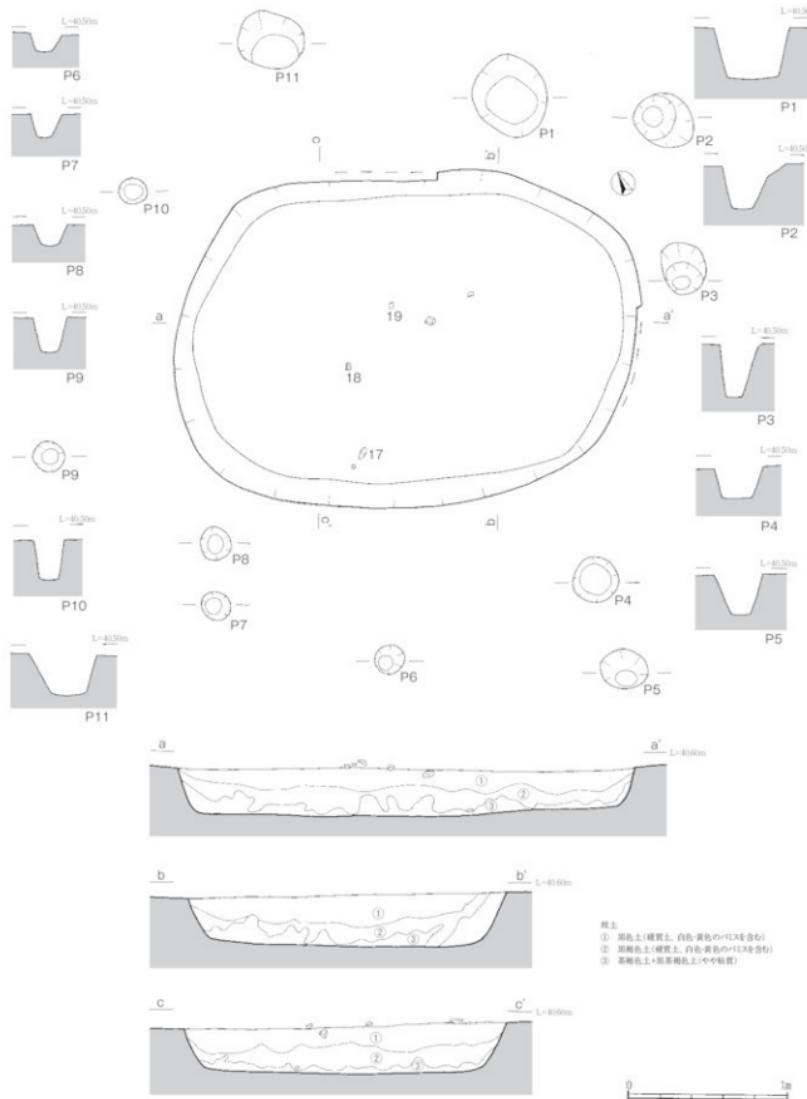
堅穴住居跡6号（第25図）

B・C - 18区、東側へ緩やかに下していく緩斜面で、Ⅷ層上面から検出された。南側約4mに堅穴住居跡5号が、西側約6mに土坑3号が位置している。その他周辺には遺構は検出されなかったが、北側の調査区外には類似した遺構が存在する可能性がある。

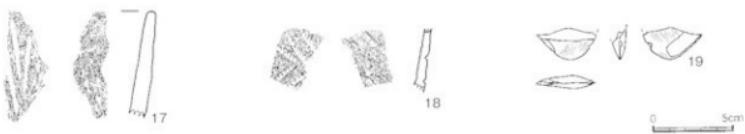
平面形状は $220 \times 148\text{cm}$ の隅丸長方形を呈し、床面積は 1.82m^2 である。主軸は略南北方向から約 30° 西へ傾いており、主軸が斜面に対して平行である。検出面からの深さは 32cm であるが、北東側の隅が深く段を成しており、深さは 35cm となる。埋土は白色バミスを含む硬質の黒褐色土で、床面近くは黄褐色土や茶褐色粘土質土が混在しており安定していない。

堅穴住居跡5号・6号は堅穴住居跡1号～4号の住居跡群と距離があり、やや高台に位置している。また、形状もやや小さめでコンパクトであるという特徴がある。

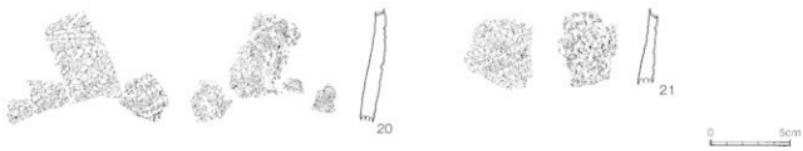
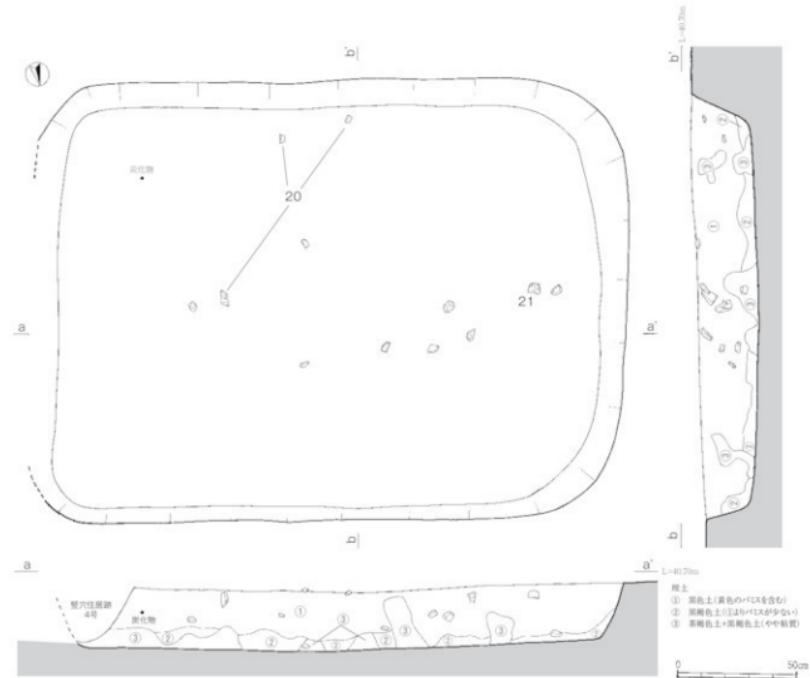
埋土中から遺物が6点出土した。このうち土器1点を実測・掲載し、残りの5点は小片であつたため図化しなかった。23は、やや外反しながら直線的に立ち上がる土器の胴部である。外面はにぶい橙色で、横位と斜位の貝殻刺突文が交わるように施されているが、内面は剥落により欠損している。胎土には細粒な金雲母が混ざる。貝殻刺突文のみが施された胴部片であることから、VI類の下洞峯式土器に相当する。



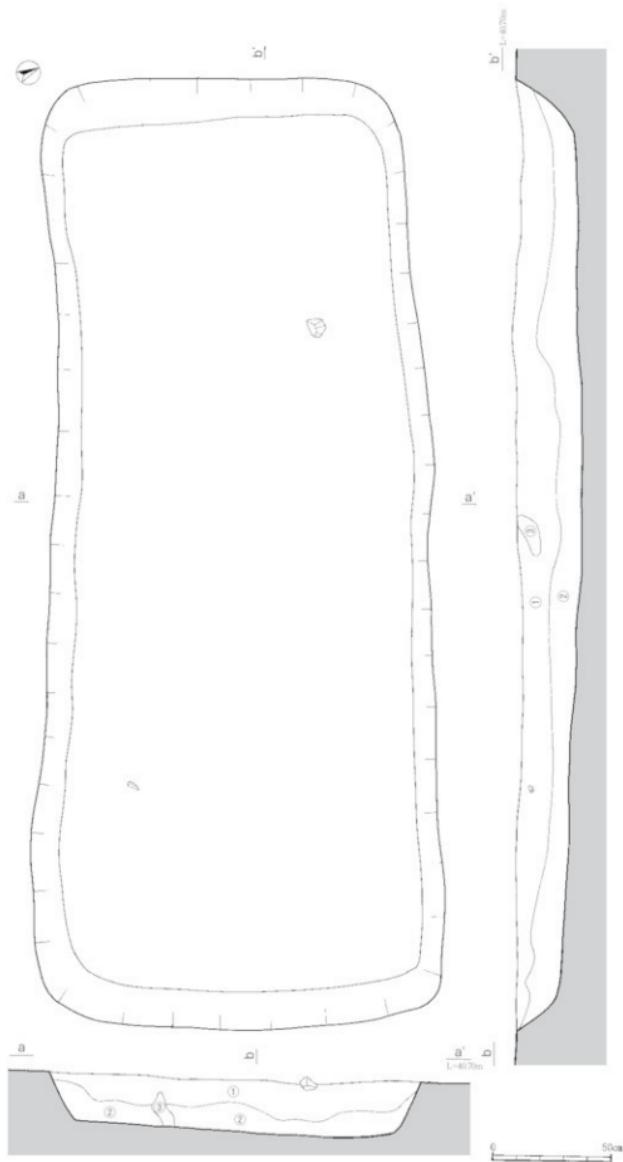
第20図 堅穴住居跡2号



第21図 竪穴住居跡2号出土遺物



第22図 竪穴住居跡3号及び出土遺物



第23図 壺穴住居跡4号

2 堪穴遺構（第 26~27 図）

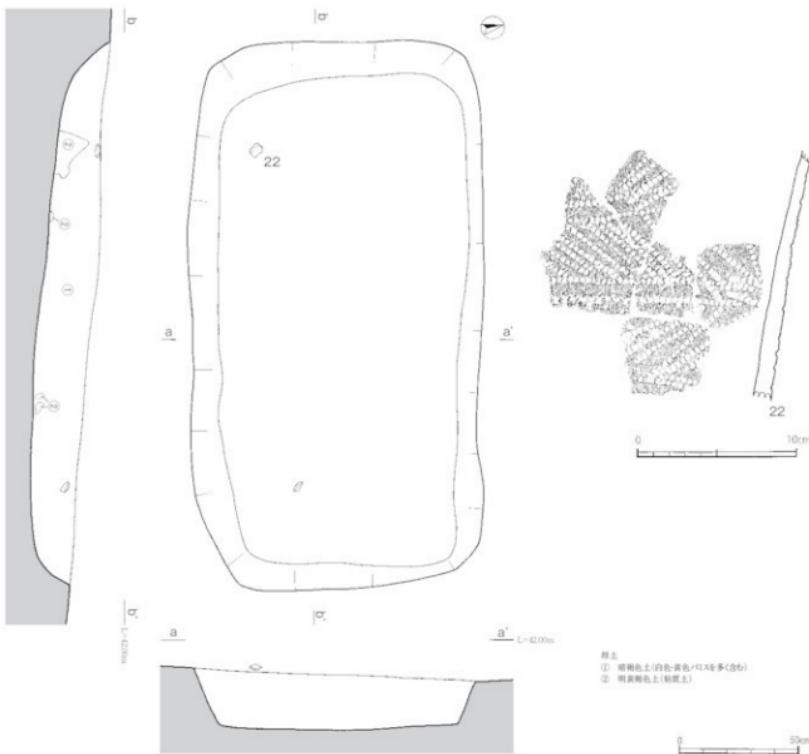
堪穴遺構は 2 基検出された。検出面は前述の堪穴住居跡と同じⅧ層上面であり、両者とも平面形は隅丸方形を呈している。検出当初は堪穴住居跡として調査していた。しかし、床面が黒褐色土と茶褐色土があり交じり凸凹した不安定な状態であったことから住居跡とは判断しなかった。しかし、平面形が隅丸方形を呈すること、堪穴住居跡と埋土堆積の様相と似ていること、遺物や炭化物がわずかながら検出されていること、堪穴住居跡が検出されたエリアに位置することなどから、堪穴住居跡との関連性のある堪穴遺構とした。埋土はⅧ層に相当する 1~2 mm の白色バミス、1~5 mm の黄色バミスを含んだ黒褐色土が主体であり、その直下にやや硬い暗黒褐色土層が見られる。2 基は、調査区東側の緩やかな平坦面の

19 区に位置する。周囲には堪穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石が見られ、他遺構に取り囲まれている状況である。

堪穴遺構 1 号（第 26 図）

C - 18・19 区、東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された。西側に堪穴住居跡 5 号、南東側に堪穴住居跡 2 号が位置し、これらの遺構とは、7~10 m 程度離れて位置している。

堪穴遺構 1 号は 262 × 245 cm のほぼ方形を呈し、床面積は 5.56 m² である。主軸は略東西方向であり、検出面からの深さは 28 cm である。埋土は粒状の黄色・白色バミスを含むやや硬質の黒褐色土で、下位は黄色バミスを多く含み、さらに硬質の黒褐色土である。床面に硬化面は見られず、黒褐色土と暗褐色粘質土等が入り混ざり凸凹した状態である。



第 24 図 堪穴住居跡 5号及び出土遺物

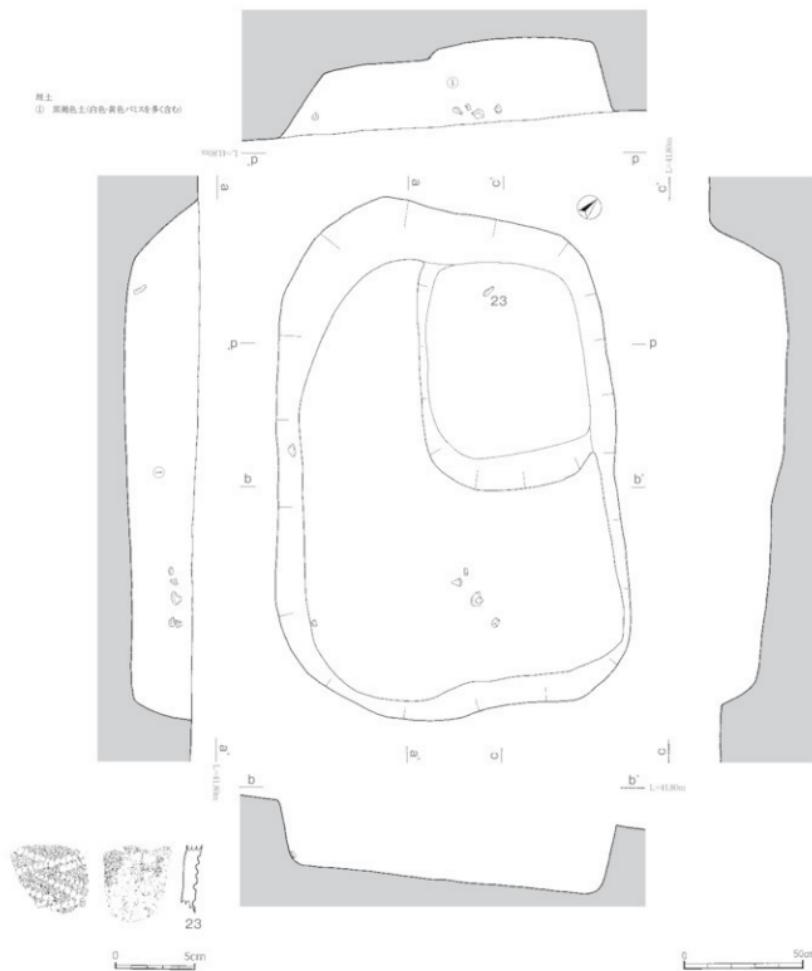
埋土中から遺物の出土は確認されなかったが、炭化物がわずかに出土し、C14年代測定を行った結果、8,820 ± 30yrBPであった。

竪穴遺構2号（第27図）

D-19区、竪穴遺構1号の南東約10mの、東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された。隣接した遺構は

なく、南方向6~15mには竪穴住居跡、連穴土坑、土坑などの遺構が位置している。

竪穴遺構の形状は177×185cmのほぼ隅丸方形を呈し、床面積は3.27mである。主軸は略東西方向であり、検出面からの深さは33cmである。埋土は粒状の黄色、白色バミスを含む黒褐色土で、下位の床面近くは、白色・



第25図 竪穴住居跡6号及び出土遺物

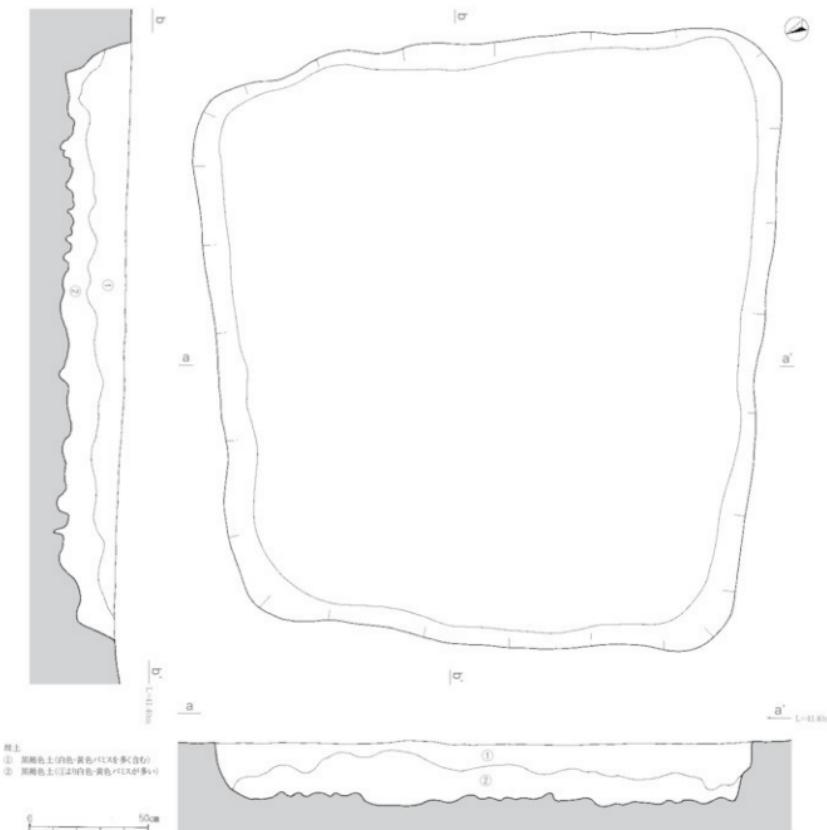
黄色バミスを多く含む暗褐色土である。当遺構の東側は、樹根、地層の横転、壁面の崩壊などが部分的に見られる状況であったため、その部分については、推定線で示している。炭化物も埋土中より出土し、C14年代測定の結果は $8,950 \pm 40$ yrBP である。

埋土中からは土器片3点が出土しており、その中から土器片1点を実測し掲載した。残りの土器片2点は小片であったため図化できなかった。24はやや広がりながら直線的に立ち上がり、口縁部は端部で器壁が薄くなる。口唇部は水平な平坦面を持ち、断面方形を呈す。口縁部

外面に横位の刺突文が4条巡り、胴部には1単位3条の短い貝殻条痕を鋸歯状に施す。内面調整は、丁寧なナデ調整が施される。胎土に金雲母が多く混ざる。貝殻刺突文と短い貝殻条痕を組み合わせて文様を構成することから、罐類土器に分類できる。

3 連穴土坑 (第28~29図)

連穴土坑は、3基検出された。いずれも19・20区のはば平坦面で検出された。検出面はいずれもⅧ層上面で、埋土はⅨ層に該当する細かい黄色及び白色バミスを含む



第26図 竪穴遺構1号

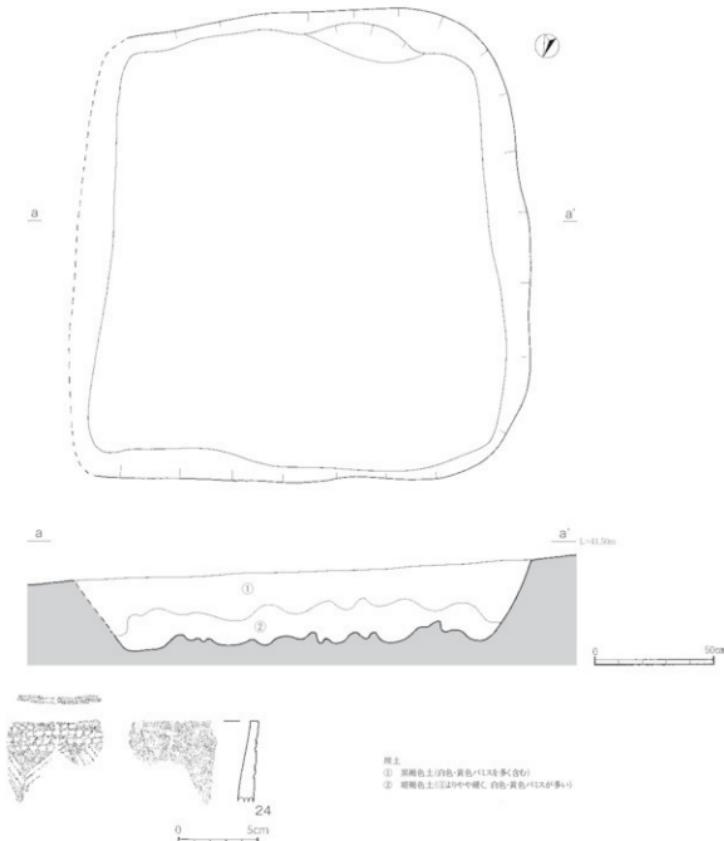
黒色土及び黒褐色土が主体であり、下位に黒色土の小ブロックを含むやや粘性のある黒褐色土が堆積している。周囲には土坑・堅穴住居跡・堅穴遺構等の遺構が集中しているエリアに位置している。当初土坑として取り扱つたものの中で、平面形状やブリッジ部分の存在、崩落の痕跡などを総合的に判断し、連穴土坑として取り扱った。

連穴土坑 1号（第 28 図）

E - 20 区、わずかに東側へ下っていく緩斜面で検出された。北方向に土坑 5 号、東方向に堅穴住居跡 1 号、南東方向に連穴土坑 2 号が隣接する。平面形の全長は

193cmで、円形の煙出部と梢円形の開口部から構成されている。

煙出部が 52×46 cm、深さ 36cm、開口部が 126×76 cm、深さ 46cm を測る。硬質な薩摩火山灰層を利用したブリッジが残っており、煙道部は約 18×20 cm であった。床面に平坦面を持ち、煙道部の下が一番深く、煙出部、開口部両方向へわずかに傾斜している。主軸は略東西方向で、標高の高い西側に煙出部が位置している。明確な焼土痕は確認されなかったが、煙出部側の埋土中より炭化物が出土し、C14 年代測定の結果は、 $8,920 \pm 40$ yr BP



第 27 図 堅穴遺構 2号及び出土遺物

である。

煙道から土器底部片1点が出土した。25は内外面とも工具ナデによる調整が施されているが、内面の調整は粗い。土器型式に関しては、判断できる肩部や文様が残っていないため不明である。

連穴土坑2号（第29図）

E・F-20区、わずかに東側へ下っていくほぼ平坦面で検出された。連穴土坑1号から南へ約3m、堅穴住跡1号から西へ8mの位置に検出された。主軸は略南北方向であり、連穴土坑1号とはほぼ90°ずれる。ブリッジ部分は崩壊しており原型を留めていないが、平面形がこけし型を呈しており、くびれている部分はブリッジの名残と考えられることから、南端部分が煙出部と思われる。開口部の北端は連穴土坑3号に切られており、ブリッジも崩落していることから全体像は不明であるが、検出状況から全長約210cm程度、煙出部の径は50cm、深さ24cm、開口部の横幅は64cm、深さ26cmと推測される。開口部の断面形は深皿形を呈し、床面は平坦面を形成する。くびれ部の埋土④には埴層の小プロックが混ざり、ブリッジ部分の崩落痕と思われる。

埋土中より遺物の出土は無かったが、床面近くの埋土中から炭化物が出土しており、C14年代測定の結果は、 $8,850 \pm 40$ yrBPである。

連穴土坑3号（第29図）

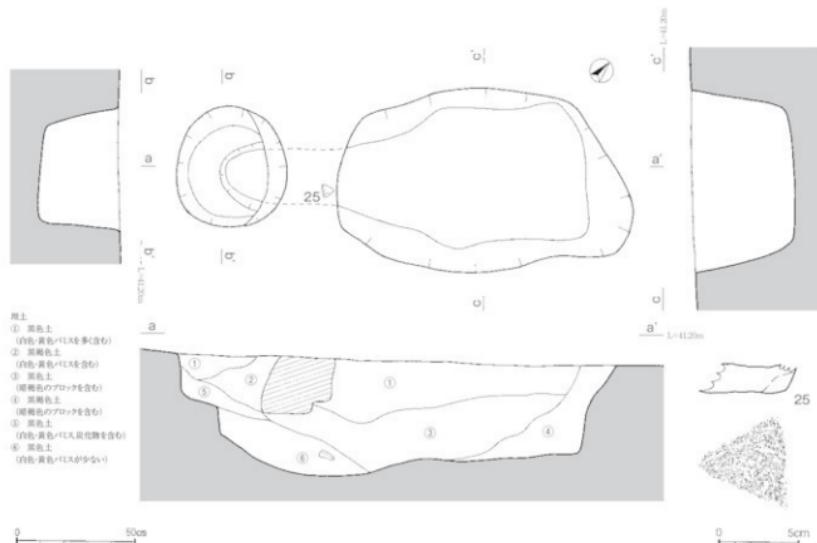
E-19・20区、連穴土坑2号の北端を切るように検出された。主軸は略東西方向であり、北方向約3mに連穴土坑1号が位置しており、主軸も同じ略東西方向である。

平面形の全長は184cmで、円形の煙出部と楕円形の開口部から構成されている。煙出部が42×40cm、深さ28cm、開口部が132×76cm、深さ28cmを測る。ブリッジ部分が残っており、煙道部は約12×10cmであった。開口部の床面は平坦面を形成するが、煙道部分がやや高くになり、また幾分狭くなっている。煙出部後方の床面には段があり、階段状を呈する。

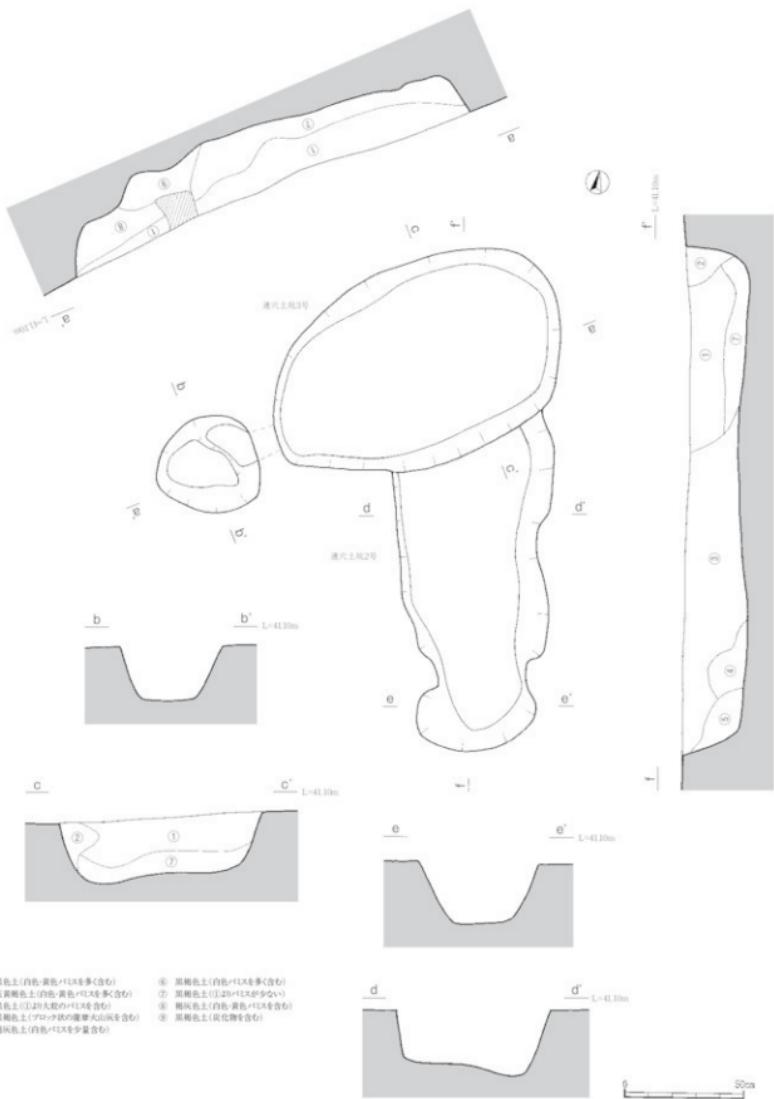
埋土中から遺物の出土は無かったが、開口部の煙道部側で焚口と思われる付近から炭化物が出土し、床面には硬化面が広がっていた。炭化物のC14年代測定の結果は、 $8,890 \pm 30$ yrBPである。炭化物の測定結果より、連穴土坑2号と3号は時代的にほとんど差がないが、2号の方が若干古い結果であること、また3号が2号を切っている状況からも2号より3号が新しい時期のものと考えられる。

4 土坑（第30～35図）

土坑は、調査区内から15基検出された。検出面はいずれも埴層上面で、埋土はⅦ層の黒褐色土が主体である。



第28図 連穴土坑1号及び出土遺物



第29図 連穴土坑2号・3号

本遺跡の尾根部に当たる 14 区を境に、緩やかに下っていく東側では 14 基が検出されているが、地形が急斜面の西側では土坑 2 号の 1 基のみが検出された。尾根に近い E・F - 15・16 区に集中域が見られる。埋土中に被熱により赤化した破碎繩が含まれ、周辺には掘り込み内に大量の繩を伴う集石が位置していることから、土坑の上面に繩の集中等は確認されていないくとも、集石の掘り込みであった可能性が考えられる。

検出された土坑は、平面形の形状により次のように、長楕円形・楕円形・円形の 3 タイプに分けた。以下、分類に従い記述する。

I 類……長楕円形を呈するもの

(1 ~ 5 号)

II 類……楕円形を呈するもの

(6 ~ 12 号)

III 類……円形を呈するもの

(13 ~ 15 号)

【I 類】

土坑 1 号（第 31 図）

C - 15 区、東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された I 類の土坑である。北側は断面が崩落等のために平面プランが不明確であった。北東 - 南西軸で 184cm を測る。検出面からの深さは 12cm で、断面は浅い皿形を呈している。埋土は細かいバミスを含む黒色土であり、多くの遺物が出土した。他の土坑とは離れた場所にあり、東隣に集石 10 号が接する。

一般繩を含め計 20 点の遺物等が埋土中から出土している。土器は無文のものが 2 点、斜位の貝殻条痕文を施すものが 1 点、石器が 3 点であった。土器についてはいずれも小片であったため図化しなかった。石器 1 点については実測し掲載した。26 は全体の 1/2 以上を欠損する磨石の破損品である。上面に磨痕がわずかに残る。

土坑 2 号（第 31 図）

E - 12 区、西側の谷へ下っていく斜面で検出された。平面規模が 124 × 55cm、略東西方向に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 13cm で、断面は皿形を呈し、埋土は細かいバミスを含むやや硬質な黒色土である。西側の斜面で検出された唯一の土坑であり、周辺には集石 28 号・31 号が検出されていることから、集石の掘り込みの可能性も考えられる。

埋土中から 10 点の遺物が出土し、その中から石器 1 点を実測し掲載し、それ以外の遺物については小片で残存状況が悪かったため図化しなかった。27 はホルンフェルス製の石斧の刃部である。上下両面を丁寧に研削し、銳利な刃部を作り出している。

土坑 3 号（第 32 図）

C - 17 区、東側へ下っていく緩斜面で検出された。平面規模が 159 × 87cm、略東西方向に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 42cm で、断面は幅広い逆台形を呈しており、1 類の他の土坑とはやや異なる断面形状である。埋土は細かいバミスを含む黒色土で、硬くしまり、わずかに埴層のバミスが混ざる。東側へ約 4 ~ 5m 離れたところに堅穴住居跡 5 号・6 号が位置している。

遺物は埋土中より 5 点出土した。その中から土器 1 点について実測し掲載した。残りの 4 点については小片のため図化していない。28 は直線的に立ち上がる円筒形を呈した土器の底部である。復元底径は 19.0cm で、外面には斜位の短い貝殻刺突文を鋸歯状に施し、底面近くには横構に施す。VI 類の下剥峯式土器に相当する。

底面近くの埋土中から炭化物が出土しており、C14 年代測定の結果は $8,840 \pm 40$ yrBP である。

土坑 4 号（第 32 図）

E - 20 区、ほぼ平坦面で検出された。平面規模は 196 × 60cm であり、略南北に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 17cm で、断面は皿形を呈している。埋土は細かいバミスを含む黒色土の單一土である。周辺には遺構が多く点在しているエリアで、約 2m 南に堅穴住居跡 1 号、約 6m 西側に連穴土坑 1 号、やや南西側に連穴土坑 2 号・3 号が位置する。その他にも堅穴住居跡 3 号・4 号、土坑 5 号などもあり、それらとの関連性も考えられる。

遺物は土器 2 点が出土したが、小片のため図化しなかった。土器はいずれも胴部片であり、外面に貝殻刺突文を施すところから VI 類の下剥峯式土器に相当する。

土坑 5 号（第 32 図）

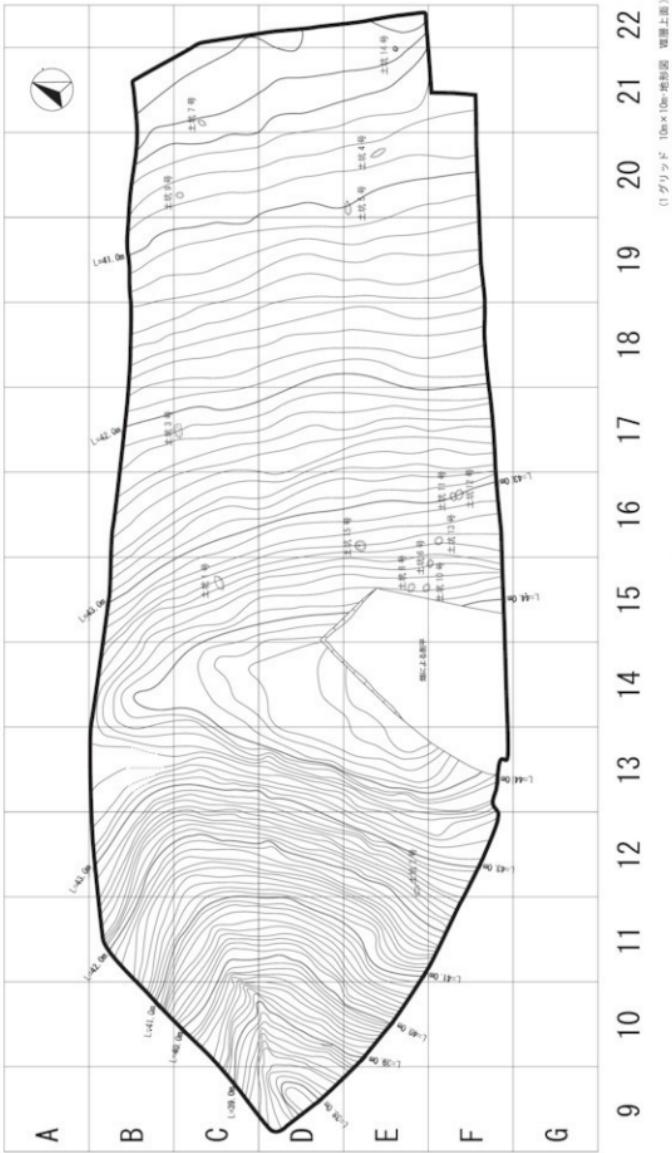
E - 20 区、東に向かってわずかに下っていくほぼ平坦面で検出された。平面規模が 166 × 73cm、略東西方向に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 19cm で、断面は皿形を呈し、埋土は細かいバミスを含む黒色土である。土坑 4 号と同じく周辺には堅穴住居跡や連穴土坑などが点在しており、それらの遺構に関連した施設の可能性がある。

埋土中から砥石の破片と思われるものが 1 点出土したが、小片のため掲載には至らなかった。

【II 類】

土坑 6 号（第 33 図）

F - 15 区、土坑 8 号の南東方向約 3 m のほぼ平坦な面で検出された。西隣に土坑 10 号、東隣に土坑 13 号があり、同タイプの土坑が集中する中に位置している。平面規模が 97 × 70cm で、略東西方向に長い楕円形を呈しており、検出面からの深さは 22cm で、断面は皿形を呈している。埋土は細かいバミスを含む黒色土である。



第30図 土坑配置図

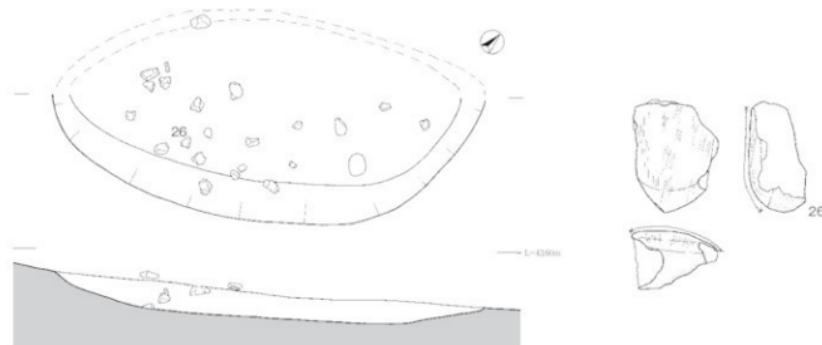
遺物は計8点が埋土中より出土している。その中から土器3点、石器1点の計4点について実測し、掲載した。

29は直線的に立ち上がる土器の胴部である。浅い斜位の貝殻条痕文を施した後、縦位の貝殻刺突文を施す。刺突文の間隔は不規則である。文様形態・内面のケズリ痕・器壁の薄さからII類に相当し、加賀山式土器と思われる。30は胴部片で、外面に貝殻腹縁部を用いた斜位の刺突文を施し、内面調整はナデが施される。VI類の下剥峯式土器に相当する。31は底面の破片であり、内面は横位のナデ調整を施し、外面にはミガキ痕が直線的に残る。

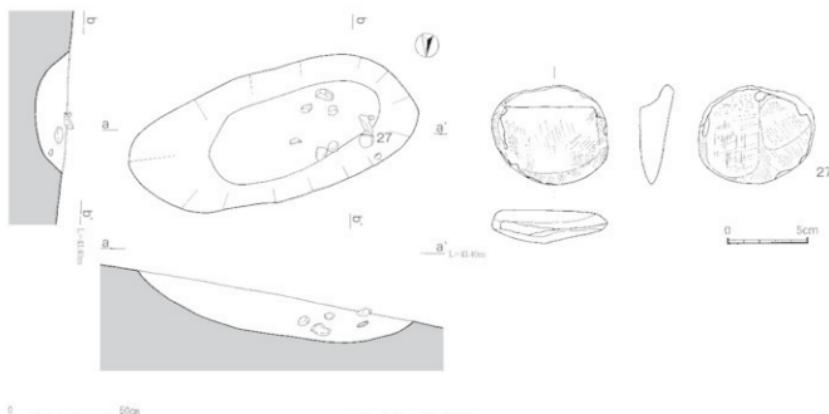
型式は不明である。32は砂岩製の砥石の剥離片である。

土坑7号（第33図）

C-21区、堅穴住居跡2号の西隣の平坦面で検出された。周辺には堅穴住居跡2号とそれに伴うピットが点在しているが、近辺にその他の遺構は確認されない。土坑の時期は特定できないが、堅穴住居跡2号と何らかの関係が考えられる。土坑の平面規模は98×58cm、略南北方向に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは20cmで、底面に平坦面を形成し、断面は深皿形を呈している。埋土は細かいバミスを多く含む黒褐色土で、下位



土坑1号及び出土遺物



土坑2号及び出土遺物

第31図 土坑1（I類）及び出土遺物

にわずかに細粒な黄色バミスが混じる。土器・石器等の遺物は検出されなかった。

土坑8号（第33図）

E - 15区、東側へ下っていくのは平坦面で検出された。平面規模が $108 \times 83\text{cm}$ 、略東西方向に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは 23cm で、断面は底面に丸味を持った深皿形を呈している。埋土は細かいバミスを含む黒褐色土で、底面付近には下層の土を含んだ暗茶褐色土が堆積している。E・F - 15・16区は特に土坑が集中しているエリアであり、北側に土坑15号、集石9号、南側に土坑6号、10号が近接している。

遺物及び一般礫計26点が、土坑の埋土から出土している。一般礫が大部分を占めるため、集石の掘り込みの可能性も考えられるが、当跡道で検出された他の集石よりも礫の密集成がみられず、また、礫の出土したレベル差もあり、全体的にまとまりもないことから土坑として掲載した。その中から土器1点を実測し掲載した。33は土器の胴部片であり、外側に細かい押型文を横側に施すことからⅤ類に分類される。

土坑9号（第33図）

C - 20区、東側の平坦面で検出された。周辺に遺構はほとんど無く、出土遺物も少ない。付近で検出された集石14号も約7m以上離れている。土坑の平面規模は $87 \times 71\text{cm}$ の楕円形を呈しており、検出面からの深さは 48cm とやや深く、断面は逆台形である。埋土は細かいバミスを多く含む黒色土が主体となり、下位に茶褐色粘質土が小ブロック状に混ざる。

遺物は実測・掲載した土器片1点が出土した。34は横位と斜位の貝殻刺突文を組み合わせて施文している胴部片である。小片のため判定はできないが、VI類の下剥峯式土器に相当すると思われる。

土坑10号（第33図）

E・F - 15区の全体的に東側へ下っていく緩斜面で検出された。周辺には土坑・集石が多く検出されており、北側に土坑8号、東側に土坑6号が位置しており、どちらも約2m程度と近接している。平面規模が $97 \times 70\text{cm}$ 、土坑8号と同じく略東西方向が長い楕円形を呈している。検出面からの深さは 22cm で、断面は深皿形を呈し、底面に多少凹凸が見られる。埋土は粘性のある暗茶褐色土が大部分をしめ、上位に細かいバミスを含む黒褐色土が堆積している。

埋土中からは、土器1点、石器1点を含む計40点の遺物・自然礫が出土している。大部分が一般礫であり、被熱を受けた破碎礫であることから、集石の掘り込み部の可能性も考えられるが、礫の密集成がみられないこと、それぞれに出土した礫のレベル差があることから、土坑として取り扱った。埋土から出土した土器・石器はいずれも掲載していないが、土器は外面に貝殻条痕文を施す。

小片のため全体像は不明であるが、IV類の石坂式土器に相当すると思われる。石器は砂岩製の罐器で、刃部に敲打痕が残る。

土坑11号（第34図）

F - 16区、東側に下していく緩斜面で土坑12号に切られた状態で検出された。土坑が集中して検出されたE・F - 15・16区の東端に位置する。長径が 96cm の楕円形を呈している。検出面からの深さは 10cm で、断面は浅い皿形を呈している。埋土は細かいバミスを含む黒色土で、部分的に暗茶褐色土が混ざる。

埋土中に遺物は確認されなかった。

土坑12号（第34図）

F - 16区、土坑11号の南東の一部を切るように検出された。新旧関係では、11号よりも新しいものである。平面規模が $105 \times 98\text{cm}$ の楕円形を呈しており、検出面からの深さは 10cm である。断面は皿形を呈しており、埋土は土坑11号と同じ黒色土であるが、土坑11号よりもバミスの量が多く色調も若干暗い。

埋土より土器2点、石器2点の計4点の遺物が出土しており、小片で残存状況が悪いものを除き、土器1点、石器1点の計2点を実測し掲載した。35は胴部片で、外側に条痕文がわずかに確認できる。砂粒を多く含む駄土で内面にはナデが施される。Ⅶ類の桑ノ丸式土器に相当すると思われる。36は花崗岩製の磨石であり、下面是凹んで左側面に変色が見られる。

【III類】

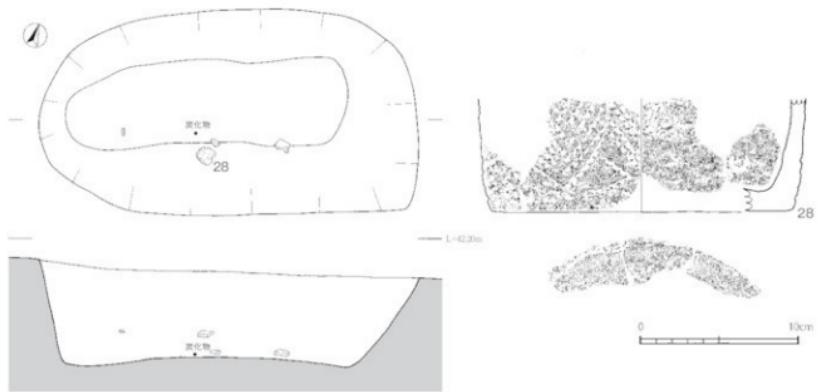
土坑13号（第35図）

F - 16区、東側に下していく緩斜面で土坑6号と土坑11号・12号に挟まれるように検出された。土坑が集中しているエリアに位置している。平面規模が $96 \times 90\text{cm}$ のほぼ円形を呈し、検出面からの深さは 21cm で、断面は逆台形を呈している。埋土は細かいバミスを含む硬質的な黒色土である。

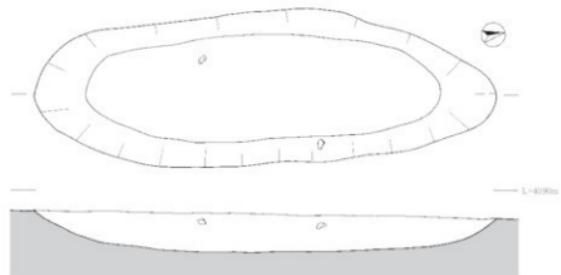
遺物は埋土中から土器片5点が出土した。その中から小片のものを除き、土器2点について実測し掲載した。37・38はいずれも胴部片である。37は、斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に組み合わせて施文する。38は横位の貝殻刺突文を横位に強く施文する。いずれもVI類土器の下剥峯式土器に相当する。

土坑14号（第35図）

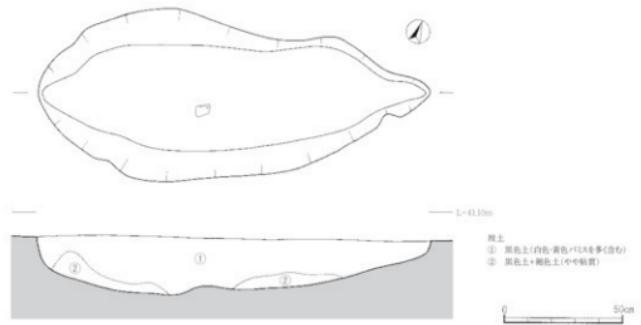
E - 21区、本遺跡の東端のほぼ平坦面で検出された。堅穴住居跡4号の南東約6mに位置し、それ以外の遺構は周辺にはみられない。土坑14号より東側に確認トレシチを数カ所入れたが遺構・遺物は検出されなかつたことから、本遺跡の東端に当たると考えられる。平面規模が $66 \times 57\text{cm}$ のほぼ円形を呈し、検出面からの深さは 12cm である。底面の南側に平面規模が $26 \times 22\text{cm}$ 、断面



土坑3号及び出土遺物

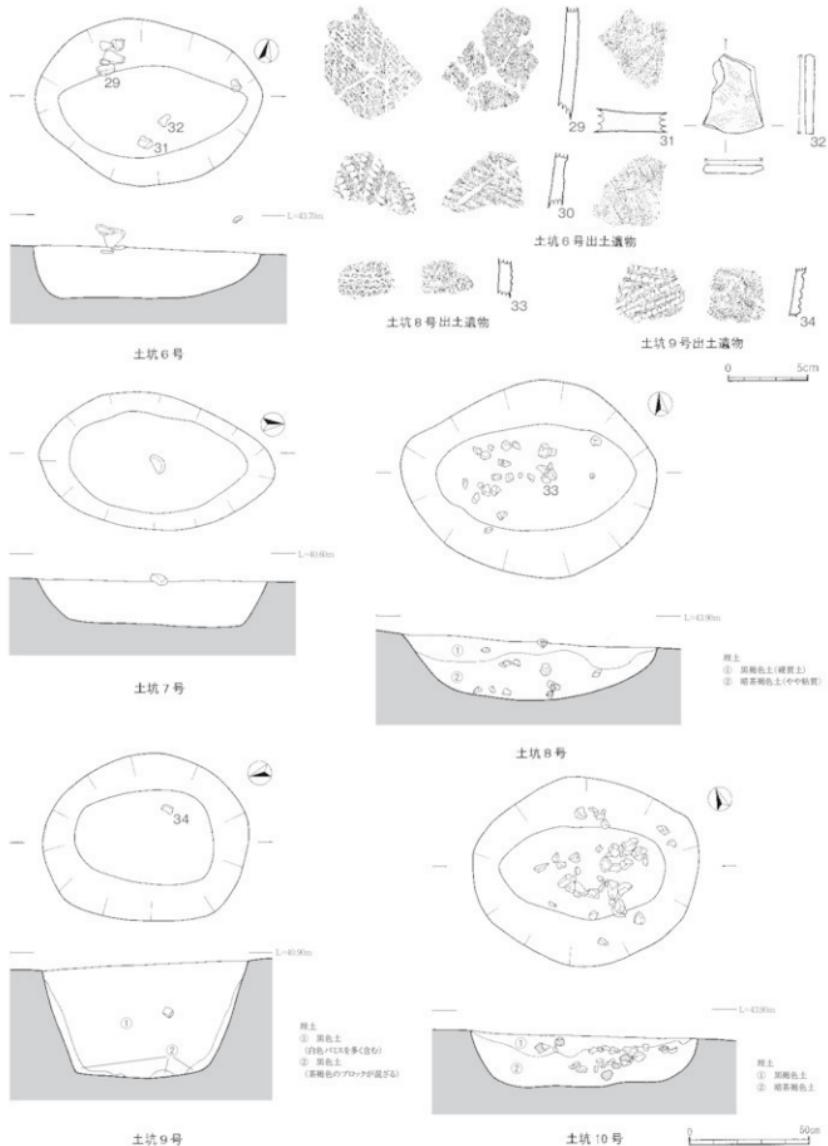


土坑4号



土坑5号

第32図 土坑2（I類）及び出土遺物



第33図 土坑3（II類①）及び出土遺物

が深皿形の掘り込みがあり、二段底となっている。この掘り込みの検出面からの深さは約23cmである。埋土は上位が白色と黄色の細かいバミスを含む黒色土であり、下位は白色と黄色バミスを多く含む黒褐色土であった。

埋土中に遺物は確認されなかった。

土坑15号（第35図）

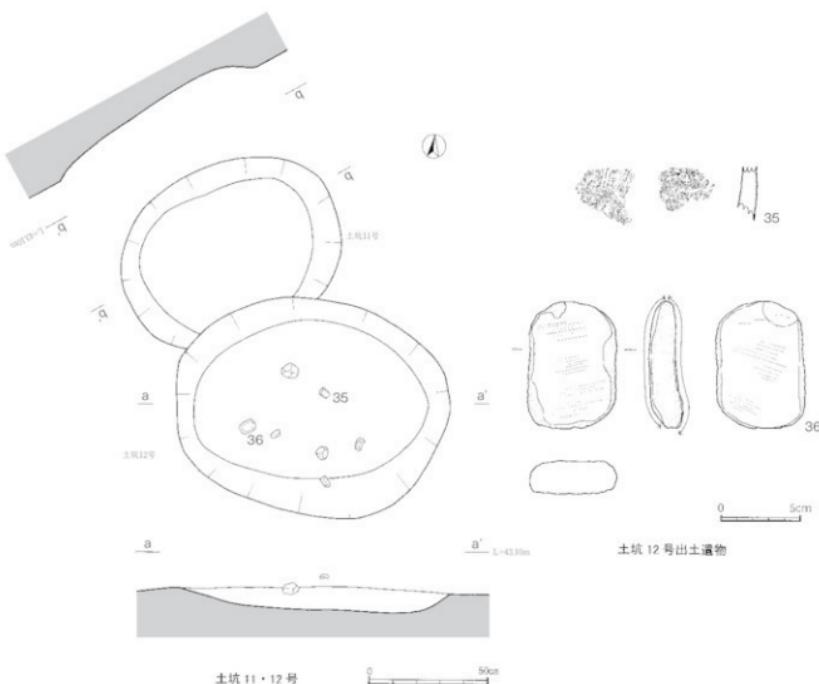
E-16区、東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された。周辺は土坑や集石などが多く検出されており、近接している遺構群の中心付近に位置している。平面規模が126×125cmのほぼ円形を呈している。検出面からの深さは20cmで、断面は深皿形を呈する。底面北側に直径30cm程度の断面レンズ状を呈した浅い掘り込みがあり、二段底となっている。この掘り込みの検出面からの深さは29cmである。埋土はバミスを含むやや硬質な黒色土であり、多くの遺物が掘り込みの中央付近より検出された浅い掘り込み周辺から出土した。掘り込みを持つ

集石2号と集石9号に挟まれており、出土した縄は被熱を受けた破碎縄が中心であることから、掘り込みを持つ集石であった可能性がある。

遺物は計44点が土坑全体から出土し、土器片1点を除きほとんどが被熱を受けた破碎縄であった。土器については、小片のため掲載には至らなかった。土坑8号・10号と同様に集石の掘り込みである可能性が考えられるが、縄それぞれにはレベル差があり、あまり密集していないことから土坑として取り扱った。

5 集石（第36～54図）

集石は堅穴住居跡や堅穴造構が検出された遺跡東側平坦部を除いて、調査範囲の尾根部を中心にはほぼ全域から34基検出された。出土した大量の縄の中で、ある程度の縄の集中が確認されたもの、狭い範囲に散縄状に検出されたもの、縄がやや密集しているもの、掘り込み内から縄



第34図 土坑4（II類②）及び出土遺物

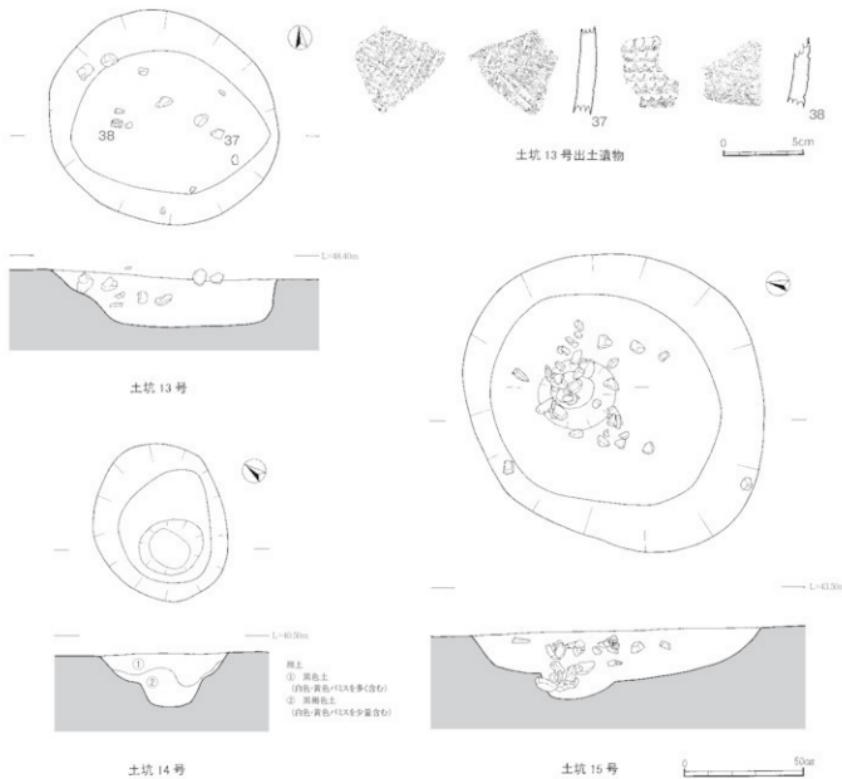
が密集して検出されたものなどを集石として判断した。

本遺跡で検出した 34 基の集石を構成する總點数は 2441 点であった。その中から石器として確認したもののが 44 点で、23 点を掲載した。また、集石内から 124 点の土器を確認し、その中から 51 点を掲載した。

本遺跡内では集石としてのまとまりのない砾が多数出土している。その特徴としては、ほとんどのものに被熱の痕跡が見られ、表面の変色や劣化、破砕などが確認される。特に被熱による破碎砾が多くみられ、使用後に廃棄または放棄されたものと考えられる。出土状況の特徴としては、調査区内で一番標高の高い尾根部(14 区付近)では少なく、そこから東西両方向へ下るにつれて出土量が増大している。東側の緩斜面では 16~18 区でピーク

を迎える。東側へ進むにつれて砾の出土量が徐々に少なくなっていく。20~22 区では検出されなかった。反対に谷地形で急斜面である西側では、下り始めた直後の 13・14 区付近から出土量が増え始め、12 区から西に向かって包含層の厚みも増し、遺物量も膨大な出土状況となっていく。出土レベルが安定せず、高低差があることから尾根から谷底へ向かって移動したものも多数存在すると想われる。

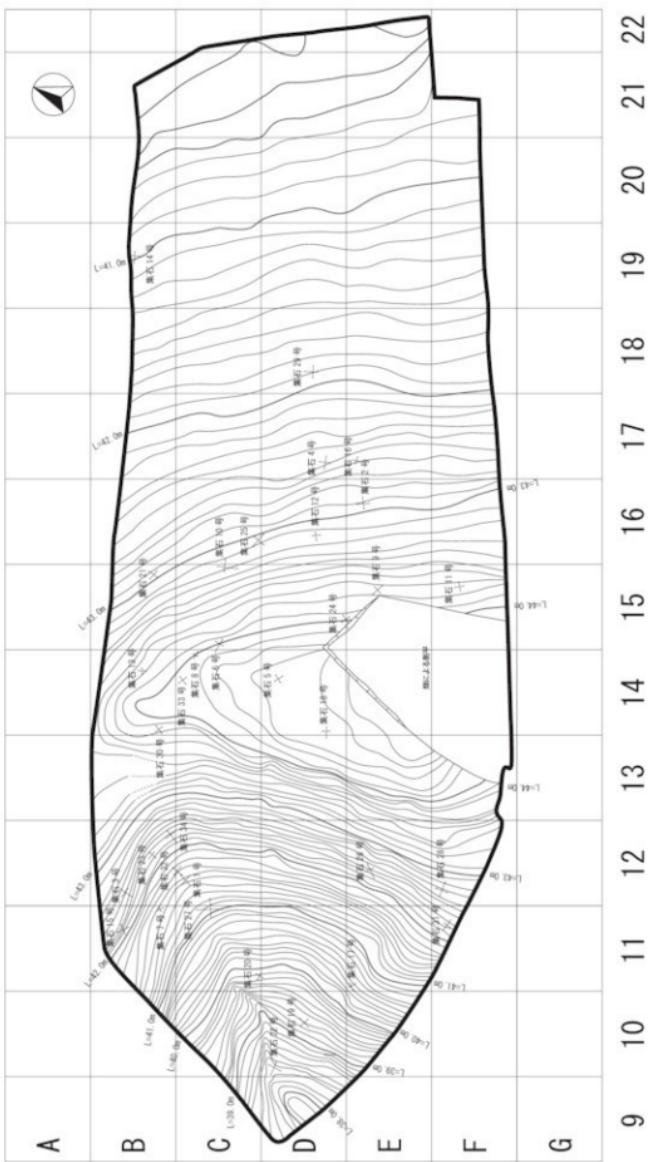
集石は砾の出土分布と同じように 20~22 区では検出されず、東側の緩斜面では 14~17 区にかけて尾根を取り巻くような位置で集中して確認された。その他に、西側の谷筋へ下っていく B・C - 11・12 区の急斜面上にも集石の集中が見られる。一部を除き、堅穴住居跡や堅穴



第35図 土坑5（Ⅲ類）及び出土遺物

(1グラフド) 10m×10m地盤断面図

第36図 集石配置図



遺構が検出された東側の平坦面から集石が検出されないことから、東側の緩斜面や西側の急斜面の礫のはほとんどは、集石での使用を目的として持ち込まれたものであると考える。なお、礫の大きさは最大長を記載してある。

検出された集石は、掘り込みの有無、礫の出土状況、礫数の違いなどで以下のように分類した。

I 類……掘り込みを持つもの

a タイプ…浅い円形の掘り込み

(1号～8号)

b タイプ…深い円形の掘り込み

(9号～13号)

II 類……掘り込みを持たないもの

a タイプ…礫が密集しているもの

(14号～18号)

b タイプ…礫がやや密集しているもの

(19号～26号)

c タイプ…散在状に広がっているもの

(27号～34号)

【I-a類】

集石 1号（第37図）

C - 12 区、南西方向へ下っていく斜面のⅦ層中より検出された。周辺には北側に礫数20～50個程度の集石が5基、南側に礫数141個の集石27号が隣接する集石群の中心に位置する。

144 × 115cmの範囲内に、礫が重なり合いながら密集成して出土した。下位には、平面径1×1m程度、検出面からの深さ約20cmの円形を呈した掘り込みがある。礫は底面近くまで隙間なく詰まっており、総数は598個である。この掘り込みは地形に沿って掘られたと思われ、底面も南側へ傾斜している。礫は5cm前後の砂岩質の破碎礫がほとんどを占め、7～8cmを超えるものも混ざるが非常に少ない。

礫間から土器片6点が出土し、実測可能であった2点を実測・掲載した。39はやや外反し直線的に立ち上がる胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕を施した後、縦位の貝殻剥突文を施している。Ⅱ類土器の加賀山式土器に相当する。40は底部片で、復元底径は9.6cmである。わずかに残る胴部には、横位の貝殻条痕が確認できるが、型式については不明である。

集石 2号（第37図）

E - 16 区、東へ下っていく緩斜面のⅧ層中で検出された。下位に平面径が115 × 103cm、検出面からの深さ約20cmの円形を呈した掘り込みがあり、総数143個の礫の全てが掘り込み中からの出土である。南西方向のE・F - 15・16 区には同様の形態をした土坑が集中するエリアがあり、当初は土坑として調査していたが、残存す

る礫が大量であり、かつ集中していたため、集石として取り扱った。

礫は10cm以上のものはほとんど見られず、大部分が被熱した5cm前後の角張った破碎礫である。石材は安山岩、凝灰岩が主流で砂岩、泥岩も混ざる。礫は掘り込み全体に広がっているが、底面からわずかに浮き気味で、各々にレベル差があることから、魔棄礫を集めて投げ込んだ可能性が考えられる。

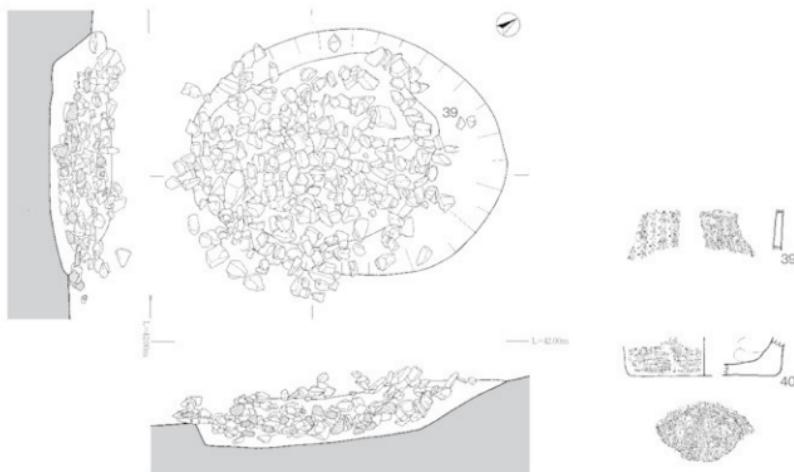
礫間から土器片1点と石器2点が出土し、実測可能であった土器片1点と石器転用品1点の計2点について実測し掲載した。41はやや内湾する胴部片である。外面には斜位の筋円押型文を施す。内面はナデ調整されているが粗い。42は凝灰岩製の磨石である。表面に明確な磨面が確認できるが、平坦面は形成されていない。全面に煤が付着し暗褐色を呈す。煤が厚く付着している部分は実測図に破線で示した。被熱による赤化は内部にまでみられ、内部には剥離やひびが入り脆くなっている状態である。

集石 3号（第38図）

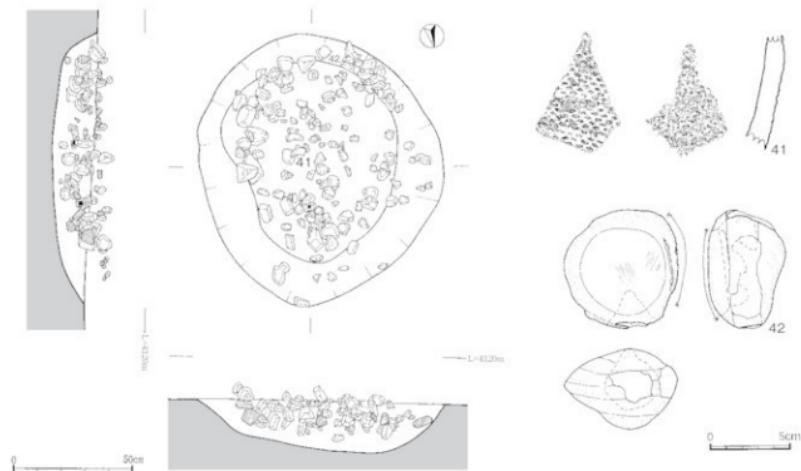
B - 12 区、南西方向へ下る急斜面のⅧ層中より検出された。総礫数は54個を数え、そのほとんどが67×52cmの狭い範囲内に密集し、南側には礫集中部分から転がったと思われる小礫が数個検出された。集中部の直下には平面径52 × 40cm、検出面から深さ10cmの円形の浅い掘り込みがある。

礫は10cm前後、300～500g程度の安山岩が主流で、丸みを帯びた自然礫である。大きさにほとんど差はなく、被熱しているが劣化が少ないと再利用のため集められたものと想定される。

総礫数54個の中から石器の転用品6点、礫を混在して出土した土器1点の計8点を実測・掲載した。43は胴部小片で、外面に浅い貝殻条痕が横位に施される。外面は灰白色、内面・断面は灰黄色を呈す。文様の全体像は不明であるが、Ⅳ類土器の石坂式土器相当の土器であると考えられる。44・47は、砂岩製の破碎した磨石である。部分的に被熱の痕跡が残る。44は、表面に平坦な磨面が形成されている。47は、表面と裏面に磨面が残る。また部分的ではあるが煤の付着がわずかに見られる。45・46は安山岩を素材とした磨石・敲石である。45は、2分の1以上を欠損した破損品である。小さな敲打痕が全面に見られ、周縁部には連続した敲打痕も残る。また表面には平坦な磨面を持つ。46は長径13.8cm、短径10.4cm、最大厚5.4cmの扁平な完形品で、連続した敲打によると想われる大きな敲打痕が周縁部に形成されている。磨面は表面・裏面に確認でき、裏面はやや平坦になっている。48は破碎した石皿の一部で、46・47と同じ砂岩製である。破碎部に被熱による赤化が確認され、二次利用された可能性が高い。49は、表面と右側面に線刻が残る礫であ



集石 1号及び出土遺物



集石 2号及び出土遺物

第37図 集石 I - a類①及び出土遺物



集石 3号及び出土遺物

第38図 集石 I-a類(2)及び出土遺物

る。凝灰岩を用いており、やや凹みのある平坦面に数本の浅い線刻が施されている。被熱により赤化がみられる。

集石 4号（第39図）

D - 17区、東方向へ緩やかに下っていく斜面のⅧ層上面で検出された。尾根部を取り巻く集石群の東端にあたり、これより東側の平坦面では集石の検出は少なく、礫の出土数も少なくなる。

平面径112×102cm程度、検出面からの深さ約20cmの楕円形を呈した掘り込みがあり、埋土は黒色土である。総数61個の礫は掘り込みの中心部にはほぼ密集しており、一部は底面付近にまで達している。礫は10cm前後の砂岩の角礫が主体であり、被熱による破碎のため、表面が赤褐色に変色したり劣化したりしたものが多く混じる。石材や破砕面から同一個体のものが数多く混在していると思われる。出土状況から選別された後に投げ入れられたものと推測される。

礫間から出土した土器2点について実測し掲載した。50は口縁部、51は胴部であるが、小片で全体像は不明である。外面に斜位の貝殻刺突文が施されていることからVI類土器の下剥峯式土器と思われる。

集石 5号（第39図）

D - 14区、集石6号から南へ約8m離れた尾根部の平坦面、Ⅸ層上面で検出された。尾根沿いに並んだ集石の一つである。71×59.4cmの掘り込み内から、礫が密集して出土し、その周辺に関連すると思われる礫が数個出土した。礫总数は42個で、石材は凝灰岩の割合が高い。密集した礫の直下には平面径42×40cm、検出面からの深さ11cmの円形を呈した浅い掘り込みがある。

礫は5~7cmの丸みを帯びた自然礫が大部分で、重さ150g前後が主流であり、尾根部の他の集石と同じように礫が密に出土している。

石器3点とチップ1点が出土し、残存状況の良かった石器1点を実測し掲載した。52は、最大厚2.4cmの扁平な敲石の破碎品である。素材は砂岩を用いている。周縁部右下側と裏面に敲打痕が残る。

集石 6号（第40図）

C - 15区、集石8号と同じ尾根部の平坦面、Ⅹ層上面で検出された。147×137cmの範囲に、礫の集中とその周辺に散礫状の広がりが見られた。礫の集中部の直下から平面径82×78cm、検出面からの深さ12cmの円形を呈した浅い掘り込みが検出された。密集している礫と周辺の礫のレベルから、実際の掘り込み面は検出面よりやや上層であったと考えられる。礫は掘り込みの中央付近に不規則に積み重ねられて出土した。

礫は10cm前後、重さ300~500gの安山岩の自然礫が約半数以上を占め、被熱し変色している。ほとんど破碎は無く、大きさが揃っているが、10cmを超えるものも含まれ

る。散礫は破碎された割合が高い。7~8cmの角礫がほとんどであり、重量100~150gとはほぼ同規模で揃っている。被熱による破碎礫もあり、同一個体のものも含まれる。

總礫数が50個で、同時に出土した土器2点を実測し掲載した。53は斜位の貝殻条痕を施した後に縦位の貝殻刺突文を上書きする胴部片である。胴部は直線的に立ち上がり、内面はケズリ痕が残る。II類土器の加栗山式土器と思われる。54は斜位の貝殻刺突文のみを持つ胴部片で、VI類の下剥峯式土器と思われる。

集石 7号（第40図）

B - 11区、南北方向に下っていく斜面のⅧ層上面で検出された。礫が谷へ向かって數多く出土し、周辺には集石群が検出されている。

68×57cm程度の狭い範囲内に、礫が密集して出土した。平面径30×30cm、検出面からの深さ約13cmの円形を呈した掘り込みがあり、底面近くまで礫が隙間無く密集していた。中心部の礫は10cm前後のものが多く、200~300gの砂岩の角礫が主流であり、500gを超えるものも含まれる。被熱により破碎し、表面が変色したものも多く混じり、同一個体のものが数多く混在していると思われる。

土器などの遺物は検出されなかった。

集石 8号（第40図）

C - 14区、北へわずかに下ていく尾根部の平坦面のⅨ層上面で検出された。近接する集石6号、33号と共に尾根上に位置し、東西の両方向へ下ると礫が多く出土している。50×40cmの範囲に礫の集中が見られる。礫总数は16個と少ないが、下位に97×75cm、検出面からの深さ約19cmの楕円形を呈した掘り込みがある。底面から浮いた状態での出土である。礫は検出面付近からの出土で、埋土からの出土はなかった。集石と掘り込みは、時期差があると考えられる。

礫は径が7~8cmの砂岩の角礫がほとんどであり、重量100~150gとはほぼ同規模で揃っている。被熱による破碎礫もあり、同一個体のものも含まれる。

土器などの遺物は検出されなかった。

【I - b類】

集石 9号（第41図）

E - 15区、尾根の頂上部から東方向へ下り始めの緩斜面のⅩ層上面より検出された。周辺の北側には多数の集石があり、南側には数基の土坑が位置している。尾根を取り囲む遺構のひとつである。

礫層上面での検出時、礫が多少集まっている程度であったが、直下の掘り込みから大量の破碎礫が底面近くまで出土したことから、当初土坑で調査していたものを集石として取り扱った。掘り込みの平面径は106×83cmでは円形を呈し、検出面からの深さは37cmと深

く、中位に段を持ち、断面は逆台形を呈す。底面付近には炭化物の集中が見られた。礫总数は362個で、砂岩の細かい破砕礫が大部分を占める。礫重量の内訳は、99 g以下209個、100~199 g 63個、200 g以上30個である。敷き詰められた形跡が見られないことから、投げ込まれ廃棄されたと思われる。

遺物については礫間から土器片2点が出土し、その内1点を実測・掲載した。55は最大厚1.69cmの底部片であり、内面・底面ともに丁寧なナデ調整が施され、底面は若干の光沢を持つ。型式は不明である。

集石10号(第42図)

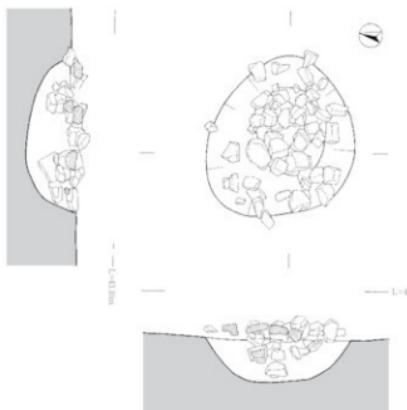
C-15区、東方向へ下る斜面のⅦ層中より検出し、 $172 \times 84\text{cm}$ の範囲に礫の集中域と散礫状の広がりが確認された。礫集中部の直下に平面径 $44 \times 45\text{cm}$ の円形、検出面からの深さ28cm、断面はU字形を呈した掘り込みがあり、総礫数89個中69個はこの掘り込みからの出土である。礫は凝灰岩の200~300 gの自然礫が大部分であり、被熱による変色が見られるが、破碎した礫はない。底面付近には礫が敷き詰められており、大きさが10cm以上、重さ400 gを超えるものも混ざる。これら下位の礫

は原位置で使用されたものと思われる。

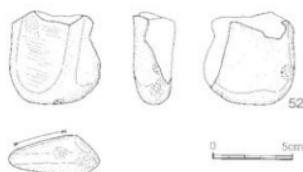
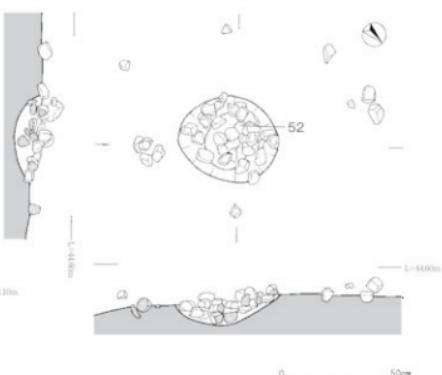
礫間から一括取上げの1点を含む土器片6点、石器5点が出土した。その中から小片を除いた土器片3点と石器1点の計4点を実測し、掲載した。56は口縁部、57は胴部、58は底部である。56はやや内傾し、断面方形で口唇部がやや内傾する。平坦面を持つ外面には口唇直下に横位、その下位に斜位の貝殻刺突文が施される。復元口径は22.4cmを測る。刺突の形状が半円状であることから、胴部に対しほば垂直に貝殻を立てて施したと思われる。57は直線的に外傾する胴部で、斜位の貝殻条痕と縦位の貝殻刺突文、内面には明瞭なケズリ痕が残る。58は復元底径は14.2cmである。外面に施されている貝殻刺突文は斜位の刺突を組み合わせて羽状を呈し、底面付近には横位に巡らす。文様形態や器形などから56・58はⅦ類土器の下剥塗式土器、57はⅡ類土器の加墨巣式土器に相当する。59は4分の3以上を欠損する安山岩製の磨石で、全面に磨痕が残る。表面及び裏面は緩やかな平坦面を呈する。一部に被熱による赤化がみられる。

集石11号(第43図)

F-15区、東へ下っていく緩斜面のⅦ層中で検出さ



集石4号及び出土遺物



集石5号及び出土遺物

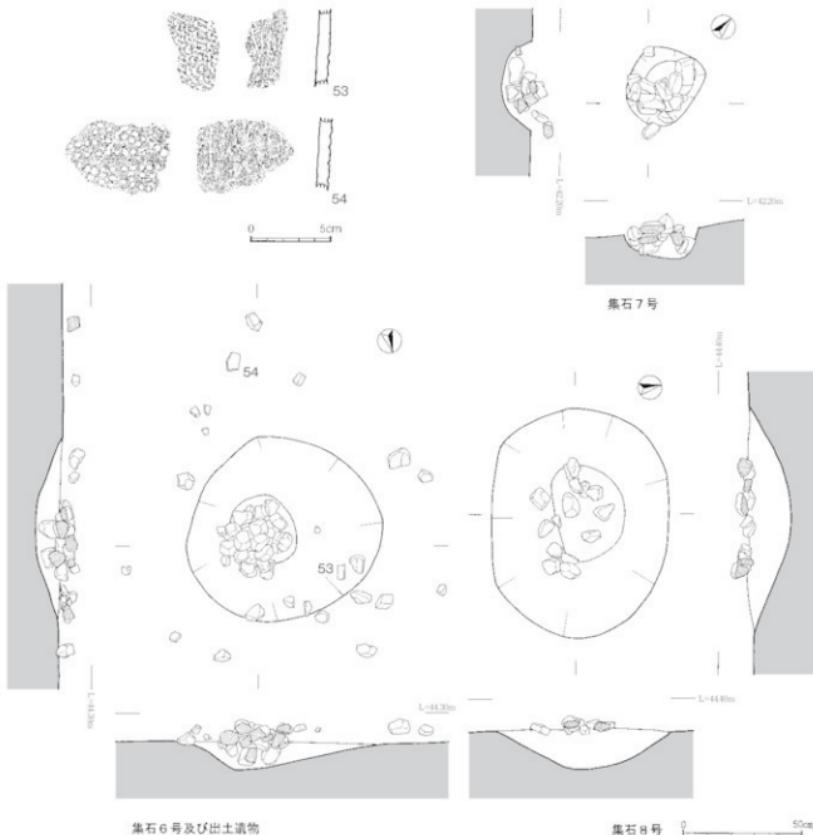
第39図 集石I-a類③及び出土遺物

れた。北側及び北東側には 6 基の土坑が位置しており、土坑の可能性もあるが、礫の密集状態から集石として取り扱った。下位に径が 66 × 56cm、検出面からの深さ 24cm の楕円形を呈した掘り込みがあり、断面は逆台形を呈する。礫総数 58 個の特徴としては、全てに被熱を受けた痕跡が見られるが、大きさが不揃いであり、100 g 以下 13 個、101~200 g 18 個、201~300 g 12 個、301~600 g 9 個、1 kg を超えるものも 4 個含まれる。様々な大きさの礫で構成されるのがこの集石の特徴である。石材も安山岩、凝灰岩、砂岩などが混在している。

土器片 2 点と石器 4 点が出土し、小片を除いた石器軸用品 1 点と土器片 1 点の計 2 点について実測し掲載した。60 は明瞭な貝殻刺突が斜位に施され、VI 類土器の下剥峯式土器と思われる。61 の最大厚は 5.1cm の凝灰岩を素材とした石皿の破片である。表面には微細な磨痕が観察できる。

集石 12 号 (第 43 図)

D - 16 区、東へ下っていく緩斜面のⅦ 層で検出された。検出場所は集石や土坑、土器集中、チップ集中などが隣接している遺構集中エリアである。104 × 87cm の範



第 40 図 集石 I-a 類④及び出土遺物

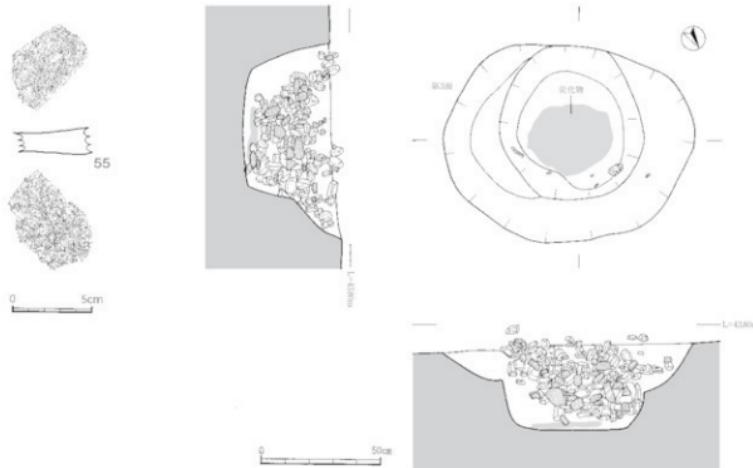
間に礫の集中が見られた。礫は7~8cmの砂岩の自然礫が中心で、大きさが揃っており破碎礫は少ない。礫集中域の南西側に、平面径40×39cmの円形を呈し、検出面からの深さ24cm、断面形U字形を呈した掘り込みが確認された。埋土中から礫の出土は見られないが、集石の形態と掘り込みの位置関係から、使用後に礫が撒き出され、再利用品以外は放置されたものではないかと推測される。礫総数は32個である。

礫間から出土した土器片7点中、残存状況の良い4点について掲載した。62は胴部に横円押型文を密に施すもので、内外面は橙色を呈し、内面の上位部分には煤が付着している。63は器壁が0.5cmの胴部片である。外面には押引状の浅い条痕と、縦位の貝殻刺突文が施される。文様形態と器壁の薄さからⅢ類土器の吉田式土器に相当すると思われる。64・65は底部片である。64は胴部に斜位の貝殻刺突文が施され、65は、一部剥落した胴部に貝殻による刺突の痕跡がわずかに確認できることからⅥ類土器の下剥峯式土器と思われる。

集石13号（第43図）

B-14区、北方向に下り始め緩斜面の埴層上面で、礫の集中が見られた。尾根部を取り巻くように検出された集石群の北端に位置している。標高43~44m付近に集石が多数検出されていることから、集石13号より北側の調査区外にかけても集石が存在する可能性がある。

35×27cmの狭い範囲に総礫数11個の礫が密集してお

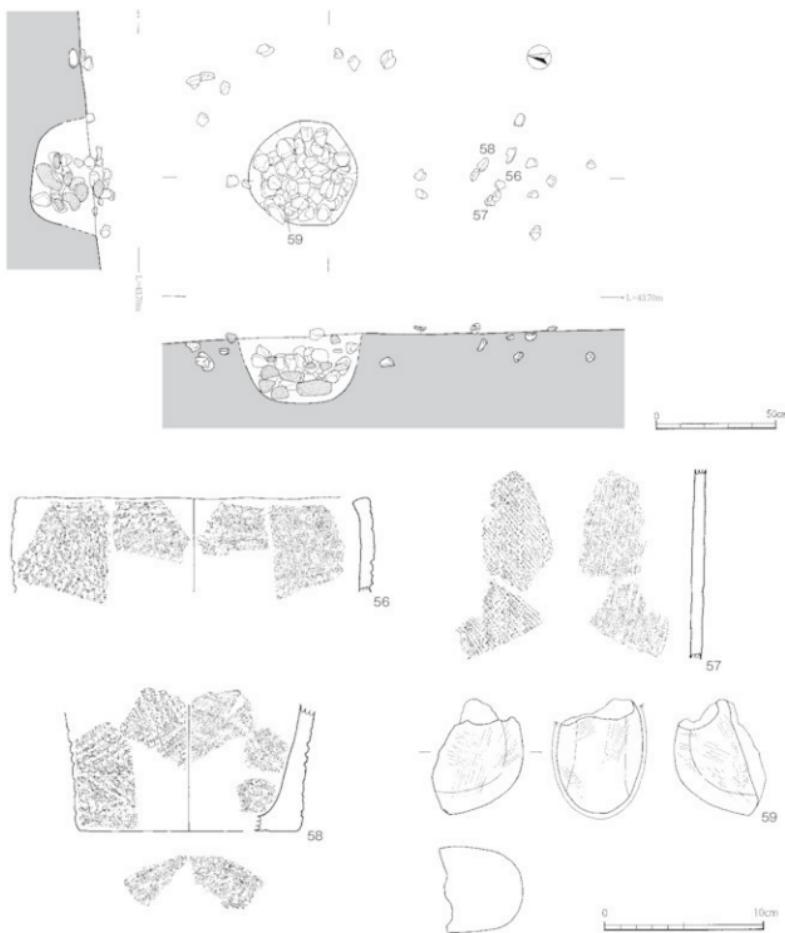


第41図 集石I-b類①及び出土遺物

り、平面径 26 × 24cm、検出面からの深さ 10cm の円形を呈した掘り込みの底面近くまで埋まっていた。縁は熱を受けた 300 g 前後の安山岩が半数を占めるが、全体としてはその大きさは揃っておらず、重量が 190~770 g の角の取れた自然礫である。

石器 4 点が出土し、石器転用品 2 点を実測し掲載した。

66・67 は石皿で、どちらも凝灰岩を素材としている。66 は、表面に敲打痕が数箇所みられる。また表面は被熱により赤化しており、二次使用された可能性が高い。67 の表面は磨痕により滑らかな平坦面になっている。石材の凝灰岩は白色で、集石 11 号の遺物番号 61 と残存状況や表面の滑らかさが非常に酷似しているため、同一個体で



集石 10 号及び出土遺物

第 42 図 集石 I - b 類②及び出土遺物

ある可能性が高い。

【II-a類】

集石 14 号（第 44 図）

B - 19 区、わずかに東へ下っていく緩斜面で検出された。検出面はⅤ層である。北側の調査区境に位置し、周辺に他の集石やその他の遺構などは検出されなかつたエリアである。集石 14 号の北側には類似の集石が存在すると予想されるが、調査区外であるため不明である。187 × 81cm の範囲内に礫の集中と散在が見られた。礫は被熱の痕跡のある砂岩の破碎礫であり、7 ~ 8cm の角張った小礫が大部分を占める。総礫数は 126 個とやや多いが、50 g 以下の小礫も多く、同一個体のものが多く含まれている。遺物の出土はない。

集石 15 号（第 44 図）

B - 11 区、南側へ急激に下っていく斜面のⅣ層で検出された。102 × 94cm の範囲内に、礫の集中部と散在状に広がる部分が見られた。東側約 2m に集石 3 号が隣接する。集中部と散在部では礫の特徴が異なり、集中部には砂岩の 100 g 以下の細かい破碎礫がほとんどであるのに対して、散在部は角の取れた凝灰岩の 150 g 前後の自然礫が主流である。2 つの集まりは同一の集石とは考えられない。周辺の土層は、南側の谷へ向かって大きなブロック状に流れ出す部分もあるなど安定しないため、上位から流れ込んだ可能性がある。

礫中からは石皿の破損品が検出されたが、残存状況が悪く掲載には至らなかった。

集石 16 号（第 44 図）

E - 17 区、東方向へ緩やかに下っていく緩斜面のⅣ層上面で検出された。尾根部を取り巻く集石群の東端にあたり、これより東側の平坦面では集石の検出は少なく、礫の出土数も少なくなる。41 × 25cm の範囲内に、やや大きめの礫が集中して出土した。総礫数は 9 個で、ほとんどが 10cm 前後、重さ 200 ~ 300 g の丸みを帯びた安山岩の自然礫である。表面に変色や劣化が多少見られるが状態は良好で、並べられたような検出状況や掘り込みが確認されていないことなどから、再利用のために集められたものと思われる。

台石転用品と思われるものが 1 点出土したが、摩耗が激しく磨痕等が確認できなかつたため、図化していない。

集石 17 号（第 45 図）

E - 11 区、Ⅶ層下位から検出された。西方向の谷底へ向かって急激に下る斜面である。周辺には礫や土器片が多く出土しているが、土塊なども出土しており、層位が安定しない場所であるため、上位から移動し検出された位置に溜まつた可能性もある。68 × 37cm の狭い範囲内に礫の集中と約 30cm 離れて磨石があり、一連のものとして取り扱った。礫総数は 22 個、安山岩の自然礫が主体

で、100 ~ 150 g 程度のものと 50 g 以下の小礫が半数ずつで構成される。熱により破碎された礫は少ないが、表面は赤化や劣化が見られる。

遺物は、土器片 2 点と石器 2 点が出土した。その内、残存状況の良い土器 1 点と石器転用品 1 点の計 2 点について実測し、掲載した。貝殻刺突文が施文される 68 は胴部片で、横位の貝殻刺突の間に斜位の刺突を施したものと思われ、VI 類土器の下剥峯式土器に相当する。69 は砂岩製の磨痕と敲打痕がある石器で、破碎した 2 片を接合したものである。磨痕は表面・裏面、敲打痕は周縁部にみられる。

集石 18 号（第 45 図）

D - 13 - 14 区の尾根部の平坦面、Ⅳ層上面で検出された。74 × 52cm の範囲内に総数 43 個の礫が暗東西方向に細長く密集して出土した。礫は丸みを帯びた安山岩の自然礫が大部分で、ほとんどが 7 ~ 8cm、重さ 150 g 前後ではほぼ大きさが揃っている。掘り込みは確認されなかつたが、暗東西方向に自然のくぼみがわずかに見られ、そこに沿つて集めた可能性がある。

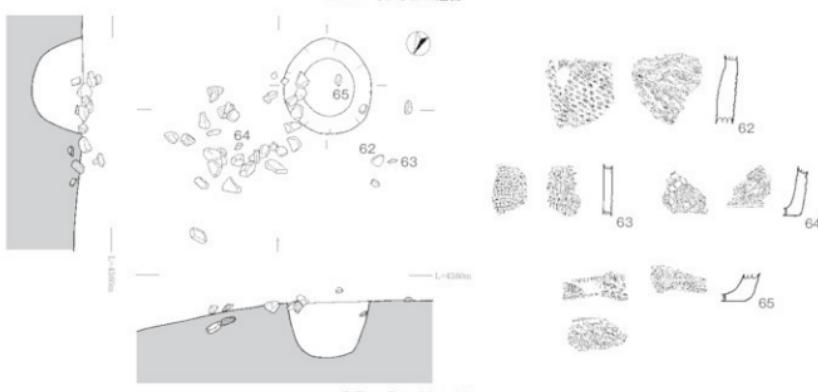
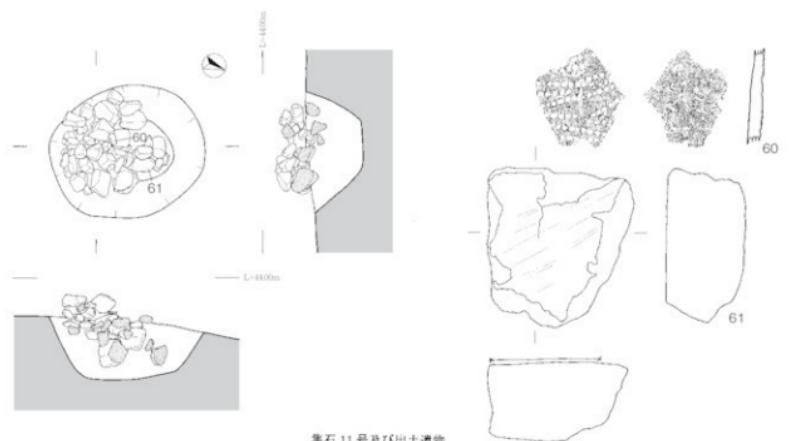
出土した石器転用品 2 点を実測・掲載した。70 は砥石で、素材に砂岩を用いている。表面と裏面に使用痕が残る。安山岩製の磨石である 71 は、表面が滑らかな平坦面で、磨った痕跡が明瞭に残る。周縁部に敲打痕が数箇所観察できることから、敲石として使用していた可能性も考えられる。

【II-b類】

集石 19 号（第 46 図）

D - 10 区、西側へ下る急斜面の VI 層と VII 層が混在し合う斜面上で検出された。周辺にはレベル差を持った礫が広がっており、ブロック状の土塊が多く見られることがから尾根部付近からの急傾斜により上位から流されて堆積した可能性も考えられる。検出位置と尾根部との標高差は約 5m である。172 × 124cm の範囲内に、総数 66 個の礫がやや集中して出土した。礫は 10cm のものもわずかに混ざるが、約 7 割が 5cm 以下、50 g 以下の被熱により破碎された小片であり、表面の変色や摩耗が激しい。

礫群からは計 11 点の土器片と砥石 1 点が出土し、その中から小片を除いた土器片 4 点を実測・掲載した。72 - 73 の外面には貝殻刺突文が施文され、VI 類土器の下剥峯式土器に相当する。74 はやや外反して立ち上がる胴部片で、4 条単位の浅い貝殻条痕が縦位に施される。下端の器壁が厚いことから底部付近の胴部であると考えられる。文様形態から VI 類土器の桑ノ丸式土器と思われる。75 は底部片で包含層出土の遺物 3 点と接合した。底部付近は摩耗している。胴部の上位には繊維状の貝殻刺突文、下位には斜位の浅い貝殻条痕文が施文されている。復元底径は 18.6cm である。貝殻刺突文と短条痕文で文様を構成する特徴から VI 類土器に該当する。外表面



第43図 集石 I - b 類③及び出土遺物

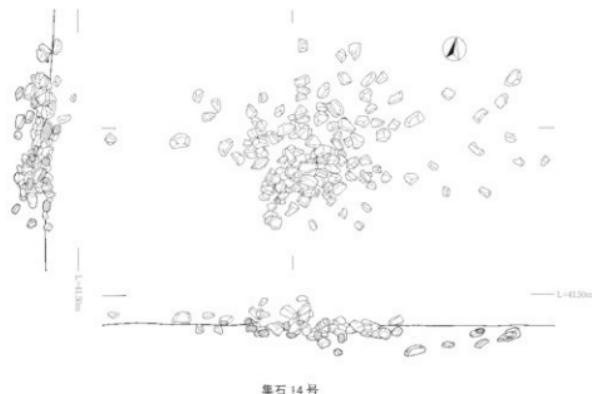
は橙色を帯び、胴部内面には煤の付着が見られる。

集石 20 号 (第 46 図)

C - 11 区、西側へ下る急斜面の VI 層と VII 層が混在し合う斜面上で検出された。集石 22 号・19 号と同様に、土砂が流れ込む谷部に位置していることから、尾根部から流されて堆積した可能性も十分に考えられる。尾根部との標高差は約 4 m である。約 1 m 四方の範囲内に、礫がやや集中して出土した。礫の約 8 割は 5 ~ 7 cm、重量 50 g 前後の自然礫で、凝灰岩の割合が多く、中には砂岩

や安山岩も含まれる。多くの礫は被熱により変色し、表面の劣化が激しい。

裸間からは 10 点の土器片が出土したが、その中から状態の良い 1 点と磨石の完形品 1 点の計 2 点について実測・掲載した。76 は、集石 19 号の遺物番号 75 と同様に、斜位の貝殻刺突文と短条痕文で文様を構成する胴部片で VII 類に分類される。77 の表面及び裏面には明瞭な磨痕が残る。表面は滑らかであるが、裏面に平坦面は形成されていない。また、どちらの面にも 1 箇所ずつ敲打痕が



集石 14 号

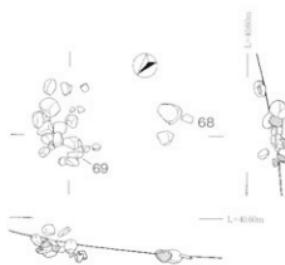


第 44 図 集石 II-a 類①

残る。石材には砂岩を用いている。

集石 21 号 (第 47 図)

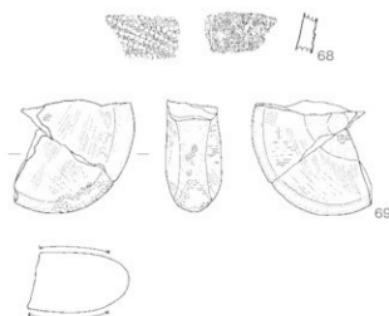
B - 15 区、東側へ緩やかに下る緩斜面のⅦ層中で検出された。周辺に遺構は無く、遺物や礫の出土量は少ないエリアである。総数 31 個の礫が 122×104 cm 范囲内に、中央にやや集中している箇所が見られるが、全体として散在状態で広がっていた。礫は安山岩と砂岩が大部分を占め、7 ~ 8 cm で重さ 100 g 程度のものが中心である。全ての自然礫や破砕礫が被熱し、表面が変色している。



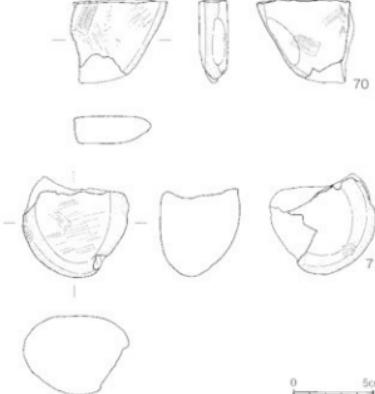
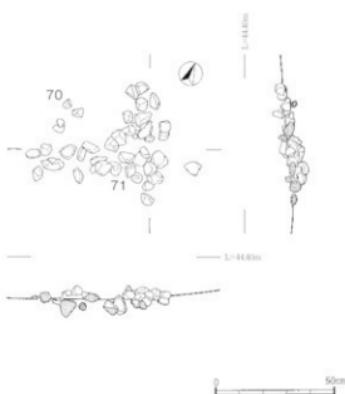
礫間からは土器片 2 点が出土したが、その内でも状態の良い 1 点と石器の転用品 1 点の計 2 点について実測・掲載した。78 は直立気味に立ち上がる肩部で、内面は丁寧に調整されている。外面に文様は施されておらず、無文土器である可能性が考えられる。79 の砥石は砂岩製で、表面は平坦面を有する。また、表面は被熱により変色し褐色を有する。さらに、下面にも微弱な磨痕が確認できる。

集石 22 号 (第 47 図)

D - 10 区、西側へ下る急斜面のⅥ層とⅦ層が混在し

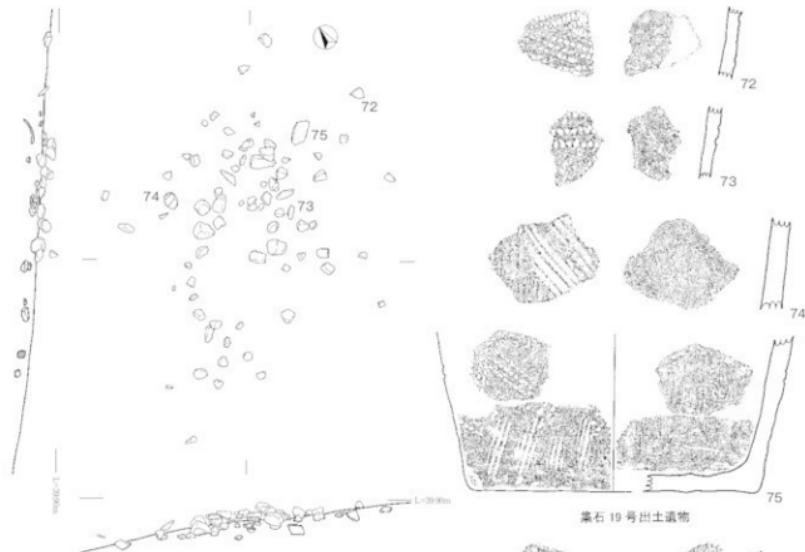


集石 17 号及び出土遺物

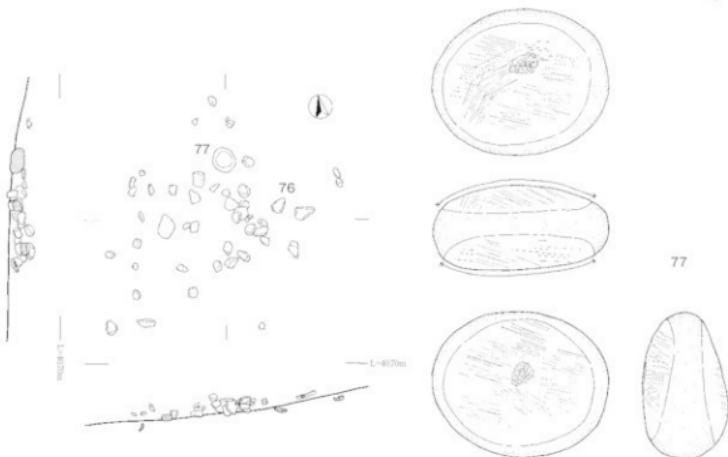


集石 18 号及び出土遺物

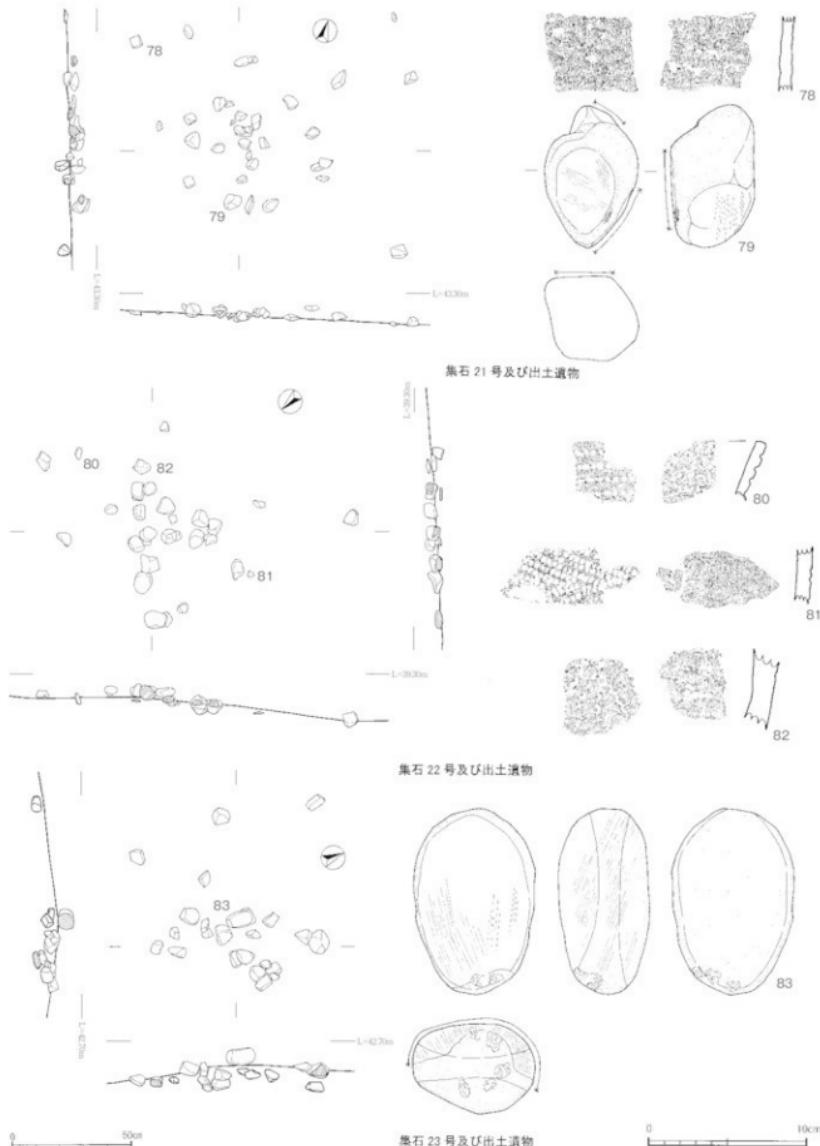
第 45 図 集石 II - a 類②及び出土遺物



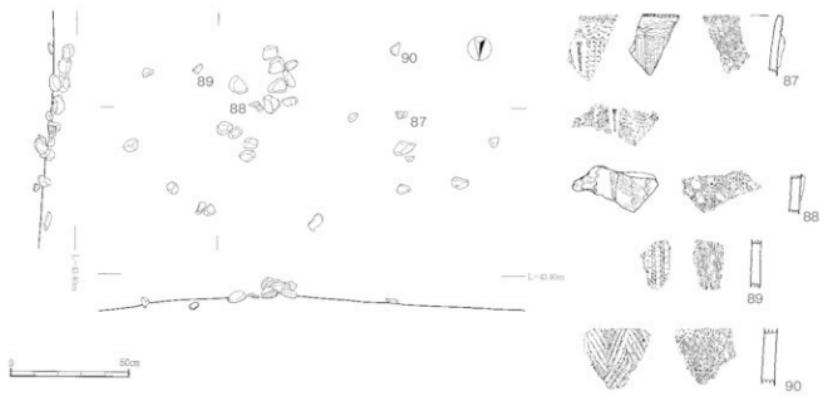
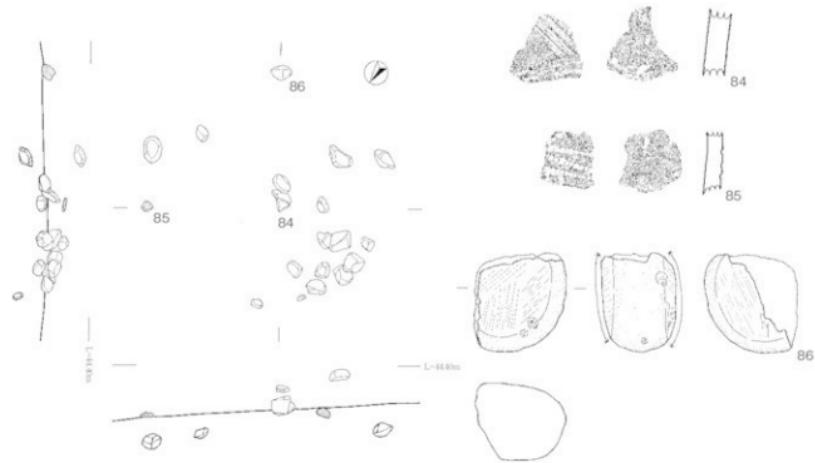
集石 19 号



第 46 図 集石 II - b 類①及び出土遺物



第47図 集石II-b類②及び出土遺物



0 5cm

第 48 図 集石 II - b 類③及び出土遺物

合う斜面上で検出された。東側約5mに集石19号があるが、地形的には西側へ急激に下る谷地形の底に近く、本遺跡の遺構の中で最も低い標高38.4mに位置している。周辺に出土する土器片や礫にはレベル差があり、またブロック状の土塊も多く見られることから、標高差約6mある急斜面を流されて、谷底に堆積したものである可能性も考えられる。136×87cmの範囲内に、総数22個の礫がやや集中して出土した。大きさは7~8cmで重さ150g前後の角の取れた自然礫が大部分であり、破碎礫はほとんど見られず、大きさも揃っている。

礫群からは8点の土器片が出土し、その中から実測可能な3点について掲載した。80はやや外傾気味に立ち上がる口縁部で、IV類土器の石坂式土器と思われる。81の外面には斜位の貝殻刺突が羽状に施されており、内面は丁寧なナデ調整により仕上げられている。直線的に立ち上がる胴部であると推定される。82は全体的に器壁が厚く、底部付近の胴部片であると思われる。斜位の貝殻刺突を施す。内外面ともに丁寧な仕上がりであり、胎土には1~2mm大の白色・黄色粒を多く含む。内面全体と外面の一部に被熱による赤化がみられる。81・82と

もVI類土器の下剥峯式土器に該当する。

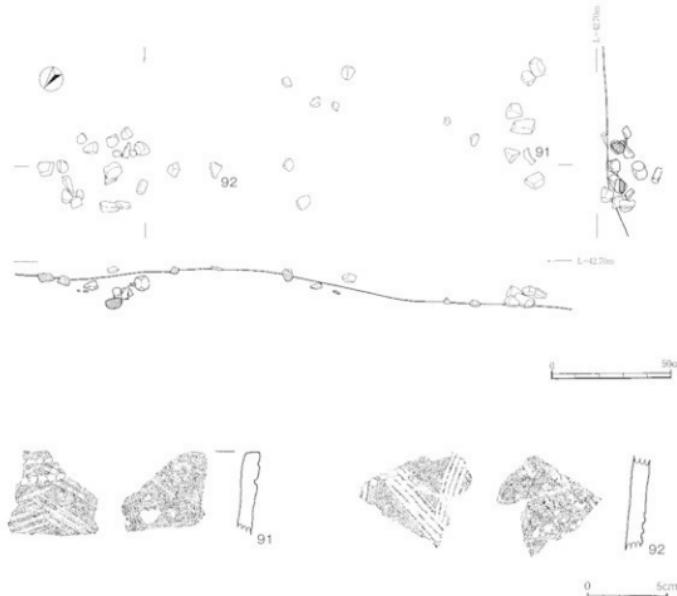
集石23号(第47図)

B-12区、南側へ下る斜面の質層上面で検出された。東側に集石34号があり、ほぼ同じような立地状況である。周辺は質層とⅦ層が混在しており、遺物や自然礫などの移動があった可能性が考えられる。84×83cmの範囲内に、総数24個の礫がやや集中して略南北方向へ細長く集まって出土した。礫の半数以上は7~8cmの凝灰岩の自然礫であるが、安山岩の破碎礫も3割ほど混ざり破碎面が鋭利なものも見られた。

石器の転用品2点が出土し、その内ほぼ完形品である1点について実測し掲載した。83は磨石・敲石である。表面から側縁部左右に磨痕がある。側縁部下側には敲打痕が数箇所残る。

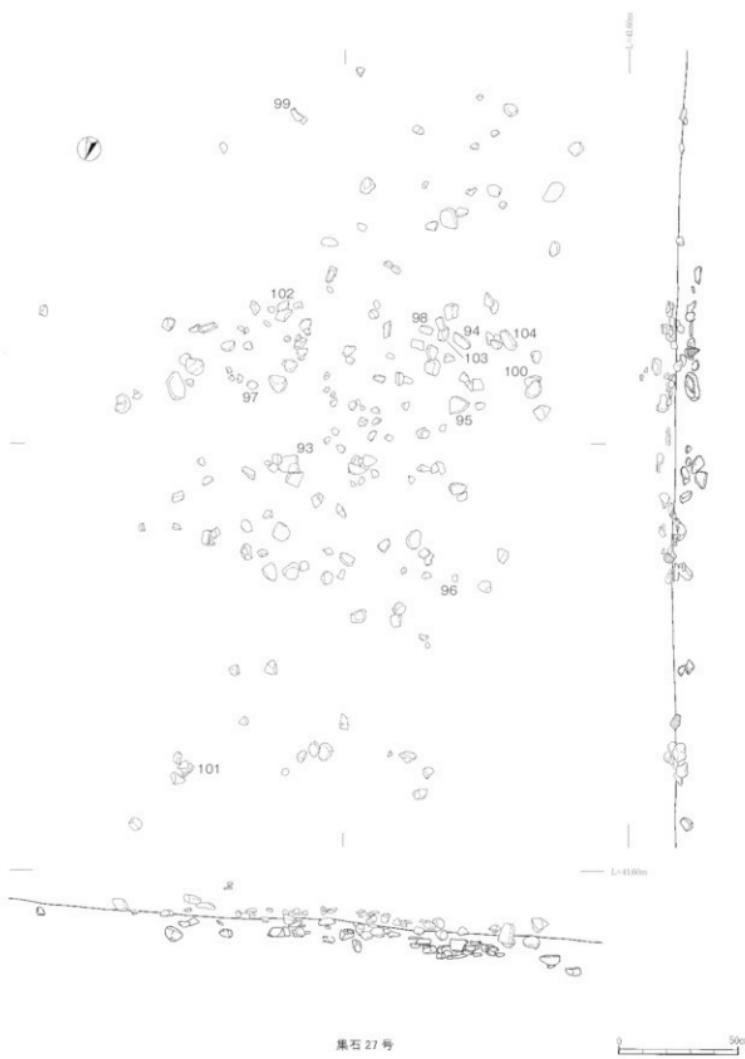
集石24号(第48図)

D-E-15区、東側へ下り始める緩斜面のⅦ層中で検出された。やや下った東側には集石5基や土坑など、南東側には土坑6基などの遺構が集中して検出された。106×103cmの範囲内に、総礫数18個、礫の集中と散在の状の広がりが見られた。礫は石材では凝灰岩、重さは



集石26号及び出土遺物

第49図 集石II-b類④及び出土遺物



第 50 図 集石 II - c 類①

100~200 g のものが約半数であるが、大きさや石材は揃っていない。

石器2点と縁から土器片2点が出土し、実測可能な土器片2点と石器の転用品1点を合わせた計3点について実測・掲載した。84は直行する胴部で、外面に幅広の条痕を斜位に施す。外面の下端は横方向の粗いナデ調整により条痕が消され、胎土には雲母を多く含む。IV類土器の石坂式土器であると思われる。85は胴部片で、やや内湾する。外面には斜位の貝殻刺突文が施される。外面に煤の付着がみられる。VI類土器の下剥峯式土器に相当する。86は半分以上を欠損する磨石で、石材は凝灰岩である。磨面は平坦で、周縁に微細な敲打の痕跡もみられる。

集石 25号（第48図）

C・D - 16区、東側へ緩やかに下る緩斜面の埴層上で検出された。北西側に集石10号、南東側に集石4号、12号があり、尾根を取り巻く多くの遺構のひとつである。158×79cmの範囲内に、縁がやや集中して出土した。總縫数は22個で、安山岩と砂岩が約半分ずつを占める。縁は5cm前後で重さ50g程度のもの約4割、7~8cmで重さ100~200g程度の縫約6割と大きく2つに分けられ、破壊されたものは少なく、被熱した自然縫が多い。

縁からは6点の土器片が出土し、その中の4点について実測・掲載した。87は両面暗黄色の口縁部で、わずかに光沢を持つほど丁寧に仕上げられた土器である。口縁部は平坦で密なキザミ目を有する。外面にはクサビ形貼付文を施した後、口縁部には横位に貝殻刺突を、胴部には押引文を施す。III類の土器の吉田式土器と思われる。88・89はII類土器の加栗山式土器の諸特徴を有した胴部片であり、斜位の条痕の後に縦位の刺突を施す。89にはクサビ形貼付文が施される。88・89とも橙色を帯びる。90は綾状の貝殻条痕が施される。IV類土器の石坂式土器に相当する。

集石 26号（第49図）

E - 12区、西側へ急激に下っていく斜面の埴層上で検出された。急激な斜面地形の検出地点では、周辺に遺構は少ない。214×64cmの細長い範囲に縁が集中していた。總縫数は35個で、安山岩の割合が多い。大きさ5~10cm程度で重さ100~250g程度の自然縫が主流であるが、5cm以下、50g以下の破碎縫も約3割程度占める。多くの縁に、被熱による縫表面の変色が見られる。

縁から出土した土器2点を実測・掲載した。91は綾状の貝殻条痕を密に施した後、口縁部に貝殻刺突文を横位に2条巡らしている。IV類土器の石坂式土器に相当する。92には貝殻条痕が鋸歯状に施されており、VII類土器の桑ノ丸式土器と思われる。

【II-c類】

集石 27号（第50・51図）

C - 11・12区、南西方向へ下っていく斜面の埴層中で検出された。縁が散縫状に広がり、掘り込みを持たないII-c類の集石である。321×230cmの広範囲内に縫総数141個が出土した。谷筋に当たるために土層が入り乱れており、上位から流れてきた縫が現位置に溜まつた可能性も十分に考えられる。縫は5cm以下、重さ50g以下のものが大部分で、縫総数の約3分の2を占める。被熱した砂岩の破碎縫である。

縁からは多くの土器片が出土したが、摩滅が激しいものが多い。土器40点が出土し、その中から残存状況の良い10点と、縁中の石器破損品2点の、計12点を実測・掲載した。93はやや波状を呈した口縁部で、頂部外面には瘤状突起が縫に付く。外面には拂状工具によるものと思われる浅めの条痕が口縁部には横位、胴部には斜位に施される。やや内湾気味の器形であり、口唇部に平坦な面を持つ。瘤状突起の部分は角張っており、胴部は角筒形のように直線的であることから、円筒形以外の器形を想起する土器である。94~100は胴部である。94・95・97~99は、下剥峯式土器にみられる貝殻刺突文を横位と斜位に施す。96は、クサビ形貼付文と縦位の貝殻刺突が施されている。II類土器の加栗山式土器に相当する。100は底部付近の胴部であり、外面は直線的に立ち上がる。鋸歯状に施されたと思われる条痕の一部と短条痕が確認できることから、VII類土器の桑ノ丸式土器であると思われる。101・102は底部である。101は、包含層出土の遺物との接合資料である。ほぼ垂直に立ち上がる胴部で、復元底径7.0cmと小さな土器である。斜位の浅い条痕が部分的にみられ、その後に縦位の貝殻刺突文が施される。底面付近にはキザミ目が巡る。赤色粒を含み、内外面橙色を帯びる。外面には被熱による赤化、内面には胴部中位に煤の付着が見られる。器壁はやや厚いが、文様形態からII類土器の加栗山式土器であると考えられる。102は復元底径7.0cmであり、101と同様に小型の土器である。全面の摩耗が激しく、外面に文様は確認できないため、型式は不明である。103は磨石の破損品である。104は磁石の破損品で、石材に砂岩を用いている。104は表面・裏面を使用しており、非常に滑らかな平坦面を呈している。裏面右下と破碎面に被熱による赤化がみられ、二次的な使用があった可能性が考えられる。

集石 28号（第52図）

F - 12区、西方向へ下り始める緩斜面でVII層中より検出された。總縫数は37個と多くはないが、191×122cmの範囲内にまとまっていた。周辺には約2mほど斜面を西方向へ下がった地点に集石31号、北西方向に土坑2号が位置する。縫は7~8cm、重さ180g前後の自然縫と5cm前後、重さ100g以下の破碎縫が混在して

おり、どちらも被熱を受けた変色が見られる。石材のほとんどが安山岩であり、砂岩がわずかに混ざる。

縫間から破損した磨石 1 点が出土したが、残存状況が悪かったため掲載には至らなかった。縫間からは土器 2 点が出土し、この 2 点を実測・掲載した。105 は口唇部に平坦面を持ち、やや外傾する口縁部である。円筒形の胴部には、Ⅳ類土器の石坂式土器によくみられる横位の貝殻刺突文と綾状紋の貝殻条痕文が施されている。106 は扁平な胴部でその上下は不明であるが、外面には貝殻刺突が密に施されており、Ⅳ類土器の下剥峯式土器の特徴を有する。

集石 29 号（第 52 図）

D - 18 区、東側へ緩やかに下るほほ平坦面のⅦ層上面で検出された。周辺に構造は検出されなかった。約 1 m 四方の範囲内に総数 47 個の縫がやや集中して出土した。ほとんどの縫が重さ 100 g 以下の被熱を受けた破碎縫であり、角張っている。石材は大部分が砂岩であるが、10cm を超える軽石も出土している。

縫間からは 3 点の土器片が出土した。密な押引文を施すもの、斜位の貝殻刺突を施すもの、無文のものであったが、いずれも小片であったため図化には至らなかった。

集石 30 号（第 52 図）

B - 14 区、西方向に下り始めるほほ平坦面のⅧ層上面で、縫の集中が見られた。標高 44 m 付近の尾根部を取り囲むように巡る集石の北端から、西側谷へ急激に下り始める位置である。北側には同じ尾根の縁辺に集石 13 号が位置する。67 × 55cm の狭い範囲に総数 24 個の縫がやや集中する場所が見られたが、重なり合うほど密集は見られない。縫は被熱した砂岩の角縫が中心で、部分的な破砕も確認される。大きさは揃っておらず、25 g ~ 378 g の範囲で幅広い。その中でも 5 ~ 7 cm、重さ 100 g 前後のものが約半分を占める。

遺物の出土はなかった。

集石 31 号（第 53 図）

F - 11 区、西方向へ下り始める急斜面でⅦ層中より検出された。総縫数は 32 個である。東側に集石 28 号が位置するが、尾根を取り囲む構造群からは離れている。縫は 5 ~ 7 cm の凝灰岩の自然縫が大部分で、被熱しているが変色はあまりなく、破碎縫は少ない。

縫中には土器や石器が数点混在していたが、その中から実測可能な土器片 1 点と石器 2 点を実測・掲載した。107 は断面方形の口縁部である。横位と鋸歯状の頂部と思われる貝殻刺突文が施される。Ⅳ類土器の下剥峯式土器に相当する。108 は、凝灰岩製の磨石で最大長 3.5cm、最大幅 3.6cm、最大厚 3.7cm、重量 22.5 g の小さな製品である。109 は半分以上を欠損する磨石で、砂岩を用いており、表裏には磨痕が残る。

集石 32 号（第 53 図）

B・C - 12 区、南側へ下る斜面のⅦ層上面で検出された。周辺はⅥ層とⅧ層が混在しており、縫が上位から流れ込んだ可能性も十分考えられる。集石 32 号を取り囲むように 5 個の集石があり集石群の中央に位置している。144 × 112cm の範囲内に、総数 55 個の縫がやや集中して出土した。縫の大部分が砂岩の破碎縫で、被熱による赤色が表面に見られる。重さ 50 g 以下の小縫が 7 割近くを占め、重さ 100 g 超えるものは 1 割程度である。

縫間から 2 点の土器片が出土し、このうち状態の良い 1 点について実測・掲載した。110 は縫位と斜位の貝殻刺突文が施されるが、刺突は細くて浅く一見条痕のように見える。型式については不明である。

集石 33 号（第 53 図）

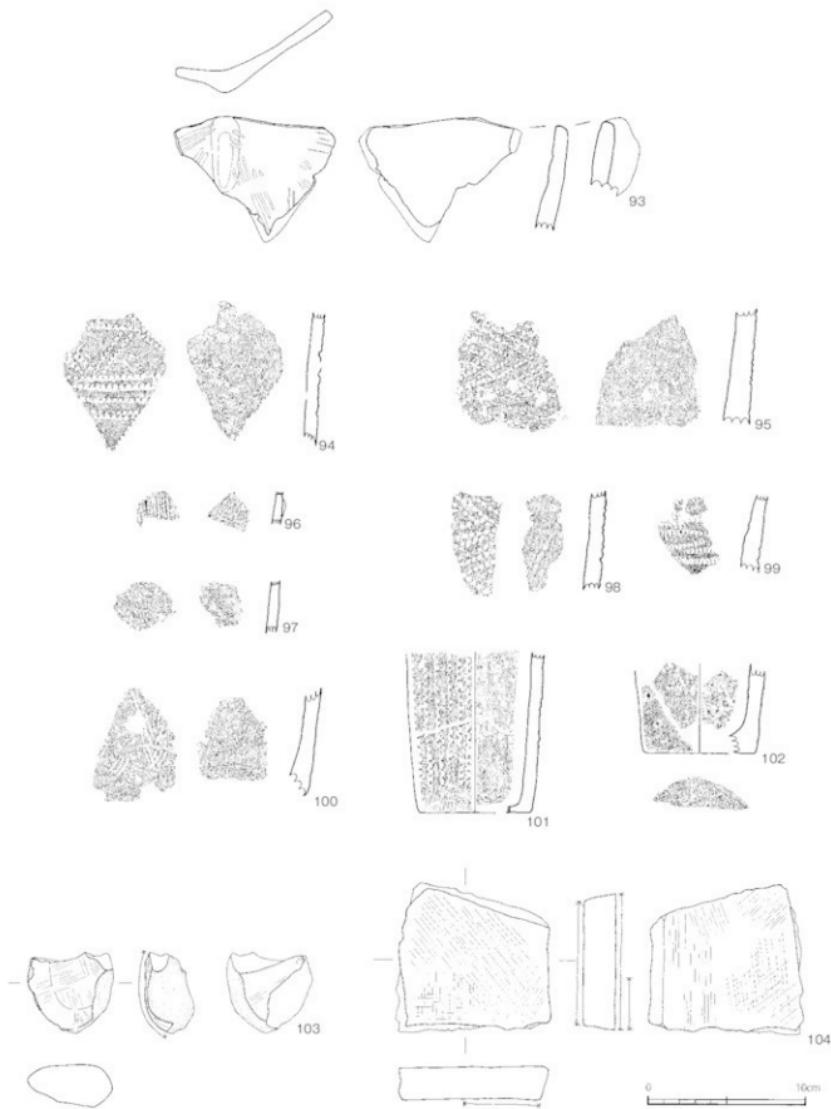
C - 14 区、北へわずかに下っていく緩斜面のⅧ層上面で検出された。近接する集石 6 号・8 号と共に尾根上に位置し、東西両方向へ下ると集石群が位置している。88cm 四方の範囲に縫が散在状に広がっている。縫总数は 24 個と少ないが、その内 10 個が 10cm 前後、重さ 100 ~ 400 g 程度の砂岩の自然縫であり、変色はあるが破碎はほとんど見られない。再利用のために集められた可能性がある。

土器が 1 点と磨石の転用品 1 点が出土しており、このうち土器 1 点について実測・掲載した。磨石は被損が激しいため図化していない。111 は直線的にやや傾く胴部には、横位・鋸歯状の貝殻刺突文を施し、内湾する口縁部付近には鋸歯状の短条痕文が施される。Ⅳ類土器に該当するとと思われる。

集石 34 号（第 54 図）

B・C - 12 区、南側へ下る斜面のⅦ層上面で検出された。集石 32 号と隣り合っており、同じように谷底へ向かって縫が出土している。周辺はⅥ層とⅧ層が混在しており、上位からの流れ込みの可能性も考えられる。140 × 73cm の範囲内に総数 40 個の縫がやや集中して出土した。縫の大部分が安山岩の自然縫で、破碎は少なく、7 ~ 8 cm、重さ 150 g のものと、5 cm 以下、重さ 50 g 以下のものが混在している。

遺構内から出土した 1 点の土器片について実測・掲載した。112 は胴部小片であり、外面に浅いナデ状の条痕が施文される。外面浅黄色を呈し、白色粒を多く含む。Ⅳ類土器の桑ノ丸式土器であると思われる。



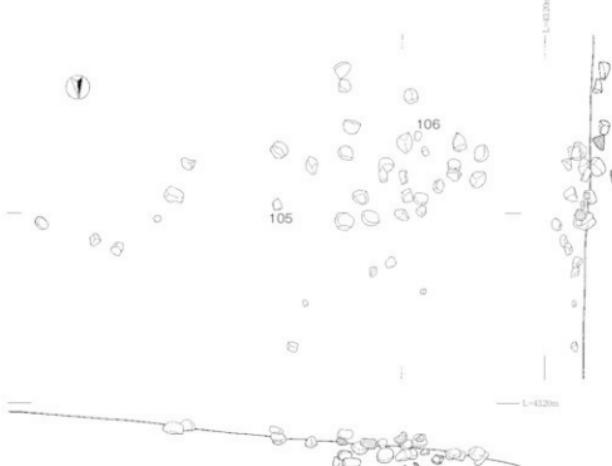
第51図 集石27号出土遺物



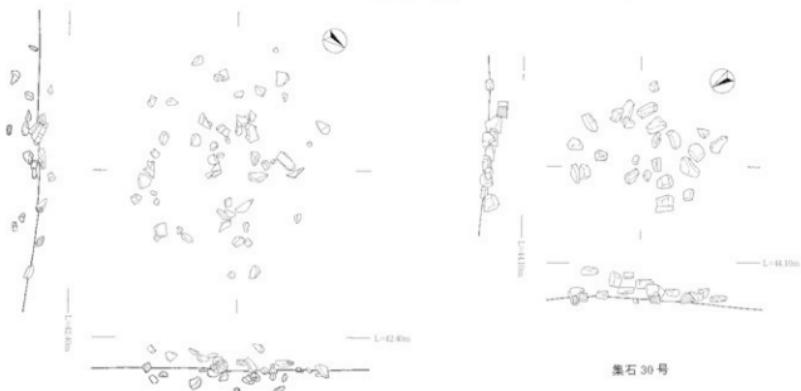
105

0

5cm



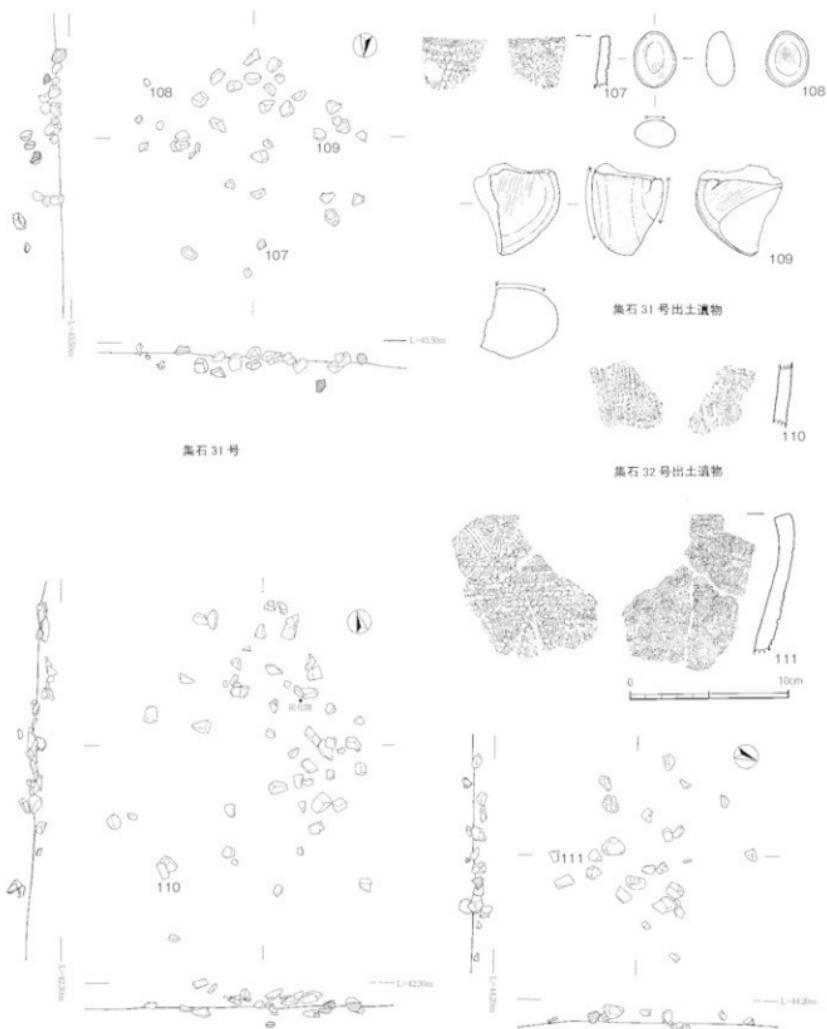
集石 28 号及び出土遺物



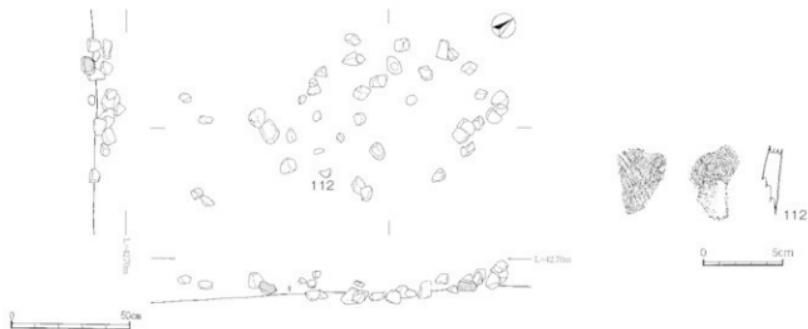
集石 29 号



第 52 図 集石 II - c 類②及び出土遺物



第53図 集石II-c類③及び出土遺物



集石 34 号及び出土遺物

第 54 図 集石 II - c 類④及び出土遺物

6 土器集中・チップ集中（第 55～56 図）

狭い範囲内で土器片やチップが集中して出土し、明瞭な作業の痕跡や掘り込み等が確認されないものについては、遺物集中域として取り上げた。土器集中に関しては、土器 1 個体の破片の集中ではなく、土器型式の異なる数個体の破片が集中して出土したものである。チップ集中とは、黒曜石やチャート等のチップが集中して検出されたものである。この土器集中・チップ集中は遺構であるかは不明であるが、特異な出土状況であったため出土状況図と遺物図を掲載することとした。

土器集中（第 55 図）

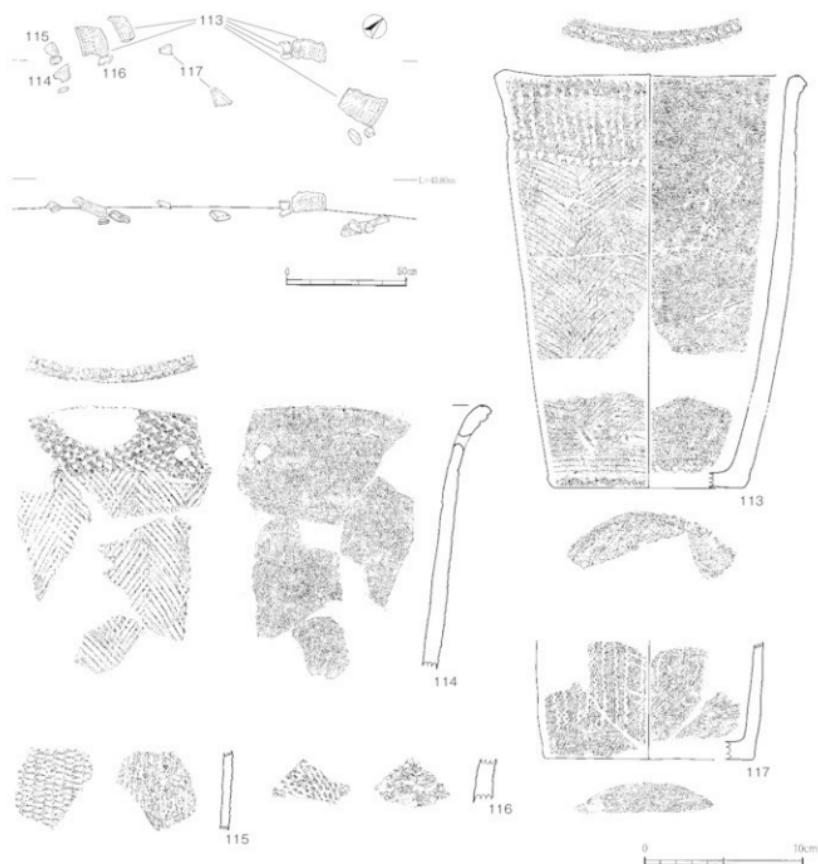
D - 15 区、東側へ向かって緩やかに下っていく傾斜面のⅤ層で検出された。約 4 m 北側にチップ集中があり、その他多くの遺構が集まる尾根を取り巻く遺構のひとつである。145 × 53cm の範囲に、土器片 13 点、石器 1 点、破碎繩 1 点の計 15 個の遺物が略東西方向に並ぶようにして出土した。土器片は大きいもので全長約 16cm を測る。2つの塊が確認され、2個体以上が残存すると考えられ、レベルの低い東方向へ押し流されている。下位からは炭化物の出土や、明確な掘り込み等は確認されなかった。遺物に関しては、実測可能なものは掲載したが、残存状況が悪いものは図化していない。

113 はやや膨らみを持つ胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する円筒形を呈する深鉢である。口縁部は平縁でやや肥厚しており口唇に細かいキザミ目を施す。外面は口縁部下に貝殻刺突文を継ぎに施し、胴部に浅めの貝殻条痕文を綾状に施すが、底部付近では横位に施している。底部は平底で、端部に粗いキザミ目

が施される。口径は 19.2cm、底径は 12.7cm である。114 はバケツ状に直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。口縁部は平縁で、口唇に浅いキザミ目が施される。口縁部外面には貝殻刺突文が繰り返し巡り、胴部は綾状の貝殻条痕文が施される。内面は丁寧なナデ調整であり、屈曲部付近に円形の補修孔を持つ。113・114 は IV類土器の石坂式土器である。115・116 は直線的に立ち上がる胴部片で、115 は器壁が薄く外面に貝殻腹縁を用いた継位の押圧状の刺突文を密に施し、内面はケズリ調整で仕上げている。Ⅲ類土器の吉田式土器であると思われる。116 は器壁がやや厚く、外面に小粒な梢円押壓文を密に施す押壓型土器である。117 は明瞭な平底を持つ底部片である。復元底径は 13.0cm を測り、端部に極めて薄い斜位のキザミ目が施される。胴部には継位の貝殻刺突文が底面近くまで施される。Ⅱ類土器の加栗山式土器の特徴を有する土器である。

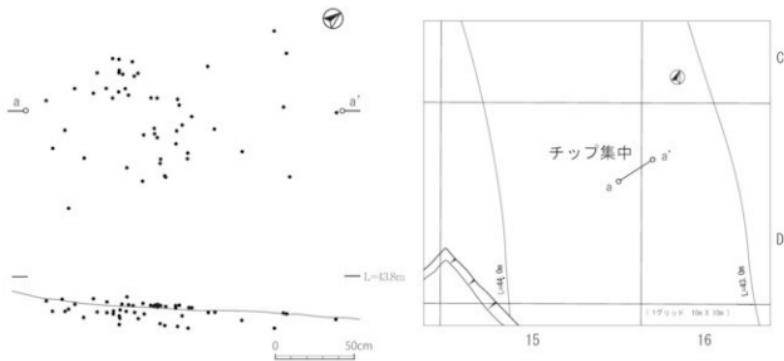
チップ集中（第 56 図）

D - 15・16 区、東側へ向かって緩やかに下っていく平坦面のⅤ層で検出され、尾根を取り巻く遺構群のひとつである。検出地点には破碎繩も数点が散在状に出土した。繩の出土レベルよりチップの出土レベルのほうが下位であったが、破碎繩とチップに関係性はないかと判断し、チップのみを実測した。195 × 122cm の範囲に総数 48 点のチップが出土し、チャート 29 点、黒曜石 8 点（姫島 4 点、腰岳 3 点、桑ノ木津留 1 点）、水晶 7 点、頁岩・ホルンフェルス 3 点、玉髓 1 点であった。検出範囲の中央西寄りに集中が見られ、その周辺に散在している。検出レベルは標高 43.5~43.7 m の範囲に収まる。調査区内か



第55図 土器集中及び出土遺物

らは黒曜石を原材料とした石器も多く出土していることから、石器加工の痕跡の可能性が考えられるが、製品の出土に比べ、チップ・洞片の出土数が少ないため、出土した全ての製品をここで加工したとは考え難く、調査区城外における加工場所の存在や他地域からの搬入が想定される。



第 56 図 チップ集中及び位置図

第 4 表 遺構内出土土器観察表 1

探査番号	面積番号	遺物名	器種	形	型式	出土区	断面	法量 (cm)			文文様・調整		新・文					断面番号	備考			
								口径	底径	高さ	外面	内面		白粉	陶片	陶器石	基盤	金碧石	石英	黄石		
											目録	絵文										
18	1	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	U断面				目録絵文	ナゲ	□	○	○	○	○	○	13017			
	2	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	U断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六3土-4		
	3	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	13005		
	4	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	13007他		
	5	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面				目録絵文	ナゲ	○							13013		
	6	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六3土-12他		
	7	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六3土-25他		
	8	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	13010		
	9	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-21	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	13022		
	10	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	断面	12.0			目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六3土-18他		
	11	望六住居跡 1 号	洋鉢	豆	下向茎	E-20	脚-底部	13.2			目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	12244他		
	12	望六住居跡 1 号	洋鉢	脚	-	E-20	U脚-側底				目録絵文・条絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六3土-6他		
	13	望六住居跡 1 号	洋鉢	脚	-	E-20	断面				目録絵文・条絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	13006		
	14	望六住居跡 1 号	洋鉢	脚	-	E-20	U脚-側底				目録絵文・条絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六3土-3		
	15	望六住居跡 1 号	洋鉢	脚	-	E-20	U断面				目録絵文・条絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	13004他		
	16	望六住居跡 1 号	洋鉢	脚	-	E-20	断面	10.0			条絵文	ナゲ	○			○	○	○	○	望六3土-29		
	17	望六住居跡 2 号	洋鉢	脚	舟ノ丸	C-21	U断面				条絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六4土-1		
	18	望六住居跡 2 号	洋鉢	豆	下向茎	C-21	断面				目録絵文	ナゲ	○			○	○	○	○	望六4土-2		
	20	望六住居跡 3 号	洋鉢	豆	下向茎	D-21	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六5土-6他		
	21	望六住居跡 3 号	洋鉢	豆	下向茎	D-21	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六5土-4		
	22	望六住居跡 5 号	洋鉢	豆	下向茎	C-17-14	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六7土-1他		
	23	望六住居跡 6 号	洋鉢	豆	下向茎	C-17-18	断面				目録絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六8土-5		
	24	望六住居跡 2 号	洋鉢	豆	右肩	D-19	U断面				目録絵文・条絵文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	望六2-1他		

第5表 遺構内出土器物観察表2

辨識番号	同機番号	遺物名	器種	形式	出土区	層位	法量(cm)		主文様・調査		附 文						取上番号	備考	
							上寸	底径	器高	外側	内面	白粉	陶質	表面	金質	石英	黄玉	碧石	
28	25	通穴土瓶1号	深鉢	圓	-	E-19-20	底面			ナガ	ナガ	○			○	○	○	通穴1	砂粒
32	28	土瓶3号	深鉢	可	下凹底	C-17	底・側部	19.0		長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	土瓶25・上-1他	
29	30	土瓶6号	深鉢	可	加葉山	F-15	側面			長縫斜文・条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	土瓶5・上-1	
33	31	土瓶6号	深鉢	可	-	F-15	側面			ナガ	ナガ	○			○	○	○	土瓶5・上-2	
34	33	土瓶8号	深鉢	直	神裂文	E-15	側面			鶴の脚文	ナガ	○		○	○	○	○	土瓶7号上-3	
34	34	土瓶9号	深鉢	可	下凹底	C-20	側面			長縫斜文	ナガ		○	○	○	○	○	土瓶19・上-1	
35	35	土瓶12号	深鉢	可	舟ノ丸	F-16	側面			条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	土瓶9・上-1	
37	37	土瓶13号	深鉢	可	下凹底	F-16	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	土瓶4・上-1	
38	38	土瓶13号	深鉢	可	下凹底	F-16	側面			長縫斜文	ナガ	○	○	○	○	○	○	土瓶4・上-2	
39	39	集石1号	深鉢	可	加葉山	C-12	側面			長縫斜文・条痕文	ナガ				○	○	○	集石39・上-6	
37	40	集石1号	深鉢	可	石瓶	C-12	底面	9.6		条痕文	ナガ	○	○	○	○	○	○	集石39・上-4	
41	41	集石2号	深鉢	直	神裂文	B-16	側面			鶴の脚文	ナガ	○		○	○	○	○	集石33・上-1	
38	43	集石3号	深鉢	直	石瓶	B-12	側面			条痕文	ナガ				○	○	○	集石48・上-1	
50	50	集石4号	深鉢	可	下凹底	D-17	口縁部			長縫斜文	ナガ				○	○	○	集石22・上-1	
51	51	集石4号	深鉢	可	下凹底	D-17	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石22・上-2	
53	53	集石6号	深鉢	可	加葉山	C-15	側面			長縫斜文・条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石30・上-2	
54	54	集石6号	深鉢	可	下凹底	C-15	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石30・上-1	
41	55	集石9号	深鉢	可	-	E-15	側面			ナガ	ナガ	○		○	○	○	○	集石52・上-1	
56	56	集石10号	深鉢	可	下凹底	C-15	口縁部	22.4		長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石20・上-1他	
37	57	集石10号	深鉢	可	加葉山	C-15	側面			長縫斜文・条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石20・上-2他	
58	58	集石10号	深鉢	可	下凹底	C-15	側・底部	14.2		長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石20・上-4他	砂粒
60	60	集石11号	深鉢	可	下凹底	F-15	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石38・上-1	
62	62	集石12号	深鉢	直	神裂文	D-16	側面			鶴の脚文	ナガ	○		○	○	○	○	集石21・上-1	発行者・砂粒
43	63	集石12号	深鉢	可	舟ノ丸	D-16	側面			神羽文	ナガ	○		○	○	○	○	集石21・上-2	
64	64	集石12号	深鉢	可	下凹底	D-16	底面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石21・上-3	
65	65	集石12号	深鉢	可	-	D-16	底面			ナガ	ナガ	○		○	○	○	○	集石21・上-7	
45	68	集石17号	深鉢	可	下凹底	E-13	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石35・上-2	
72	69	集石19号	深鉢	可	下凹底	D-16	底面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石10・上-9	
73	73	集石19号	深鉢	可	下凹底	D-10	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石10・上-7	
46	74	集石19号	深鉢	可	舟ノ丸	D-10	側面			条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石10・上-1	砂粒
75	75	集石19号	深鉢	可	-	D-10	側・底部	18.6		長縫斜文・条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石10・上-10他	発行者
76	76	集石20号	深鉢	可	-	C-D-11	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石9・上-7	
78	78	集石21号	深鉢	可	-	E-15	側面			ナガ	ナガ	○		○	○	○	○	集石31・上-2	
80	80	集石22号	深鉢	直	石瓶	D-10	口縁部			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石26・上-2他	砂粒
81	81	集石22号	深鉢	可	下凹底	D-10	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石26・上-5他	
82	82	集石22号	深鉢	可	下凹底	D-10	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石26・上-4	砂粒
84	84	集石24号	深鉢	直	石瓶	D-E-15	側面			条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石44・上-1	
85	85	集石24号	深鉢	可	下凹底	D-E-15	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石44・上-2	発行者
87	87	集石25号	深鉢	直	舟ノ丸	C-D-16	口縁部			鶴の脚文・Aサレ	ナガ	○		○	○	○	○	集石36・上-5	
88	88	集石25号	深鉢	可	加葉山	C-D-16	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石36・上-2	
89	89	集石25号	深鉢	可	加葉山	C-D-16	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石36・上-1	
90	90	集石25号	深鉢	可	石瓶	C-D-16	側面			条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石36・上-4	
91	91	集石26号	深鉢	可	石瓶	E-12	口縁部			長縫斜文・条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石2・上-2	
92	92	集石26号	深鉢	可	舟ノ丸	E-12	側面			条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石23・上-1他	
93	93	集石27号	深鉢	可	石瓶	C-D-12	口縁部			条痕文	ナガ	○		○	○	○	○	集石27・上-4	
94	94	集石27号	深鉢	可	下凹底	C-D-12	側面			長縫斜文	ナガ	○		○	○	○	○	集石27・上-12	

第6表 遺構内出土器観察表3

辨認番号	揭露番号	遺構名	器種	型式	出土区	層位	法量(cm)		主文様・調査		附 文					取上番号	備考	
							上寸	下寸	底径	高さ	外側	内面	白粉	陶片	金環	石英	黄玉	
51	95	集石27号	遺構	Ⅱ	下凹基	C-11-12	側面				貝殻網文	ナメ	○	○	○	○	○	集石27-1-32
	96	集石27号	遺構	Ⅱ	加豐山	C-11-12	側面				貝殻網文	ナメ	○	○				集石27-1-1
	97	集石27号	遺構	Ⅱ	下凹基	C-11-12	側面				貝殻網文	ナメ	○	○	○	○	○	集石27-1-17
	98	集石27号	遺構	Ⅱ	下凹基	C-11-12	側面				貝殻網文	ナメ	○	○	○	○	○	集石27-1-13
	99	集石27号	遺構	Ⅱ	下凹基	C-11-12	側面				貝殻網文	ナメ	○	○	○	○	○	集石27-1-21
	100	集石27号	遺構	Ⅱ	集石丸	C-11-12	側・底部				条文	ナメ	○			○	○	集石27-1-31
	101	集石27号	遺構	Ⅱ	加豐山	C-11-12	側・底部	7.0			貝殻網文	ナメ	○		○	○		集石27-1-6他 集行者
	102	集石27号	遺構	Ⅱ	—	C-11-12	側・底部	7.0			—(溝)	ナメ	○		○	○	○	集石27-1-35
52	105	集石28号	遺構	Ⅱ	右斜	F-12	口縫部	15.6			貝殻網文・条文	ナメ	○		○	○	○	集石1-1-2他
	106	集石28号	遺構	Ⅱ	下凹基	F-12	側面				貝殻網文	ナメ	○		○	○	○	集石1-1-1
	107	集石31号	遺構	Ⅱ	下凹基	F-11	C-縫部				貝殻網文	ナメ	○		○	○	○	集石18-1-3
53	110	集石32号	遺構	Ⅱ	下凹基	B-C-12	側面				貝殻網文	ナメ	○	○	○	○	○	集石11-1-1
	111	集石33号	遺構	Ⅱ	—	C-縫部	—				貝殻網文・条文	ナメ	○	○	○	○	○	集石40-1-1他
54	112	集石34号	遺構	Ⅱ	集石丸	B-C-12	側面				条文	ナメ	○		○	○	○	集石5-1-1
	113	土器集中	遺構	Ⅱ	右斜	D-15	完形品	19.2	12.7	26.0	貝殻網文・条文	ナメ	○	○	○	○	○	土器4-4他
	114	土器集中	遺構	Ⅱ	右斜	D-15	口縫部				貝殻網文・条文	ナメ	○		○	○	○	土器4-4-2他
	115	土器集中	遺構	Ⅱ	吉原	D-15	側面				神引文	ナメ	○		○	○	○	土器4-10
	116	土器集中	遺構	Ⅱ	仰型文	D-15	側面				稻斗仰型文	ナメ	○	○	○	○	○	土器4-11 稲船
	117	土器集中	遺構	Ⅱ	加豐山	D-15	側・底部	13.0			貝殻網文・条文	ナメ	○	○		○	○	土器4-3他

第7表 遺構内出土石器観察表

辨認番号	揭露番号	遺構名	器種	石材	出土区	層位	長さ(cm)		幅(cm)		厚さ(cm)		重さ(g)		取上番号	備考
							(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)			
21	19	堅穴住居跡2号	石斧	ホルンフェルス	C-21	遺	(2.0)	(3.7)	0.8	4.5	4					
31	26	土坑1号	磨石	凝灰岩	C-15	遺	7.0	5.4	3.6	122.0	15					
	27	土坑2号	石斧	ホルンフェルス	E-12	遺	6.2	7.2	2.1	112.0	5					
33	32	土坑6号	砥石	砂岩	F-15	遺	5.0	3.8	0.5	14.0	1					
34	36	土坑12号	磨石	花崗岩	F-16	遺	8.0	5.6	2.2	141.0	1					
37	42	集石2号	磨石	凝灰岩	E-16	遺	7.5	7.2	5.0	225.5	87	集行者				
38	44	集石3号	磨石	砂岩	B-12	遺	7.3	6.2	4.4	248.0	44					
	45	集石3号	磨石・敲石	安山岩	B-12	遺	6.1	9.6	6.0	394.5	35					
	46	集石3号	磨石・敲石	安山岩	B-12	遺	13.8	10.4	5.4	986.5	4					
	47	集石3号	磨石	砂岩	B-12	遺	6.3	8.7	4.5	288.0	12					
	48	集石3号	石皿	砂岩	B-12	遺	7.3	6.4	5.2	315.0	49					
	49	集石3号	礪削	凝灰岩	B-12	遺	7.8	6.7	7.3	529.5	16					
39	52	集石5号	敲石	砂岩	D-14	堆上	5.9	5.7	2.6	109.5	39					
42	59	集石10号	磨石	安山岩	C-15	堆上	7.2	5.8	5.3	237.0	25					
	61	集石11号	石皿	凝灰岩	F-15	堆中	10.0	9.3	5.0	598.0	24					
43	66	集石13号	石皿	凝灰岩	B-14	堆	12.5	12.5	4.7	710.5	5					
	67	集石13号	石皿	凝灰岩	B-14	堆	5.7	9.1	4.6	292.0	9					
	69	集石17号	磨石	砂岩	E-11	堆上	7.2	7.6	3.5	258.0	4					
45	70	集石18号	砥石	砂岩	D-14	堆上	5.2	6.0	1.8	83.0	43					
	71	集石18号	磨石	安山岩	D-14	堆上	6.4	6.6	5.0	241.0	12					
46	77	集石20号	磨石	砂岩	C-11	堆上	11.1	9.2	5.4	722.5	32					
	79	集石21号	砥石	砂岩	B-15	堆	8.9	6.0	5.3	297.0	32					
	83	集石23号	磨石・敲石	凝灰岩	B-12	堆上	11.7	7.7	5.7	608.5	17					
48	86	集石24号	磨石	凝灰岩	D-E-15	堆中	6.2	5.9	4.8	240.5	1					
51	103	集石25号	磨石	砂岩	C-11	堆中	5.2	5.4	3.1	88.5	65					
	104	集石27号	砥石	砂岩	F-11	堆中	9.4	9.7	2.2	334.0	62					
53	108	集石31号	磨石	砂岩	F-11	堆中	5.7	5.4	4.5	133.5	22					

第3節 遺物

1 土器

縄文時代早期の土器はVI及びV層から出土している。それぞれの土器の特徴から以下のIからXVに分類した。それぞれの分類に該当する土器型式等は次のとおりである。

I 類 口縁部が小波状を呈し、口唇部内面に段を有する土器である。岩本式土器に該当する。

II 類 口縁部は直行かやや外反し、口唇部は平坦となり、器壁は全体的に薄い。口縁部には横位の貝殻刺突文を数条這らし、胴部には斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる土器である。器形の特徴から円筒形と角筒形に二分した。加栗山式土器に該当する。

III 類 口縁部がやや外反し、胴部に貝殻押引文を施す点が特徴である一群である。吉田式土器に該当する。

IV 類 僅かに膨らむ胴部に口縁部は外反もしくは直行する器形となる。口縁部に貝殻刺突文を横位・斜位・羽状に施し、胴部の横位・斜位の条痕を特徴とする一群である。倉園B式土器、石板式土器、石坂系の土器を想定している。口縁部は形状から細分した。

V 類 口縁部から胴部にかけて横方向の貝殻腹縁による条痕文が施される土器である。中原式土器に該当する。

VI 類 口縁部は直線的に外傾、直行、内湾する器形で、口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで構成する土器群である。下剥峯式土器に該当する。

VII 類 口縁部は直行、やや外傾もしくは内湾する器形となる。短い貝殻条痕や沈線により施文する。波状口縁の波頂部下に瘤状突起を貼付するものもある。桑ノ丸式土器に該当する。

VIII 類 口縁部は直行、やや外傾および内湾する器形で、短い条痕文や沈線文と貝殻刺突文で文様を構成する。下剥峯式土器と桑ノ丸式土器の要素を併せ持つ土器群である。

IX 類 回転施文具により施文する土器群である。押型文土器様式に属するものである。

X 類 外反する口縁部に胴部は張るものが多い。文様は沈線文、刺突連点文、刻目突帯文、襤文、結節縄文で構成される一群である。妙見・天道ヶ尾式土器、平柄式土器を想定している。

XI 類 口縁部がラッパ状に開く器形となる。胴部に網目撲糸文やヘラによる平行沈線文を施すものである。塞ノ神式土器に比定できる。

XII 類 胴部に条線文や貝殻腹縁による押引文等を施す土器である。苦浜式土器に該当する。

XIII 類 文様の施されない土器の一群である。

XIV 類 上記のI類からXII類に分類できなかった土器を本類とした。

XV 類 次の出土品を本類とした。

1 下剥峯式土器等で円筒形以外の器形の土器片をまとめた。

2 土器の底部を再加工した土製品をまとめた。

3 压痕のある土器の底部をまとめた。

(1) I類土器 (第58・59図 118)

C-10区から1点のみの出土である。118は、口唇部外端に貝殻刺突文を押圧気味に施すことにより小波状を呈する口縁部となる。口縁部外面にも同様の刺突が施される。口唇部内面には段を有する。胴部には幅の広い横位の条痕が残る。これらの特徴から岩本式土器に該当するものと思われる。また、胴部には縦長の補修孔が残る。

(2) II類土器 (第58~61図)

II類土器は加栗山式土器に該当し、出土状況は第58図に示した。調査区の西側の斜面に多く出土し、東に行くにつれて出土量が減少しながら21区及び22区では皆無となる。加栗山式土器は円筒形・角筒形・上面観がレモン形を呈する3種類の器形があるとされるが、本遺跡出土の土器のほとんどは円筒形で、角筒形は極めて少なく、上面観がレモン形を呈するものは確認できなかった。ここでは、その器形で円筒形と角筒形に二分した。

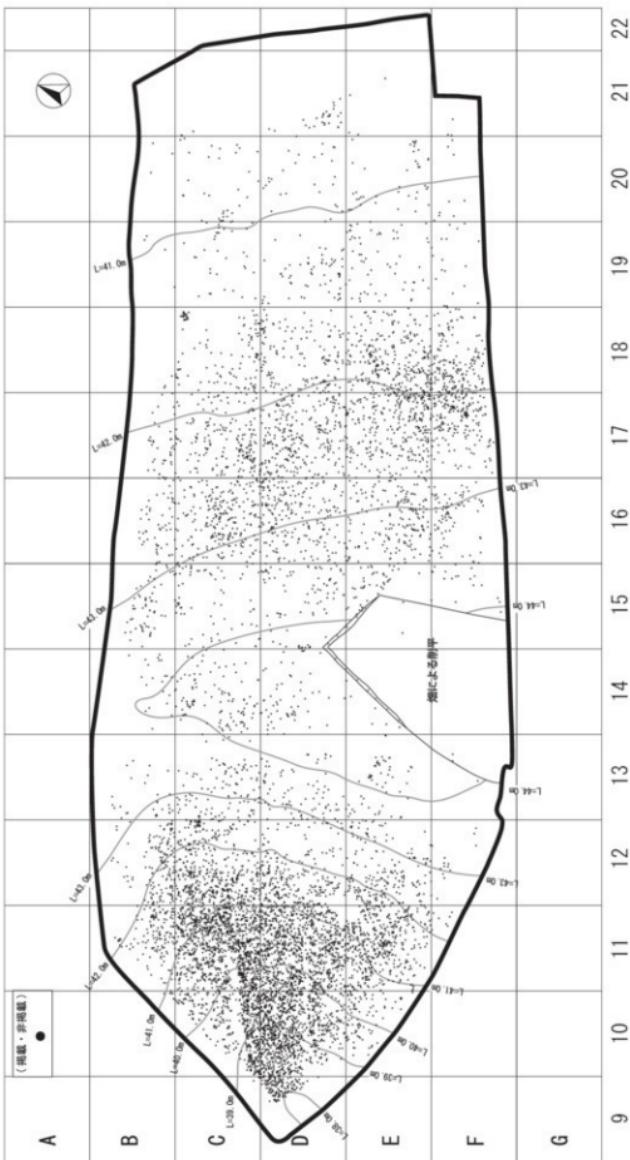
II-1類 (第59~61図 119~148)

II類の中でも円筒形の器形をもつものである。119~125は口縁部片である。クサビ形貼付文をもつ121~125と貼付しない119・120に大別できる。

119~125はいずれも直行もしくは直線的に若干開く

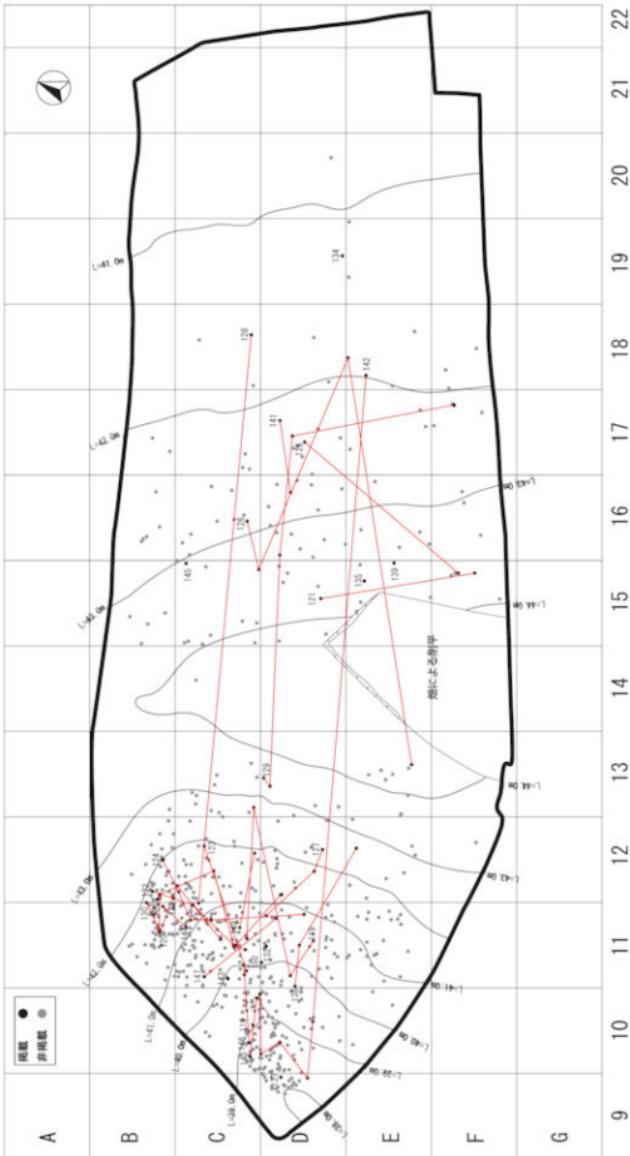
(1タリット 10m × 10m 地形図 位置上乗)

第57図 全土器出土分布図



(1グリッド 10m×10m・測量基準面以上)

第58図 I・II類土器出土分布図



口縁部で、口唇部は平坦でキザミが施される。口縁部には横位の貝殻刺突文が3~4条巡り、口縁部文様帶の直下にはクサビ形の突起が2~3段貼付される。胴部には縱位もしくは斜位の貝殻刺突文が施される。内面調整は口縁部が横方向のナデで、胴部は縱方向のナデとなる。119は口径13.0cmで、直線的に開く器形となる。口縁部には3条の貝殻刺突文を施し、胴部には縦位の貝殻刺突文が上書きされる。120は口径10.0cmを測る小形の土器である。胴部が若干膨らみ、口縁部は直線的に開く器形を呈する。口唇部にはキザミが施され、横位の貝殻刺突文が2条口縁部を巡り、胴部は全面に縱位の貝殻刺突文が施される。

126・127は胴部片で、直線的に開く器形となる。126は縦位に貝殻刺突文が3条・1条のパターンで施される。

127は、縦位の貝殻刺突文が密に施される。

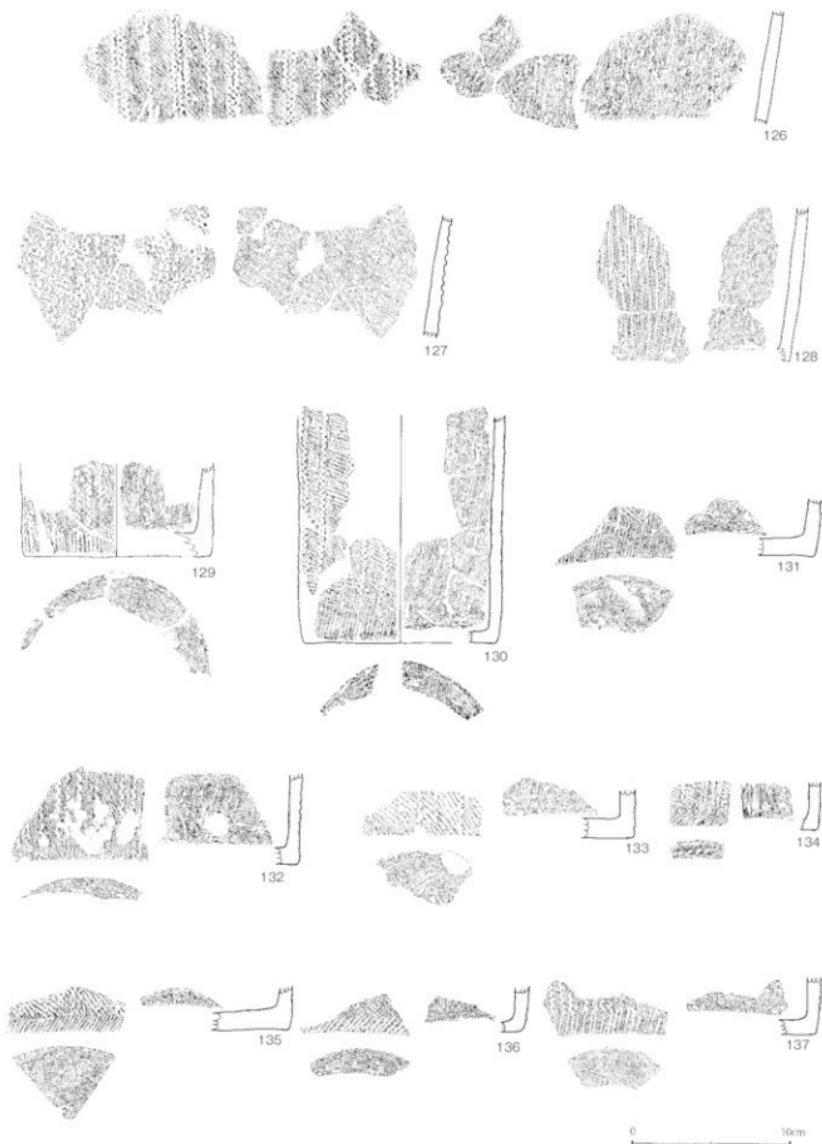
128~148は平底を呈する。底部から胴部にかけての器形は直接的にいくらか開きながら立ち上がるか直立するものである。128の大半は胴部であるが底部との境付近が残る。その中で144は膨らみをもって立ち上がる器形である。胴部には斜位の条痕文に縦位もしくは斜位の密な貝殻刺突文が二重に施され、底面には縦位もしくは斜位のキザミが施される。145~148は底面境のキザミのみが残る。

II-2類 (第61図 149・150)

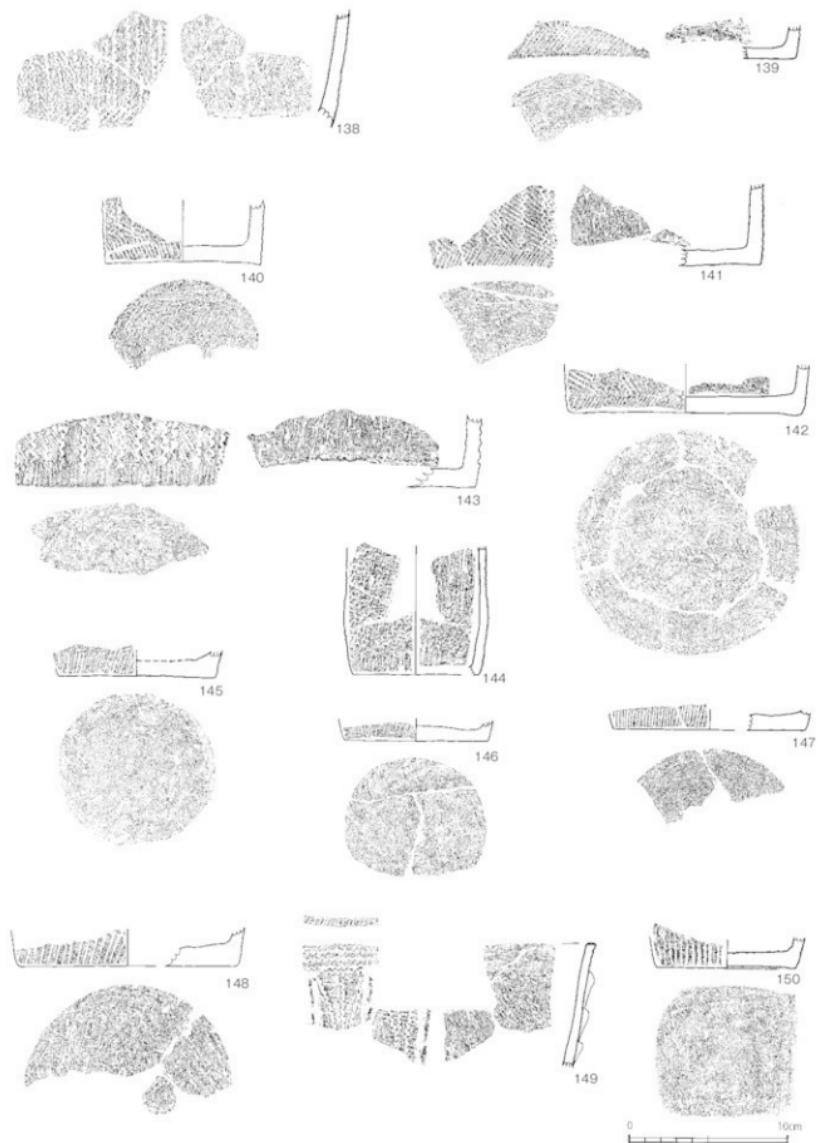
II-2類は角筒形の器形をもつもので、2点を掲載した。149は直線的に開く器形で、平坦面をもつ口唇部にはキザミが施される。口縁部には3条の貝殻刺突文が巡り、その下位にクサビ形の粘土が貼付される。胴部には



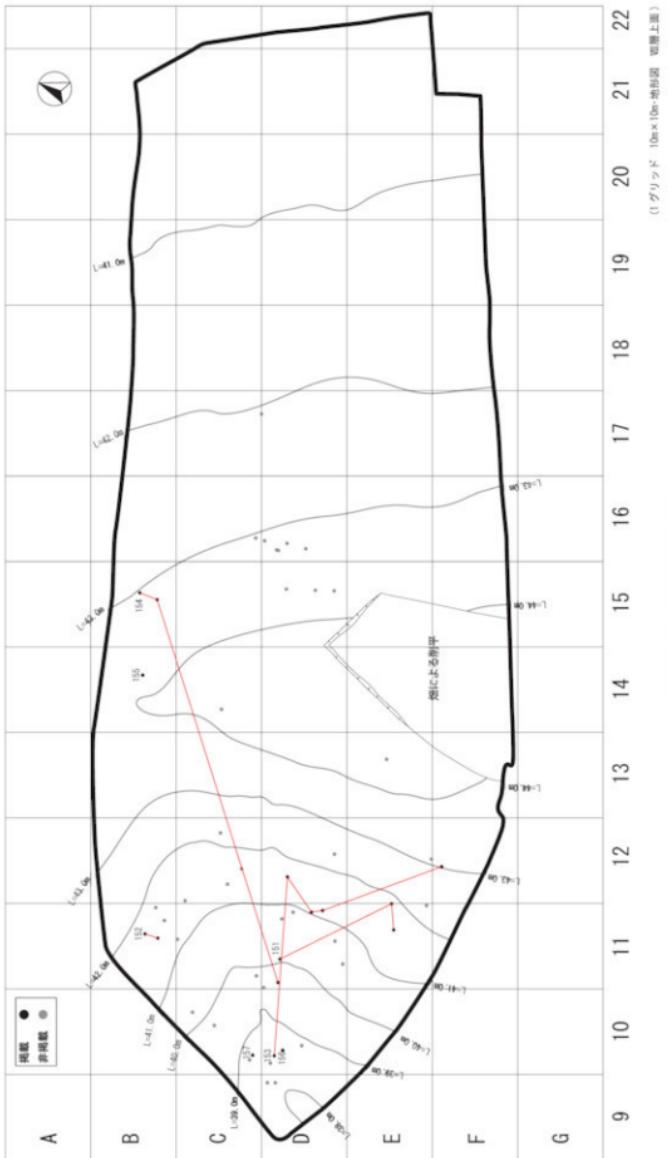
第59図 I・II類土器



第60図 II類土器 1



第61図 II類土器2



第62図 Ⅲ類土器出土分布図

(1グリッド 10m×10m・測量基準 地圖上)



第63図 III類土器

斜位の貝殻条痕に斜位・縱位の貝殻刺突文が施される。本土器とクサビ形貼付文をもつ円筒形土器の文様構成は同じである。150は角筒形土器の底部である。底面境に縱位のキザミが残る。

(3) Ⅲ類土器（第62・63図 151～157）

全体的にはまばらな出土状況ではあるが、そのほとんどは調査区西側の斜面からの出土である。18区から東への平坦面での出土は確認されなかった。出土状況は第62図に示した。Ⅲ類土器は、吉田式土器である。掲載点数が少ないとから一括して記述する。

胴部に貝殻押引文を施す点が特徴である。加栗山式土器と同様に3種類の器形をもつとされているが、本遺跡からは円筒形のみが確認された。口縁部は外反もしくはやや外反する器形となる。

151は胴部から口縁部にかけて直立し、口縁端部でやや外反する。口唇部にはキザミが、口縁部上部には斜位の貝殻刺突文が巡り、その下位には1段の押しつぶされたクサビ形貼付文が、胴部には斜位の条痕文が施される。クサビ形貼付文の間に縦位の貝殻刺突文が施文される。内面調整は、口縁部付近で特に丁寧にナデしている。152は外反する器形に、口唇部にはキザミが施される。口縁部は横位の貝殻刺突文が3条巡る。胴部には押引文が施され、クサビ形貼付文が1段残る。153は151と同一個体と思われる。胴部から口縁部にかけての器形に若干の違いはあるものの、施文・胎土・調整等は類似する。154は、幾分厚い器壁をもつ。口縁部はやや外反する器形に、口唇部にキザミが入る。口縁部には貝殻刺突文が3条横位に巡り、胴部には横位の押引文が施される。口縁部に縱長の補修孔が穿たれている。155は、外反する口縁部に、横位の刺突文とその下位に押引文で文様を構成する。156は器壁が1.5cmと厚い。口縁部は外反し、口唇部にキザミはない。口縁部から胴部にかけて横位の押引文が施される。内面は丁寧なナデ調整である。157も器壁が1.5cmと厚い胴部である。外面は多少摩耗しているが、横位の押引文は刺突による施文にも見える。

(4) Ⅳ類土器（第64～70図）

Ⅳ類土器は石坂式土器に該当すると思われ、その出土状況は第64図に示した。調査区内の西側にある斜面から多く出土し、14区付近の尾根部分の出土は少なくなる。15区から18区にかけ出土量がやや増加し、19区から東側へかけての出土は確認できなかった。

石坂式土器は、僅かに膨らむ胴部に口縁部は外反もしくは直行する器形が多い。口縁部に貝殻刺突文を横位・斜位・羽状に施し、胴部には条痕文を主に斜位に施す土器である。ここでは、口縁部と胴部以下に大別し、口縁部についてその器形で次のように細分した。

【口縁部】

- IV-1類 外反するもの
- IV-2類 直線的に外傾するもの
- IV-3類 直立するもの
- IV-4類 内湾、内湾気味のもの

IV-1類（第65・66図 158～176）

口縁部が大きく外反するものからやや外反するもの一群である。の中でも口縁部の文様でさらに分けた。

158～169は口縁部が外反する器形で、口縁部文様帯に斜位の刺突文を施すものである。158～160は特に外反が強く、160は内面に棱をもつ。161と165は波状口縁でそれ以外は平口縁となる。本類の土器は、基本的に口縁部には斜位もしくは羽状の刺突文、胴部には斜位もしくは綾状の条痕文が施されるが、161の胴部には縦位の条痕文と横位の刺突文が施される。158・159・162・163・168の口唇部には刺突文が施されるが、162は2列の刺突が巡る。161・164・166・169の口唇部にはキザミが施されるが、161は羽状の施文となる。内面調整はいずれも丁寧なナデが施されている。169の復元口径は13.8cmで、口縁部に斜位の刺突文、胴部に綾状の条痕文が施される。165・167・168も同様な文様構成となる。

170～176は口縁部が外反する器形で、口縁部文様帯に横位の刺突文が施されるものである。口縁部が外反するものと口縁端部のみが外反するものがあるが、171と175は内面に棱をもつ。口縁部文様帯に横位の刺突を施し、胴部には綾状の条痕文を施す文様構成となっている。170・172・176の口唇部にはキザミが施される。170は器高29.3cm、口径24.0cm、底径13.0cmを測る。口縁部には6条の貝殻刺突文が横位に巡らせ、胴部には縦に引いた条痕文に沿って斜位の条痕文を施す規格性をもった文様構成である。胴部最下位には横位の条痕文を巡らせ、底部境には縦のキザミが施される。173には補修孔が穿たれる。174の口径は18.0cmを測る。本類の土器の内面調整はいずれも丁寧なナデである。IV-1類は、器形的な特徴から石坂I式土器に該当する。

IV-2類（第66・67図 177～191）

口縁部が、直線的に外傾するものである。の中でも口縁部文様が刺突文か条痕文で更に分けられる。胴部は、基本的に綾状の条痕文が施される。

177～187は口縁部が外傾する器形を呈し、口縁部文様帯に刺突文を施すものである。183は波状口縁となり、それ以外は平口縁である。さらに、口唇部断面が方形を呈するものが多く、180・185・186の口唇部には刺突が施される。ただ、186の刺突は一部分のみの施文である。177～184の口縁部文様帯には、横位の刺突文が2～3条巡る。185と186は、口縁部文様帯に斜位の刺突文が施される。183・184は瘤状突起が貼付される。183は、波

頂部に瘤状突起が貼付される。184は口径18.2cmで、瘤状突起は1対が想定される。182には補修孔が穿たれる。187の口縁部には銀歯状と横位の刺突文が施される。胴部には、浅い条痕文の上に格子目状の沈線が部分的に施される。

188～191は、直線的に外傾する器形に口縁部から胴部にかけて条痕文が施されるが、口縁部は横位の条痕文である。189は口唇部平坦面が内傾し、口縁部直下の器壁が薄くなる。191は波状口縁となり、波頂部外面に瘤状突起が貼付けられる。IV-2類は、石坂II式土器に該当する。

IV-3類（第68図 192～199）

口縁部が直立するもので、口縁部文様帶に刺突もしくは条痕文を施し、口縁部断面はほぼ方形となる。

192～196は口縁部に斜位もしくは縱位の刺突文、胴部に斜位や横位の条痕文が施される。192は、胴部から直線的に立ち上がり、口縁部の器壁を薄くすることで外反するよう見える。口唇部には刺突文が施される。193の口唇部には、2列の刺突文が施される。194の器壁は1.3cmと他のものと比べて厚く、口唇部外縁のキザミが特徴的である。195の口唇部には刺突文、196の口唇部にはキザミが施される。197・198は口縁部に横位の刺突文を2条巡らせ、胴部に綾杉状の条痕を施す。199は口縁部に横位の条痕文、胴部に横位・縱位の条痕文を施す。IV-3類は、石坂II式土器に該当する。

IV-4類（第68図 200～205）

口縁部が内湾もしくは内湾気味のものである。

200～204は、口縁部には数条の刺突文を横位に巡らせ、胴部には条痕文等を施す土器である。203のみが波状口縁となり、他は平口縁である。201は口唇部外縁にキザミを施し、口縁部には横位の3条の刺突文が巡り、胴部は綾杉状の条痕で施される。胎土には雲母を含む。なお、口唇部外縁のキザミを施すのは194と同じである。202と203は口縁部に横位の刺突文を施すが、胴部文様は明瞭な条痕文である。203は胴部に屈曲部をもち、205は摩耗のため明確ではないが、矧い沈線による横位の羽状文を施す。IV-4類に分類した土器は石坂II式土器の器形や文様とは異なるが、文様構成には類似点もあることから石坂系の土器としておきたい。

【胸部・底部】（第69・70図 206～235）

胸部と底部については文様により分類し、一括して記述する。総じて底部から胴部にかけて直線的に外傾する器形のものが多い。

206～214は、斜位もしくは横位の条痕文を施すものである。206は外面が摩耗し、底部下端の文様は確認できないが、胴部には斜位の条痕文が施される。207～212は底部下端まで横位もしくは斜位の条痕文が施され、213

と214は胴部下端に施文はない。

215～222は胴部から底部にかけて綾杉状の条痕文が施されるものである。216の器壁の厚さは不安定で器面調整も粗く、補修孔が穿たれる。217～220・222は胴部から胴部下端まで綾杉状の条痕で施文されるが、221はヘラ状と思われる工具で施文している。

223～230は胴部に綾杉状もしくは斜位の条痕、胴部下端には横位の条痕が施されるものである。223の底径は10.6cmで、底部から胴部にかけて幾分膨らみをもって立ち上がる。224の底部境には部分的に横位の条痕文が観察される。上げ底気味の底部で、底径は14.5cmを測る。225は底部から胴部にかけて直線的にやや外傾する器形である。胴部と底部境付近は摩耗しているが、一部横位の条痕文が残る。底径13.0cmを測る。229・230は、外傾の度合いが強い。

231・232は、胴部に綾杉状の条痕文が施される。231は胴部がやや膨らみ、底面境には縦位の条痕を施す。底径は8.4cmを測る。232は、底部から胴部にかけて直線的にやや外傾する器形を呈する。胴部には綾杉状の条痕文、底面境には横位の刺突文が巡り、底径は8.8cmを測る。

233と234の胴部下半には縦位の条痕文が施されるが、その上位の文様は不明である。

235の胴部には綾杉状の条痕文に縦位の刺突文が上書きされる。底面境には施文されない。底面に厚みがあり、底径は7.0cmを測る。

（5）V類土器（第71・72図 236～241）

本類は、中原式土器に該当する。出土量が少ないこともあってまばらな出土状況であるが、出土状況は第71図に示した。

いずれももはば直立する口縁部片で口唇部は丸く収める。器壁は1.0cm以上1.5cm未満と総じて厚い。出土した土器には、貝殻腹縁による横位の押引文が口縁部に施される。内面調整は丁寧なナデ、特に236はミガキがかかる。

（6）VI類土器（第73～88図）

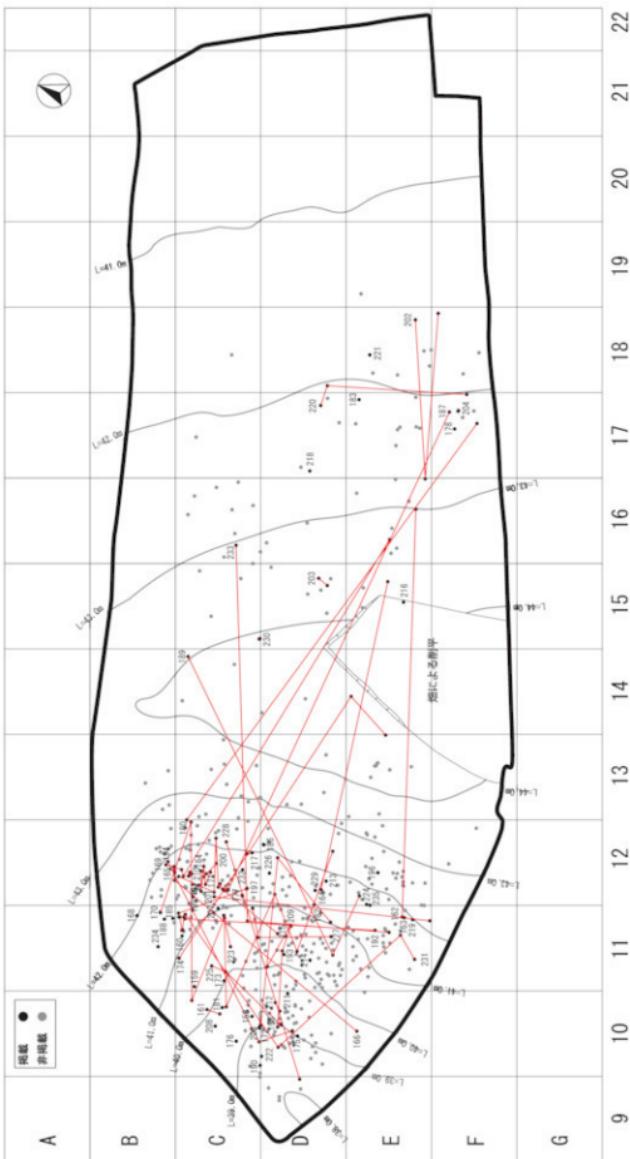
本遺跡において遺物量が一番多く、10区から12区、16区から18区に特に多く出土した。尾根状の地形となる14区、調査区の東端となる21区・22区の出土量は少ない。その出土状況は、第73・74図に示した。

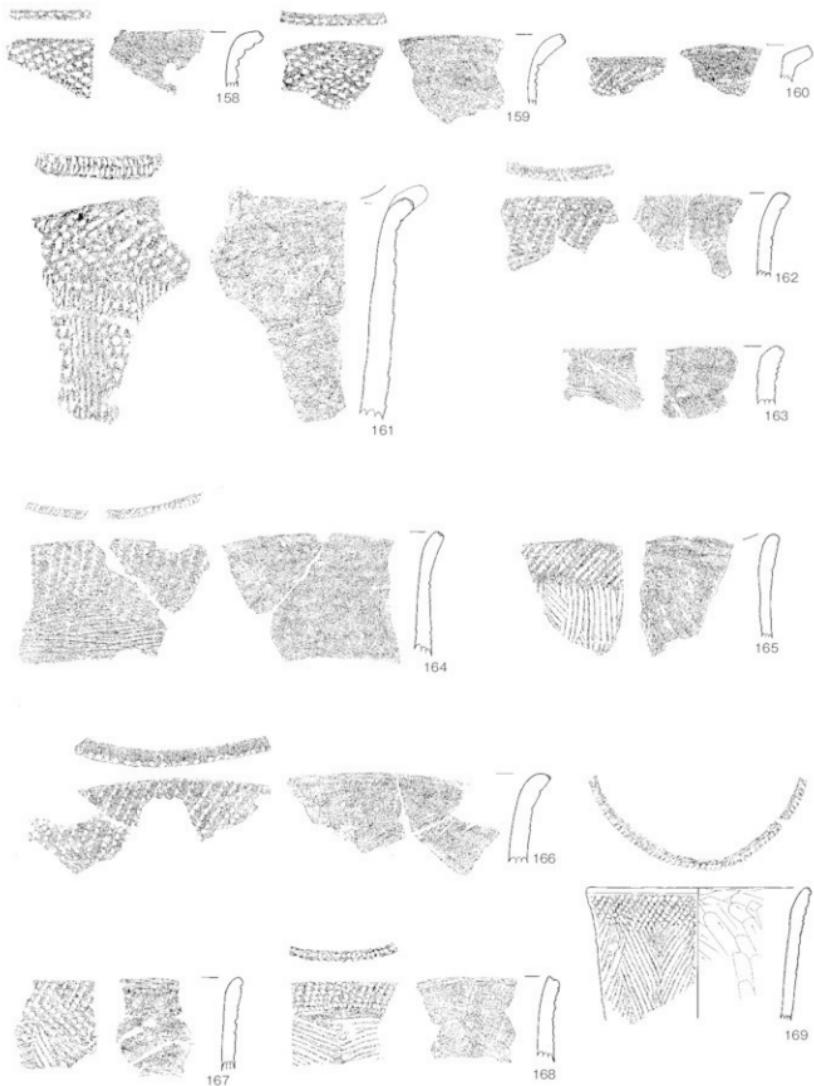
口縁部が僅かに内湾あるいは直行する器形で、口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで構成する土器である。口縁部あるいは胴部に瘤状突起がつくものがある。下剥峯式土器に該当する。

口縁部については器形によって細分し、胴部、底部は一括して記述する。

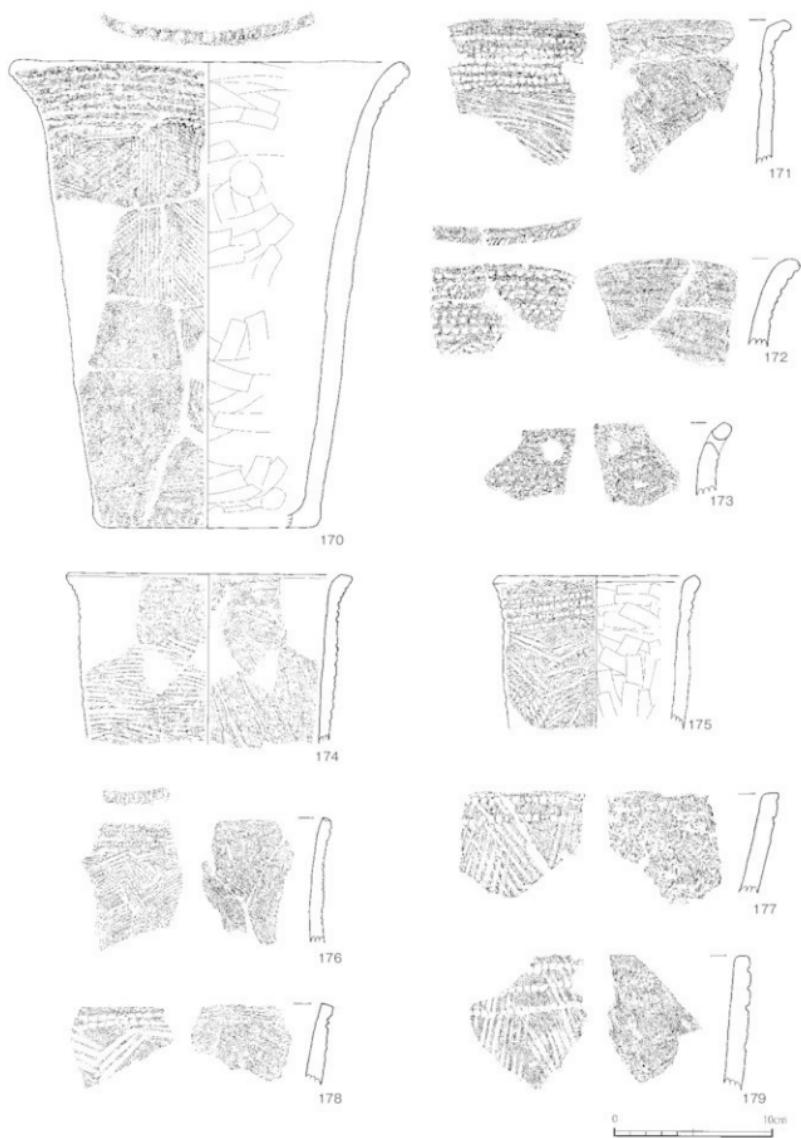
(1グリッド 10m×10m・地形図 背景上)

第64図 IV類土器出土分布図

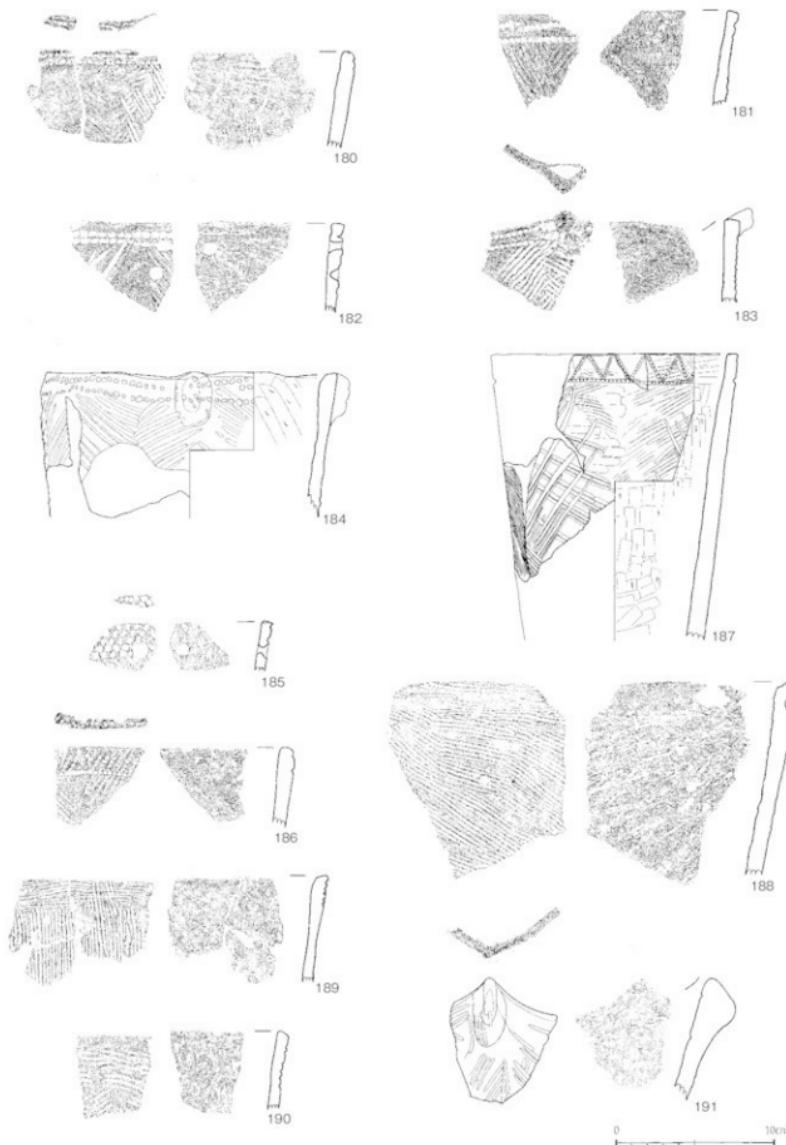




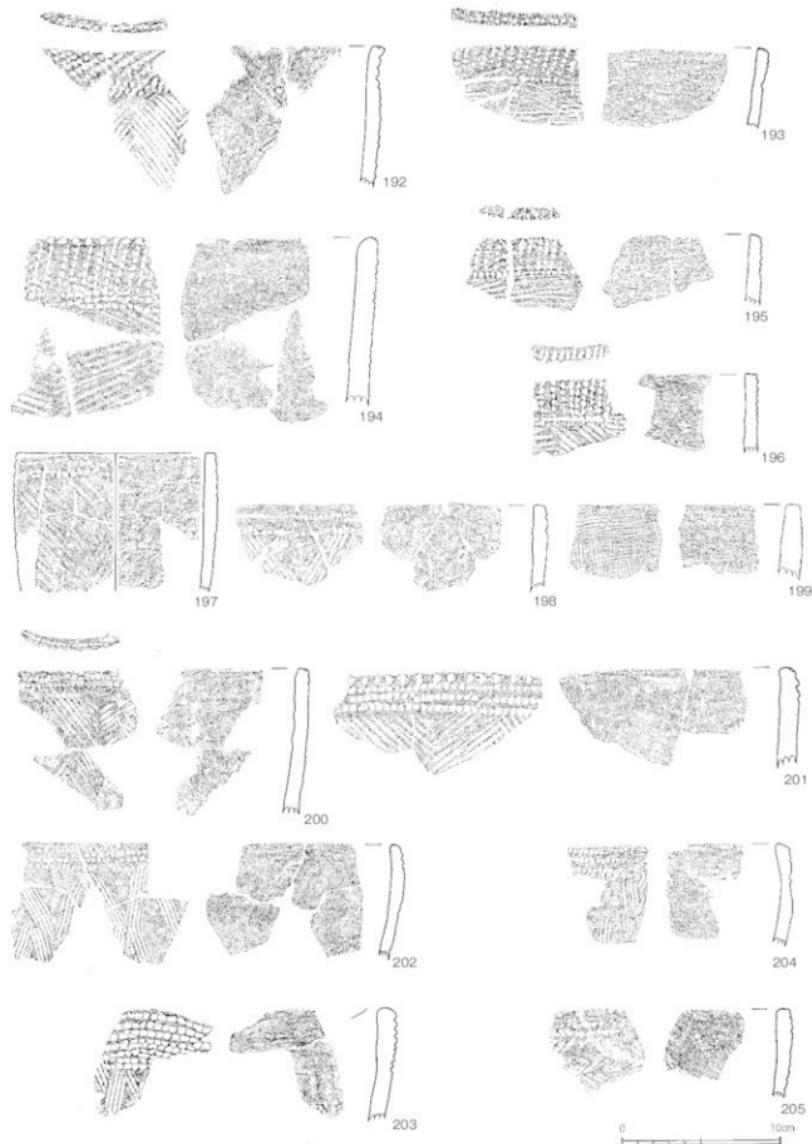
第65図 IV類土器1



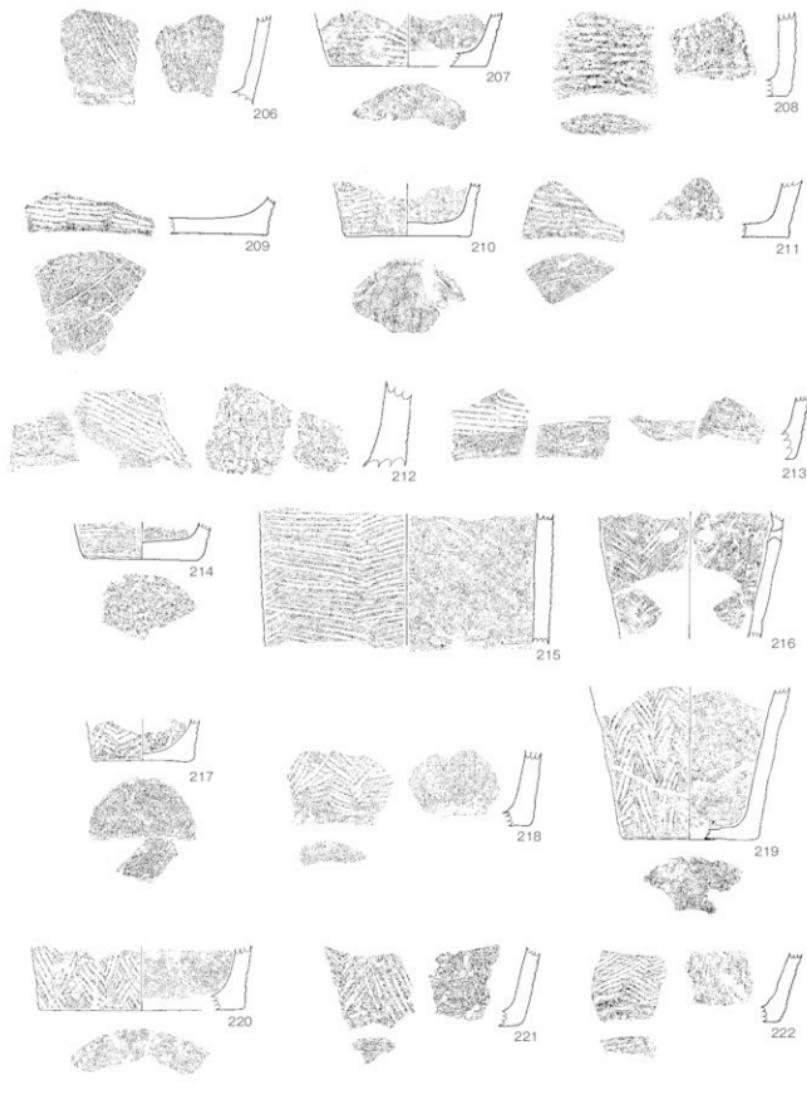
第66図 IV類土器2



第67図 IV類土器3



第68図 IV類土器4

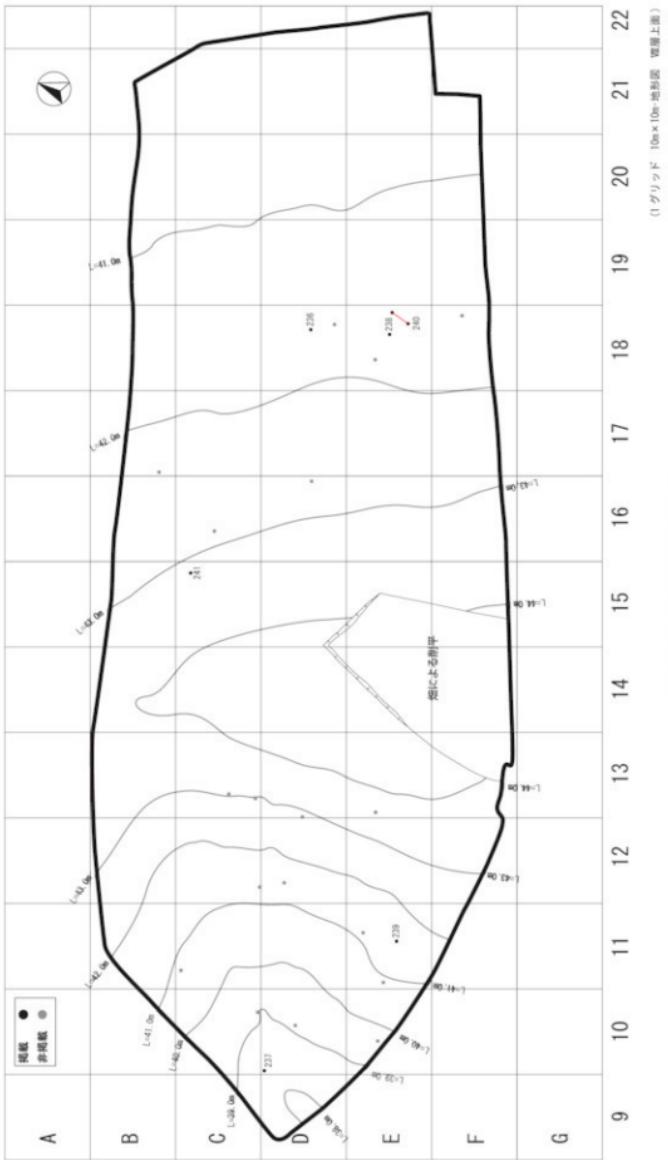


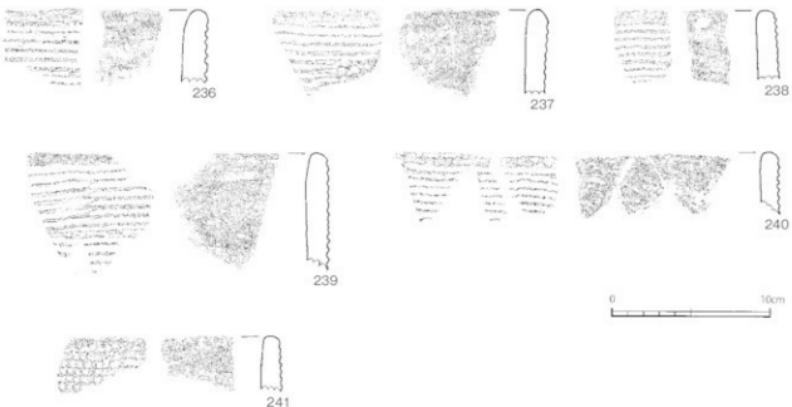
第69図 IV類土器5

0 10cm



第70図 IV類土器6





第72図 V類土器

【口縁部】

口縁部は、大まかに直線的に開くもの、直立するもの、内湾するものに分類した。

- VI-1類 口縁部が直線的に開くもの
- VI-2類 口縁部が直立するもの
- VI-3類 口縁部が内湾するもの

VI-1類 (第75~78図 242~289)

口縁部が直線的に開く土器群である。この中でも平口縁と波状口縁があり、さらに瘤状突起の付くものがある。

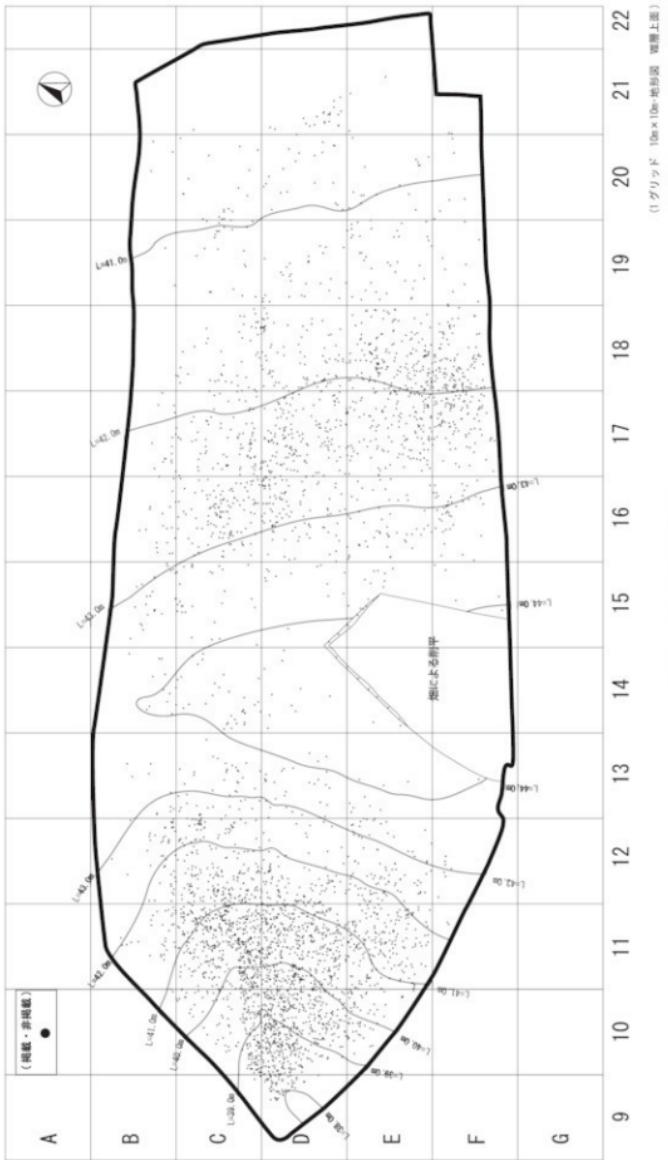
242~271は口縁部が直線的に開き、平口縁のものであるが、253は脇部に若干の膨らみをもつ。口縁部の断面は方形。平坦面はほぼ水平となるものが多い。文様構成は、口縁部から脇部にかけて同じ文様を施すもの(242・243・252・260)、口縁部文様帯をもつもの(244~251・253~259・261・264~270)に大別できる。242と243は器形に多少の違いはあるが、間隔を置いて横位に施す刺突文、ケズリの内面調整・砂粒を多く含む胎土等から同一個体の可能性もある。244は口縁部に横位の刺突文、脇部に羽状の刺突文を施すもので、本類の中で最も多い文様構成である。246・247の脇部文様は不規則に施されるが、248は羽状に近い。249は横位の刺突文を口縁部に巡らせ、脇部には鋸歯状の刺突文を施す。250の外面が摩耗しているため明確ではないが、口縁部には羽状の刺突文を横位に、脇部には鋸歯状の刺突文を施す。252は、羽状の刺突文を口縁部から脇部にかけて施す。254の口縁部の施文は部分的である。261・263・266には円形の補修孔が穿たれる。262は口縁部文様帯に鋸歯状の刺突文が施される。265・267・268は口縁部に横位の刺

突文を施すが、その下位には施文されない。269は口縁部に横位の刺突文を施すが、その口縁部文様帯は幅広い。270は口縁部と脇部に横位の刺突文、その間を斜位の刺突文で充填する。

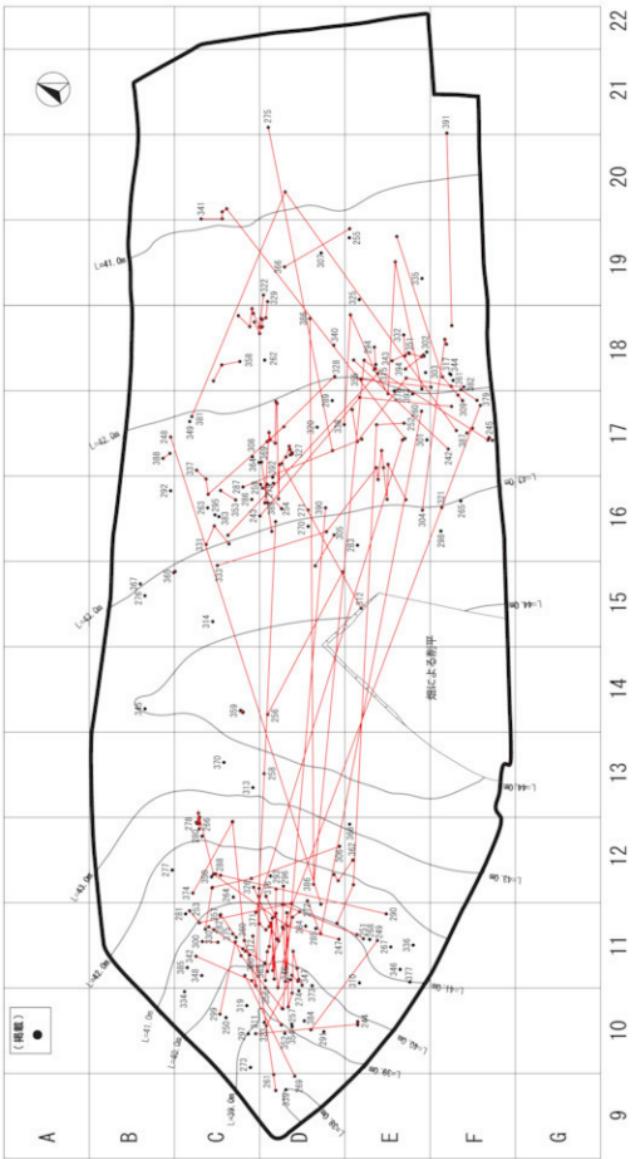
272~277は口縁部が直線的に開き、平口縁で瘤状突起を貼付する一群である。いずれも口唇部は水平な平坦面となり、横位の刺突文を施す口縁部文様帯をもつ。272~274は縦長、275~277は横長の瘤状突起を貼付する。278の口唇部はしっかりとした面取りを行っている。口縁部に横位の刺突文を3条重らせ、脇部には横位の羽状文を刺突で施す。さらに、口縁下部に穿孔された縱長の瘤状突起が貼付される。273・274は口縁部に横位の刺突文、脇部に斜位の刺突文で文様を構成し、縦長の瘤状突起が貼付される。

278~282は直線的に開く口縁部で、波状口縁となるものである。278は、口縁部に沿って刺突文、脇部には刺突による横位の羽状文が施される。波頂部は二対を想定して実測してある。282は波頂部のみが部分的に突起し、外反が強くなる。

283~289は口縁部が直線的に開き、波状口縁で瘤状突起を有するものである。283~288は波頂部に合わせ縦長の瘤状突起を口縁部上端から貼付するが、289は波頂部からやや下方に瘤状突起を貼付している。いずれも、口縫に沿って横位の刺突文が施される。285は瘤状突起の下方に補修孔が穿たれている。

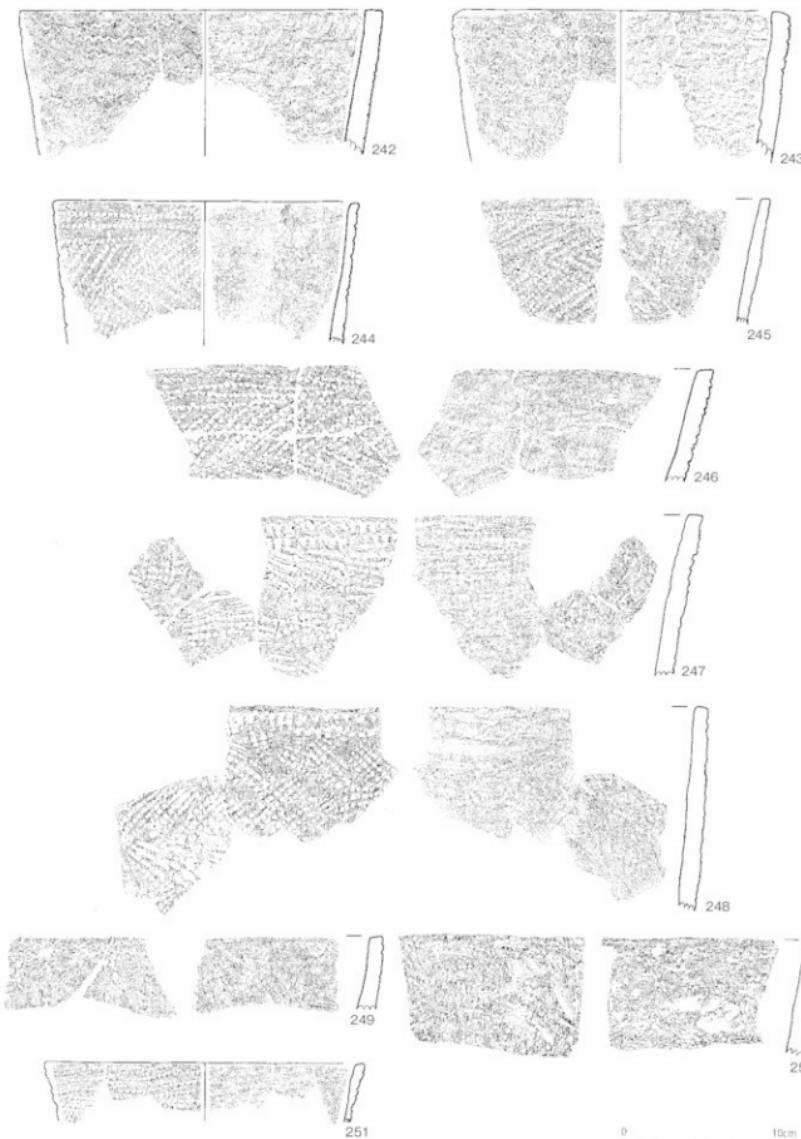


第73図 VI類土器出土分布図



(1グリッド 10m×10m 地形図 背景上塗)

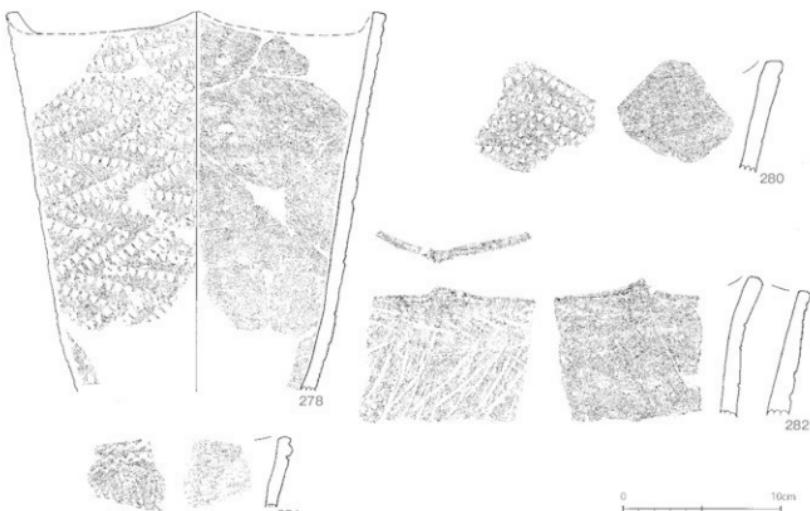
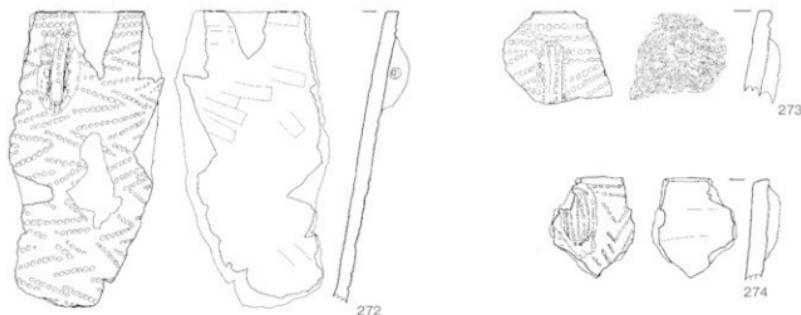
第74図 VII頃出土分布図(掲載分)



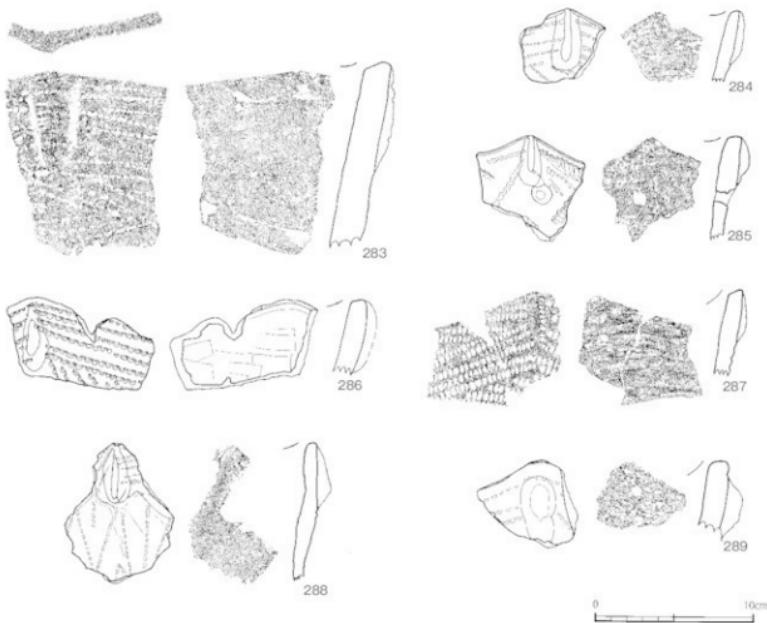
第75図 VI類土器1



第76図 VI類土器2



第77図 VI類土器3



第78図 VI類土器4

VI-2類 (第79図 290~304)

口縁部が直立する土器群である。この中でも、平口縁と波状口縁があり、さらに瘤状突起が貼付されるものもある。本類はIV-1類、IV-3類と比較して出土点数が少ない。

290~297は口縁部が直立し、平口縁となるものである。口縁部断面はほぼ方形で、口唇部の平坦面は水平となる。

290・294・296・297は、口縁部文様帯に斜位もしくは横位の刺突を施すものである。291~293・295は口縁部に横位の刺突を施す文様帯をもち、胴部には斜位の刺突で施文する。295は補修孔が途中まで穿たれている。

298~301は口縁部が直立し、平口縁となり、瘤状の突起が貼付されるものである。298は穿孔のある瘤状突起が継長に、299は継長の瘤状突起が平行に二つ貼付される。300・301は瘤状突起が横方向に貼付される。

302~304は波状口縁となるもので、303・304には瘤状突起が貼付され、文様構成や胎土等から同一個体の可能性ある。

本類の瘤状突起は口縁端部からやや下方に貼付される

という特徴をもつ。

VI-3類 (第80・81図 305~326)

口縁部が内湾する器形を呈するもので、平口縁が多いが波状口縁もあり、瘤状突起を貼付するものもある。

305~318は、口縁部が内湾、やや内湾、内傾気味のものである。そのほとんどの土器が口唇部が平坦で口縁部断面が方形となる。口縁部文様帯に横位の刺突文を巡らせ、胴部に斜位の刺突文を施すものが多い。口縁部文様帯には311は鋸歯状の刺突文、312・313は継位の刺突文を施す。314の口唇部外端は丸みを帯びるのが特徴で、胴部に一部盛り上がりがあることから瘤状の突起が貼付されていた可能性もある。318は、直線的に延びる口縁部は内傾に近い器形となる。

319~322は、平口縁に瘤状突起が貼付されるものである。319・320は口唇外端から、321は口唇外端からやや下方に継長の瘤状突起を貼付する。322は、口縁部文様帯と胴部文様帯の境付近に瘤状突起が横位に貼付される。

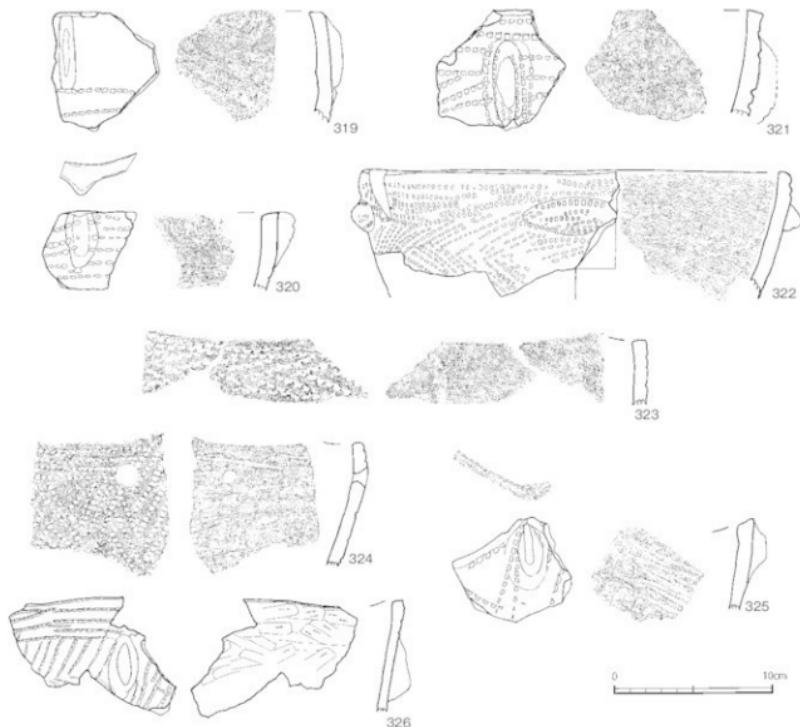
323~326は波状口縁となるものである。324は山形の



第79図 VI類土器5



第80図 VI類土器6



第 81 図 VI類土器 7

突起が付き、円形の補修孔が穿たれる。325 は口頂部外面に、326 は口縁部文様帯と胴部文様帯の境から縦長の瘤状突起が貼付される。

【胸部】(第 82~84 図 327~341)

胴部は一括して記述する。

327~338 は、総じて胸部が直線的に開く器形のものである。斜位の刺突文を組み合わせて、横位か縦位の羽状の文様を施すものが多い。330 は、文様を区画する横位の刺突文を施す。331・332 の胎土には金雲母を含む。336 は横位の刺突文が間隔をおいて施され、その間には施されない。333・337 の胎土には金雲母を含む。

339~341 は瘤状突起が貼付される。339・340 の瘤状突起には穿孔がある。341 は胴部に横位の刺突文を間隔をおいて巡らせ、その間に斜位の刺突文で充填するものである。瘤状突起を綫長に貼付した後に、突起の上まで

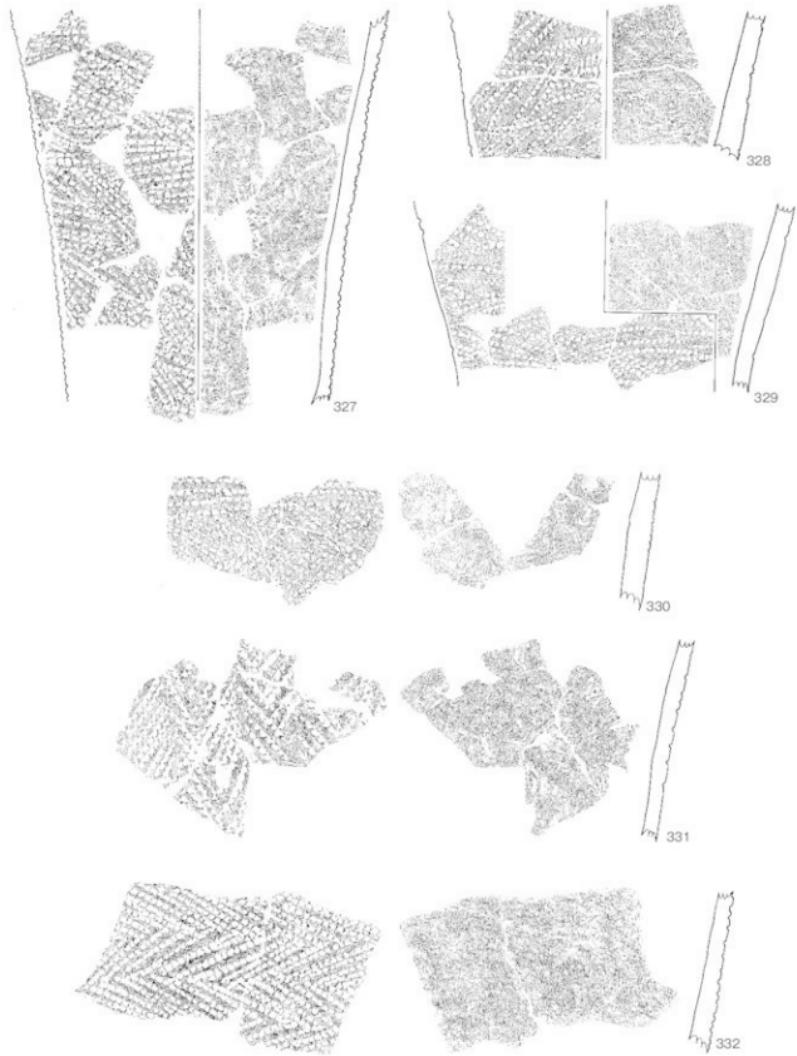
丁寧に施される。

【底部】(第 85~88 図 342~394)

底部については、底部から胴部にかけて直線的に開くものと直立及び直立気味のものに大別した。

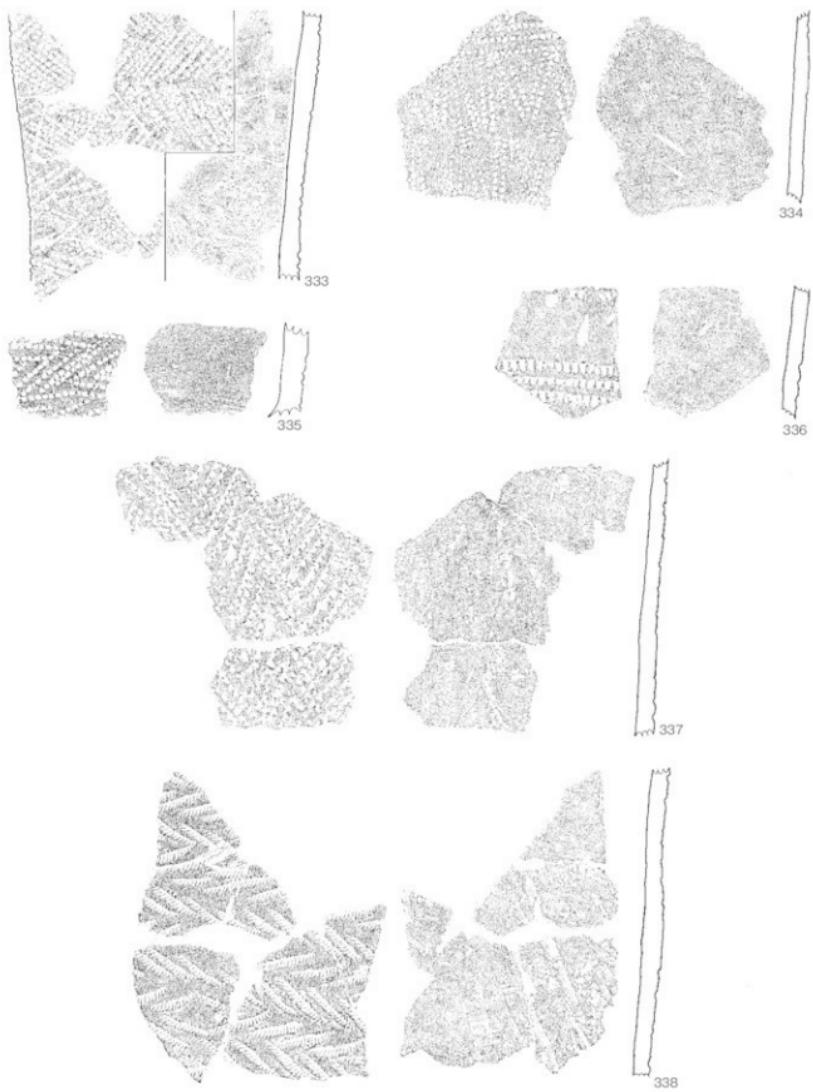
342~380 は、底部から胴部にかけての器形が直線的に開くものである。文様は斜位の刺突文もしくは斜位の刺突を組み合わせて羽状に構成するものがほとんどで、規格性を持って密に施されるものは少ない。また、胴部下端まで施されないものが掲載点数の 3 割程度ある。底部外縁の調整は、総じて丁寧なナデが行われている。

342 は外傾の度合いが強く、胎土には多くの砂粒と金雲母を含む。底径 16.0cm を測る。344 は表面が摩耗しているが、縦位の羽状刺突文が観察できる。また、344・348・352 の胎土は精選され、砂粒が目立たない。344 の底径は 7.0cm、345 の底径は 9.0cm であった。345 の文様

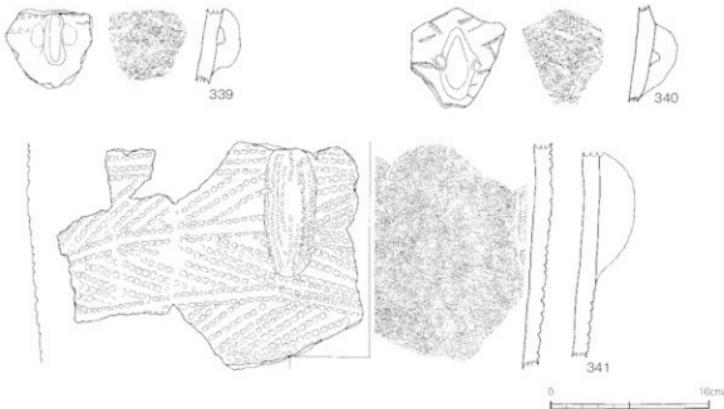


0 10cm

第82図 VI類土器8



第 83 図 VI類土器 9



第 84 図 VI類土器 10

は、貝殻背面を使った押圧に近い。347 は、底部から直線的に開き、胴上部から口縁部に向かって直立する器形となる。文様は横位の羽状刺突文を施す。内面調整は、本類の他の土器と比べ、丁寧なナデを行い、胎土には金雲母が含まれる。底径は 15.0cm を測る。355 は斜位の刺突文が観察でき、底径は 15.8cm であった。357 は斜位の刺突を羽状に組み合わせて施し、底径は 18.8cm と大きい。358 は他の土器より薄手で、内面も胴下部まで丁寧にナデによる調整が行われている。366 は底径 10.8cm を測り、底部から胴部にかけての内面調整はケズりが施される。胴部下半の文様は、斜位の刺突文のみで構成される。367 と 368 の底径は小さく、それぞれ 8.0cm と 6.6cm である。369 と 371 は斜位の刺突で文様を構成し、底径はそれぞれ 12.0cm と 9.7cm である。372 は横位に近い刺突文を施し、底径は 11.4cm である。374 は底部から胴上部にかけて器壁が薄くなり、底径 10.4cm を測る。

381～394 は、底部から胴部にかけて直立もしくは直立気味の器形をもつものである。文様は、斜位の刺突文もしくは斜位の刺突を組み合わせて羽状の刺突文を構成するものがほとんどである。381 は、底径 22.4cm で掲載遺物中で最も大きい。382 は間隔を置いて羽状に刺突文を施し、底径は 383 と同じく 18.0cm と大きい。384 の胴下半には、横位の刺突文が施され、底径は 15.0cm である。385 は刺突を羽状に施し、底径は 11.2cm であった。386 は斜位の浅い刺突で施文するが、その間隔は広い。底径は 14.0cm である。387 の底面の器壁は削と薄く作られており、底径は 14.0cm である。また、391・394 は底面境までは施文されない。

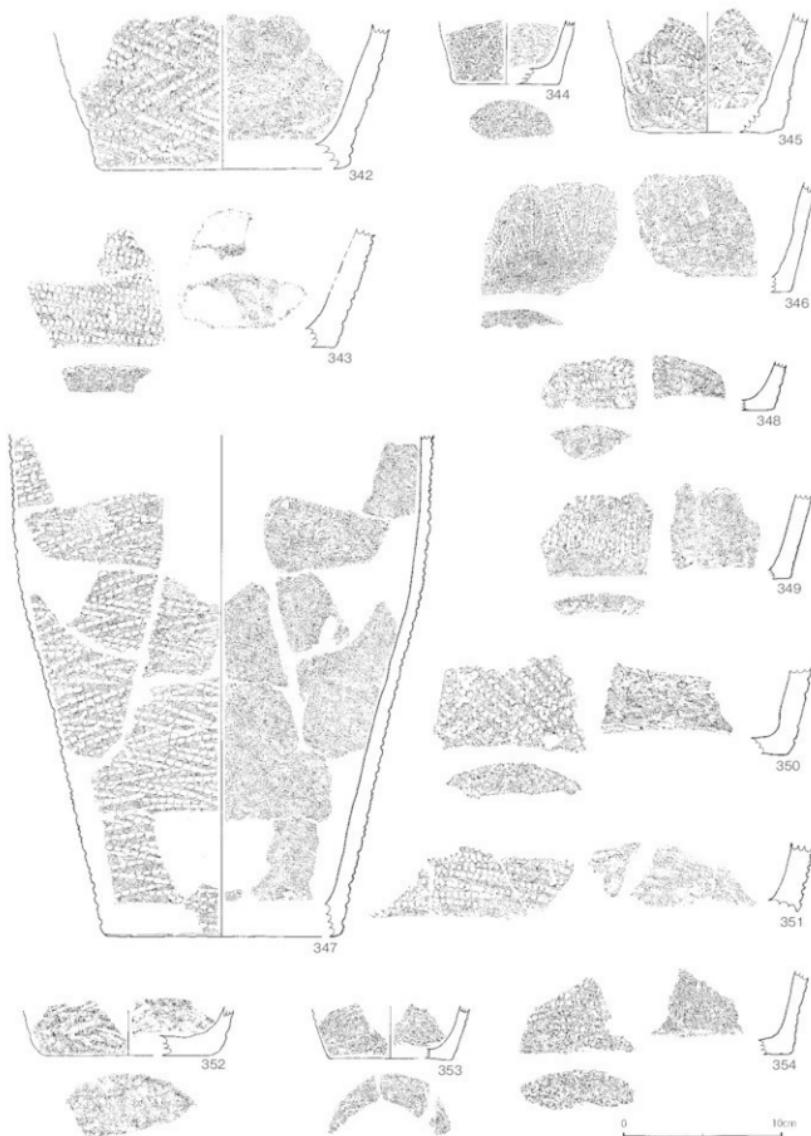
(7) VII類土器 (第 89～92 図)

本類は 10 区から 12 区にかけての斜面部分と 15 区から 18 区にかけての緩斜面部分に多くが出土し、調査区の東端に行くに従って出土はまばらとなる。出土量の違いはあるが、VI類土器の出土状況とはほぼ重なる。短い貝殻条痕や絲織により施文する土器である。ここでは部位毎に記述する。なお、本類の出土状況については第 89 図に示した。

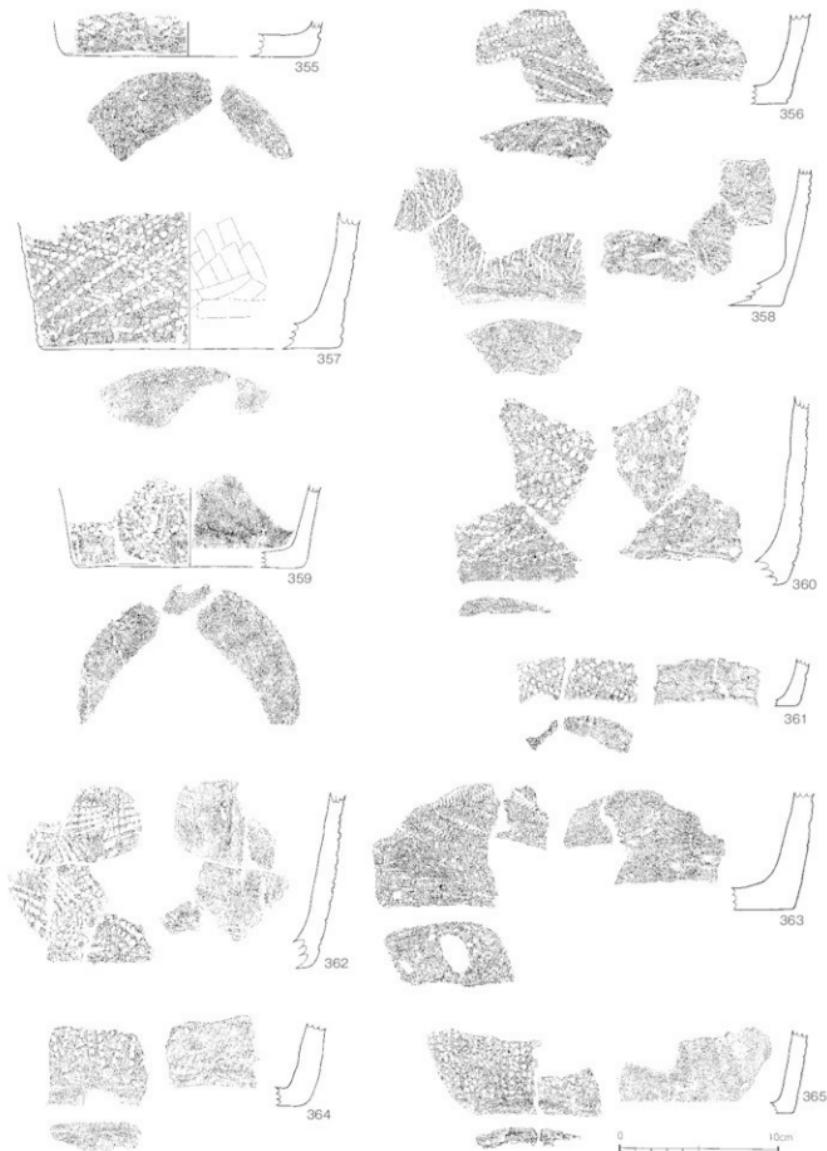
【口縁部】(第 90・91 図 395～409)

口縁部は直線的に立ち上がるものの (395～404) と内湾するものの (405～409) とに大別できる。いずれにも平口縁と波状口縁がある。また、直線的に立ち上がる器形のものには瘤状突起を貼付するものもある。文様は、口縁部に横位の条痕文を巡らすものが掲載遺物の半数以上ある。

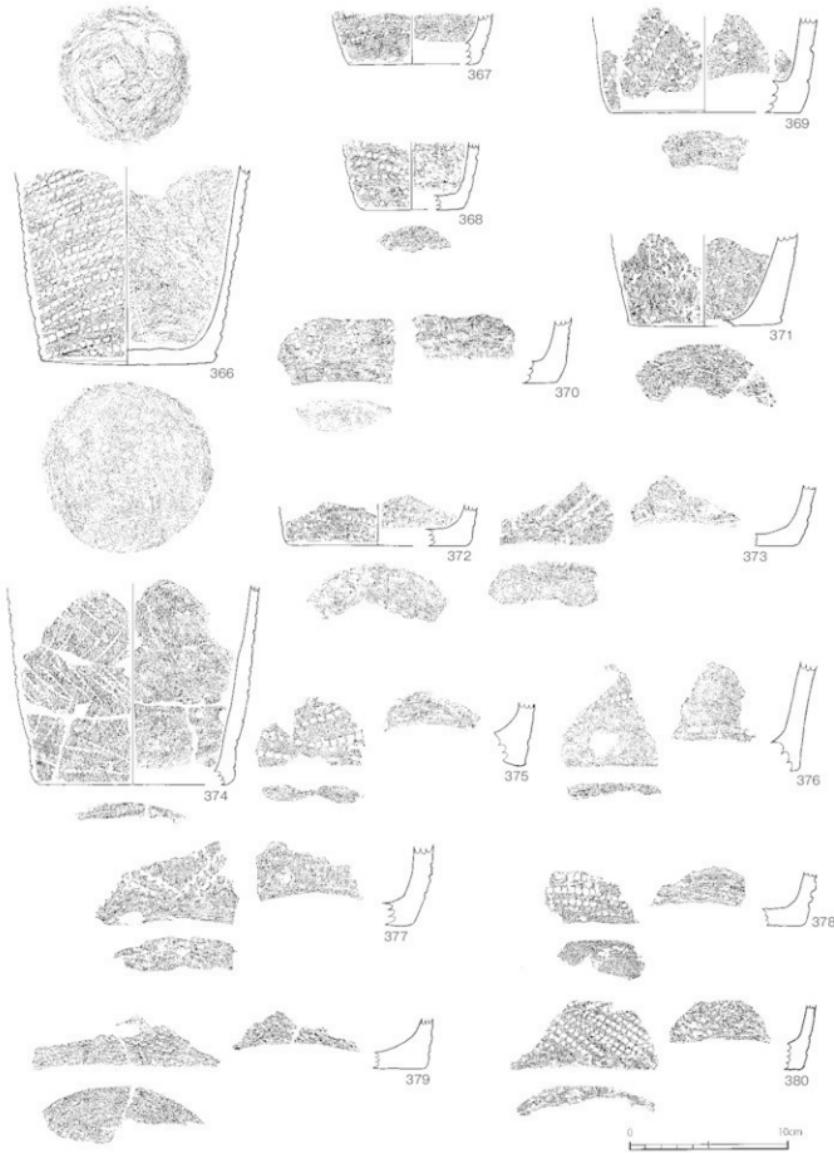
395～404 は、口縁部が直線的に立ち上がるものである。平口縁 (395～401) と波状口縁 (402～404) があり、波状口縁には瘤状突起が貼付されるものがある。395 は直線的に開く器形で復元口径 12.0cm を測る。口唇部は平坦面をもつが、やや丸みを帯びる。内面調整は、胴部附近に条痕が明瞭に観察できる。396～400 は直線的にやや開く器形をもち、口縁部断面は方形となり、口唇部に平坦面をもつ。396 は口縁部に条痕文を施し、ほぼ円形の補修孔が穿たれる。397 は口縁部に沿って条痕文を巡らし、胴部には 4 本一組の短い条痕文を施す。399 も 397 と同様の文様構成である。400 は縱方向に 2 本一組の条痕文が施される。401 は直立する口縁部に鋸歯状の条痕文が施される。402 は波状口縁を呈し、櫛歯状の工



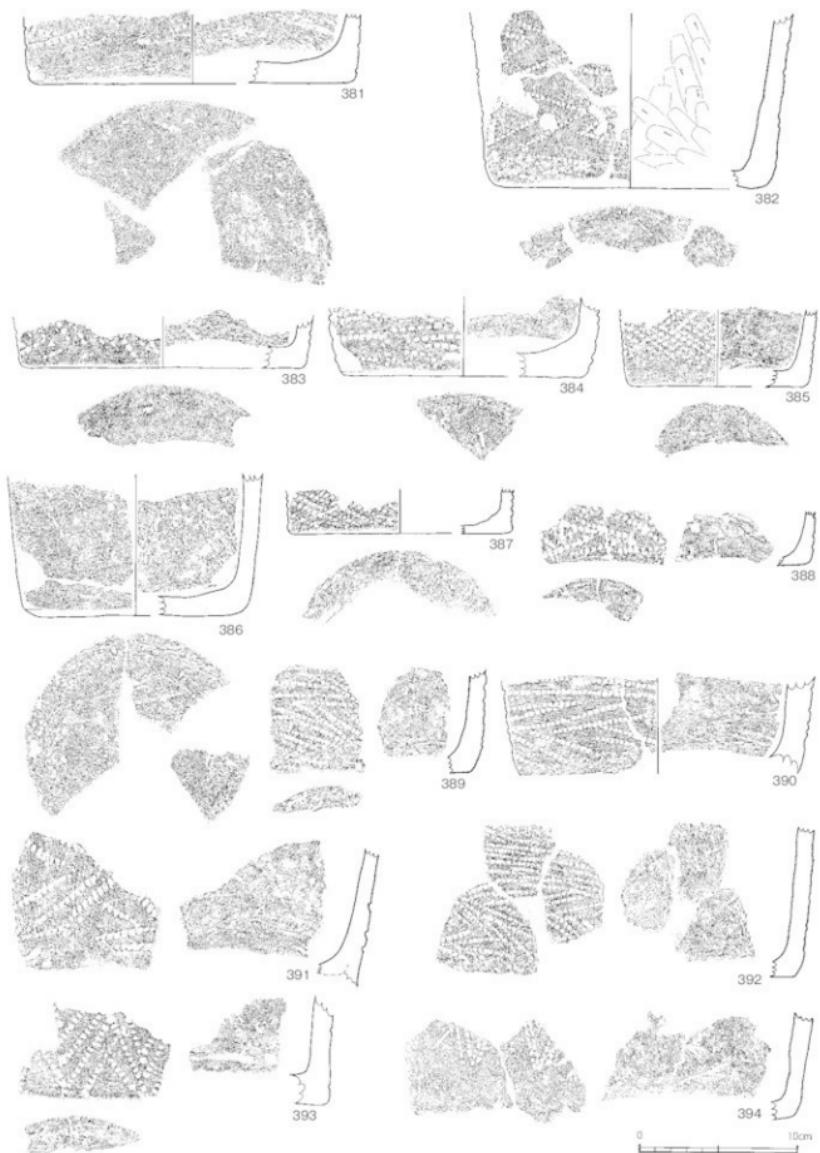
第 85 図 VI類土器 11



第 86 図 VI類土器 12



第 87 図 VI類土器 13



第 88 図 VI類土器 14

具による細い条痕文で施文される。403・404は、直線的に開く口縁部で波状口縁を呈し、波頂部外面に瘤状突起が貼付される。いずれも、口縁部に沿って条痕文を施す。404の胴部には4～5本一組の短い条痕文を施す。

405～409は、口縁部が内湾もしくは内湾気味のものである。平口縁と波状口縁があり、瘤状突起の貼付されるものは確認されていない。405・406は平口縁、407・408・409は波状口縁となる。405は口唇部に平坦面を作るが、部分的に不安定となる。406・407の口唇部平坦面は内傾する。408の波頂部は断定できないが、2対を想定している。409は直線的に開く胴部に、口縁部が内湾する器形となる。口縁部に沿って4～5本一組の条痕文、胴部には同じ条痕文を鋸歯状に胴下部まで施す。

【胴部】(第91図 410～412)

410～412は胴部片で、直線的に開く器形を呈す。いずれも2本一組の工具で短沈線を施し、内面は丁寧なナデ調整である。

【底部】(第91・92図 413～428)

413～428は底部ないしは胴部から底部付近の土器である。底部から胴部にかけて直線的に開く器形のものが大部分を占め、直立する器形のものは少ない。胎土は砂粒を多く含むものが多いが、417・425・426は胎土に砂粒を少し含む土器である。底部調整は、内面より外面のほうが丁寧である。胴部下端の文様は、短い条痕で鋸歯状の条痕文を胴部から連続的に施すものが多い。415と416には斜位の条痕文が施され、底径はそれぞれ8.0cmと12.6cmである。419には鋸歯状の条痕文が施され、底径は21.6cmを測る。421の胴部には鋸歯状の条痕文、底面境には横位の条痕文が施される。424は僅かに条痕文が覗き、底径は10.6cmである。425の底径は9.0cmで、底面境まで施文されないのは423と同じである。428は小型の土器で、胴部には4本一組の短い条痕文が施されるが、底部形状については不明である。

(8) VII類土器 (第93～95図 429～448)

Ⅶ類土器は胴部から口縁部にかけて直線的に開くか、やや内湾する器形をもち、貝殻縁による刺突文と条痕文もしくは沈線文で文様を構成する一群である。本遺跡からは58点出土したが、小片のため本類の文様を確認できない可能性も考えれば、本来はもう少し出土点数が多いと思われる。出土状況は第93図に示した。ここでは、文様に着目し、記述する。

429～433は口縁部に刺突文、胴部に条痕文を施し、器形は直線的に開くものである。433は波状口縁となる。429・431は口縁部に横位の刺突文、胴部に鋸歯状の刺突文を施す。432は口縁部に横位の刺突文を巡らし、胴部には部分的な縱位の条痕文に斜位の刺突文を上書きする。433は口縁部に鋸歯状の刺突文を、胴部には斜位の

条痕文を施す。

434～436は口縁部に条痕文を、胴部に刺突文を施すものである。434の器形は外傾し、波頂部外面には縱長の瘤状突起が貼付される。435・436は内湾する器形で、口縁部には鋸歯状の条痕文を巡らせ、胴部には横位や斜位の刺突文が施される。435は口唇端部が少し欠けるが、器形や文様等から436と同一個体の可能性もある。437～439の胴部には、明瞭な縱位の条痕文と鋸歯状の刺突文が施される。また、胎土に雲母、1～2mm程度の小礫が多く含まれ、土器の色調も類似することから同一個体と思われる。さらに、437と438の口唇部には刺突が施される。439の内面には縱方向のケズリ痕が観察できる。440・441は、いずれも胴部片で刺突文と条痕文で文様を構成する。442～448は3条程度の沈線を横位に巡らすことにより区画し、その間を斜位の刺突文で充填する文様構成となっている。底部から胴部にかけて外傾する器形は、口縁部ではその度合いが小さくなる。口唇部には平坦面をもち、その断面は方形となる。口縁部外面には、穿孔された瘤状突起が貼付される。内面調整は丁寧なナデが施される。442～447は同一個体と思われるが、胴部に施す斜位の刺突文から448は別個体と思われる。

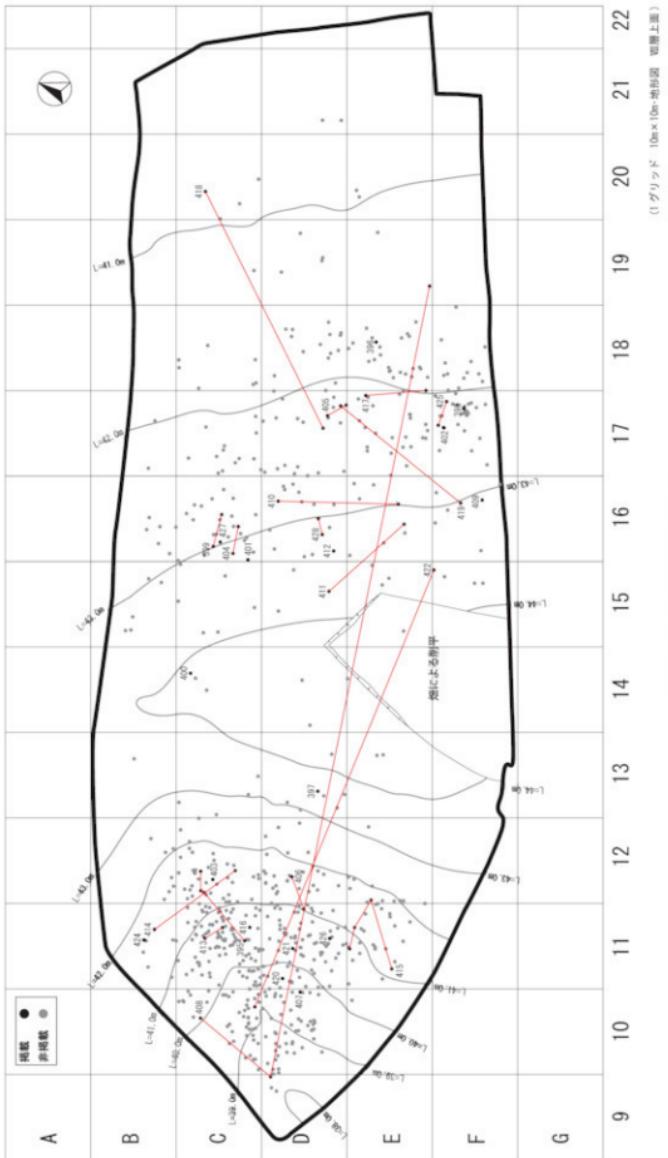
(9) IX類土器 (第96・97図 449～461)

本類の土器は点数的には少ないが、調査区内でも標高の高い14区を中心に出土した。その出土状況は第96図に示した。

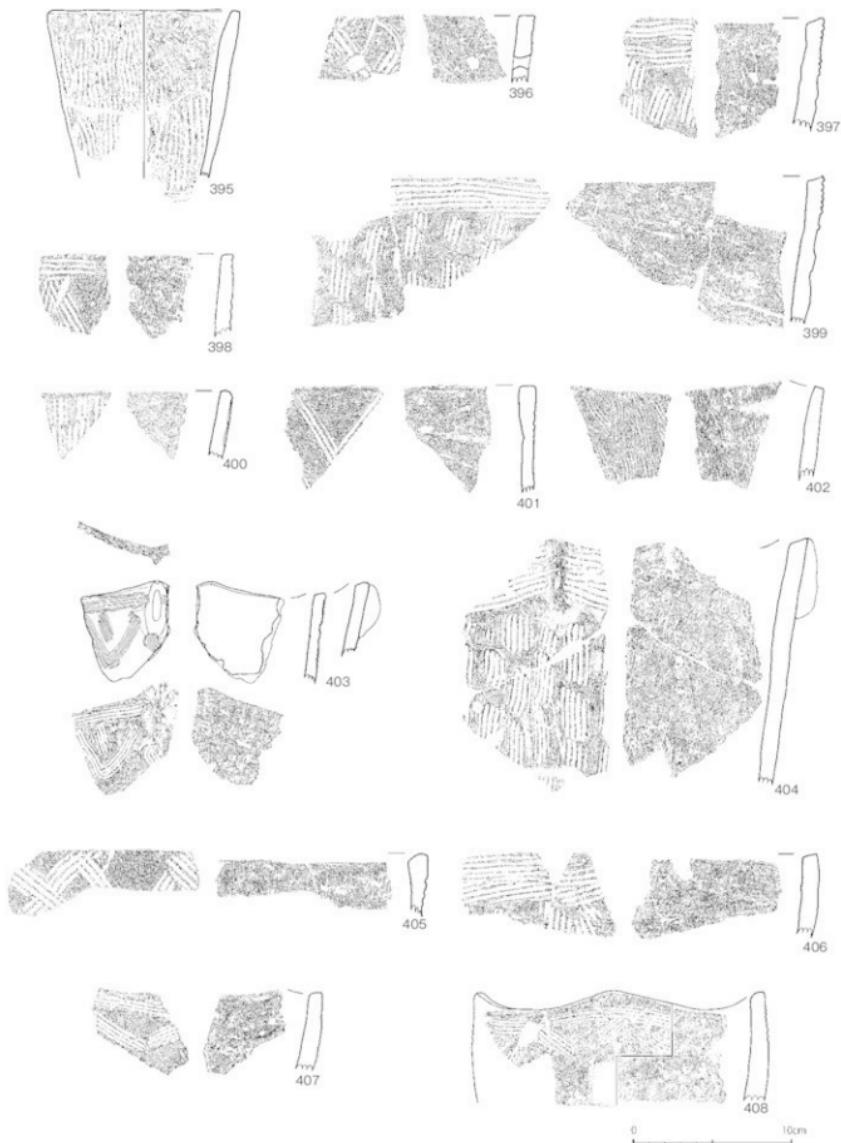
本類土器は出土量も少ないこともあり、その文様で梢円押型文を施すもの、山形押型文を施すもの、原体が不明なものに3分類した。

449～454は梢円押型文を施す土器である。449・450は口縁端部が外反し、口縁部内面には稜をもち、口唇部には平坦面を作る。文様は原体を斜めに転がし施文するが、原体の転がし方により部分的に無文となる箇所もある。また、口唇部や口縁部内面にも梢円押型文が施される。451はやや外反する器形で、内面に浅い稜をもつ。口縁部外面に斜位の梢円押型文、胴部は横位に、内面及び口唇部にも施文する。452は内面に稜をもち、施文は口縁部外面のみである。453と454は底部から直線的に大きく開く器形で、453は横位と斜位の梢円押型文が施される。453及び454は白色の砂粒を多く含み、内面調整は粗い。

455～459は山形押型文を施す土器である。455はやや外反する口縁部の内面と口唇部に山形押型文を施す。口縁部外面には施文されない。456・457は直線的に伸びる口縁端部が若干外反し、口唇部は丸みを帯びる。口縁部には縱位の、胴部には横位の山形押型文を施文するが、部分的に縱位と横位の押型文が重なり、格子目状となる。



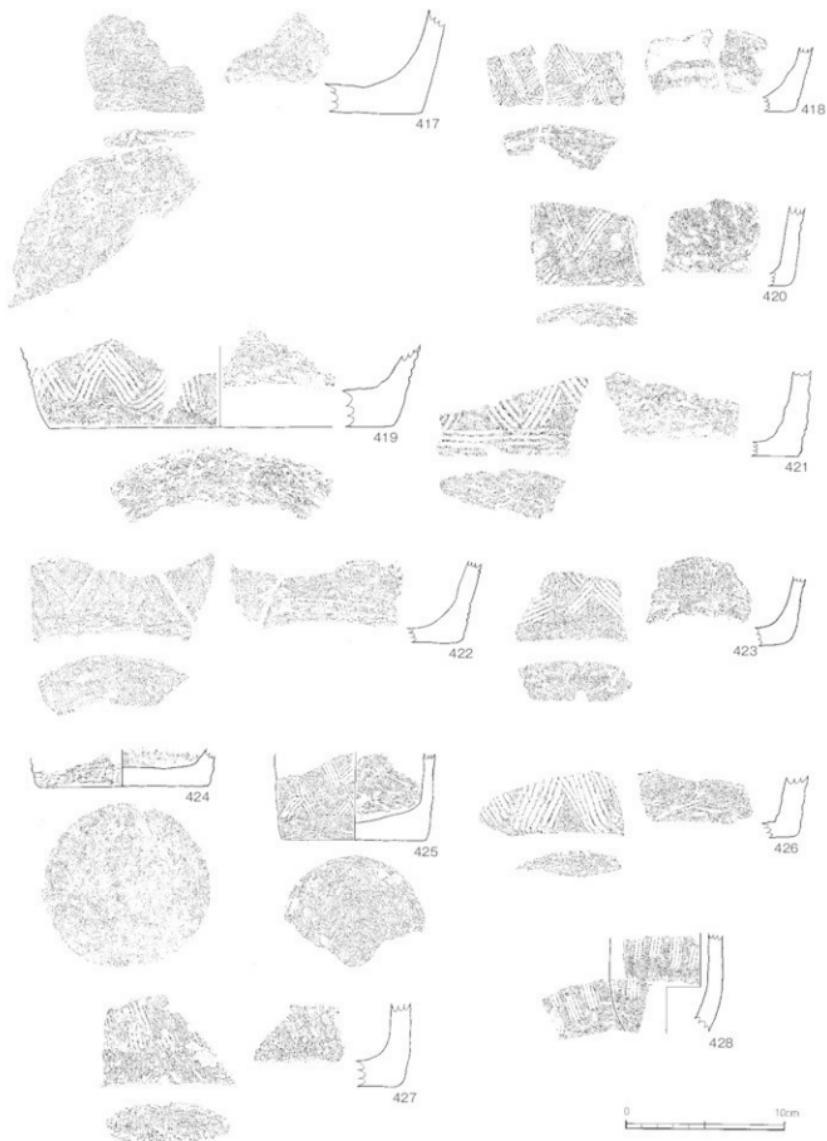
第89図 VM類土器出土分布図



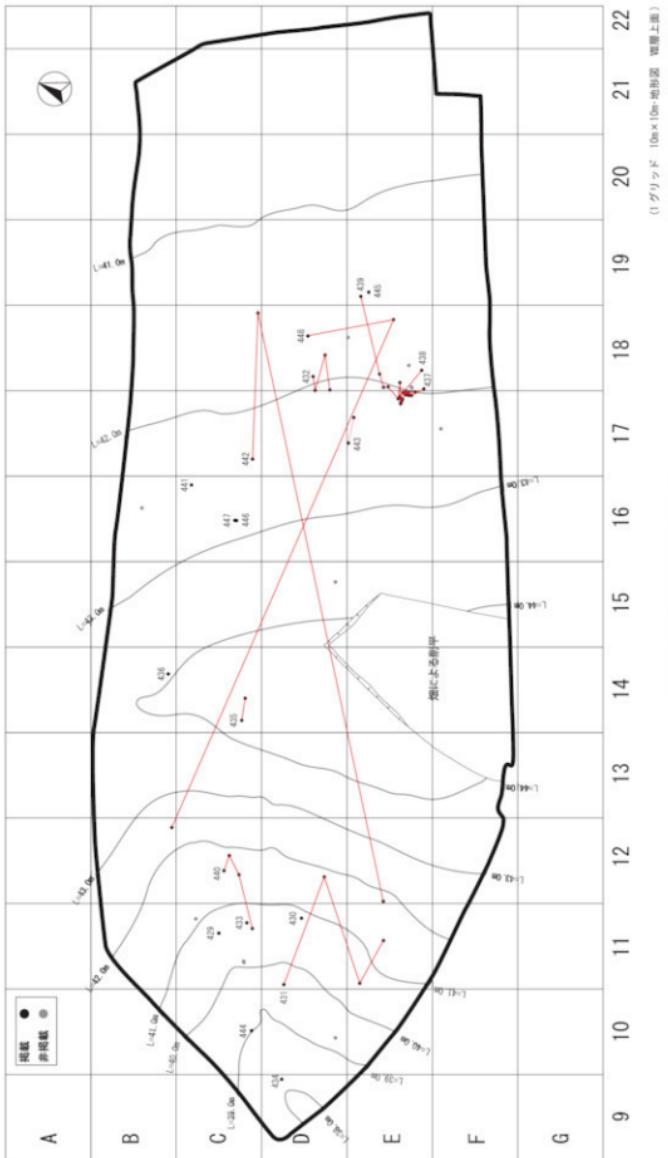
第90図 VII類土器1

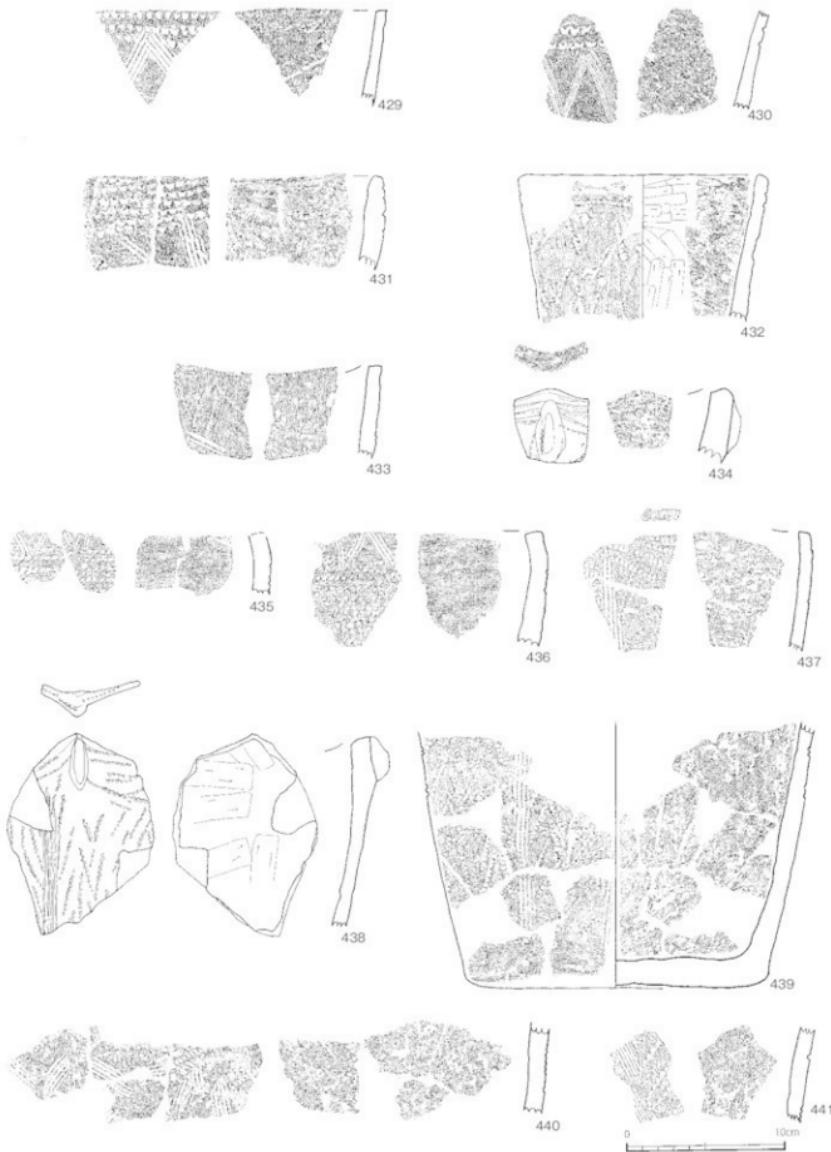


第91図 VII類土器2



第92図 VII類土器3





第94図 VII類土器 1



第95図 VII類土器2

箇所もある。

458はやや膨らみを持ちながら外に開く器形で、平底である。山形の押型文が全面に施される。胎土に白色の砂粒を多く含み、内面は粗いナデ調整が施される。459は斜位の山形押型文で、白色の砂粒を含む。

460・461は施文原体が不明な土器である。460は薄手の器壁に上げ底気味の底部から手向山式土器に該当すると思われる。白色砂粒を多く含み、内面は丁寧なナデ調整が施されている。461は底部から胴部にかけて大きく開く器形で、平底となる。一部には稍円押型文も施される。

(10) X類土器(第98~103図 462~488)

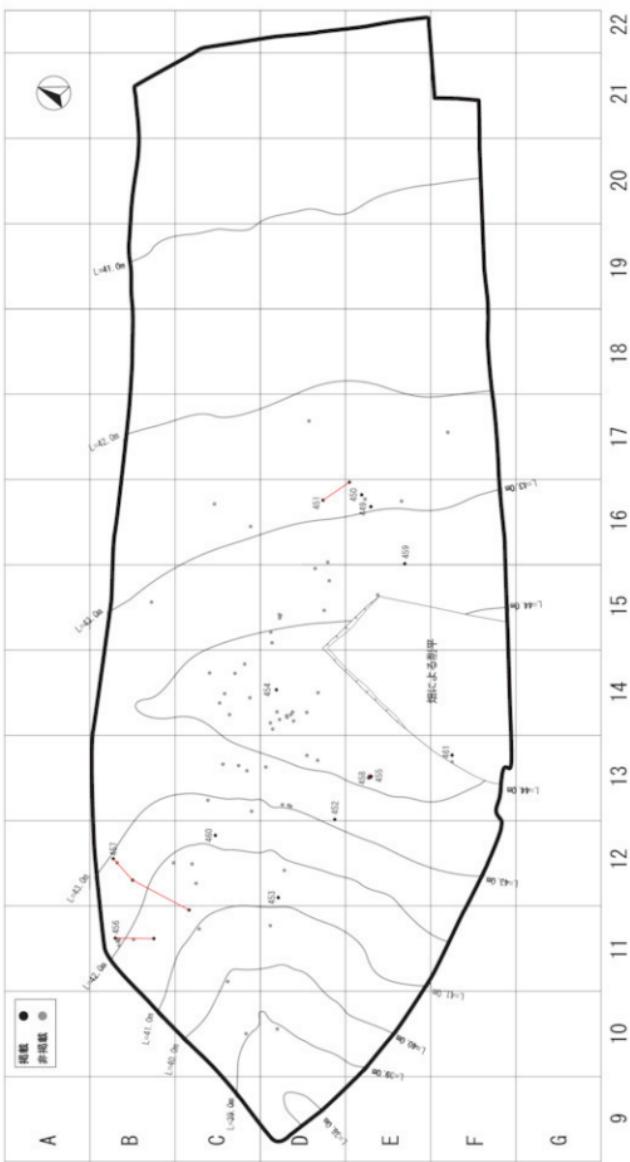
調査区の14区から19区にかけて主に出土し、西側斜面での出土量は少ない。その出土状況は第98図に示した。本類の土器は外反する口縁部に胴部は膨らみ、文様は沈線文・刺突連点文・刻目突帯文・繩文・結節繩文で構成される一群である。本類の土器は、分類上は一括して平柄様式として扱う。

462~482は口縁部が残るものである。462は波状とな

る口縁部は外反する器形である。口唇部にキザミを施し、口縁部には刻目突帯が巡る。刻目突帯間に地文としての単節繩文が部分的に観察できる。胎土には多くの金雲母が入り、内面はナデ調整が施される。463は胴部が膨らみ、頭部から口縁部にかけて外反し、波状口縁を呈する器形となる。口唇部にはキザミを、口縁上端に刺突を、その下位には数条の沈線で波状に文様を施す。口縁部から頭部にかけて刻目突帯を4条巡らすが、最上位の刻目突帯に沿うように、その上位に刺突を施す。刻目突帯間に1条の沈線を波状に施す。頭部には単節繩文を施す。464の外反する口縁部は波状を呈す。波頂部外側にはキザミを施した粘土紐が頭部に向かって貼付される。口唇部にもキザミが施され、口縁部下位には刻目突帯が巡る。さらに、口縁部には刺突文と沈線が斜位に施される。465は、口径27.0cmを測る。直線的に外反する口縁部は波状となる。口唇部外端にキザミを、口縁部には刺突と沈線で文様を構成する。波頂部外端から頭部には刻目突帯が垂下する。頭部にも刻目突帯が巡り、胴部には結節繩文が施される。466は復元口径35.0cmである。口唇部にキザミ、見かけの肥厚帯をもつ口縁部は刺

(1 ブロック 10m × 10m 地形図 要素上層)

第96図 IX類土器出土分布図





第97図 IX類土器

突文と沈線で施文される。頭部には刻目突帯が巡る。467は波状口縁を呈し、口唇部にはキザミを施す。口縁部には沈線で文様を構成し、頭部には突帯が巡る。468は、口唇部にキザミ、肥厚する口縁部には刺突と沈線で施文される。469は口縁部を断面三角形に肥厚させ、沈線で施文する。頭部以下が不明のため判断はできないが、壺形土器の可能性も否定できない。470は、口唇部にキザミを施す。口縁部には刺突と沈線で、その下位に刻目突帯が巡る。471は復元口径 25.0cm、残存器高 32.0cmを測る。口縁部は刺突と沈線で施文し、頭部には刻目突帯が巡る。波状口縁で、口唇部にキザミを施す。胴部は上半が膨らみ、結節縄文が見られる。472・473・475・477は口縁部に沈線と刺突で施文する。474は沈線のみ、478は刺突のみの施文である。476は、波状口縁の口唇部にキザミ、頭部に刻目突帯が巡り、胴部には結節縄文を施す。479・480は口縁部を肥厚させ、縄文を施す。481・482は口縁部に見かけの肥厚帯を作り、単節及び結節縄文を施す。462と463は、文様構成から妙見・天道ヶ尾式土器の範疇に入り、それ以外の土器は平柄式土器と思われる。

483~488は頭部・胴部及び底部である。483・484は頭部片で、沈線と刺突で文様を構成する。484には刻目突帯が巡る。485の胴部には単節及び結節縄文が、486には頭部に刻目突帯と胴部に結節縄文が施される。487は尖底で、刻目突帯を螺旋状に貼付する。突帯間に刺突と沈線で施文されるが、その器形の全体像については不明である。488は、頭部から底部まで残存する。底径は、12.6cmを測る。頭部には刻目突帯が巡り、胴部には地紋として単節縄文を施す。横位の刻目突帯を頭部に巡らせ、縱位の刻目突帯を頭部から胴下部まで 9 本垂下させる。487については平柄式土器の範疇ではあると思われるが、詳細は不明である。488は妙見・天道ヶ尾式土器でそれ以外は平柄式土器と思われる。

(11) XI類土器 (第 104・105 図 489~492)

調査区の E - 17・18・20 区から少量出土した。その状況については、第 104 図に示した。本類の土器は口縁部がラッパ状に開く器形で、胴部に網目撚糸文や沈線文を施すものである。本類の掲載遺物は 4 点である。

489~491の口縁部は外反し、内面には棱をもち、舌状の口唇部となる。口縁部に施文はない。489・490は網目撚糸文を縱位に施した後に、横位の沈線を頭部・胴中央部に巡らす。491は、胴上部に施された網目撚糸文の端部が残る。489~490は塞ノ神 Aa 式土器に該当する。492は上げ底気味で、底部内面の中央部が盛り上がる。底部から胴部にかけては直線的に開く器形となる。胴部下部に条痕文と思われる文様が一部残る。器形及び文様から塞ノ神 B 式土器と思われる。

(12) XII類土器 (第 104・105 図 493~495)

調査区の東側緩斜面の C - 18・19 区から僅かに出土し、その状況は第 104 図に示した。本類の土器は、微隆突帯を巡らせ、条縁文と刺突文で文様を構成するものである。

本類は 3 点を掲載したが、同一個体と思われる。493は直線的に開く口縁部を呈し、内輪する口唇部の外端にはキザミを施す。口縁部外面にはキザミを施した 2 条の微隆突帯を巡らせる。さらに、条縁文と鋸歯状の刺突文も施し、文様を構成する。494・495も直線的な条縁文と鋸歯状の刺突文で文様を構成するが、494 の条縁文は直線的な条縁文の交点に梢円形に近い曲線を配する。これらは苦浜式土器と思われる。

(13) XIII類土器 (第 106・108・109 図 496~510)

本類は、文様の施されない土器片の一群である。11 区から 18 区にかけてまばらな出土である。出土状況は第 106 図に示した。なお、部分的に文様が施されない土器の一部である可能性は否定できない。

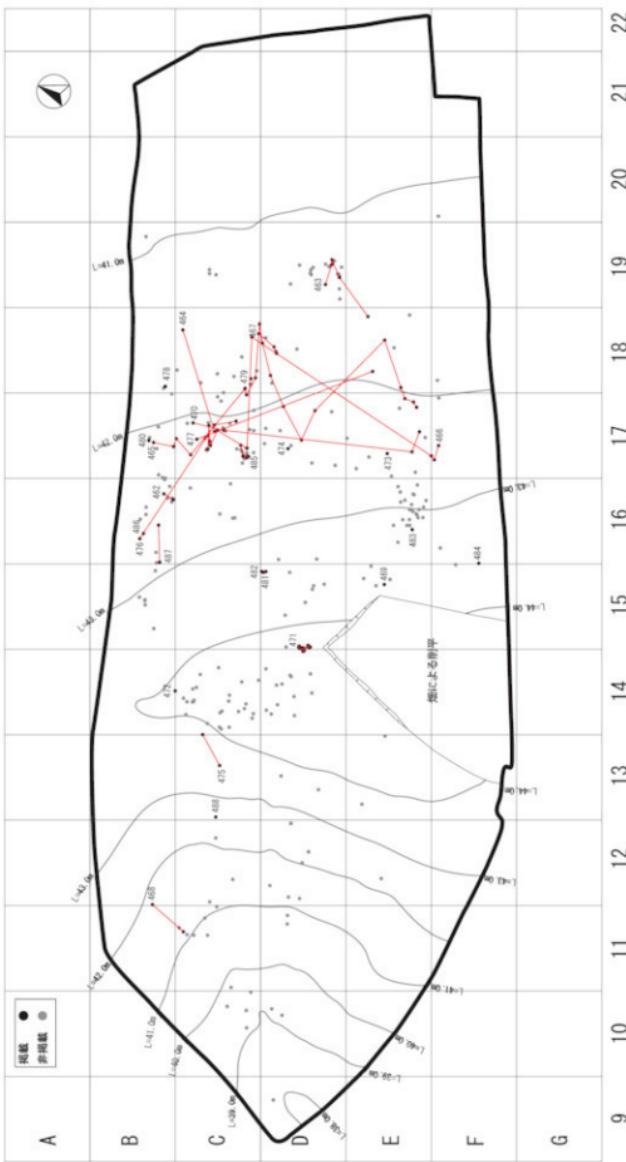
496は口縁部が外反し、口唇部は舌状となる。平口縁ではあるが、口縁端部の高さに違いができるくらいびつな口縁となる。頭部がやや縮まり、胴部が幾分膨らむ平底の器形となる。内外ともナデ調整が施され、外面には縁が付着する。復元口径 29.7cm、復元底径 10.5cm を測る。497~502は外傾、もしくはやや外傾する口縁部である。497・498・500は波状口縁となる。499は三角状に肥厚する口縁部の形状から、無文の平柄様式の土器と思われる。500には瘤状突起が見られ、その形状から VI類、VII類との関連が考えられる。501の口径は 7.2cm、503 の口径は 8.0cm を測る小型土器である。503~505の口縁部は内済する。506は底部から胴部にかけて大きく外に開く器形で、底部が上げ底となる。507~509は底部から胴部にかけてやや外傾する器形となる。507~509の底径は 11.0cm、5.8cm、8.6cm である。510は底部から胴中央部にかけて外傾し、口縁部にかけて内傾する。

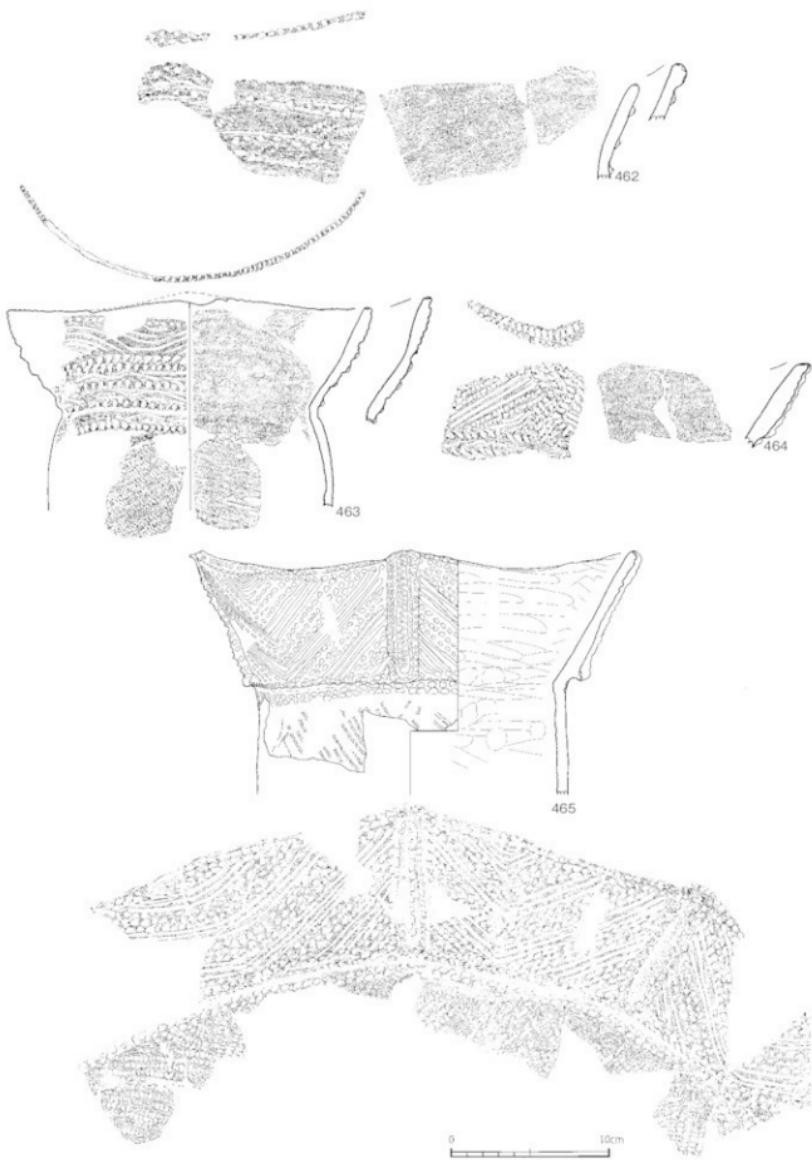
(14) XIV類土器 (第 107・109 図 511~517)

本類は I ~ XIII類に分類できなかった土器である。

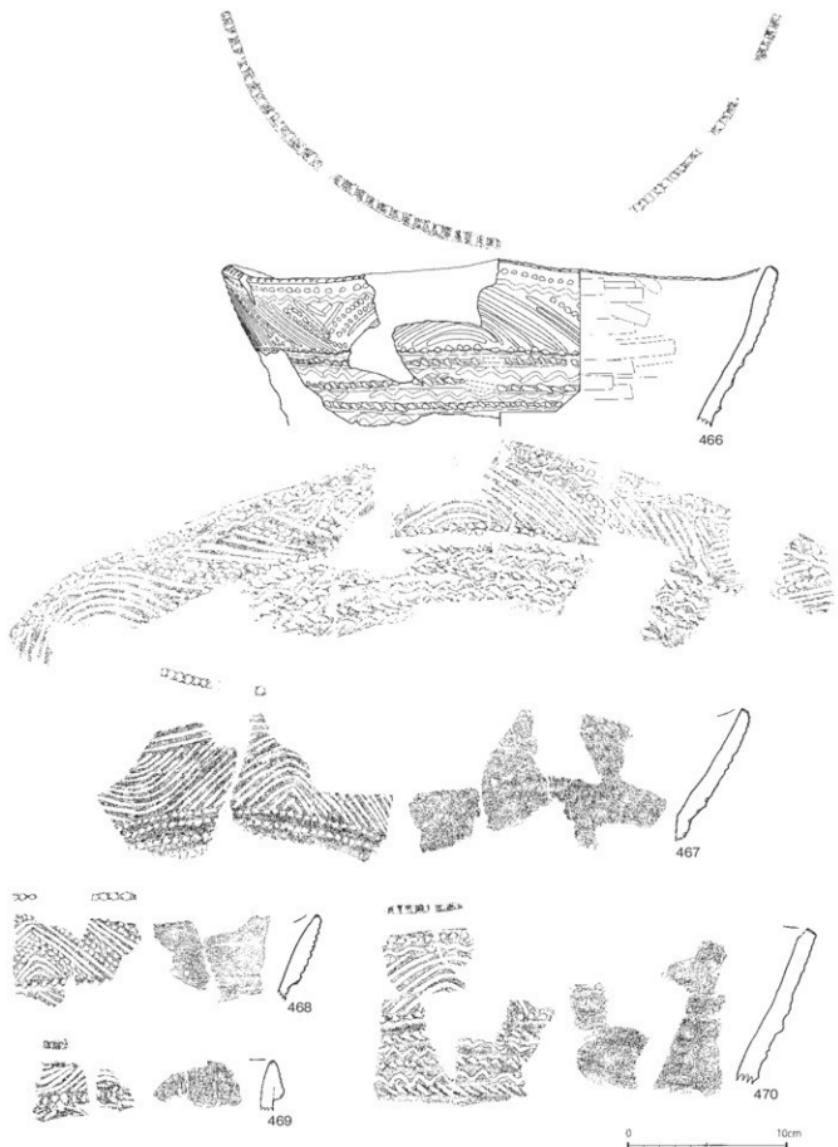
511は器高 17.5cm、口径 15.6cm、底径 10.0cm を測る。底部接地面で少し張り出す器形は、胴部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部で若干内済する。内面調整は底部内面まで丁寧なナデが施される。口縁部上端に縦位のキザミ、その下位から底部境まで棒状工具によるところに施される。同一個体の土器片に円形の補修孔が残されていたことから、実測図の断面に示した。512~514は薄手の土器片である。512は開き気味の器形で、口唇部と口縁部上端付近に刺突文が施される。口唇部は強い刺突のために凹む。部分的に斜位

第98図 X類土器出土分布図

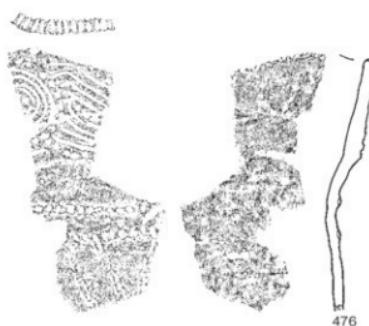
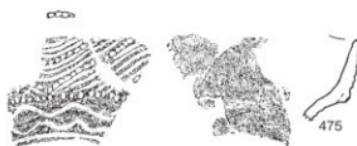
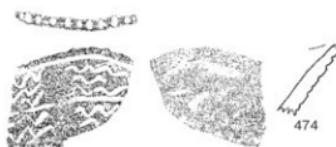




第99図 X類土器1

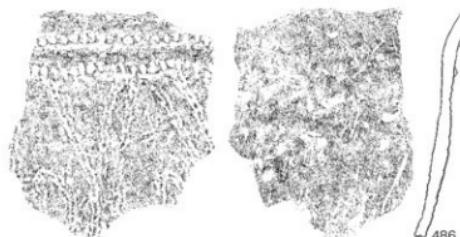
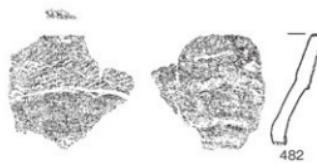
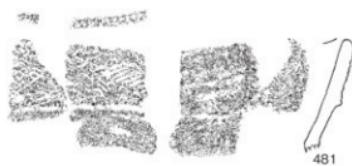


第100図 X類土器2



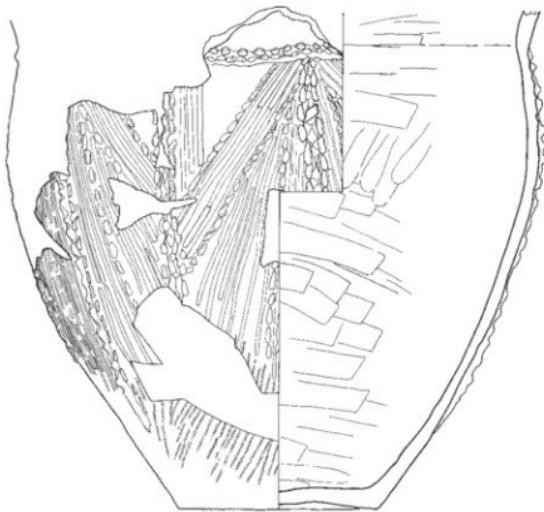
0 10cm

第101図 X類土器3

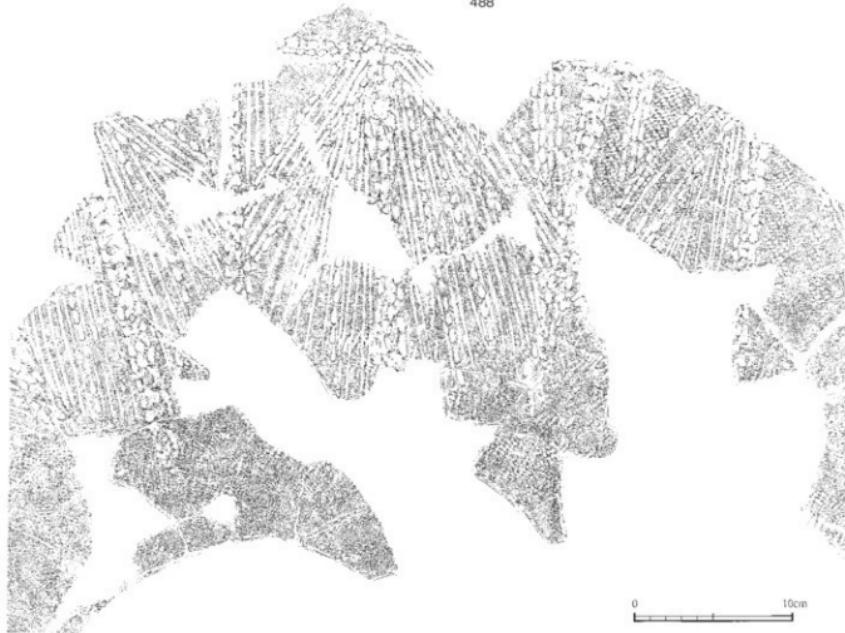


0 10cm

第102図 X類土器4



488

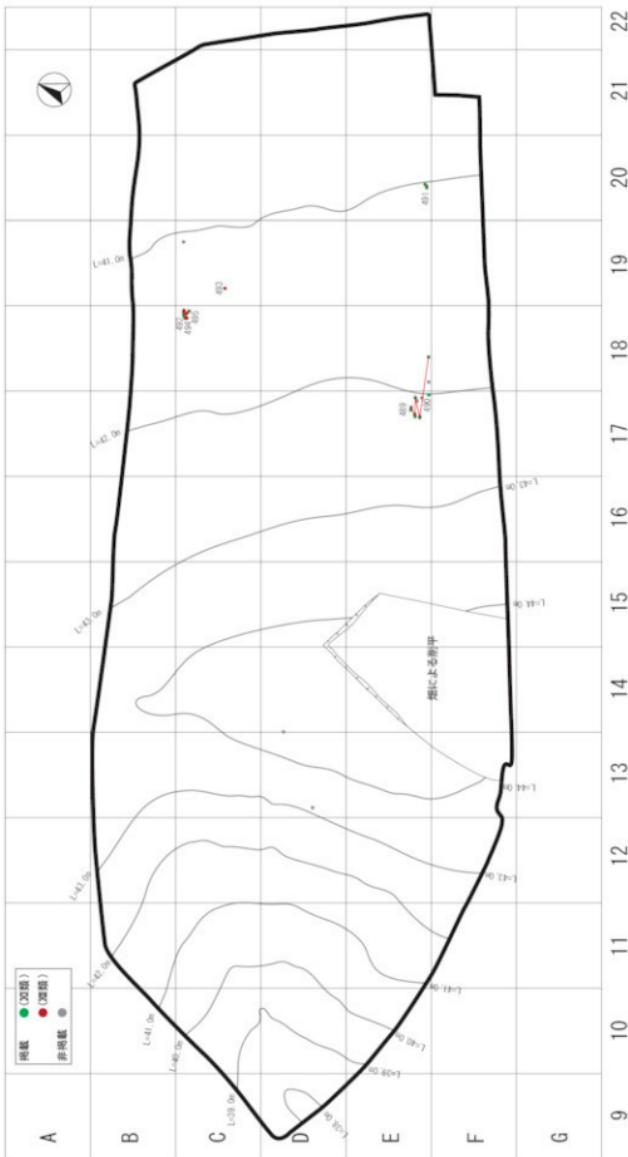


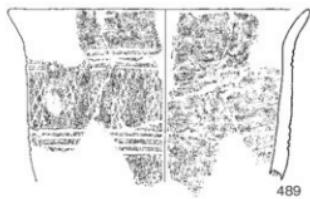
0 10cm

第103図 X類土器5

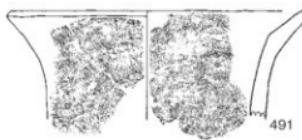
(1グリッド 10m × 10m 地図上)

第104図 XI・XII頃土器出土分布図

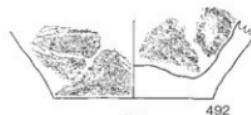




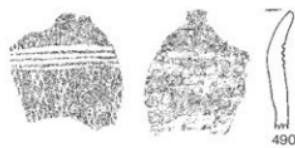
489



491



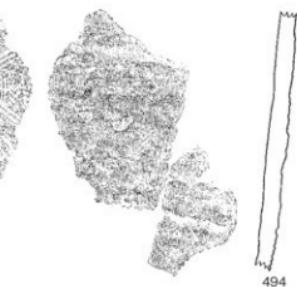
492



490



493



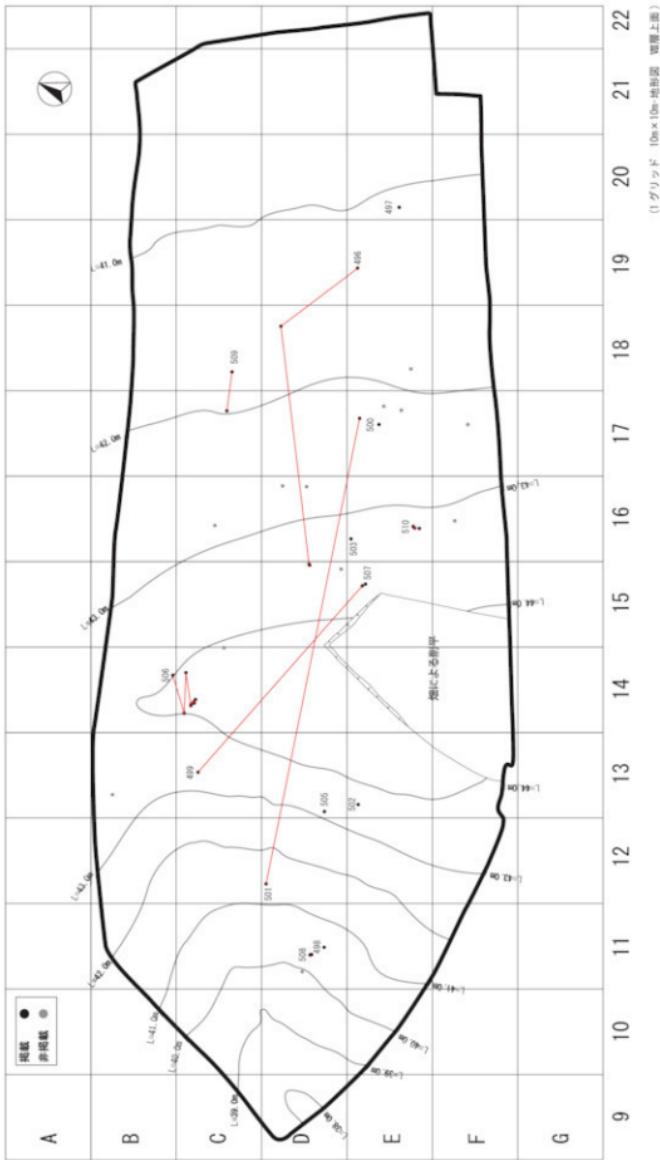
494



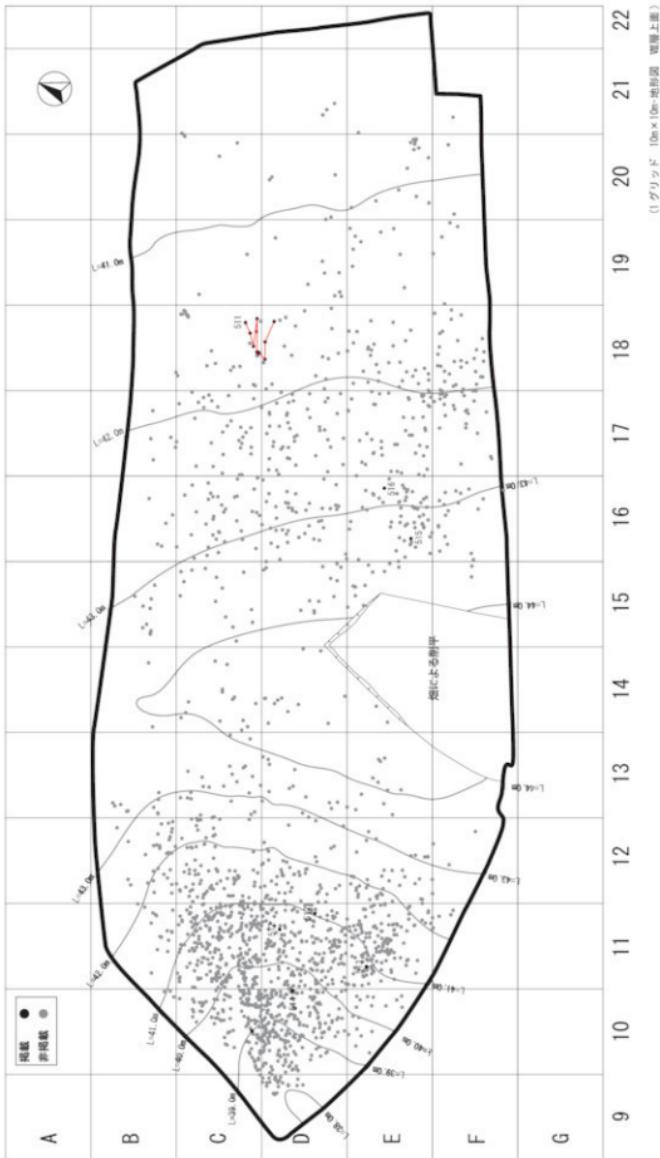
495

0 10cm

第 105 図 XI・XII類土器



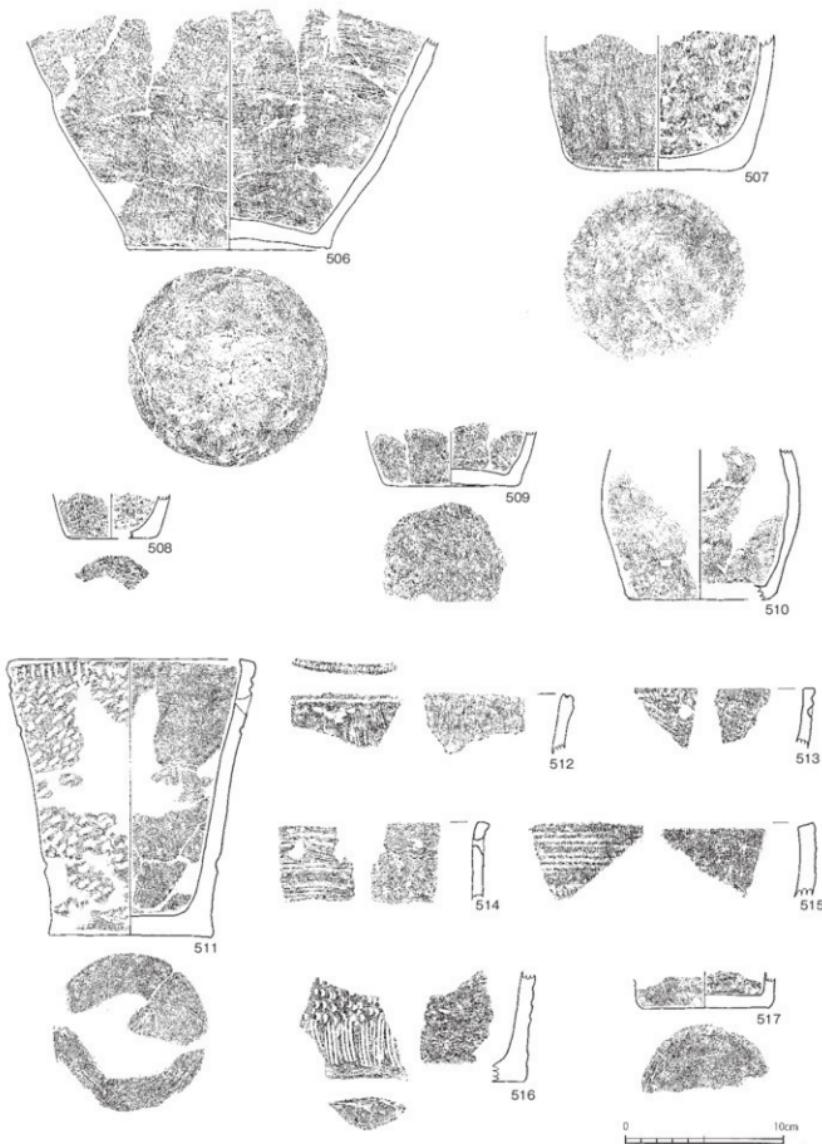
第106図 X3頸土器出土分布図



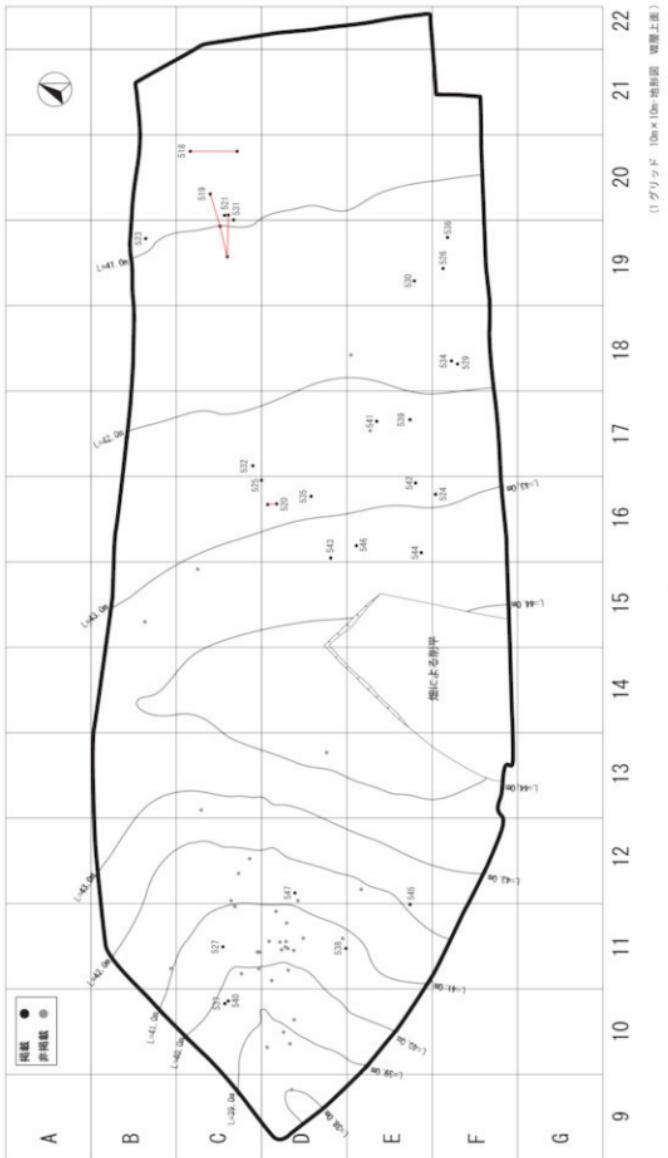
第107図 那須原出土分布図



第 108 図 灰類土器

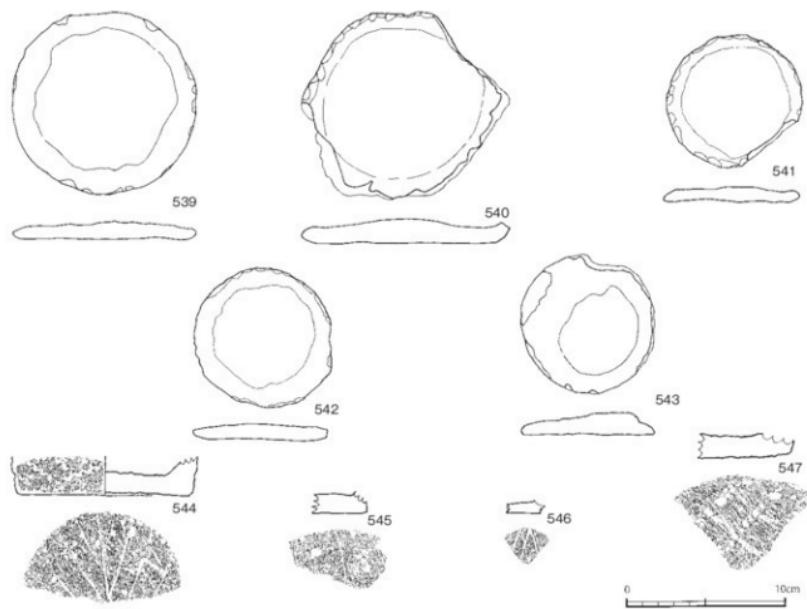


第109図 XIII・XIV頃土器





第 111 図 XV類土器 1



第112図 XV類土器

の条痕文が残る。513は開き気味の口縁部の上端付近に刺突文を1条巡らす。斜位の条痕文が見られる器面には、補修孔が途中まで穿たれている。514の直立する口縁部は端部で外反する。口縁部に横位の刺突文を1条巡らせ、その下位には横位の条痕文が施される。口縁部に梢円形の補修孔が残るが、外面からの穿孔である。515は幾分厚みのある器壁で、内湾する口縁部に口唇部平坦面が内側する。外面が若干摩耗しているため明確ではないが、口縁部には横位の沈線が施される。516は底部片で、外傾する器形を呈し、胴下部に長めの条痕文を縱位に、その上位には爪形風の文様を施す。517は薄い器壁で、底部から直線的に立ちあがる器形である。胴下部に条痕文らしきものも残るが詳細は不明である。

(15) XV類土器（第110~112図）

本類は器形に特徴のある土器、土製品と思われるもの、木葉压痕の残る底部について記述する。

1 器形に特徴のある土器（第111図 518~538）

518~534は円筒形土器と比べ、不自然な屈曲部をもつ

土器である。

518~521は、口縁部片である。518と519は同一個体と思われる。波状を呈す口縁部は外傾する。口縁部に沿って横位の刺突文、胴部には斜位の刺突文、そして口縁部文様帯と胴部文様帯の境には横に長い瘤状突起が貼付される。518の口唇部は波頂部で130度程度屈曲し、519の僅かに湾曲する口唇部は途中で120度程度に屈曲する。520・521は波頂部で屈曲する。ただ、掲載はしていないが、波頂部外面に少量の粘土を貼り付け、部分的に角部を作るものもある。522~532は胴部・底部片で、その屈曲の角度はほぼ90度から150度程度と様々である。ただし、上下や傾きについては不明なものもあった。522・524の屈曲はほぼ直角に近く、530の屈曲は150度程度開く。533は条痕文が施された胴部片で、文様から桑ノ丸式土器との関連が考えられる。534は口縁部に横位の刺突文とその下位に鋸歯状の条痕文で文様が構成される。直線的に伸びる口唇部は途中で湾曲する。口縁部の下位に横長の瘤状突起が貼付される。

535~538は口唇部の上面観が直線的になるものである。535と536は直線的に立ちあがる口縁部は端部で多

少内湾し、横位の刺突文を施す。口縁部に横長の瘤状突起が貼付されるが、他の土器と比較して長く、突帯が巡る可能性もある。両者は器壁の厚さに違いはあるが、同一個体と思われる。538の口唇部は直線的に延び、胴部も湾曲をもたない。

518~532・535~538は下剥峯式土器、533は桑ノ丸式、534は雁類土器と思われる。

2 土製品（第112図 539~543）

底部を再利用した土製品の可能性も考えられることから掲載したが、詳細については不明である。本遺跡から5点出土したが、底部のみで端部は舌状に成形されている。型式等については不明である。

540は成形途中で539が完成形と想定する。539は底部と胴部を切り離し、周辺を部分的に打ち欠いて成形している。540には底部と胴部を切り離すために使用した工具痕と思われるものが残る。切り離しが不十分で放棄した可能性も考えられる。

3 底部圧痕（第112図 544~547）

底面に圧痕の残るもののが、4点出土した。544~546が本業圧痕で、547が鷺口圧痕である。546は推定5.0cm程度の底径をもつ小型土器である。544は底径10.6cm程度で、胴下部に斜位の刺突文を施すことから下剥峯式土器と思われる。他の底部は型式不明である。

第8表 I・II類土器観察表

部番 番号	底面 形状	縁 形	足式	底面 区分	底径	底深 (cm)	底面・高型		軸上						取入手号	備考
							1脚	直徑	周長	外周	内側	白色釉	黑色釉	陶質	器縁	
539	I	鉢	C-10	直	13.0	13.0	刺突・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10450	鶴井丸-印紋
	II	加葉山	C-12	直	13.0	13.0	刺突・条板	ナゲ				○			900	無
540	III	加葉山	D-11	直	10.0	9.5	キサリ・刺突	ナゲ				○			890	無
	IV	加葉山	D-15	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○	○		2887	無
541	III	加葉山	B-12	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○			788	無
542	III	加葉山	P-11	直	13.0	13.0	刺突・条板	ナゲ				○			728	無
543	III	加葉山	C-11	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○			700	無
544	III	加葉山	P-15	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○			110512	無
545	III	加葉山	C-15	直	13.0	13.0	刺突・条板	ナゲ				○	○		758	無
546	III	加葉山	D-12	直	13.0	13.0	刺突・条板	ナゲ				○	○		6126	無
547	III	加葉山	C-11	直	13.0	13.0	キサリ・刺突	ナゲ				○			4022	無
548	III	加葉山	D-13	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		5119	無
549	III	加葉山	C-11	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		9880	無
550	III	加葉山	D-19	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○			13374	無
551	III	加葉山	D-11	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		8282	無
552	III	加葉山	B-12	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		7887	無
553	III	加葉山	D-19	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		12054	無
554	III	加葉山	E-15	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		月21-1-2	無
555	III	加葉山	B-12	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		10986	無
556	III	加葉山	C-D-19	直	13.0	13.0	キサリ・条板・刺突	ナゲ				○	○		9259	無
557	III	加葉山	D-11	直	13.0	13.0	刺突・条板	ナゲ				○	○		8265	無
558	III	加葉山	E-15	直	13.0	13.0	キサリ・刺突	ナゲ				○	○		4067	無
559	III	加葉山	C-10	直	13.0	13.0	キサリ・刺突	ナゲ				○	○		10741	無
560	III	加葉山	D-17	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○	○		3073	無
561	III	加葉山	D-10	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○	○		4906	無
562	III	加葉山	C-11	直	13.0	13.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○	○		14068	無
563	III	加葉山	C-11	直	8.0	8.0	キサリ・刺突・条板	ナゲ				○	○		2277	無
564	III	加葉山	C-15	直	10.0	9.0	キサリ・不規	ナゲ				○	○		2866	無
565	III	加葉山	C-11	直	9.0	9.0	キサリ	ナゲ				○	○		9017	無
566	III	加葉山	D-11	直	12.2	12.2	キサリ	ナゲ				○	○		7962	無
567	III	加葉山	C-9	直	13.6	13.6	キサリ	ナゲ				○	○		13374	長
568	III	加葉山	C-11	直	13.0	13.0	キサリ・刺突	ナゲ				○	○		6009	角
569	III	加葉山	D-11	直	8.8	8.8	キサリ	ナゲ				○	○		9076	角

第9表 III類土器觀察表

測量番号	地質	形態	型式	出土区	層位	深度	位置 (cm)		土文様・調整		胎土						取上番号	備考	
							100	底径	高さ	内面	外面	白色粘	黑色粘	陶片石	黒母	黄母	長石		
63	151	深鉢	平	吉田	E-11	堆	口縁~側面			サザン・削刃・鉄物	ナゲ	○	○	○	○	○	○	2307 他	
	152	深鉢	平	吉田	D-11	堆	口縁~側面			サザン・削刃・鉄物	ナゲ	○	○	○	○	○	○	12807 他	
	153	深鉢	平	吉田	D-12	堆	口縁~側面			サザン・削刃・鉄物	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6024 他	
	154	深鉢	平	吉田	B-15	堆	口縁部	20.0		サザン・削刃・鉄物	ナゲ	○	○	○	○	○	○	13408 他	破損
	155	深鉢	平	吉田	B-14	堆	口縁部			サザン・削刃・鉄物	ナゲ	○	○	○	○	○	○	13860	
	156	深鉢	平	吉田	D-10	堆	口縁部			鉄刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10381	
	157	深鉢	平	吉田	C-10	堆	側面			鉄刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10440	鉄刃
	158	深鉢	平	石原	C-10	另	口縁部			削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6780	
	159	深鉢	平	石原	C-11	堆	口縁部			削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	12807	
	160	深鉢	平	石原	C-11	另	口縁部			削刃	ナゲ・セカリ	○	○	○	○	○	○	7021	
65	161	深鉢	平	石原	C-10	堆	口縁~側面			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	11405 他	
	162	深鉢	平	石原	E-11	堆	口縁部			削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6062 他	
	163	深鉢	平	石原	E-11	堆	口縁部			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6561	
	164	深鉢	平	石原	D-12	堆	口縁~側面			サザン・削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6204 他	
	165	深鉢	平	石原	D-12	堆	口縁~側面			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	11395	
	166	深鉢	平	石原	D-12	堆	口縁部			サザン・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	2304 他	
	167	深鉢	平	石原	D-9	另	口縁部			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	11374 他	
	168	深鉢	平	石原	D-11	堆	口縁部			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	12058	
	169	深鉢	平	石原	D-12	堆	口縁~側面	13.8		サザン・削刃・条板	ナゲ・セカリ	○	○	○	○	○	○	11745 他	
	170	深鉢	平	石原	D-11	堆	口縁~底部	24.0	(13.0 29.3)	サザン・削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	11713 他	
66	171	深鉢	平	石原	C-12	堆	口縁~側面			削刃・条板	ナゲ・セカリ	○	○	○	○	○	○	5192	
	172	深鉢	平	石原	D-11	堆	口縁部			サザン・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	8795 他	
	173	深鉢	平	石原	C-11	堆	口縁部			削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	14067	破損
	174	深鉢	平	石原	E-16	另	口縁~側面	18.0		削刃・条板	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	6306 他	
	175	深鉢	平	石原	D-10	另	口縁~側面	12.4		条板・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10344	
	176	深鉢	平	石原	C-10	堆	口縁~側面			サザン・削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	12394	
	177	深鉢	平	石原	C-12	堆	口縁部			条板・削刃	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	6256 他	
	178	深鉢	平	石原	F-12	堆	口縁部			削刃・条板	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	11933	
	179	深鉢	平	石原	D-9	另	口縁部			削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	56	鉄板
	180	深鉢	平	石原	C-13	另	口縁部			条板・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	1774 他	
67	181	深鉢	平	石原	C-10	堆	口縁部			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	12731	
	182	深鉢	平	石原	D-12	堆	口縁部			削刃・条板	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	9079	破損
	183	深鉢	平	石原	E-12	堆	口縁部			条板・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	4222	破損状況
	184	深鉢	平	石原	C-12	堆	口縁~側面	28.2		条板・削刃	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	2712 他	破損状況
	185	深鉢	平	石原	D-11	堆	口縁部			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	7295	破損
	186	深鉢	平	石原	D-12	堆	口縁部			条板・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	2734	
	187	深鉢	平	石原	C-12	堆	口縁~側面	15.6		削刃・折り目状況	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6661 他	
	188	深鉢	平	石原	D-11	堆	口縁~側面			条板	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	2397	
	189	深鉢	平	石原	E-12	堆	口縁部			条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6322 他	
	190	深鉢	平	石原	C-10	堆	口縁部			条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10432	鉄板
68	191	深鉢	平	石原	C-12	堆	口縁部			条板	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	2690	破損状況
	192	深鉢	平	石原	C-11	另	口縁~側面			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6035 他	
	193	深鉢	平	石原	D-11	堆	口縁部			サザン・削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10601 他	
	194	深鉢	平	石原	C-10	堆	口縁~側面			サザン・削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	10601 他	
	195	深鉢	平	石原	C-10 II	另	口縁部			削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	11236	
	196	深鉢	平	石原	E-12	堆	口縁部			サザン・削刃・条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6033 他	
	197	深鉢	平	石原	C-11	堆	口縁~側面	12.4		条板・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	6033 他	
	198	深鉢	平	石原	D-10	堆	口縁部			条板・削刃	ナゲ	○	○	○	○	○	○	8300 他	鉄板
	199	深鉢	平	石原	C-12	堆	口縁部			条板	ナゲ	○	○	○	○	○	○	5909	

第11表 IV類土器觀察表2

辨認番号	面積	形	型式	出土区	層位	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土							取上番号	備考		
							U縫	底縫	唇縫	外縫		白色粘	黑色粘	陶鈍石	黒母	金雲母	石英	長石			
										○	○										
68	200	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	口縫~側縫			外縫	内縫	白色粘	黑色粘	陶鈍石	黒母	金雲母	石英	長石	輝石	126 他	
	201	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	1403 他	69枚
	202	深鉢	平	石灰系	F-18	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	12300 他	
	203	深鉢	平	石灰系	D-15	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	3943 他	
	204	深鉢	平	石灰系	F-17	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	11362 他	69枚
	205	深鉢	平	石灰系	D-10	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	9344	
	206	深鉢	平	石灰系	C-10	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	トレンジー長	
	207	深鉢	平	石灰系	C-11	縫	底部	9.8		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	11752	
69	208	深鉢	平	石灰系	C-10	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	12722	
	209	深鉢	平	石灰系	D-11	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	9371 他	
	210	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	底部	8.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	5961 他	
	211	深鉢	平	石灰系	D-10	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	6645	
	212	深鉢	平	石灰系	D-10	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	6967 他	
	213	深鉢	平	石灰系	D-12	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	633 他	
	214	深鉢	平	石灰系	D-11	縫	底部	7.5		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	7279	
	215	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	側縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	6987 他	
70	216	深鉢	平	石灰系	E-15	縫	側縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	4451 他	補記
	217	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	底部	6.3		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	1061 他	
	218	深鉢	平	石灰系	D-17	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	3780	
	219	深鉢	平	石灰系	E-11	縫	側~底部	8.2		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	6355 69枚	
	220	深鉢	平	石灰系	D-17	縫	底部	12.4		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	3752 他	69枚
	221	深鉢	平	石灰系	E-18	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	5286	
	222	深鉢	平	石灰系	D-10	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	10396	
	223	深鉢	平	石灰系	C-11	縫	底部	10.6		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	10634 他	
72	224	深鉢	平	石灰系	E-12	縫	底部	14.5		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	4043	
	225	深鉢	平	石灰系	D-10	縫	側~底部	13.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	7400 他	
	226	深鉢	平	石灰系	D-12	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	5227	
	227	深鉢	平	石灰系	C-11	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	9622 他	69枚
	228	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	1119 他	
	229	深鉢	平	石灰系	E-11	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	7198 69枚	
	230	深鉢	平	石灰系	C-15	縫	底部			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	10903 他	
	231	深鉢	平	石灰系	C-11	縫	側~底部	8.4		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	7024 他	
73	232	深鉢	平	石灰系	C-12	縫	側~底部	8.8		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	5217	
	233	深鉢	平	石灰系	C-11	縫	底部	17.6		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	9622 他	69枚
	234	深鉢	平	石灰系	B-11	縫	底部	8.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	12867	
	235	深鉢	平	石灰系	E-11	縫	側~底部	7.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	8864	

第12表 V類土器觀察表

辨認番号	面積	形	型式	出土区	層位	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土							取上番号	備考		
							U縫	底縫	唇縫	外縫		白色粘	黑色粘	陶鈍石	黒母	金雲母	石英	長石			
										○	○										
72	236	深鉢	V	中腹	D-18	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	13229	
	237	深鉢	V	中腹	D-10	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	10303	
	238	深鉢	V	中腹	E-18	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	5277	
	239	深鉢	V	中腹	E-11	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	7320	
	240	深鉢	V	中腹	E-18	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	12867	
	241	深鉢	V	中腹	C-15	縫	口縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	2860	

第13表 VI類土器觀察表1

辨認番号	面積	形	型式	出土区	層位	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土							取上番号	備考		
							U縫	底縫	唇縫	外縫		白色粘	黑色粘	陶鈍石	黒母	金雲母	石英	長石			
										○	○										
73	242	深鉢	足	丁尚集	F-17	縫	口縫	22.4		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	11907 他	69枚
	243	深鉢	足	丁尚集	F-17	縫	口縫	21.2		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	12942 他	69枚
	244	深鉢	足	丁尚集	C-10	縫	口縫	19.4		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	10543 他	
	245	深鉢	足	丁尚集	F-17	縫	口縫	19.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	14299 他	
	246	深鉢	足	丁尚集	D-11	縫	口縫	19.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	7401 他	
	247	深鉢	足	丁尚集	C-13	縫	口縫	19.0		外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	1186 他	
	248	深鉢	足	丁尚集	D-11	縫	口縫~側縫			外縫	内縫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	2455 他	

第14表 VI類土器觀察表2

器種番号	形態	型式	底上区	底	部位	武量 (cm)		寸丈相・調整		鉢上							取上番号	備考	
						(1)徑	(2)直徑	(3)底	外周	内周	白色	黑色	内凹	底母	底凹	白裏	底石		
249	深鉢	足	丁形茎	D-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		10749 錐	
250	深鉢	足	丁形茎	C-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		12753 錐	砂粒
251	深鉢	足	丁形茎	E-11	錐	1.00部	20.2		鉢突	ナデ				○	○			5511 錐	
252	深鉢	足	丁形茎	D-11	錐	1.00部	-側面		鉢突	ナデ	○			○	○			8809 錐	砂粒
253	深鉢	足	丁形茎	D-11	錐	G100-側面			鉢突	ナデ	○			○	○			6662 錐	砂粒
254	深鉢	足	丁形茎	D-14	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○			11864 錐	
255	深鉢	足	丁形茎	E-10	錐	1.00部			鉢突	タズリ	○			○	○	○		11893 錐	
256	深鉢	足	丁形茎	D-13	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		12430 錐	砂粒
257	深鉢	足	丁形茎	D-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		9604 錐	砂粒
258	深鉢	足	丁形茎	D-13	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		5430 錐	
259	深鉢	足	丁形茎	D-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		2961 錐	砂粒
260	深鉢	足	丁形茎	E-12	錐	1.00部	26.0		鉢突	ナデ	○			○	○	○		11411 錐	
261	深鉢	足	丁形茎	D-9	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		10890 砂粒・鍍金孔	
262	深鉢	足	丁形茎	D-18	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		19073 錐	砂粒
263	深鉢	足	丁形茎	C-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		11792 鍍金孔	
264	深鉢	足	丁形茎	C-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		6901 錐	
265	深鉢	足	丁形茎	F-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		10894 錐	
266	深鉢	足	丁形茎	C-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		5173 砂粒・鍍金孔	
267	深鉢	足	丁形茎	E-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		7324 錐	
268	深鉢	足	丁形茎	E-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		8026 錐	
269	深鉢	足	丁形茎	D-9	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		2317 錐	砂粒
270	深鉢	足	丁形茎	D-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		12483 錐	砂粒
271	深鉢	足	丁形茎	D-16	錐	1.00部	9.0		鉢突	ナデ	○			○	○	○		3821 錐	
272	深鉢	足	丁形茎	D-11	錐	1.00-側面			鉢突	ナデ	○			○	○	○		8715 錐	底凹・鍍金孔
273	深鉢	足	丁形茎	C-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		7526 鍍金底凹・鍍金孔	
274	深鉢	足	丁形茎	D-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		8279 鍍具・鍍金底凹	
275	深鉢	足	丁形茎	D-17	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		3774 錐	底凹・鍍金孔
276	深鉢	足	丁形茎	B-15	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		13463 鍍具・鍍金底凹	
277	深鉢	足	丁形茎	B-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		2567 鍍具・鍍金底凹	
278	深鉢	足	丁形茎	C-13	錐	1.00-側面	24.0		鉢突	ナデ	○			○	○	○		1686 錐	
279	深鉢	足	丁形茎	D-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		12596 錐	
280	深鉢	足	丁形茎	C-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		12466 砂粒	
281	深鉢	足	丁形茎	C-11	錐	1.00部			鉢突	タモト				○	○	○		2807 砂粒	
282	深鉢	足	丁形茎	C-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		11725 砂粒	
283	深鉢	足	丁形茎	E-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		10843 鍍具・鍍金底凹	
284	深鉢	足	丁形茎	D-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		9554 鍍具・鍍金底凹	
285	深鉢	足	丁形茎	D-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		8763 鍍具・鍍金底凹	
286	深鉢	足	丁形茎	C-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		11858 鍍具・鍍金底凹	
287	深鉢	足	丁形茎	E-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		12289 錐	鍍具・鍍金底凹
288	深鉢	足	丁形茎	C-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		1314 鍍具・鍍金底凹	
289	深鉢	足	丁形茎	D-17	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		14061 鍍具・鍍金底凹	
290	深鉢	足	丁形茎	C-12	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		5296 錐	
291	深鉢	足	丁形茎	D-13	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		8999 錐	
292	深鉢	足	丁形茎	B-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		13362 砂粒	
293	深鉢	足	丁形茎	F-18	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		5239 砂粒	
294	深鉢	足	丁形茎	E-18	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		13321 錐	
295	深鉢	足	丁形茎	C-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		3386 鍍孔	
296	深鉢	足	丁形茎	D-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		7965 錐	
297	深鉢	足	丁形茎	C-10	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		8433 砂粒	
298	深鉢	足	丁形茎	F-16	錐	1.00部			鉢突	ナデ				○	○	○		11429 鍍具・鍍金底凹	
299	深鉢	足	丁形茎	C-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		9321 錐	鍍具・鍍金底凹
300	深鉢	足	丁形茎	C-11	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		13750 錐	鍍具・鍍金底凹
301	深鉢	足	丁形茎	E-17	錐	1.00部			鉢突	ナデ	○			○	○	○		12204 鍍具・鍍金底凹	

第15表 VI類土器觀察表3

監視番号	地名	形態	出土区	層位	部位	式様 (cm)		寸丈等・調整		鉢上						取上番号	備考	
						(1)徑	(2)徑	外周	内周	白灰	黄灰	陶質	底母	底型	右裏	左裏		
79	須崎	切	下河原	E-18	縦	1.00部		側面	ナデ		○	○	○	○	○	○	13251	
	須崎	切	下河原	E-18	縦	1.00部		側面	ナデ	○					○	○	13222	縦長輪状鉢
	須崎	切	下河原	F-18	縦	1.00部		側面	ナデ						○	○	13223	縦長輪状鉢
80	須崎	切	下河原	D-16	縦	1.00部		側面	ナデ		○	○	○	○	○	○	3063	他
	須崎	切	下河原	C-11	切	1.00部		側面	ナデ		○	○	○	○	○	○	2300	他
	須崎	切	下河原	D-19	縦	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	1265	砂粒
	須崎	切	下河原	C-17	縦	1.00部		側面	ナデ		○	○	○	○	○	○	11568	他
	須崎	切	下河原	F-17	縦	1.00部		側面	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	11554	砂粒
	須崎	切	下河原	E-11	切	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	4571	砂粒・繩目
	須崎	切	下河原	C-10	切	1.00部		側面	ナデ		○	○	○	○	○	○	1073	
	須崎	切	下河原	D-17	縦	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	11243	砂粒
	須崎	切	下河原	C-16	切	1.00部		側面	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	6211	砂粒
	須崎	切	下河原	C-15	切	1.00部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	2963	
81	須崎	切	下河原	C-16	縦	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	11230	他
	須崎	切	下河原	D-11	縦	1.00部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	6054	他
	須崎	切	下河原	F-18	縦	1.00部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	12569	砂粒
	須崎	切	下河原	-		1.00部		側面	ナデ								トシナ	他
	須崎	切	下河原	C-10	切	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	9142	縦長輪状鉢
	須崎	切	下河原	D-17	縦	1.00部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	9962	縦長輪状鉢
	須崎	切	下河原	F-16	縦	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	10807	縦長輪状鉢・砂粒
	須崎	切	下河原	D-18	縦	1.00部	27.0	側面	ナデ			○	○	○	○	○	12637	縦長輪状鉢
	須崎	切	下河原	D-11	切	1.00部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	4942	砂粒
	須崎	切	下河原	D-14	縦	1.00部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	1-5	砂粒・繩目
82	須崎	切	下河原	E-19	縦	1.00部		側面	ナズリ	○		○	○	○	○	○	12092	縦長輪状鉢・砂粒
	須崎	切	下河原	C-12	縦	1.00部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	5667	縦長輪状鉢
	須崎	切	下河原	D-17	縦	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	11265	砂粒
	須崎	切	下河原	D-17	縦	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	11637	砂粒
	須崎	切	下河原	C-18	縦	側面		側面	ナズリ	○		○	○	○	○	○	12638	砂粒
	須崎	切	下河原	D-11	切	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	9072	砂粒
	須崎	切	下河原	C-16	縦	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	3250	砂粒
	須崎	切	下河原	E-18	縦	側面		側面	ナデ			○	○	○	○	○	11640	砂粒
	須崎	切	下河原	E-16	縦	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	12436	砂粒
	須崎	切	下河原	C-10	切	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	12726	砂粒
83	須崎	切	下河原	E-19	縦	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	11633	
	須崎	切	下河原	E-11	切	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	5485	
	須崎	切	下河原	C-16	縦	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	3235	砂粒
	須崎	切	下河原	E-19	縦	側面		側面	ナデ			○	○	○	○	○	13142	砂粒
	須崎	切	下河原	D-9	切	側面		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	10624	縦長輪状鉢・砂粒
	須崎	切	下河原	C-18	縦	側面		側面	ナデ			○	○	○	○	○	11208	縦長輪状鉢・砂粒
	須崎	切	下河原	E-17	縦	側面		側面	ナデ			○	○	○	○	○	12861	縦長輪状鉢・砂粒
	須崎	切	下河原	D-10	縦	底部	16.0	側面	ナデ			○	○	○	○	○	6656	砂粒
	須崎	切	下河原	E-18	縦	底部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	13162	砂粒
	須崎	切	下河原	F-18	縦	底部	7.0	側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	12179	
84	須崎	切	下河原	B-14	切	底部	9.0	側面	ナデ			○	○	○	○	○	13095	砂粒
	須崎	切	下河原	E-11	切	底部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	5561	砂粒
	須崎	切	下河原	D-11	切	底部	15.0	側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	5217	砂粒
	須崎	切	下河原	C-21	切	底部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	12897	
	須崎	切	下河原	C-17	切	底部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	10684	
	須崎	切	下河原	C-12	切	底部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	1452	砂粒
	須崎	切	下河原	E-18	切	底部		側面	ナデ			○	○	○	○	○	13154	砂粒
	須崎	切	下河原	D-10	切	底部	10.4	側面	ナデ			○	○	○	○	○	8321	
	須崎	切	下河原	C-16	切	底部	8.0	側面	ナデ			○	○	○	○	○	11835	
	須崎	切	下河原	D-10	切	底部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	8226	砂粒
85	須崎	切	下河原	F-18	切	底部	15.8	側面	ナデ			○	○	○	○	○	13226	
	須崎	切	下河原	D-10	切	底部		側面	ナデ	○		○	○	○	○	○	9066	砂粒

第16表 VI類土器觀察表4

區分 番号	地層 番号	形態	類	出土区	層 位	部位	計量 (cm)		丈尺標・調整		鉢上						取上番号	備考	
							(1)標	直徑	高さ	外周	内周	白石板	黒石板	陶片	蓋母	金型板	右裏		
	357	深鉢	切	下而素	C-11	縦				底部	18.8				ナメ	○	○ ○ ○ ○ ○ ○	8628	他
	358	深鉢	切	下而素	C-18	縦	底部			側面	ナメ	○		○		○ ○ ○ ○ ○ ○	10052	他	
	359	深鉢	切	下而素	C-14	縦	底部		14.0	側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	10478	他		
	360	深鉢	切	下而素	D-10	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	10335	他		
	361	深鉢	切	下而素	F-18	縦	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	4322	他		
	362	深鉢	切	下而素	E-12	縦	底部			側面	ナメ		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	418	他			
	363	深鉢	切	下而素	F-17	縦	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	14254	他		
	364	深鉢	切	下而素	C-17	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	3648	他		
	365	深鉢	切	下而素	B-15	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	13485	他		
	366	深鉢	切	下而素	E-19	縦	側・底部	10.8		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	12672	他		
	367	深鉢	切	下而素	B-13	縦	底部	8.0		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	13457	他		
	368	深鉢	切	下而素	E-12	縦	底部	6.6		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	561	他		
	369	深鉢	切	下而素	D-16	縦	底部	12.0		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	10608	他		
	370	深鉢	切	下而素	C-13	縦	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	6230	他		
	371	深鉢	切	下而素	C-11	縦	底部	9.7		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	5964	他		
	372	深鉢	切	下而素	C-11	切	底部	11.4		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	5964	他		
	373	深鉢	切	下而素	D-11	縦	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	7299			
	374	深鉢	切	下而素	D-16	縦	側・底部	10.4		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	11528	他		
	375	深鉢	切	下而素	C-11	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	9514	他		
	376	深鉢	切	下而素	D-15	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	65	他		
	377	深鉢	切	下而素	E-11	切	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	5874			
	378	深鉢	切	下而素	E-17	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	10235	他		
	379	深鉢	切	下而素	F-17	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	14251	他		
	380	深鉢	切	下而素	C-11	切	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	9093	他		
	381	深鉢	切	下而素	C-17	縦	底部	22.4		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	7236	他		
	382	深鉢	切	下而素	E-12	縦	側・底部	18.0		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	12434	他		
	383	深鉢	切	下而素	C-16	切	底部	18.0		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	3390	他		
	384	深鉢	切	下而素	D-10	縦	底部	15.0		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	9807	他		
	385	深鉢	切	下而素	C-11	切	底部	11.2		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	13540	他		
	386	深鉢	切	下而素	D-18	縦	側・底部	14.0		側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	13622	他		
	387	深鉢	切	下而素	F-17	縦	底部	14.0		側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	14249	他		
	388	深鉢	切	下而素	B-17	縦	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	12590	他		
	389	深鉢	切	下而素	D-16	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	10605	他		
	390	深鉢	切	下而素	D-16	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	3840	他		
	391	深鉢	切	下而素	F-21	縦	側・底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	14115	他		
	392	深鉢	切	下而素	D-16	縦	側・底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	12521	他		
	393	深鉢	切	下而素	D-17	縦	底部			側面	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	11430	他		
	394	深鉢	切	下而素	D-18	縦	底部			側面	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	12215	他		

第17表 VII類土器觀察表1

區分 番号	地層 番号	形態	類	出土区	層 位	部位	計量 (cm)		丈尺標・調整		鉢上						取上番号	備考
							(1)標	直徑	高さ	外周	内周	白石板	黒石板	陶片	蓋母	金型板	右裏	
	395	罐	直	A-2A	C-11	縦	1.0縦・側部	12.0		条板	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	8667	他	
	396	罐	直	A-2A	E-18	縦	1.0縦			条板	ナメ	○	○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○	東洋2-1-1	縫接法	
	397	罐	直	A-2A	D-15	縦	1.0縦			条板	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	5415	他	
	398	罐	直	A-2A	F-17	縦	1.0縦			条板	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	10232	他	
	399	罐	直	A-2A	C-16	切	1.0縦			条板	ナメ	タツリ		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	11132	他	
	400	罐	直	A-2A	C-14	切	1.0縦			条板	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	8537		
	401	罐	直	A-2A	C-16	切	1.0縦			条板	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	3221	他	
	402	罐	直	A-2A	F-17	縦	1.0縦			条板	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	11937		
	403	罐	直	A-2A	C-12	切	1.0縦			条板	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	1424	扇貝章付突起	
	404	罐	直	A-2A	C-16	縦	1.0縦・側部			条板	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	3273	扇貝章付突起	
	405	罐	直	A-2A	D-17	縦	1.0縦			条板	ナメ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	7804	他	
	406	罐	直	A-2A	D-11	切	1.0縦			条板	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	1030	他	
	407	罐	直	A-2A	D-10	縦	1.0縦			条板	ナメ	○		○	○ ○ ○ ○ ○ ○	8905		

第18表 VII類土器觀察表2

測量番号	施設番号	組別	形	型式	出土区	層	断面	法量(cm)			主文様・調整		船土						取上番号	備考
								(1)横	(2)直	(3)高	外周	内面	白色釉	黑色釉	陶質	表面	裏面	石英		
90	408	測定	縦	舟ノ丸	D-9	切	L断面	18.2			舟底	ナデ	○			○	○	○	9082	船底
91	409	測定	縦	舟ノ丸	F-16	切	口縁一底面				舟底	ケズリ				○	○	○	11900	舟底
	410	測定	縦	舟ノ丸	E-16	切	側面				舟底	ナデ	○			○	○	○	10902	船底
	411	測定	縦	舟ノ丸	E-18	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	9412	船底
	412	測定	縦	舟ノ丸	D-16	切	側面				舟底	ナデ	○			○	○	○	3016	
	413	測定	縦	舟ノ丸	C-11	切	底部				舟底	ケズリ	○			○	○	○	13878	船底
	414	測定	縦	舟ノ丸	B-11	切	底部				舟底	ナデ	○			○	○	○	6045	船底
	415	測定	縦	舟ノ丸	C-11	切	底部	8.0			舟底	ナデ				○	○	○	6276	船底
92	416	測定	縦	舟ノ丸	C-11	切	底部	12.6			舟底	ナデ	○			○	○	○	6073	船底
	417	測定	縦	舟ノ丸	E-17	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	10105	船底
	418	測定	縦	舟ノ丸	C-20	切	側面				舟底	ナデ	○			○	○	○	13121	船底
	419	測定	縦	舟ノ丸	F-16	切	底部	21.6			舟底	ナデ	○			○	○	○	10807	船底
	420	測定	縦	舟ノ丸	D-11	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	8280	船底
	421	測定	縦	舟ノ丸	D-11	切	側面				舟底	ナデ				○	○	○	8222	
	422	測定	縦	舟ノ丸	D-19	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	11308	船底
93	423	測定	縦	舟ノ丸	C-10	半切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	1レーナー長	船底
	424	測定	縦	舟ノ丸	D-11	切	底部	10.6			舟底	ナデ				○	○	○	1302	船底
	425	測定	縦	舟ノ丸	F-12	切	底部	9.0			舟底	ナデ	○			○	○	○	4309	船底
	426	測定	縦	舟ノ丸	D-11	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	8766	
	427	測定	縦	舟ノ丸	C-16	切	底部				舟底	ナデ	○			○	○	○	7608	船底
	428	測定	縦	舟ノ丸	D-16	切	側面				舟底	ナデ	○			○	○	○	10575	船底

第19表 VII類土器觀察表

測量番号	施設番号	組別	形	型式	出土区	層	断面	法量(cm)			主文様・調整		船土						取上番号	備考
								(1)横	(2)直	(3)高	外周	内面	白色釉	黑色釉	陶質	表面	裏面	石英		
94	429	測定	縦	舟ノ丸	D-9	切	L断面				舟底	ナデ				○	○	○	11934	船底
95	430	測定	縦	舟ノ丸	D-11	切	L断面				舟底	ナデ				○	○	○	6025	船底
	431	測定	縦	舟ノ丸	D-12	切	L断面				舟底	ナデ				○	○	○	2405	船底
	432	測定	縦	舟ノ丸	D-18	切	口縁一側面	14.4			舟底	ナデ	ケズリ			○	○	○	2853	船底
	433	測定	縦	舟ノ丸	C-11	切	L断面				舟底	ナデ	○			○	○	○	9293	
	434	測定	縦	舟ノ丸	D-9	切	L断面				舟底	ナデ	ケズリ			○	○	○	9508	縦長腹斜切丸
	435	測定	縦	舟ノ丸	C-14	切	側面				舟底	ナデ	○			○	○	○	7114	船底
	436	測定	縦	舟ノ丸	B-14	切	L断面				舟底	ナデ				○	○	○	13070	船底
96	437	測定	縦	舟ノ丸	E-17	切	L断面				舟底	ナデ	ケズリ			○	○	○	12280	船底
	438	測定	縦	舟ノ丸	E-12	切	L断面				舟底	ナデ	○			○	○	○	13274	縦長腹斜切丸
	439	測定	縦	舟ノ丸	E-17	切	側面	17.6			舟底	ナデ	トスリ			○	○	○	11431	船底
	440	測定	縦	舟ノ丸	C-11	切	側面				舟底	ナデ	ケズリ			○	○	○	9292	船底
	441	測定	縦	舟ノ丸	C-16	切	側面				舟底	ナデ				○	○	○	11795	船底
	442	測定	縦	舟ノ丸	C-18	切	口縁一側面	16.0			舟底	ナデ				○	○	○	11295	縦長腹斜切丸
	443	測定	縦	舟ノ丸	E-17	切	側面				舟底	ナデ				○	○	○	10108	船底
97	444	測定	縦	舟ノ丸	E-19	切	側面				舟底	ナデ				○	○	○	10401	
	445	測定	縦	舟ノ丸	C-16	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	12284	
	446	測定	縦	舟ノ丸	C-18	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	11124	
	447	測定	縦	舟ノ丸	C-16	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	11125	
	448	測定	縦	舟ノ丸	E-18	切	底部				舟底	ナデ				○	○	○	12187	

第20表 IX類土器觀察表1

測量番号	施設番号	組別	形	型式	出土区	層	断面	法量(cm)			主文様・調整		船土						取上番号	備考
								(1)横	(2)直	(3)高	外周	内面	白色釉	黑色釉	陶質	表面	裏面	石英		
97	449	測定	縦	押型文	E-16	切	L断面				舟底	ナデ	船底+ナデ			○	○	○	9428	船底
	450	測定	縦	押型文	E-16	切	L断面				舟底	ナデ	船底+ナデ	○		○	○	○	10689	
	451	測定	縦	押型文	E-16	切	L断面				舟底	ナデ	船底+ナデ	○		○	○	○	13282	
	452	測定	縦	押型文	D-13	切	L断面				舟底	ナデ	ナデ			○	○	○	1309	船底
	453	測定	縦	押型文	D-12	切	底部				舟底	ナデ	ナデ			○	○	○	7987	船底
	454	測定	縦	押型文	D-14	切	底部				舟底	ナデ	ナデ			○	○	○	8479	船底
	455	測定	縦	押型文	E-13	切	L断面				舟底	ナデ	船底+ナデ	○		○	○	○	6176	

第21表 IX類土器観察表2

器種 番号	施設 番号	器種	形 式	出土区	層 位	部位	法量 (cm)		丈尺類・調整		軸上						取上番号	備考	
							1寸	直徑	深長	外周	内周	白色板	黑色板	陶石	黒母	金碧	白石		
95	456	須津	盆	押型文	B-11	縦	口縫-側面			山形文	ナゲ	○	○	○	○	○	○	13805 須	
	457	須津	盆	押型文	B-12	縦	口縫-側面			山形文	ナゲ	○			○	○	○	13514 須	49組
	458	須津	盆	押型文	E-13	縦	側-底部	10.0		山形文	ナゲリ	○			○	○	○	6176 須	49組
	459	須津	盆	押型文	E-16	縦	底部			山形文	ナゲ	○			○	○	○	14600 須	49組
	460	須津	盆	千字文	C-12	縦	底部	7.6	(底板不明)	ナゲ	○				○	○	○	1160 須	49組
	461	須津	盆	押型文	F-13	縦	底部	7.0	(底板不明)	ナゲ	○				○	○	○	6206 須	

第22表 X類土器観察表

器種 番号	施設 番号	器種	形 式	出土区	層 位	部位	法量 (cm)		丈尺類・調整		軸上						取上番号	備考	
							1寸	直徑	深長	外周	内周	白色板	黑色板	陶石	黒母	金碧	石英		
99	462	須津	X	平底	B-16	縦	口縫		圓日癸葉-亞圓頭	ナゲ	○			○	○	○	○	13816 須	
	463	須津	X	平底	E-19	縦	口縫-側面	23.0	圓日癸葉-沈面	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	1-21 須	
	464	須津	X	平底	C-17	縦	口縫		圓日癸葉-沈面	ナゲ	○			○	○	○	○	11598 須	
	465	須津	X	平底	C-18	縦	口縫-側面	27.0	圓日癸葉-沈面	ナゲ				○	○	○	○	7711 須	
100	466	須津	X	平底	C-18	縦	口縫	35.0	圓日癸葉-沈面	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	7227 須	
	467	須津	X	平底	D-18	縦	口縫		ナギト-則度-法縫	ナゲ	○			○	○	○	○	11289 須	
101	468	須津	X	平底	C-11	縦	口縫		ナギト-則度-沈面	ナゲ				○	○	○	○	6037 須	
	469	須津	X	平底	E-15	縦	口縫		ナギト-沈面	ナゲ				○	○	○	○	9365 須	
102	470	須津	X	平底	E-17	縦	口縫		圓日癸葉-沈面	ナゲ	○			○	○	○	○	5042 須	
	471	須津	X	平底	D-14	縦	口縫-側面	25.0	32.0 圓日癸葉-最圓頭	ナゲ				○	○	○	○	7147 須	
103	472	須津	X	平底	D-14	縦	口縫		沈面-則度	ナゲ				○	○	○	○	13027 須	
	473	須津	X	平底	E-17	縦	口縫		ナギト-沈面	ナゲ	○			○	○	○	○	7852 須	
104	474	須津	X	平底	D-17	縦	口縫		ナギト-沈面	ナゲ				○	○	○	○	9471 須	
	475	須津	X	平底	C-13	縦	口縫		則度-沈面	ナゲ				○	○	○	○	5145 須	49組
105	476	須津	X	平底	C-17	縦	口縫-側面		圓日癸葉-最圓頭	ナゲ	○			○	○	○	○	2058 須	49組
	477	須津	X	平底	E-18	縦	口縫		沈面-圓日癸葉	ナゲ				○	○	○	○	12219 須	
106	478	須津	X	平底	B-18	縦	口縫		則度	ナゲ	○			○	○	○	○	12866 須	
	479	須津	X	平底	C-18	縦	口縫		ナギト-國文	ナゲ				○	○	○	○	7712 須	
107	480	須津	X	平底	B-17	縦	口縫		ナギト-國文	ナゲ				○	○	○	○	13628 須	
	481	須津	X	平底	D-15	縦	口縫		ナギト-國文	ナゲ				○	○	○	○	3865 須	
108	482	須津	X	平底	D-15	縦	口縫		ナギト-國文	ナゲ				○	○	○	○	3063 須	
	483	須津	X	平底	E-16	縦	側部		沈面-則度	ナゲ				○	○	○	○	10879 須	
109	484	須津	X	平底	F-16	縦	側部		圓日癸葉-沈面	ナゲ				○	○	○	○	10785 須	
	485	須津	X	平底	C-12	縦	側部		國文	ナゲリ	○			○	○	○	○	3278 須	49組
110	486	須津	X	平底	B-16	縦	側部		圓日癸葉-最圓頭	ナゲ				○	○	○	○	14366 須	
	487	-	-	平底	B-16	縦	側部		圓日癸葉-沈面	ナゲ				○	○	○	○	13997 須	小型上部
111	488	須津	X	平底	C-13	縦	底部	12.6	圓日癸葉-最圓頭	ナゲ	○			○	○	○	○	上束1-3集	碎片

第23表 XI・XII類土器観察表表

器種 番号	施設 番号	器種	形 式	出土区	層 位	部位	法量 (cm)		丈尺類・調整		軸上						取上番号	備考	
							1寸	直徑	深長	外周	内周	白色板	黑色板	陶石	黒母	金碧	石英		
489	須津	盆	蓋	B-17	縦	口縫-側面	19.6		圓日癸葉-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	5237 須	
490	須津	盆	蓋	B-17	縦	口縫			圓日癸葉-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	2862 須	
491	須津	盆	蓋	B-20	縦	口縫	18.3		圓日癸葉-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	11086 須	
492	須津	盆	蓋	C-18	縦	底部		10.0	柔軟-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	12000 須	
493	須津	盆	蓋	C-19	縦	底部			柔軟-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	11610 須	
494	須津	盆	蓋	C-18	縦	側部			柔軟-則度-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	12005 須	
495	須津	盆	蓋	C-18	縦	側部			柔軟-則度-ナゲ	ナゲ				○	○	○	○	12006 頂	

第24表 XII類土器観察表1

器種 番号	施設 番号	器種	形 式	出土区	層 位	部位	法量 (cm)		丈尺類・調整		軸上						取上番号	備考	
							1寸	直徑	深長	外周	内周	白色板	黑色板	陶石	黒母	金碧	石英		
496	須津	縦	-	E-19	縦	口縫-底部	29.7	10.5	31.0	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	○	上束2-1集	
497	須津	縦	-	E-20	縦	口縫			ナゲ	ナゲ	○	○		○	○	○	○	11090 頂	
498	須津	縦	-	D-11	縦	口縫			ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	○	○	○	7361 頂	
499	須津	縦	-	C-13	縦	口縫			ナゲ	ナゲリ	○			○	○	○	○	10620 頂	碎状
500	須津	縦	-	E-17	縦	口縫			ナゲ	ナゲリ	○	○	○	○	○	○	○	10598 碎状	

第 25 表 XI類土器觀察表 2

號	號	形	式	出上區	層	層位	法量 (cm)			上文種·調整		黏土						取土番号	備考
							(1)件	(2)件	(3)件	外觀	內觀	白色粘	黑色粘	陶鈎石	鐵母	金屬	石英	長石	輝石
108	501	圓錐	罐	—	D-12	堆	口緣~側底	7.2		ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	6132 錄	
	502	圓錐	罐	D-E-13	堆	口緣部				ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	6136 2-1	69 錄
	503	圓錐	罐	E-16	堆	口緣部	8.0			ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	12445	
	504	圓錐	罐	D-13	堆	口緣部				ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	—	
	505	圓錐	罐	D-13	堆	口緣部				ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	1519	
	506	圓錐	罐	C-13	瓦	側~底部	12.0			ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	1.83-1 錄	
109	507	圓錐	罐	E-15	堆	側~底部	11.0			ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	6131 9302	69 錄
	508	圓錐	罐	D-11	瓦	底部	5.8			ナラ	ナラ	○	○	○	○	○	○	5666 錄	69 錄
	509	圓錐	罐	C-18	堆	底部	8.6			ナラ	ナラ					○	○	3621 錄	
110	510	圓錐	罐	E-16	堆	側~底部	9.0			ナラ	ナラ					○	○	9422 錄	

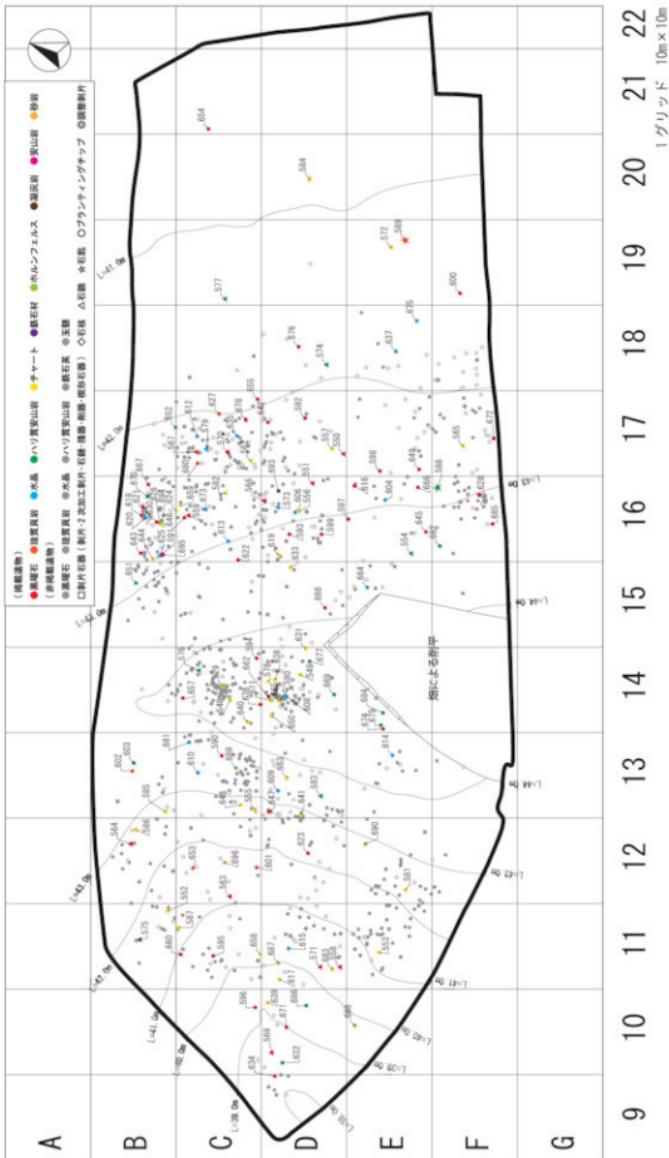
第 26 表 XII類土器觀察表

號	號	形	式	出上區	層	層位	法量 (cm)			上文種·調整		黏土						取土番号	備考	
							(1)件	(2)件	(3)件	外觀	內觀	白色粘	黑色粘	陶鈎石	鐵母	金屬	石英	長石	輝石	
109	511	圓錐	罐	—	C-18	堆	口緣~底部	15.0	10.0	27.5	ナガミ~短沈底	ナラ	○	○	○	○	○	○	11665 錄	薄物孔
	512	圓錐	罐	—	D-11	堆	口緣部				刺突·条紋	ナラ	○	○	○	○	○	○	7963	
	513	圓錐	罐	—	E-11	堆	口緣部				刺突·条紋	ナラ	○	○	○	○	○	○	5576	薄物孔
	514	圓錐	罐	—	D-10	堆	口緣部				刺突·条紋	ナラ	○	○	○	○	○	○	7493	薄物孔
	515	圓錐	罐	—	E-16	堆	口緣部				沈底	ナラ	○	○	○	○	○	○	10893	
	516	圓錐	罐	—	E-16	堆	底部				刺突·条紋	ナラ					○	○	10890	
111	517	圓錐	罐	D-11	堆	底部				条紋	ナラ					○	○	○	6096	69 錄

第 27 表 XV類土器觀察表

號	號	形	式	出上區	層	層位	法量 (cm)			上文種·調整		黏土						取土番号	備考	
							(1)件	(2)件	(3)件	外觀	內觀	白色粘	黑色粘	陶鈎石	鐵母	金屬	石英	長石	輝石	
111	518	—	Y-直	C-20	堆	口緣部				陶突	ナラ	○	○	○	○	○	○	○	12974 錄	銀長壁凹凸孔
	519	—	Y-直	C-20	堆	口緣部				陶突	ナラ								13262 錄	銀長壁凹凸孔
	520	—	Y-直	D-16	堆	口緣部				刺突	ナラ								7254 錄	鉛管
	521	—	Y-直	C-20	堆	口緣部				陶突	ナラ								1109	
	522	—	Y-直	D-20	堆	側部				刺突	ナラ								15	
	523	—	Y-直	B-19	堆	側部				刺突	ナラ								14206	
112	524	—	Y-直	F-16	堆	側部				刺突	ナラ								10622	
	525	—	Y-直	C-16	瓦	側部				刺突	ナラ								13304	
	526	—	Y-直	C-17	堆	底部				刺突	ナラ								11988	
	527	—	Y-直	C-17	堆	側部				刺突	ナラ								12967	
	528	—	Y-直	D-17	堆	側部				刺突	ナラ								15	
	529	—	Y-直	F-18	堆	側部				刺突	ナラ								12275	
113	530	—	Y-直	E-19	堆	側部				刺突	ナラ								12891	
	531	—	Y-直	C-20	堆	底部				刺突	ナラ								12578	
	532	—	Y-直	C-17	堆	底部				刺突	ナラ								10096	
	533	—	Y-直	—	—	側部				刺突	ナラ								11774 錄	
	534	—	Y-直	F-18	堆	側部				刺突·条紋	ナラ	○	○	○	○	○	○		13251 銀長壁凹凸孔	
	535	—	Y-直	D-16	堆	口緣部				刺突	ナラ	○	○	○	○	○	○		3614 錄	銀長壁凹凸孔
114	536	—	Y-直	F-19	堆	口緣部				刺突	ナラ								12053 錄	銀長壁凹凸孔
	537	—	Y-直	C-10	瓦	口緣部				刺突	ナラ								11567	
	538	—	Y-直	D-11	堆	口緣部				刺突	ナラ								9805	
	539	—	—	E-12	堆	底部				刺突	ナラ								10132 上製品	
	540	—	—	C-10	瓦	底部				刺突	ナラ								12917 上製品	
	541	—	—	E-17	堆	底部				刺突	ナラ								4195 上製品	
115	542	—	—	E-16	堆	底部				刺突	ナラ								9423 上製品	
	543	—	—	D-16	瓦	底部				刺突	ナラ								11533 上製品	
	544	308	Y-直	E-16	堆	底部				木葉底板	ナラ								10889	
	545	308	Y-直	E-11	堆	底部				木葉底板	ナラ								4462	
	546	308	Y-直	E-16	瓦	底部				木葉底板	ナラ								4075	
	547	308	Y-直	D-12	堆	底部				木葉底板	ナラ								9380	

図113 繩文時代早期の剥片石器出土分布図



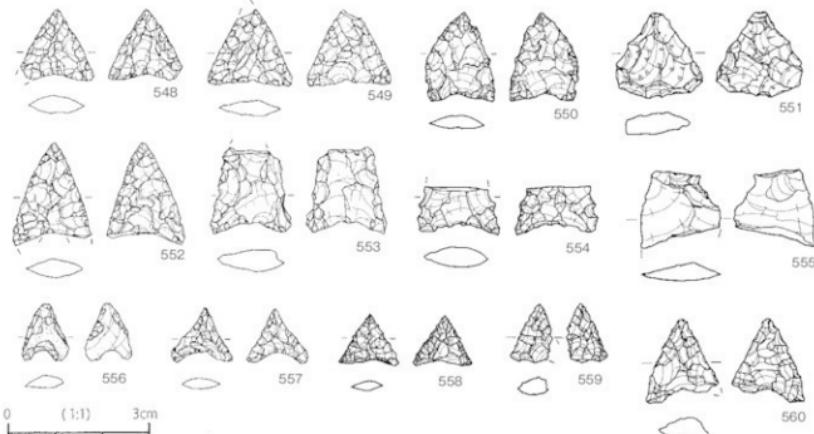
2 石器

548～816は縄文時代早期の包含層であるVI・VII層から出土した石器である。洞片石器は黒曜石・チャート・水晶などの素材が多く、玉髓や貝岩の素材は少量であった。打製石斧や礫石器は貝岩（ホルンフェルス）を素材としており、磨石・敲石などは安山岩・砂岩を中心に花崗岩を素材とするものも出土した。石器で取り上げ番号があるものは総数1,924点で、洞片石器は総数1,046点、その中に149点を掲載した。礫石器は総数878点、その中で109点を掲載した。

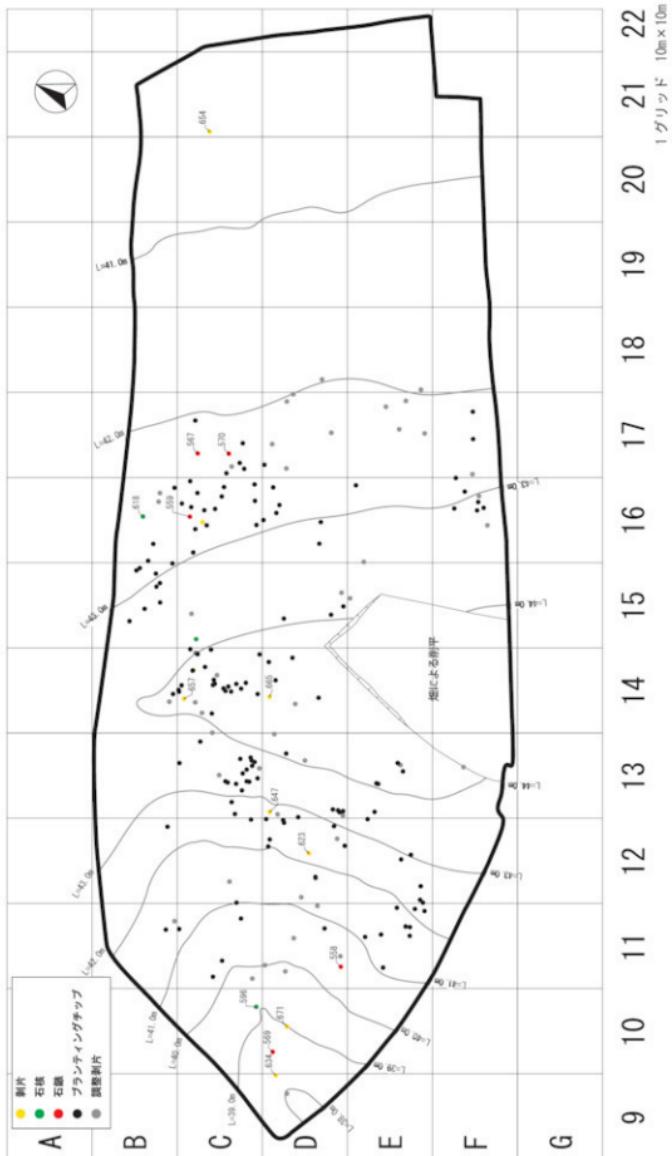
石鎌（第114～121図 548～587）

548・549は正三角形を呈する石鎌である。素材はチャートで、基部は浅く三角形状に成形される。550は左側縁が丸みを帯びるが、基部が浅く548・549と比較的近い形状である。551は日東産黒曜石を素材としたものである。正三角形形状で、側縁部の剥離や脚部の作出がみられない。石鎌未成品と考えられる。552は二等辺三角形を呈している。両脚部が欠損しており、全体の形状は不明であるが、基部は548と類似している。553はチャートを素材とするもので、先端部を欠損している。浅い抉りが施される。554は腹部から上を欠損する。ハリ貫安山岩を素材とし、基部は浅く、形状は553と類似している。555はチャートを素材とした石鎌未成品である。上下は欠損し、両側縁の剥離痕がみられない。556はチャートを素材とした小さい石鎌である。二等辺三角形形状で脚部が短く形成される。剥離痕は少なく、裏面はほとんどみられない。頭部と脚部が作出されているが丸みを帯びる。557は正三角形形状で基部に抉りが施され

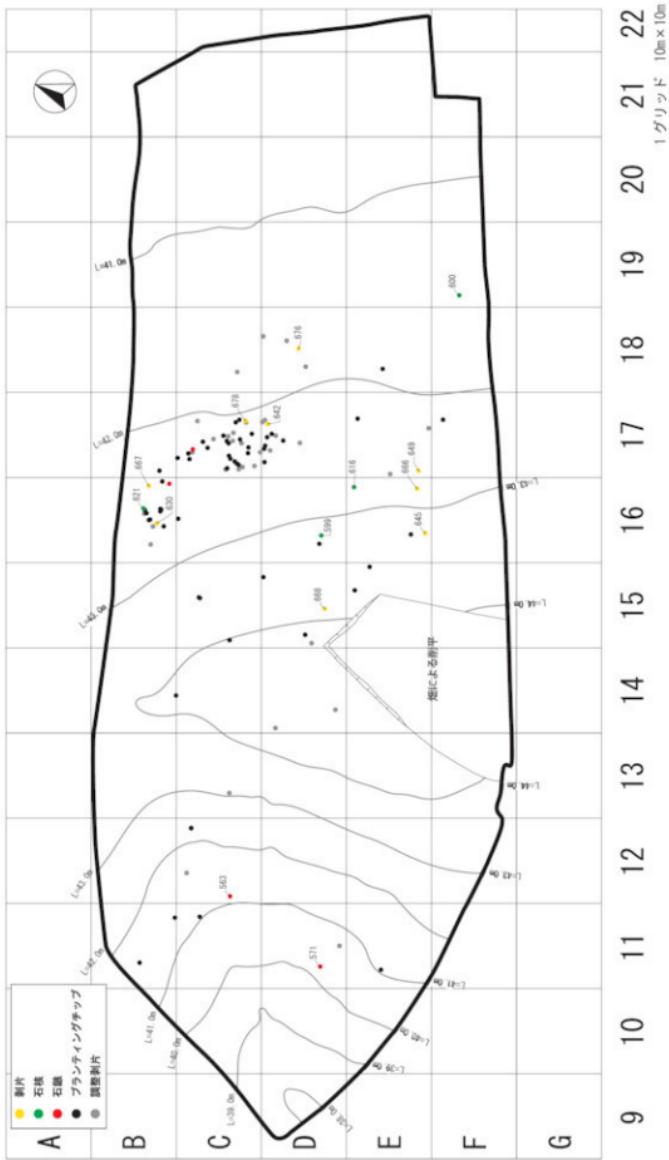
る。抉りの幅は広く、先端部は尖るように剥離されている。558は557と同じ大きさだが、基部が浅い正三角形を呈する。両側縁部は密に剥離されている。南九州の縄文時代早期前半特有の小型三角形鎌と思われる。石材は桑ノ木津留産黒曜石を用いており、透明度の高い黒曜石が嗜好される傾向にも相応する。559は桑ノ木津留産黒曜石を素材としたもので、二等辺三角形状を呈する。基部の抉りはなく、脚部付近の剥離が少ないため、石鎌未成品と考えられる。560は正三角形形状を呈し、浅く抉りが施される。連続的な剥離痕が一部みられる。561は正三角形形状で基部はやや深く抉っており、薄手に仕上げられている。素材はチャートである。562の先端部は欠損するが、正三角形形状で基部の抉りは深く、薄手に形成される。両側縁部には連続的な剥離痕が残り、基部の中央部にも細かく施される。563は針尾産黒曜石を素材としており、両側縁部は丸く厚手である。基部の抉り中心と脚端部は丸く形成される。564は先端部と右脚部を欠損している。やや厚みがあり、二次加工が密に施されている。脚端部は丁寧な剥離によって丸く作出される。腰岳産黒曜石を素材としている。565も先端部が欠損しているが、全体形は寸胴な二等辺三角形を呈する。基部はやや広い抉りが作出される。側縁に鋸歯状の加工が施されている。素材はチャートである。566は三船産黒曜石を素材としている。全体的に薄く、脚部の先端は丸みを帯びる。基部の抉り中心も丁寧に剥離されている。567は桑ノ木津留産黒曜石を素材とするものである。先端部と側縁部を一部欠損するが、基部は深く抉り、V字状を呈する。568は深い抉りが施され、やや長い脚部が作出され



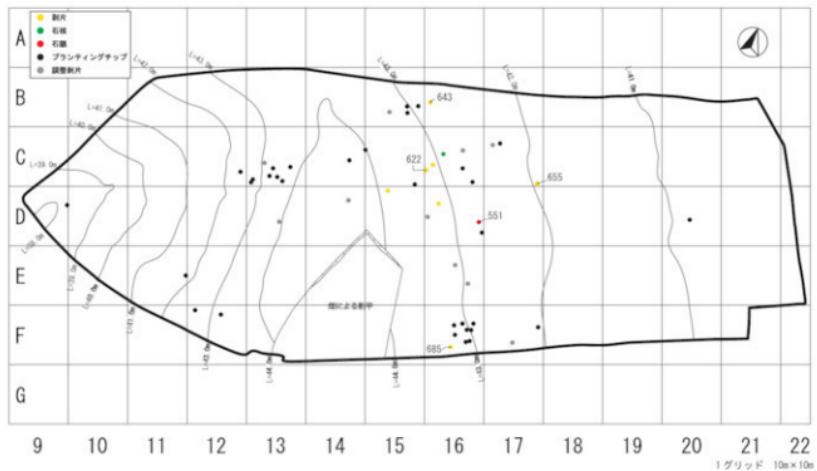
第114図 縄文時代の石器1



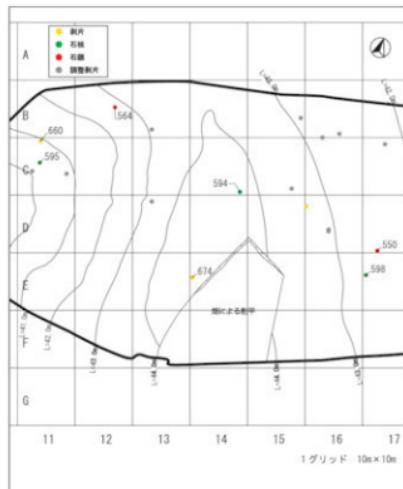
第115図 黒曜石（桑ノ木津留）出土分布図



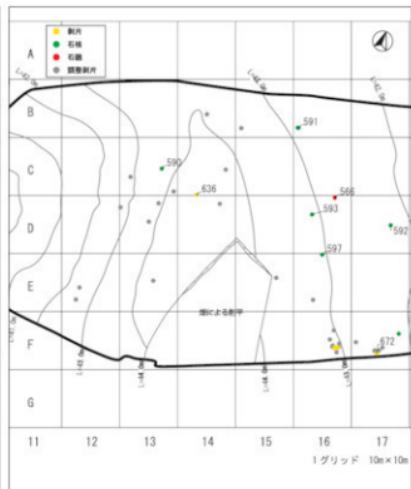
第116図 黒曜石(針尾)出土分布図



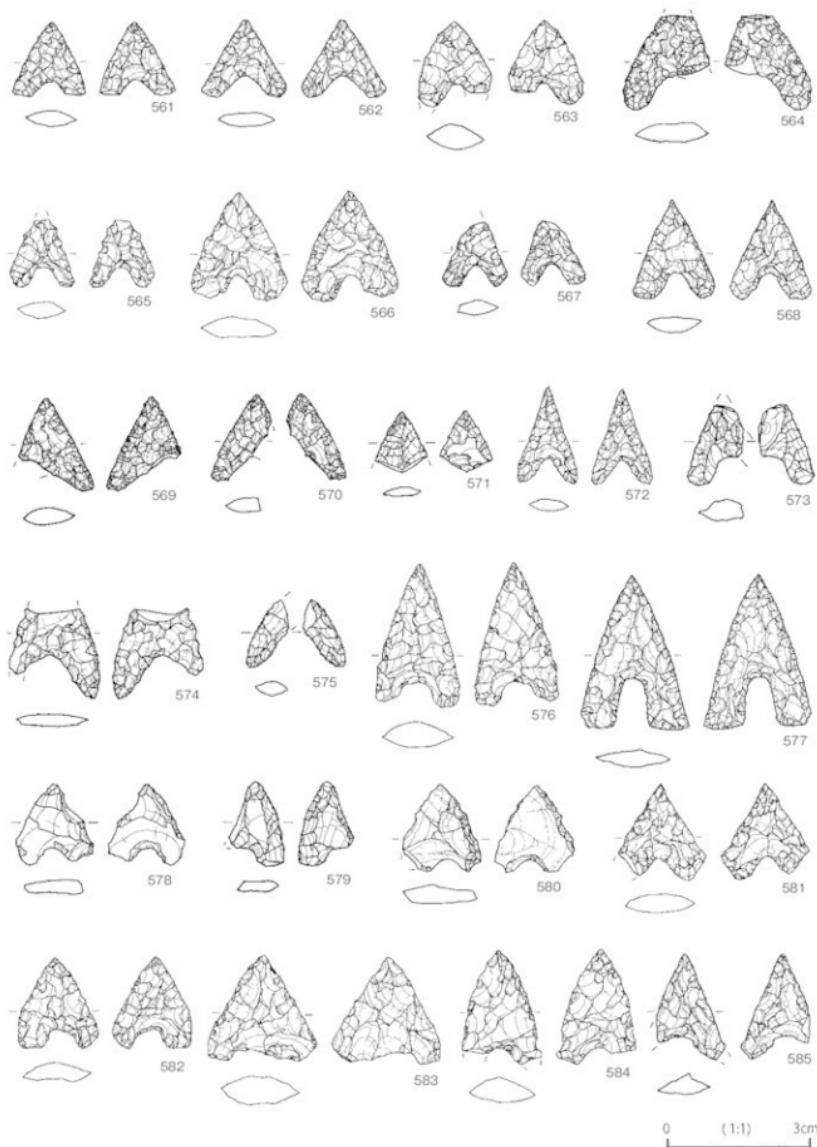
第117図 黒曜石（日東）出土分布図



第118図 黒曜石（腰岳）出土分布図



第119図 黒曜石（三船）出土分布図



第120図 縄文時代の石器2

る。薄手で先端部は鋭く、両側縁部の剥離痕が明瞭で、丁寧に作成されている。569・570は桑ノ木津留産黒曜石を素材とした石器である。どちらも片脚を欠損するが両側縁部の剥離痕は緻密に施されている。571は先端部のみ残存している。腹部から下は欠損している。572も563と同様の形状を呈するが、先端部が細く伸びる形状である。チャートを素材としている。573は水晶を素材とした石器である。二等辺三角形状で、脚部先端が丸みを帯びる。574はハリ賀安山岩を素材としている。左脚部と先端部を欠損する。基部は深く抉り、V字状を呈する。575は鉄石英の脚部である。この素材の製品は1点のみ出土している。側縁部に緻密な剥離痕が残っている。576は腹部に厚みがあり、脚部が短く先端部は尖る形状である。丁寧な二次加工が施されている。577はハリ賀安山岩を素材としたものである。全体形は長身の二等辺三角形状で、基部にU字状の深い抉りが施される。脚端部は平らに整形される。これらは縄文時代早期前葉から縄文時代早期中葉にみられるものと思われる。578はチャートを素材としている。基部の抉りはやや深く丸みを帯びる。579はやや歪んだ形状である。脚部の先端は太く、片脚は欠損している。580は五角形を呈する石器の未成品である。左脚部を欠損しており、右側縁に剥離痕が残る。581も同様の形状で左脚部を欠損している。両側縁部と脚部には剥離痕が残る。582は基部の中心に抉りが施され、比較的薄く整形されている。583はハリ賀安山岩製の石器である。全体形は正三角形を呈す

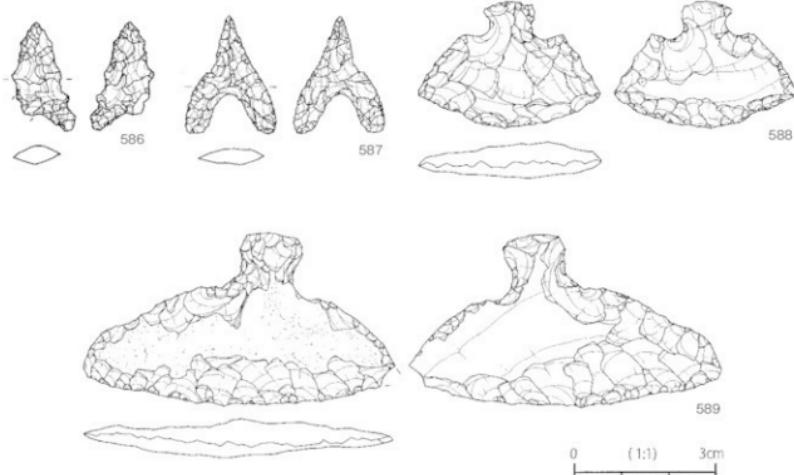
るが、脚部が短く整形される。やや厚みがあり、基部は左に偏っている。584は両脚部を欠損している。全体形には両側縁の脚部の付け根付近から外側へ鋸歯状を呈しながら張り出すものと考えられる。これらの素材はすべてチャートである。585も同様の素材である。二等辺三角形状で基部にはやや深い抉りが施されている。両脚部は欠損している。586はチャートを素材としており、側縁部から脚部が鋸歯状に作出される。剥離痕は密ではなく、隙間が残る。これらは、縄文時代後期にみられるものと考えられる。587の左側縁の一部はガジリにより欠損する。比較的大きい資料で基部に深い抉りが施され、腹部から脚部にかけて丸みを帯びた独特の形状である。

石匙（第121図 588・589）

588はハリ賀安山岩を素材とした石匙である。刃部の中央部に調整剥離が多く施される。つまみ部にも剥離痕が残る。縄文時代早期の平格式土器と同時期に相当するものと思われる。589はやや横長の製品で右脚の先端部を欠損している。周縁に二次加工がみられ、中央部には素材面を残している。縄文時代前期以降のものと考えられる。

石核（第122図 590～621）

590～592は三船産黒曜石の石核である。比較的小さい形状である。591は上端部と右側縁に剥離がみられる。592は左下側縁に一部打点が残る。593は三船産黒曜石の石核である。下側縁の打点から剥離が施される。594・595は腰岳産黒曜石の石核である。594は左下側縁



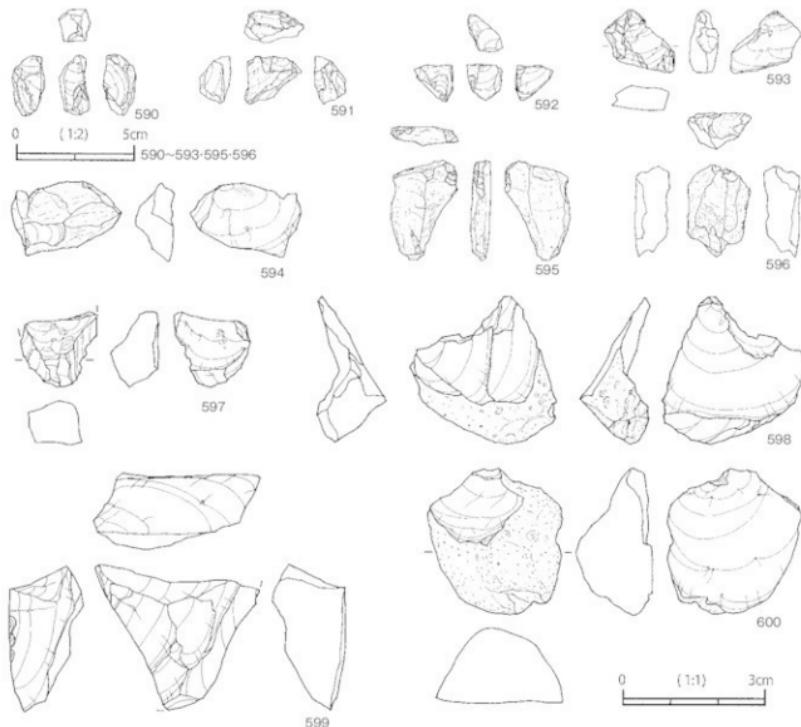
第121図 縄文時代の石器3

に打点が確認できる。595は右側縁に連続的な剥離痕がみられる。596は桑ノ木津留産黒曜石の素材である。上端部の打面から剥離痕がみられる。597は三船産黒曜石を素材としており、上端部を欠損するが、剥離面で構成される。598は腰岱産黒曜石で、比較的大きい素材である。599・600は針尾産黒曜石を素材としている。599は瓶長剥片を上から剥離したものである。601・602は頁岩製の石核である。601は自然面を残して剥離面が形成されている。602の右側縁には両方向からの剥離痕が認められる。603はハリ質安山岩の素材で、上下に打点が認められ下側縁に剥離痕が残る。604～614は水晶の石核で、剥離面で構成される。604は上端部の打面による剥離面が残る。605は亀甲状の形状で、様々な角度から剥離が施されている。606は角礫状に剥離面が構成される。607・610は四角形を呈し、610の下側面には連続的な剥離痕が残る。下端部に剥離痕の潰れがわずかに認められることから楔形石器の可能性が考えられる。

608・611は角礫状の形状で、腹部に二次加工が施されている。612は断面三角形状で下端部は先細る形状である。腹部に二次加工が施されている。613も類似した形状でやや大きく、裏面の下端部に剥離面が多く残る。614は上側面が平坦で断面三角形状である。剥離面で構成される。615・620は水晶の石核である。617は上端部と下側縁に剥離痕が残る。下側縁は薄く尖るように作出される。616は針尾産黒曜石を素材としたものである。自然面が残っており、表の左側縁には微細な剥離痕が残る。618は表の腹面に剥離痕が残り、二次加工が施されている。619はチャートの石核である。上側縁に剥離痕が多く、表面は二次加工が認められる。621は腹面から左側縁にかけて二次加工が認められる。

剥片石器 (第 125～133 図 622～696)

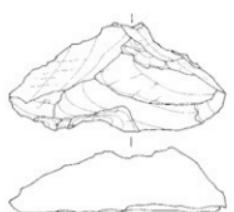
622・623は石鏃を製作する際のプランティングチップである。622は日東産黒曜石の剥片で、周縁に微細な剥離痕がみられる。623は桑ノ木津留産黒曜石の剥片であ



第 122 図 繩文時代の石器 4



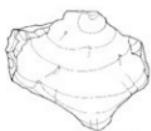
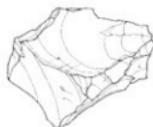
第123図 縄文時代の石器5



615



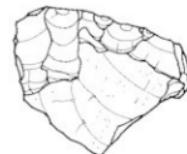
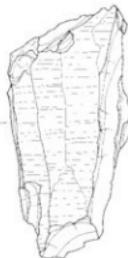
616



617



618



619



0 (1:1) 3cm

620



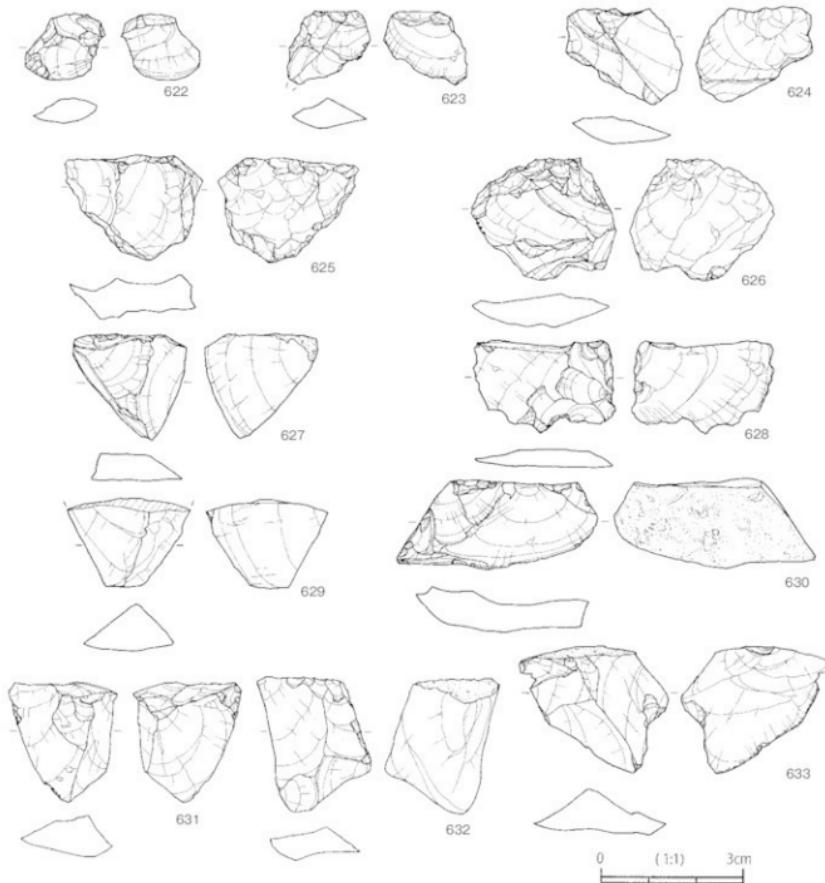
621

第 124 図 縄文時代の石器 6

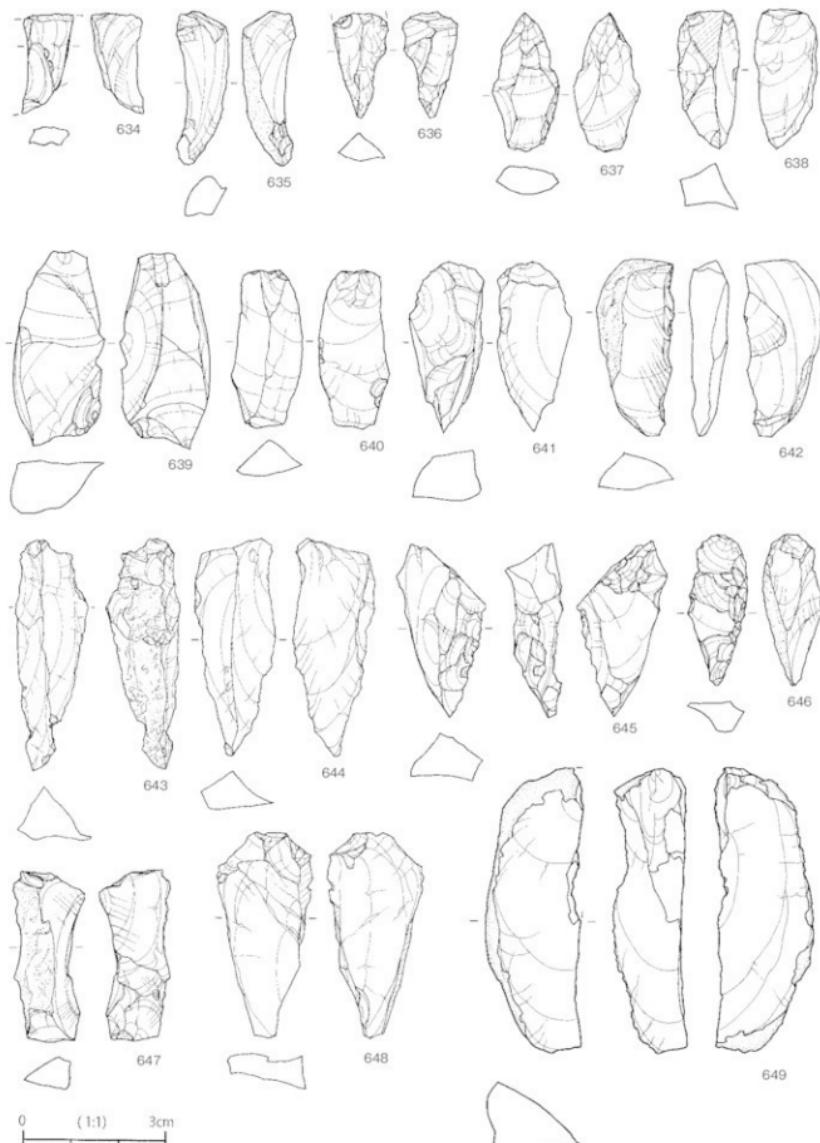
る。上側面に剥離痕が残る。624はチャートの剥片を素材としており、剥離面で構成される。625は水晶の剥片である。上側縁と左側縁にわずかな剥離痕がみられる。626はチャートの剥片である。上側縁には二次加工が施され、細かい剥離痕が残る。627は頁岩を素材とする剥片で、剥離痕は少ない。右側縁が鋭く尖る。628は姫島産黒曜石の剥片である。薄く剥がれた剥片に二次加工が残る。629はチャートの剥片で627と同様に三角形状を呈する。やや厚みがある。630は針尾産黒曜石の剥片である。裏面は躍面が残り、上側縁と左側縁に剥離痕が残る。

る。二次加工が施されている。631はチャートの剥片である。上側縁に打点がみられ、裏の上側縁にはわずかな剥離痕が残る。632はハリ賀安山岩の剥片である。上側面は剥離痕がみられるが、躍面が残る。633は上面に躍面を残し、右側縁は剥離痕が残る。

634は桑ノ木津留産黒曜石を素材とした薄い剥片を利用し、調整剥離はほとんどみられない。635は水晶を素材としており、鉛直方向からの加壓により剥離面が形成される。素材面は残され、先端部に微細剥離がみられる。636は三船産黒曜石を素材とした剥片尖頭器である。上



第125図 繩文時代の石器7



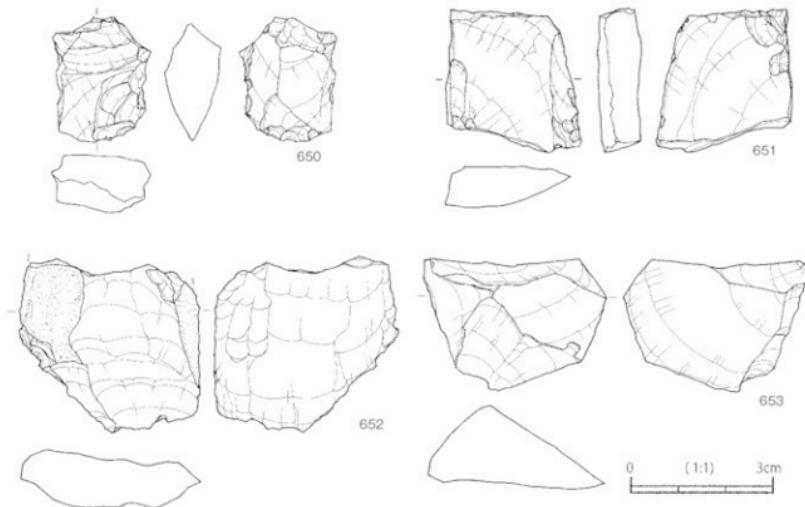
第 126 図 縄文時代の石器 8

端部を欠損するが、先端部に一部剥離痕が残る。637は水晶の剥片である。下端部は薄く剥がれ、やや厚みがある上端部は尖るように剥がれている。638は左側縁に剥離痕が残る。639はやや大きめのチャートの剥片である。下端部からの剥離が施される。640はチャートを素材としたもので剥離痕はあまりみられない。641はチャートを素材としたやや大きめのものである。横長の剥片を利用したもので、先端は鋭く尖る。642は針尾産黒曜石の横長剥片が上側縁からの剥離によって剥がれている。また、右側縁からも剥離が施されている。一部剥面が残る。643は日東産黒曜石を素材としており、縱に長く細めの剥片で形成される。上端部周辺に剥離が施され、先端は尖るように剥離面がみられる。644はやや大きめの形状で先端部が鋭く尖っている。649は針尾産黒曜石の剥片である。645~647は二次加工剥片である。646は姫島産黒曜石を素材としている。右側縁は先端部まで微細剥離を施す。645は針尾産黒曜石を素材とし、右側縁に剥離痕が残る。また、上端部と右側面に打点が確認できる。647は桑ノ木津留産黒曜石の剥片である。横長の剥片にフッシャーが多くみられる。裏面は下端部からの剥離と左側縁からの打点が確認できる。

650は腹面からの二次加工が施される。651はハリ賀安山岩の剥片で、上側面に素材面を残し、両側縁に剥離痕がみられる。652は水晶の剥片である。両側面は裏面

が残り、上端部と左側縁にわずかに剥離痕がみられる。653は厚みのある頁岩の剥片である。断面は三角形状を呈し、裏面の上端部から剥離によって剥がれている。

654・660・663は楔形石器。655・656は石錐である。654は桑ノ木津留産黒曜石を素材としており、上下端部に剥離を施している。655は日東産黒曜石を素材としており、先端部は鋭く調整され、剥離痕が一部残る。また、先端部にはドリルとして使用された跡跡が確認できる。656は角錐状の玉器を素材とした石錐である。やや厚みがあり、基部の一部に剥離痕が残る。657は裏面の左側縁に剥離痕が残る。658・659はチャートを素材としている。剥離痕は上端部に認められる。660は腰岳産黒曜石を素材としたものである。上下端部に微細な剥離痕がみられる。上下には明瞭な潰れが観察される。661は上端部と側縁部に剥離が施される。662はチャートを素材としたもので、右側縁部に腹面から二次加工が施される。663はチャートを素材としており、周縁に剥離痕が残る。厚さ1cm程の剥片に周囲から剥離が行われる。亀甲状の形状を呈する。積極的に刃部形成を行なうような調整剥離はみられないが、部分的に微細剥離痕を含む細やかな剥離によって抉入部が形成される。664は上端部に腹面から急角度の二次加工が密に施される。素材は水晶である。665は断面三角形のものである。上端部と右側縁に剥離痕がみられる。666・667・668は針尾産黒曜石を素



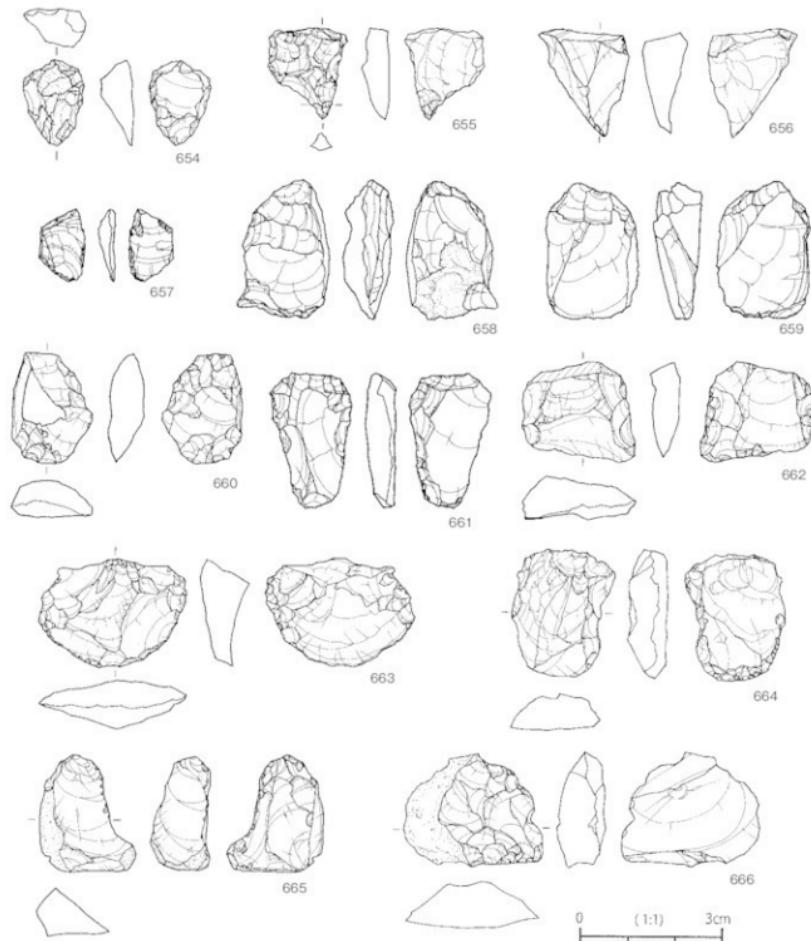
第127図 縄文時代の石器9

材としたものである。666は一部素材面を残して、中心部から周縁にかけて二次加工が細かく施される。

667は裏面の両側周縁に二次加工が多く施される。668は両面に腹面からの二次加工が施され、裏面の左側縁に剥離痕が残る。669はハリ賀安山岩を素材としたものである。下側縁に連続的な剥離が緻密に施され、上側

縁にも剥離痕が残る。これらは搔器として使用された可能性が考えられるものである。

670~686は削器と考えられるものである。670はハリ賀安山岩を素材とし、上端部に剥離痕が残る。671は桑ノ木津留産黒曜石を素材としている。左側縁は一部欠損している。672は三船産黒曜石で、先端部は微細な剥離

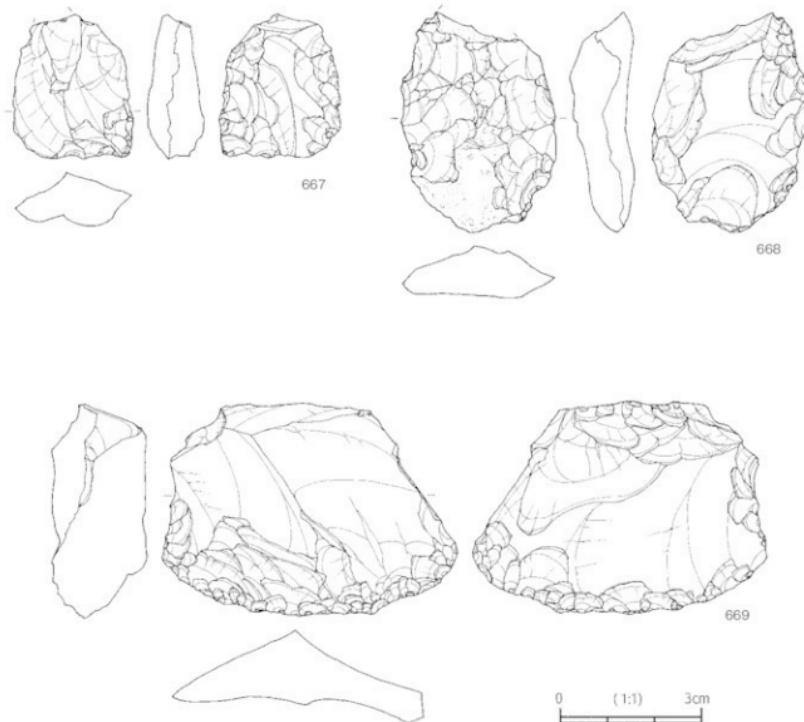


第128図 縄文時代の石器10

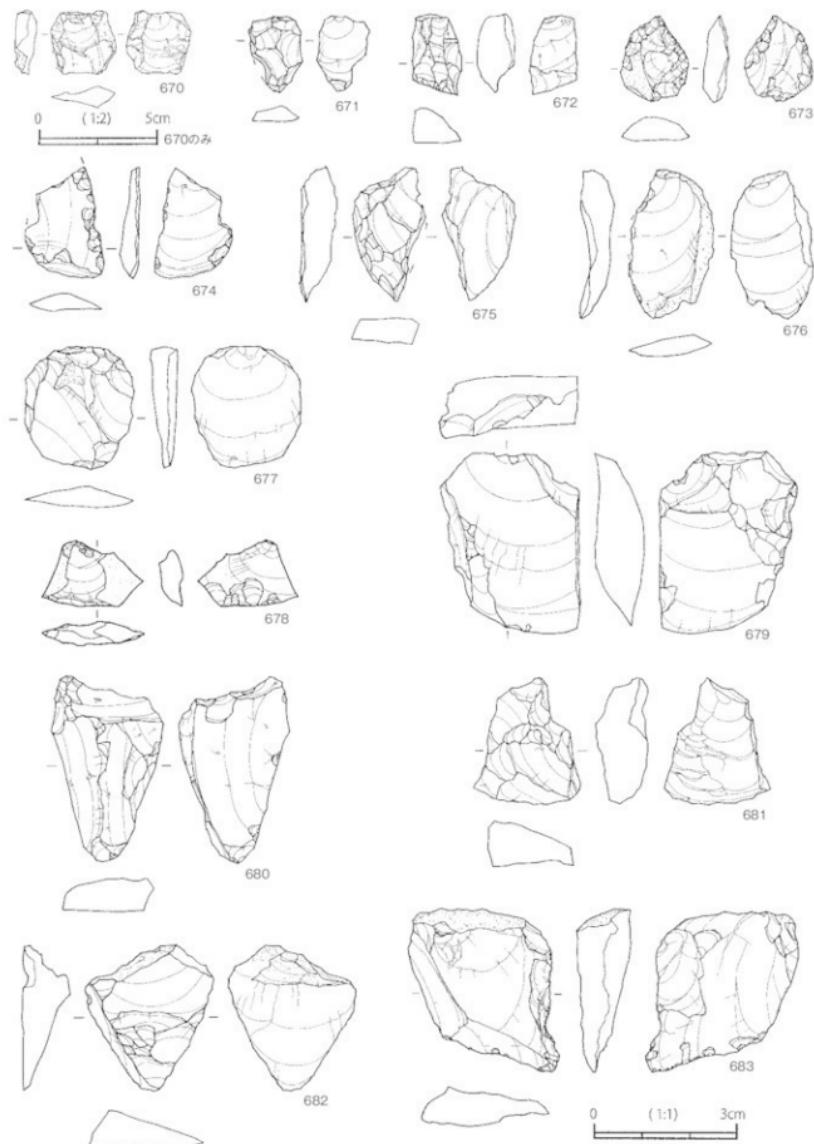
によって尖らせている。673は水晶を素材としたもので、周縁に微細剥離痕が多く残る。一部に自然面を残す。674は腰岳産黒曜石を素材とし、右側縁に剥離痕がみられる。上側面は欠損している。675は左側縁に剥離痕が残る。676は針尾産黒曜石で、側面に縦面を残すものである。断面は薄く剥がれている。677はハリ賀安山岩を素材とし、上端部に剥離痕がみられる。下側縁は鋭く刃部を形成している。678はやや小さめの針尾産黒曜石の削器である。刃部に連続的な剥離痕が確認できる。679はハリ賀安山岩の削器である。断面形状は先端部が鋭く尖り、裏面の左側縁は打点が確認できる。680は珪質頁岩を素材とする綫長剥片に腹面からの二次加工がみられる。681は水晶を素材としており、剥離痕はほとんどみられなかつた。683は中形でやや厚めのものである。右側縁に剥離痕が確認できる。

682・684・686はハリ賀安山岩の削器である。上側面に打点と剥離痕が確認できる。685は日東産黒曜石の削器で、右側縁に微細剥離痕が確認できる。686は大きめの削器で表の周縁は剥離が多く施される。右側縁に集中して微細剥離痕が残る。剥離の凹凸がはっきりしているため、搔器としても使用された可能性がある。

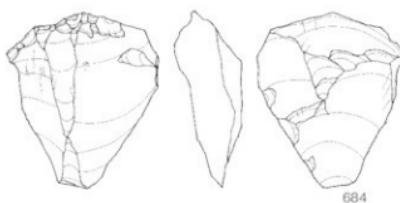
687は表の右側縁から腹面にかけて二次加工が施される。688は右側縁に表・裏から剥離痕が確認できる。薄い剥片を利用したものと思われる。689は右側縁に刃部が形成される。細かく欠けているが、鋭い刃部となっている。削器として使用された可能性がある。690はホルンフェルスを素材としたものである。綫長剥片を利用したもので、右側縁に剥離痕が残る。断面は薄く形成される。691は右側縁と左側縁に剥離痕が一部残る。692は下側面を欠損しているが、左側縁は尖るように剥離され



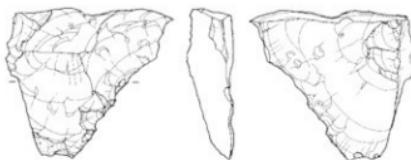
第129図 縄文時代の石器 11



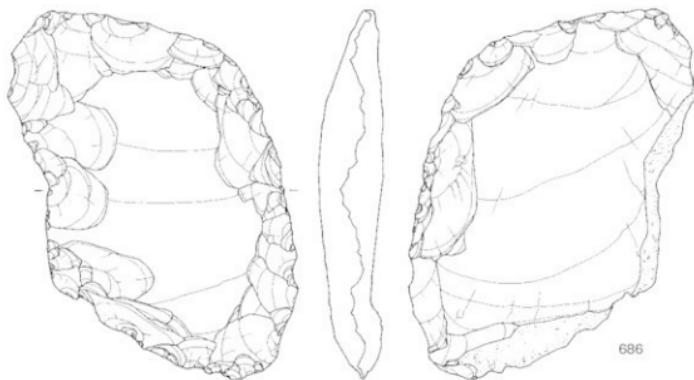
第130図 縄文時代の石器12



684



685



686



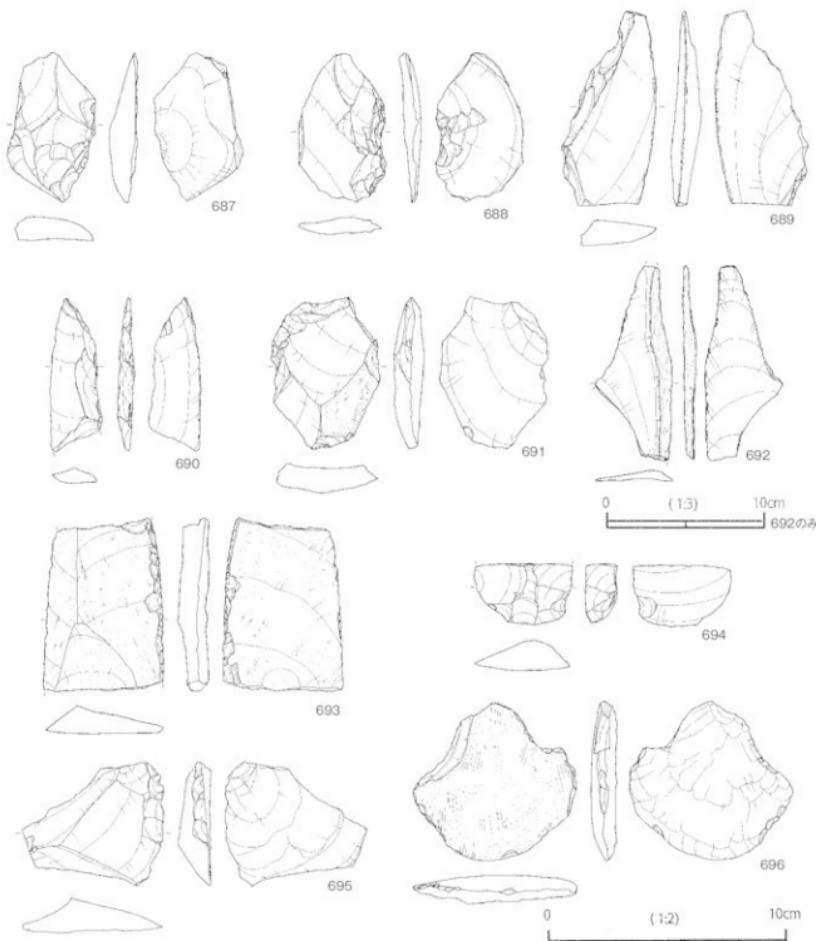
第131図 縄文時代の石器13

ており、削器として使用された可能性がある。693は凝灰岩を素材としたものである。右側縁の表・裏に連続的な剥離痕が観察される。694・695は断面に剥離痕が残り、下側面は刃部が形成されている。695は右側縁に二次加工が施され、やや大きめの連続的な剥離痕が残る。搔器として使用された可能性がある。696は薄く剥がれた繭を磨製石斧として転用したものである。括部と刃部

にわずかに剥離痕が残り、表は擦痕が確認できる。

砾石器（第133図 697～702）

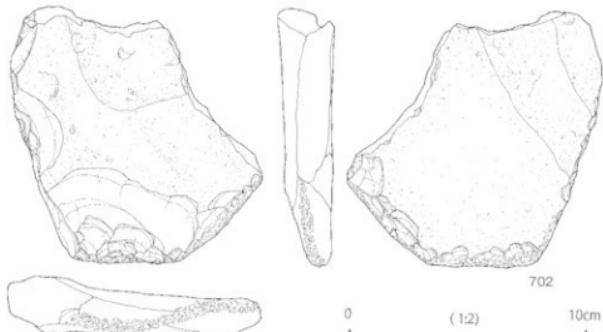
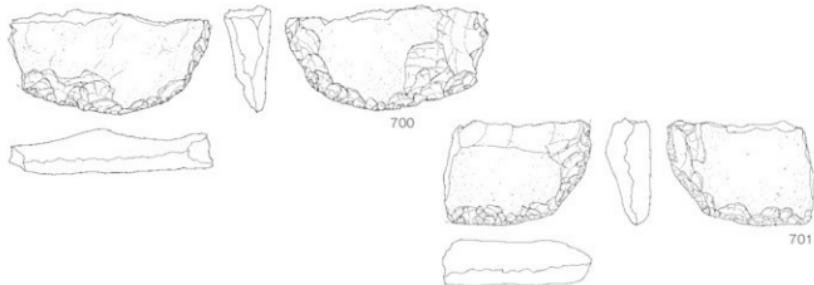
697～702は素材面をそのままで、下側縁に調整剥離を施すものである。699は断面が薄く、上側縁と下側面に剥離痕が確認できる。700は表に二次加工が施されている。701・702は剥離痕と敲打痕が残っており、両方に使用されたと思われる。安山岩製のもので、手のひらに収



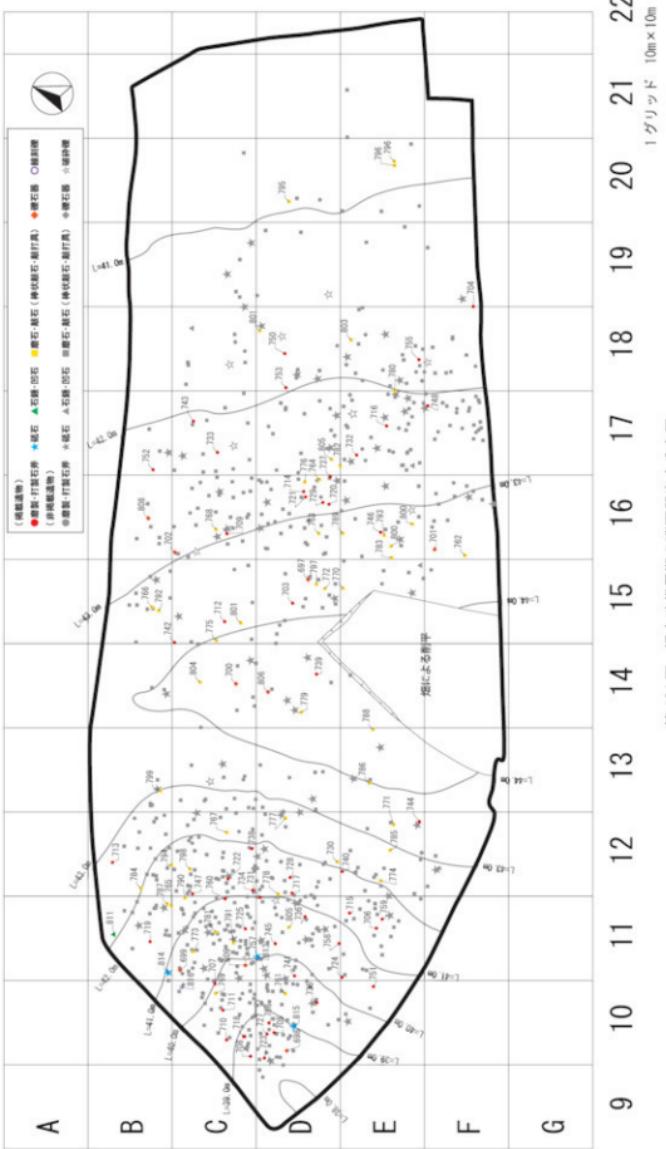
第132図 縄文時代の石器 14



0 (1:3) 10cm



第133図 縄文時代の石器15



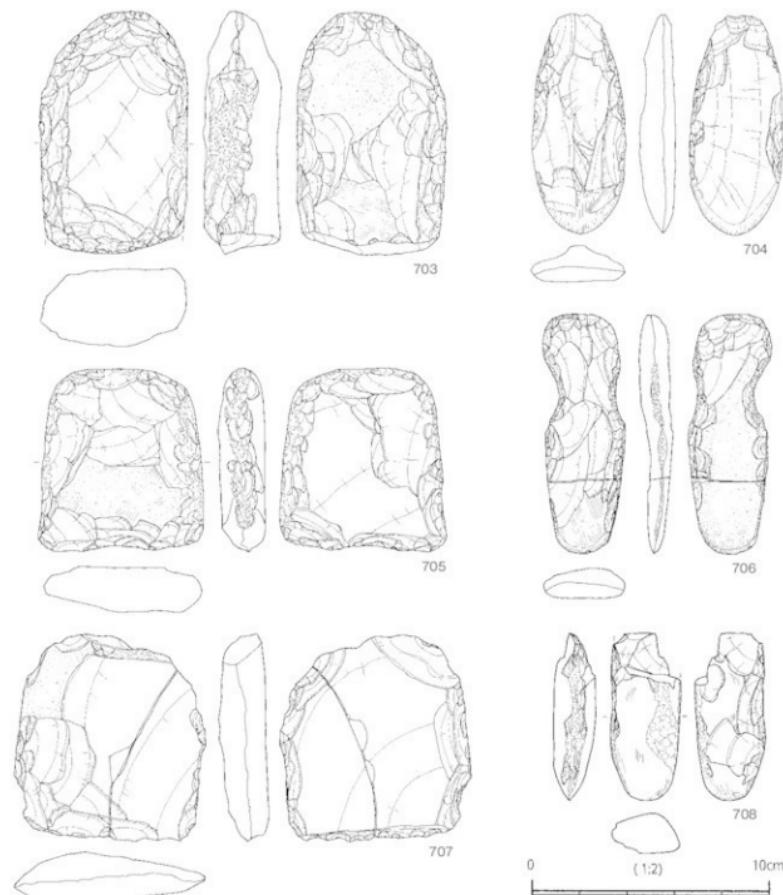
第134図 総文時代早期の礫石器出土分布図

まる大きさである。下側縁の敲打痕が多く確認できた。

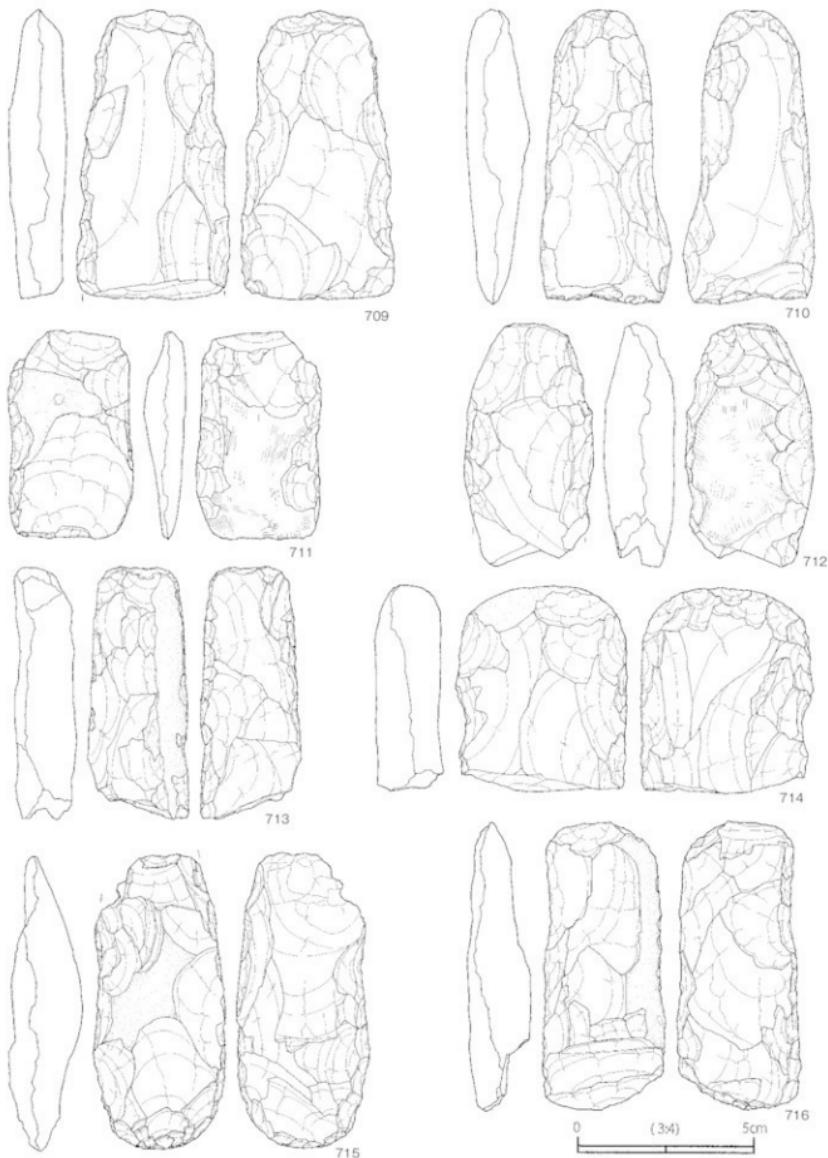
石斧（第135～142図 703～760）

703の素材はホルンフェルスで、厚みのある打製石斧である。腹部から下は破断している。頭部は丸く整形され、二次加工が施されている。右側縁には敲打痕が残り、擦り減りにより平坦を成す。裏面は一部研磨が施されている。704もホルンフェルスの素材で、大きさはやや小さく、横長剥片を利用したものである。刃部は研磨により鋭く尖っている。刃部のみ研磨を施す打製石斧であ

る。頭部や周縁も剥離がみられる。表面は研磨された刃部に剥離が施されていることから、二次加工を行い再利用された可能性がある。705は703と同様に厚みと幅がある。頭部は四角い形状で細かい加工により剥離面が多く角がない。また、頭部や周縁には敲打痕が多くみられる。706の腹部上には、木の柄などに結びつけるための括部が作出される。頭部や周縁は細かい剥離痕や敲打痕が残る。刃部は研磨が施され、薄く形成される。707も幅のある石斧で、腹部から下は破断しているが、二次加



第135図 繩文時代の石器 16



第136図 縄文時代の石器 17

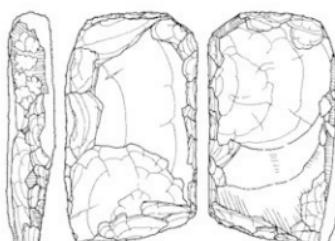
工によって刃部が作出されている。頭部は一部欠損している。刃部や周縁の剥離痕が少なく、刃部の鋒さが甘いため加工途中の未成品の可能性がある。708は706と大きさや形状が類似している。頭部が欠損しているが、両縁には敲打痕、腹部には擦痕が残る。

709~716はホルンフェルスを素材としたものである。709は横長剥片の周縁に剥離が多く施される。710も同様に上側縁は丸く形成され、丁寧に剥離される。表面にわずかに擦痕が残る。711・712はやや小さく、周縁が剥離によって丸みを帯びる形状である。自然面には擦痕が確認できる。715は下側縁に集中して剥離痕が残り、先端が尖る刃部を作出している。716も同様に周縁に剥離痕を多く施したものである。

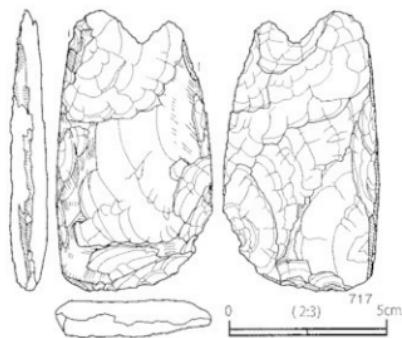
717は横長剥片に入念な二次加工を施し、周縁に剥離痕が残る。718・719は表裏・断面に擦痕がみられ、周縁の剥離痕が明瞭である。720・721はホルンフェルスの横

長剥片を利用した打製石斧である。右側縁や頭部に剥離面が残り、左側縁に打点が多く残る。刃部の断面は薄く尖る形状である。

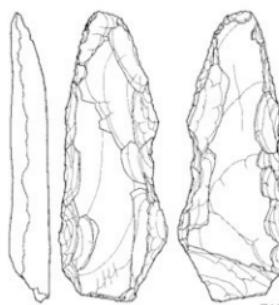
722は表裏に自然面を残し、右側縁に細かい剥離が施される。断面に厚みがある。724は表面に施された大き



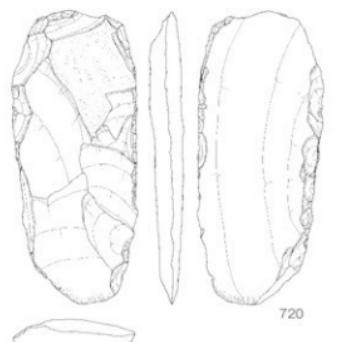
718



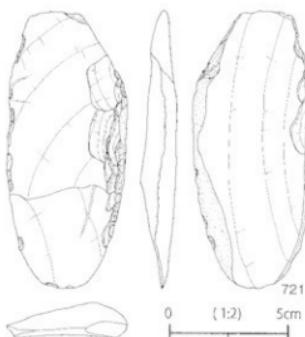
0 (2:3) 5cm
717



719

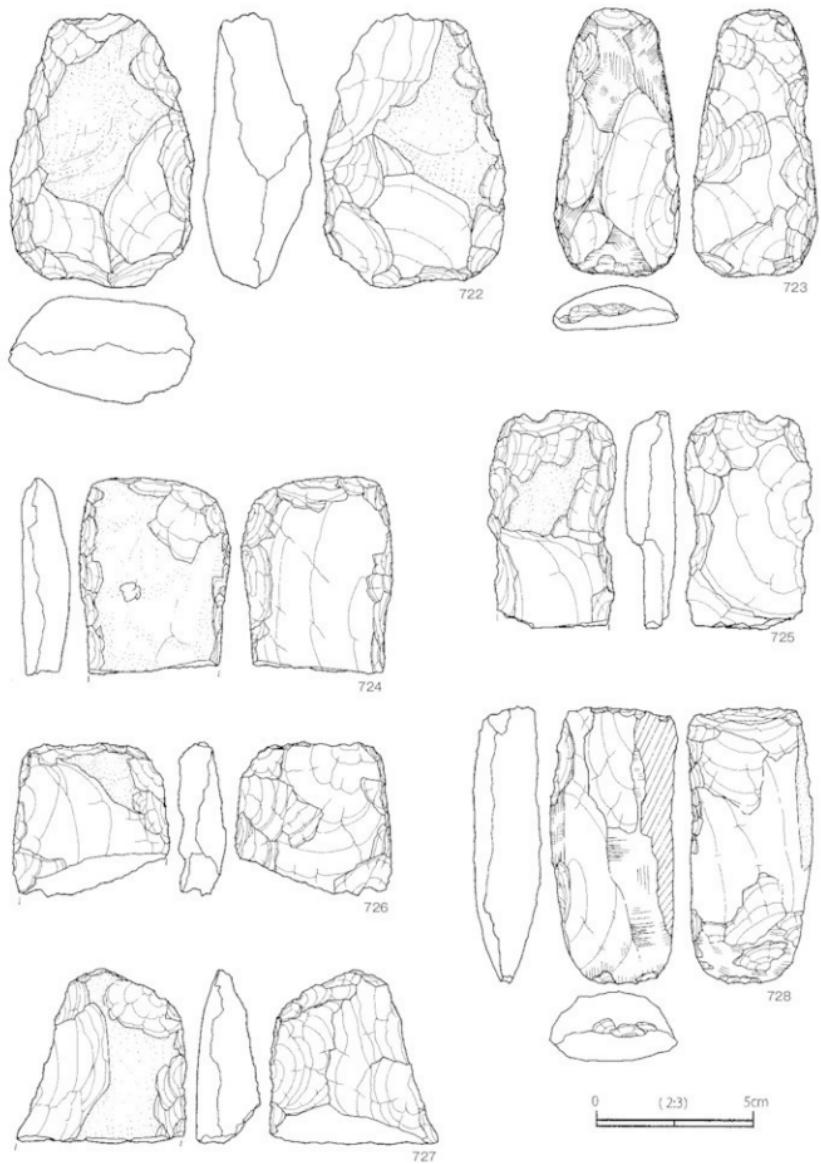


720

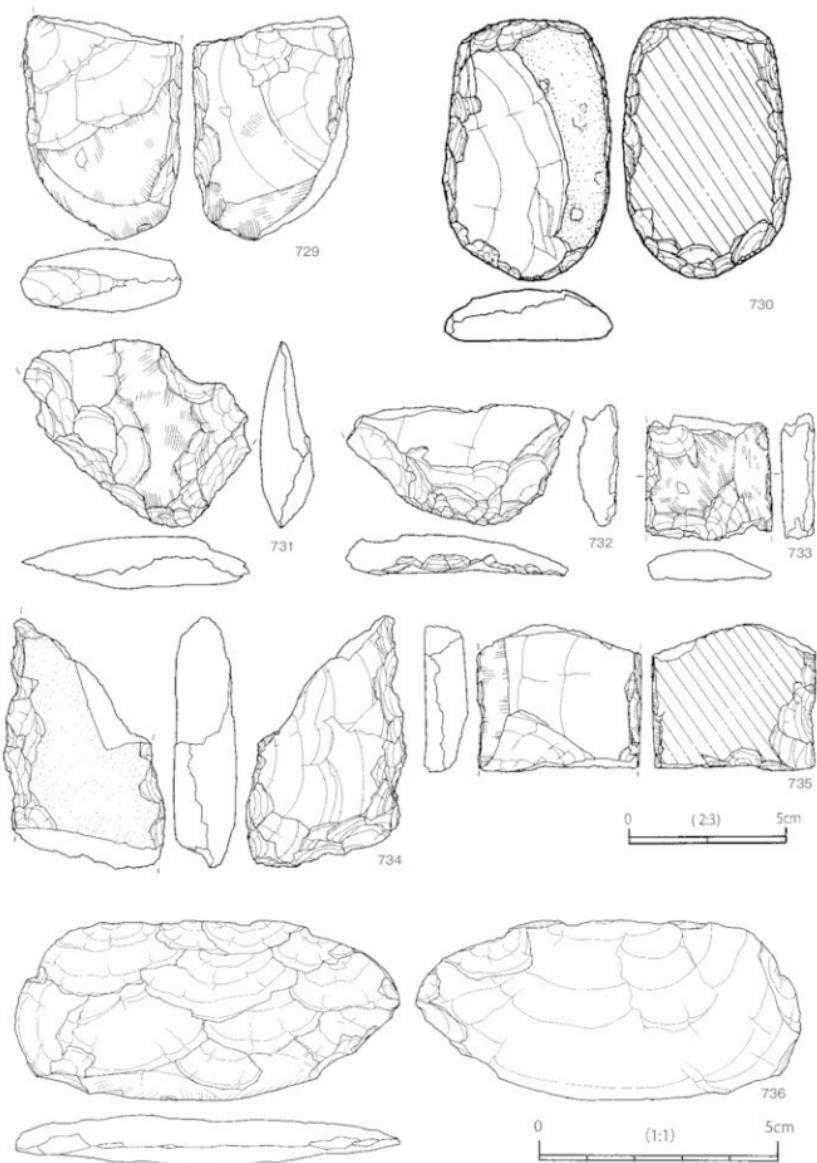


0 (1:2) 5cm
721

第137図 縄文時代の石器 18



第138図 縄文時代の石器19



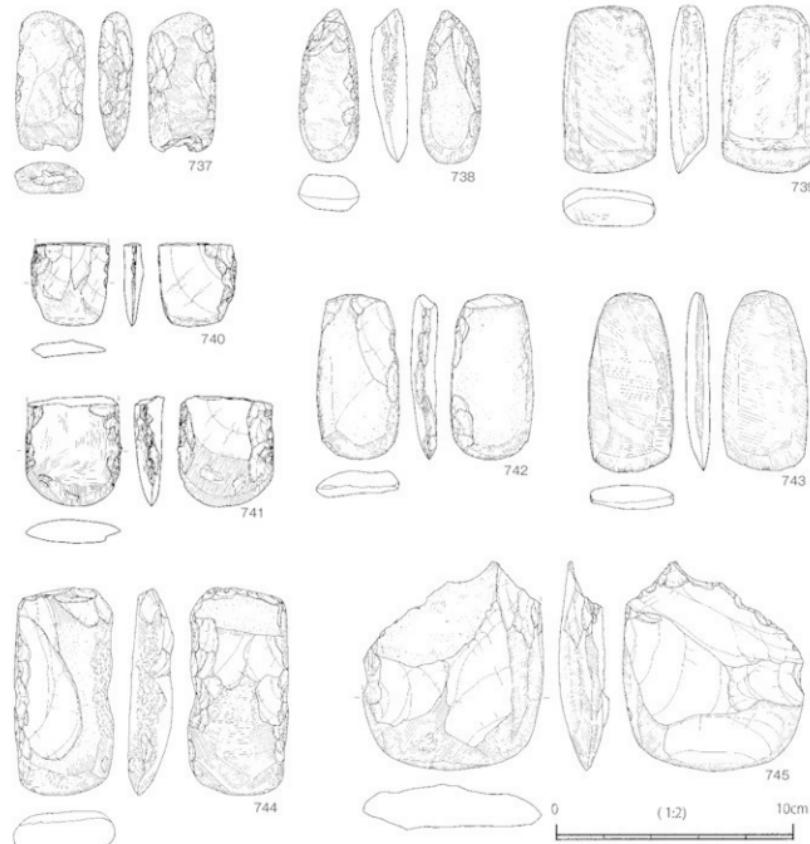
第139図 縄文時代の石器 20

な剥離により断面が剥がれている。724～727の周縁は丸みを帯びるように剥離が施されている。

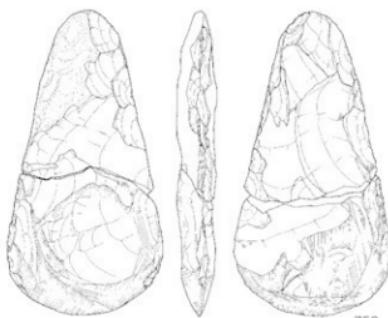
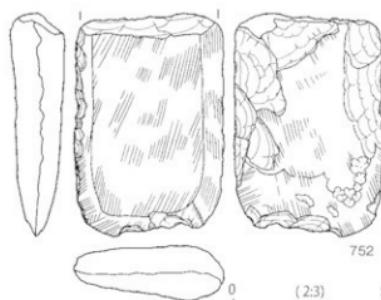
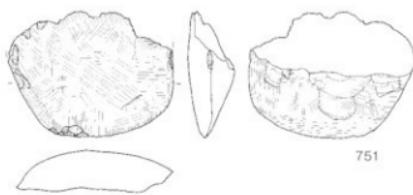
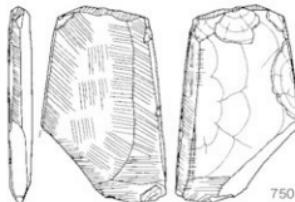
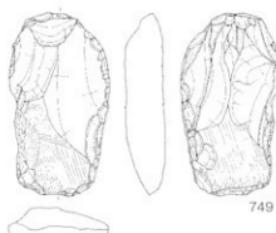
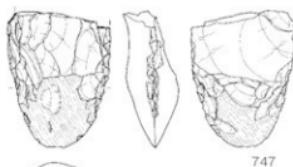
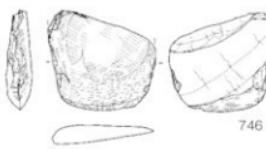
729～736は磨製石斧・打製石斧に二次加工を施したものである。729は石斧の刃部片である。表裏に擦痕が確認でき、側縁部に剥離痕が残る。730は周縁に丁寧に剥離が施される。敲打具と思われる。731・732は石斧の刃部に二次加工が施されたものである。

737は刃部が欠けており、両側縁の剥離面は大きい。丸い頭部は素材面が残り、刃部は鋭く尖る。比較的小さい製品である。738は小さく継長の形状で、刃部と表面を研磨し、両側縁は敲打痕が残る。739は表裏・両側縁

ともに入念な研磨が施されている。刃部は鋭く断面は扁平な形状を呈する。両面と側面の境に明瞭な棱が観察できる。740・741は頭部が欠損した刃部である。741は左側縁に打点があり、刃部にかけては鋭く仕上げている。表裏に研磨が確認できる。742は743と形状や大きさが類似している。刃部と左側縁に細かく研磨が残る。743はハリ貫安山岩を素材とする磨製石斧である。表裏及び両側縁は丁寧な研磨により加工されている。断面形状も薄く安定している。744はホルンフェルスを素材としている。全体の形状は739に近く、表面に大きな剥離面が残り、右側縁に敲打痕がみられる。745は表裏・両側縁



第140図 縄文時代の石器 21



0 (2:3) 5cm 750-752

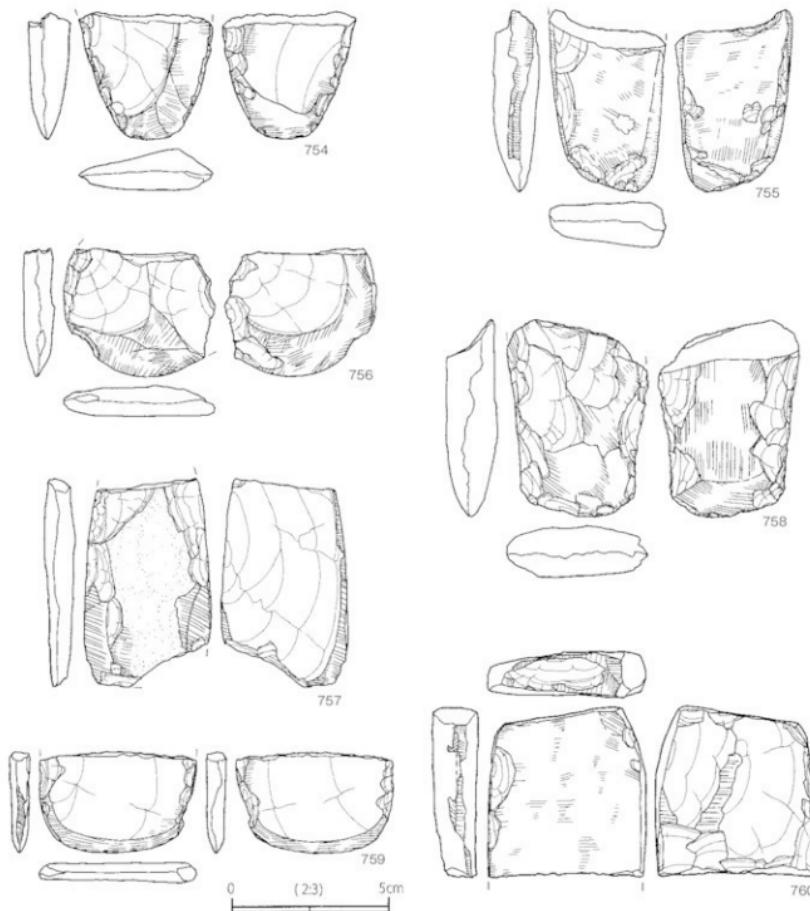
0 (1:2) 10cm

第141図 縄文時代の石器 22

に研磨が施されているが、使用後の剥離面が多い。表に一部敲打痕がみられ、破断した裏面に剥離痕がみられることから二次加工して再利用されたものと考えられる。

746は磨製石斧の刃部である。表面に研磨が施され、裏面は大きな剥離面が残る。747はホルンフェルスを素材とするもので、両側縁に剥離痕が残る。748はホルンフェルスを素材としたやや大きめのものである。敲打痕は両側縁にみられ、裏面はほとんど剥離面である。749は頭部の一部に素材面を残し、表裏に研磨が確認できる

が、刃部は欠損している。750はやや大きめの形状で、表面と断面に擦痕が多くみられる。裏面に剥離痕が残る。751は頁岩を素材とする刃部である。断面形状は739や745と類似しており、表裏に丁寧な研磨を施し、鋭い刃部を作出している。752は左側縁に連続的な調整剥離がみられる。刃部はわずかに剥離痕が残る。753は頁岩製の握形の磨製石斧である。表裏ともに大きく剥離されている。側縁は大きい剥離痕が残り、刃部の形状は丸く、丁寧に研磨して作出されている。



第142図 繩文時代の石器 23

754~759は刃部周縁に剥離痕が残る。表裏に擦痕が多く残り、局部磨製石斧に再加工をしたものと思われる。757は表に自然面を残し、周縁に剥離が施される。760は上部と刃部を欠損しており、表・上側面・左側縁に擦痕が残る。

磨石・敲石（第143~148図 761~805）

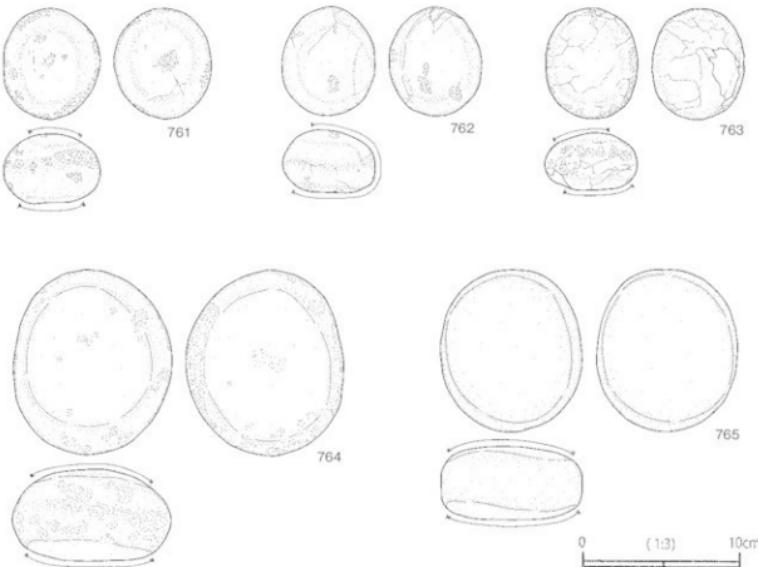
761~763は砂岩を素材とした長径6.9cmの小さな円形の磨石である。表裏に磨面が観察される。わずかに敲打痕も残る。764~765は砂岩を素材としたもので長径11cm程度である。764は右側面と下側面に敲打痕が多いが、765は敲打痕がなく表裏に平坦な磨面が形成されている。

766~767は小さな楕円形で、下側面に敲打痕が残る。768は砂岩を素材としており、下側面から右側面にかけて敲打痕が残っている。769は凝灰岩を素材とする磨石で、断面は丸くボールのような形状である。770は敲打痕がなく、磨面が残っている。771はやや大きめのもので、わずかに敲打痕が残る。772は表の中心部と裏面に平滑面が形成される。これらは砂岩を素材としている。773は裏面に平滑面が形成されている。774は花崗岩を素材とする磨・敲石で、比較的平坦な磨面が形成されている。側面には敲打痕が顕著に観察できる。775~776は敲石で、775は表裏面の中心部と側縁部に敲打痕が残っている。776は不定形で表裏面と周縁部にやや大きめの

敲打痕が明瞭に残る。

777は安山岩を素材としたものである。下側面に敲打痕が集中する楕円形を呈する。裏面に磨面がみられる。778は花崗岩を素材とするものである。下側面に敲打痕が確認でき、表裏に平滑面が形成されている。779は砂岩の磨石である。表裏・側面の敲打痕はみられなかった。780は花崗岩を素材とした磨・敲石である。頭部から左側面は敲打痕がわずかにみられる。781は砂岩を素材としており、上側面と下側面の一部が欠損しているが、裏面に平滑面がみられる。782は表裏・両側面に擦痕があり、磨面は光沢がみられる。783は中心部に大きな敲打痕が確認できる。784は断面に厚みがあるが、幅は狭く、縱に伸びる形態である。785~786は砂岩を素材とした磨・敲石で、大きさや形状が類似したものである。786は完形で、中心部や下側面に敲打痕が残る。785はやや厚みがあるが、表裏の平滑面がはっきりしている。787は安山岩を素材とした磨石である。表裏全面に擦痕がみられ、磨面は光沢を保っている。

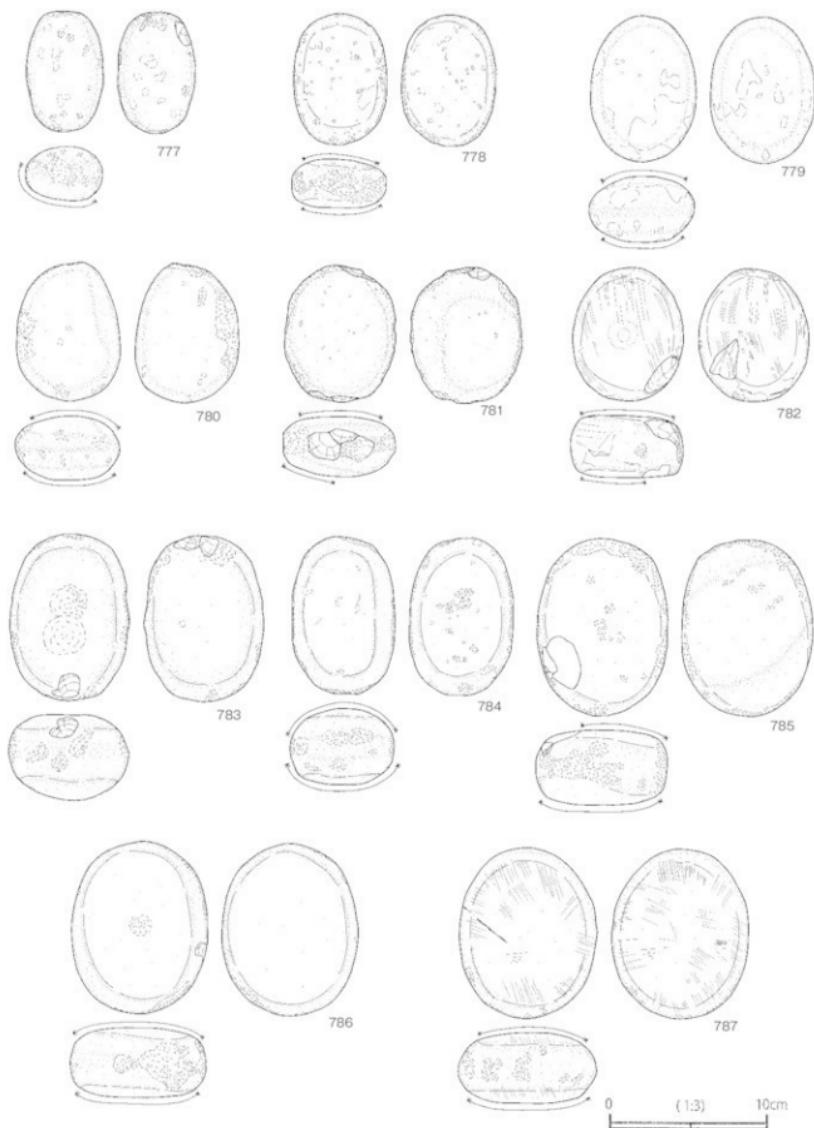
788は花崗岩を素材としたもので、磨面は平滑面を成しており、上下側面に敲打痕が残る。789は凝灰岩を素材とする磨石で、厚みがあり重い。表裏の中心部は敲打による擦り減りが確認できる。上下側面・左側面は敲打痕が集中しており平坦面を成している。790は縱に伸び



第143図 縄文時代の石器 24



第144図 縄文時代の石器 25



第145図 縄文時代の石器 26

る橢円形を呈し、表裏面にまばらな敲打痕がみられる。下側面にも敲打痕が残っている。791は安山岩を素材とした磨・敲石である。表裏に擦痕がみられ敲打痕も残る。792・795は花崗岩を素材とするもので、下側面に敲打痕が多く残る。793は砂岩を素材とする磨石である。裏面を欠損するが、両面とも磨面が残る。上下側面は敲打痕がみられ、中心部は擦り減りによって凹んでいる。794は表裏を磨面として下側面に敲打痕が集中している。

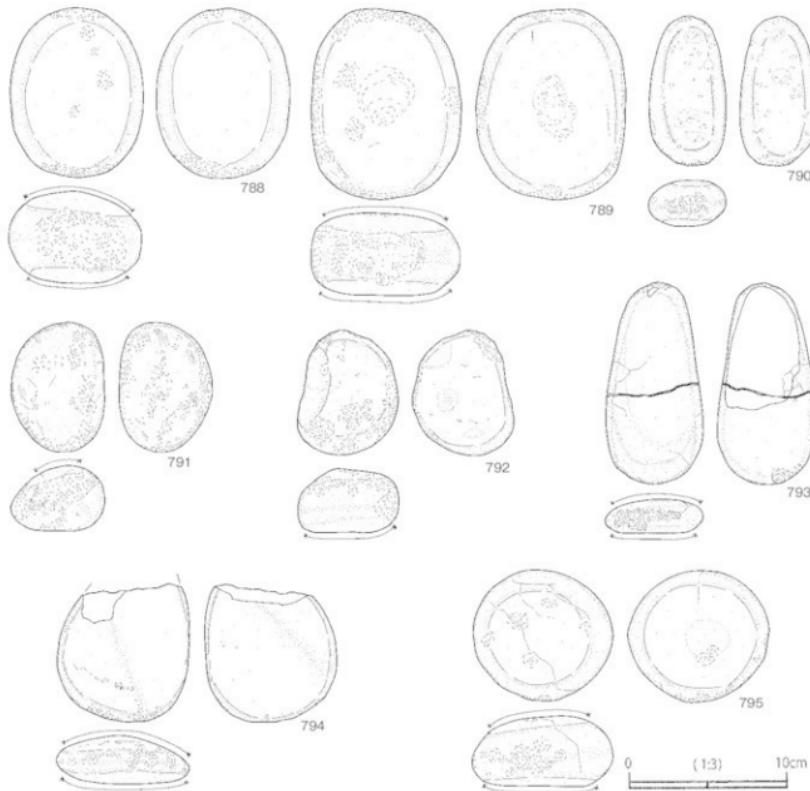
796は右側面と下側面に敲打痕が残る。797は花崗岩を素材とした磨・敲石である。上下が欠損しており、右側面にわずかに敲打痕が残る。798は右側面から下側面、左側面にかけて敲打痕が集中している。799は右側面に敲打痕が集中しており、左側面にはみられないため右側面を主に使用していたと思われる。800・801は敲打

痕がない。表面に擦痕があり、磨面に光沢がみられる。802は砂岩を素材とした磨・敲石である。長径19.6cm程度に伸びる形状である。上下側面に敲打痕が残る。

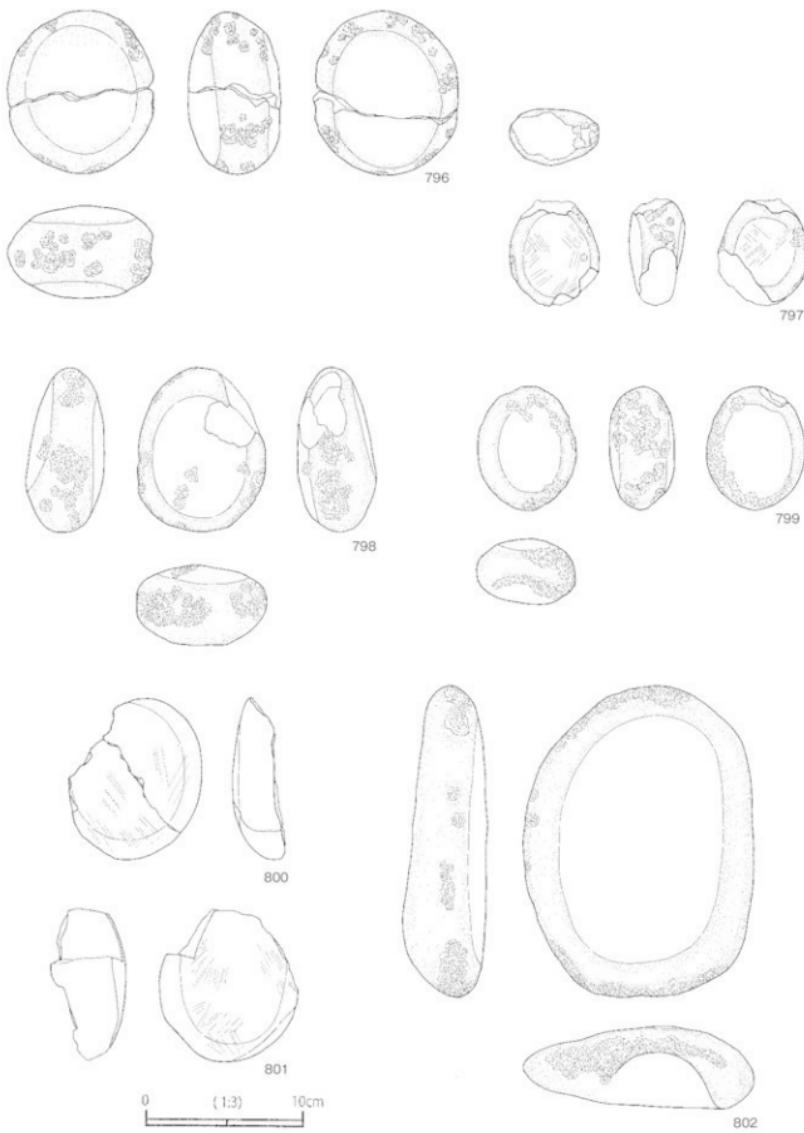
803・804は中心から下を欠損しているが、上側面に敲打痕が多く残る。805は砂岩を素材とした磨・敲石で、表面は擦痕が多く光沢がある。左側面に敲打痕が残る。裸器(第148・149図 806~809)

806~809は磨石や敲石等に使用される繩が加工されたものである。806は安山岩を素材としたもので、素材面の一部に剥離が施される。807は砂岩製で、連続的な剥離痕が一部みられる。808は表面に擦痕が確認でき、右側面から下側面に敲打痕が確認できる。磨・敲石を加工したものと思われ、裏面にもわずかに剥離痕が残る。

809は砂岩製の裸石器である。表面は擦痕の擦面がみ



第146図 縄文時代の石器 27



第147図 縄文時代の石器 28

られ、下側面に剥離痕と敲打痕が確認できる。

石錘（第149図 810~812）

810~812は安山岩を素材とした石錘である。811・812は橢円形状を呈し、両側面に紐掛部として使用された凹みがあり、表裏ともに磨面がみられる。810はやや小さめ、断面に厚みがある。両側面の凹みは少ない。

砥石（第149図 813~815）

813~815は砂岩を素材とした砥石である。813は両側面

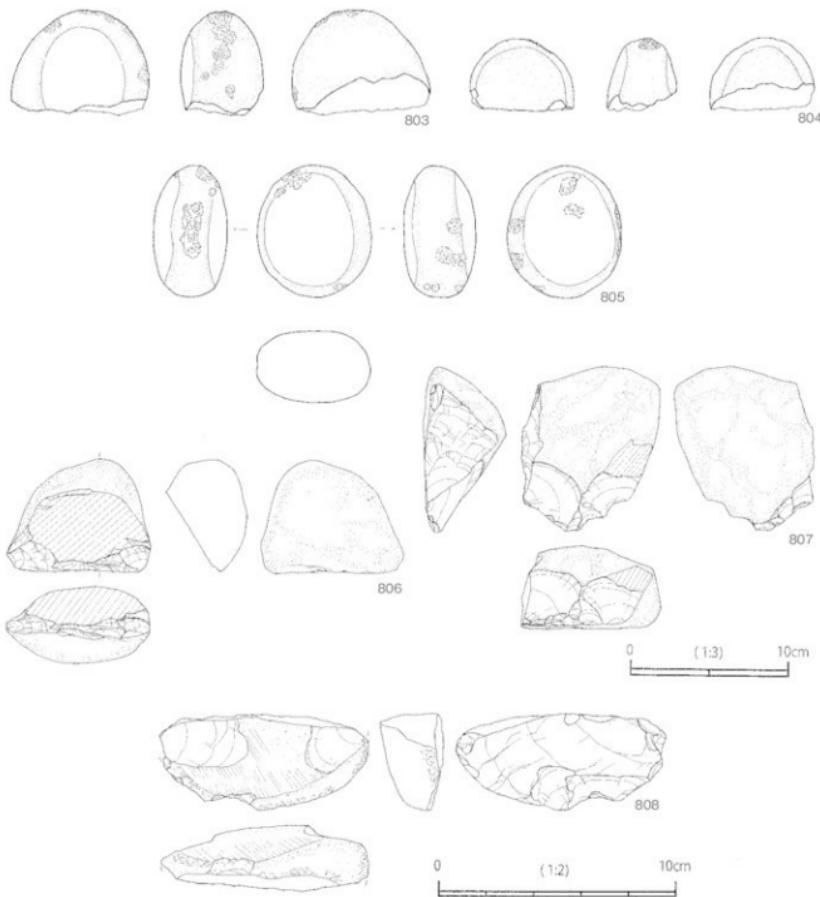
面ともに磨面があり、右側面の一部に敲打痕がみられる。

814は磨面の中心部が丸く凹んでいる。腹部で破断して

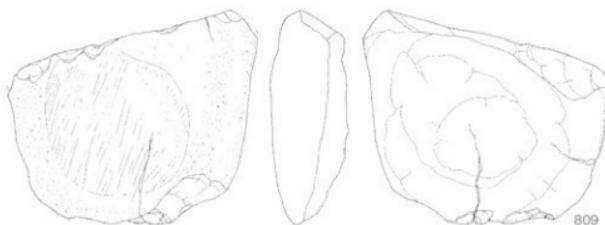
おり、表面の一部が被熱している。右側面と裏面に敲打痕が残っている。815は被熱により石が焼けている。表裏・両側面に磨面が明瞭に確認できる。断面は磨面の擦り減りにより中心部が凹んでいる。上側面と右側面は敲打痕が残る。

線刻礫（第149図 816）

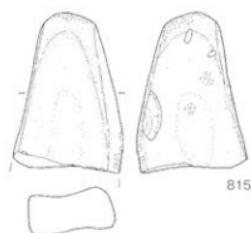
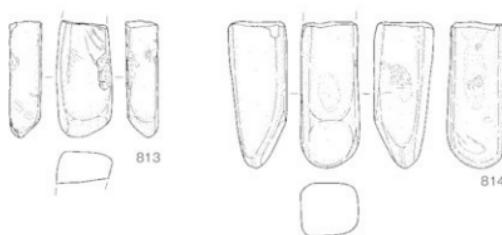
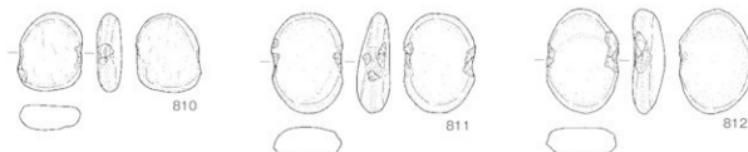
816は安山岩を素材とした線刻礫である。礫の縦方向に細い工具で線刻されている。表と両側面と上側面にも一部みられる。



第148図 縄文時代の石器 29



0 (1:2) 10cm



0 (1:3) 10cm

第149図 縄文時代の石器 30

第28表 繩文時代の石器観察表1

※()は推定

邦国番号	国歴番号	石種	石材	出土区	層位	長さ		幅		厚さ		取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)			
114	548	石頭	チャート	C-14	見	1.5	(1.5)	0.4	0.6	6061			
	549	石頭	チャート	D-14	見	(1.6)	1.8	0.3	0.7	6405			
	550	石頭	ob 錐形	D-17	覗	1.9	1.5	0.3	0.7	13307			
	551	石頭未成品	ob 日東	D-16	覗	1.8	1.8	5.0	1.4	11808			
	552	石頭	チャート	B-11	覗	(2.1)	(1.7)	0.4	1.0	10981			
	553	石頭	チャート	E-11	見	(1.6)	1.7	0.5	1.4	4523			
	554	石頭	ハリ黄安山岩	E-16	見	(1.6)	1.7	0.4	0.7	7833			
	555	石頭未成品	チャート	C-13	覗	(1.6)	(1.7)	0.4	1.0	1627			
	556	石頭	チャート	D-16	見	1.2	1.0	0.2	0.3	11879			
	557	石頭	チャート	D-17	覗	1.3	1.2	0.2	0.2	3773			
120	558	石頭	ob 壱ノ津留	D-11	見	1.3	1.0	0.2	0.2	4682			
	559	石頭未成品	ob 壱ノ津留	C-16	覗	1.2	(0.9)	0.3	0.3	7634			
	560	石頭	ob 錐形	D-15-16	覗	1.7	(1.5)	5.0	0.8	一絃			
	561	石頭	チャート	E-16	鉄土	1.5	1.5	0.3	0.6	一絃			
	562	石頭	チャート	C-17	覗	1.7	1.8	0.3	0.6	9496			
	563	石頭	ob 封尾	C-12	鍬	(1.6)	1.5	0.5	0.9	5953			
	564	石頭	(b) 錐形	B-12	覗	(2.0)	(1.8)	0.4	1.1	13052			
	565	石頭	チャート	F-17	見	(1.4)	1.4	0.3	0.5	4389			
	566	石頭	ob 三船	D-16	覗	2.0	2.3	0.5	1.4	13339			
	567	石頭	ob 壱ノ津留	C-17	覗	(1.2)	1.4	0.3	0.4	3485			
129	568	石頭	チャート	B-14	覗	2.0	1.7	0.3	0.7	一絃			
	569	石頭	ob 壱ノ津留	D-10	覗	1.9	(1.6)	0.3	0.6	9669			
	570	石頭	ob 壱ノ津留	C-17	鍬	(1.6)	(1.3)	0.3	0.4	5600			
	571	石頭未成品	ob 封尾	D-12	覗	(1.2)	(1.1)	0.2	0.2	4657			
	572	石頭	チャート	E-19	覗	2.0	1.3	0.2	0.6	1202			
	573	石頭	水晶	D-16	覗	(1.6)	(1.2)	0.4	0.6	11525			
	574	石頭	ハリ黄安山岩	D-18	覗	(1.8)	1.9	0.3	0.8	9521			
	575	石頭	鉄石	B-11	覗	(1.4)	(0.9)	0.3	0.3	12890			
	576	石頭	ハリ黄安山岩	C-14	見	3.0	1.7	0.5	2.0	8540			
	577	石頭	ハリ黄安山岩	C-19	覗	3.2	2.3	0.4	1.8	11662			
130	578	石頭未成品	チャート	D-14	鉄土	1.7	1.6	0.3	0.8	6454			
	579	石頭未成品	水晶	C-17	覗	1.7	(1.2)	0.2	0.5	12036			
	580	石頭未成品	チャート	D-14	見	1.8	(1.7)	0.4	1.1	7096			
	581	石頭	チャート	E-12	覗	2.0	(1.9)	0.4	1.3	6153			
	582	石頭	チャート	C-16	覗	1.9	1.7	0.4	0.9	7625			
	583	石頭	ハリ黄安山岩	D-13	覗	2.2	2.3	0.6	2.3	6188			
	584	石頭	チャート	D-20	覗	2.4	(1.7)	0.5	1.7	12105			
	585	石頭	チャート	B-13	鍬	(2.2)	(1.4)	0.4	0.9	1761			
	586	石頭	チャート	B-12	覗	2.3	(1.3)	0.4	0.7	13063			
	587	石頭	チャート	C-11	見	2.5	1.9	0.3	1.0	2998			
131	588	石頭	ハリ黄安山岩	F-16	覗	2.6	3.8	0.7	6.4	11860			
	589	石頭	桂貝貝殻	E-19	覗	3.6	(6.6)	0.8	12.4	11312			
	590	石核	ob 三船	C-13	覗	2.5	1.4	1.4	4.1	5143			
	591	石核	ob 三船	B-16	覗	2.6	2.5	1.3	4.6	13108			
	592	石核	ob 三船	D-17	鍬	1.5	1.6	1.5	2.6	9493			
	593	石核	ob 三船	D-16	見	2.6	2.9	1.2	7.3	10985			
	594	石核	ob 錐形	C-14	見	1.5	2.3	0.8	2.4	7144			
	595	石核	ob 錐形	C-11	覗	4.2	2.8	0.9	9.0	12841			
	596	石核	ob 壱ノ津留	C-10	見	3.9	2.6	1.5	13.0	10465			
	597	石核	ob 三船	E-16	見	(1.6)	1.6	0.9	1.8	4144			
132	598	石核	ob 錐形	E-17	見	3.1	3.1	1.5	7.6	4186			
	599	石核	ob 封尾	D-16	覗	(3.1)	(3.5)	1.6	11.0	12485			
	600	石核	ob 封尾	F-19	鍬	3.6	2.9	1.6	10.5	14279			
	601	石核	桂貝貝殻	C-12	覗	4.5	4.1	2.4	48.8	1337			
	602	石核	桂貝貝殻	B-13	見	3.4	3.9	1.5	13.1	7090			
	603	石核	ハリ黄安山岩	B-13	見	8.3	5.3	1.9	63.0	7051			
	604	石核	水晶	E-16	見	3.6	3.2	2.3	21.1	4094			
	605	石核	水晶	D-13	覗	5.6	4.9	2.9	58.1	一絃			
	606	石核	水晶	D-16	見	3.3	2.9	1.8	17.2	10590			
	607	石核	水晶	D-12	—	3.7	4.4	2.9	53.3	14521			
133	608	石核	水晶	D-14	見	3.3	2.0	1.7	11.3	6426			
	609	石核	水晶	D-13	覗	2.8	1.9	1.3	4.6	7072			
	610	石核	水晶	C-13	見	1.6	1.8	1.3	3.4	5150			
	611	石核	水晶	D-14	見	3.6	2.4	1.7	14.1	7105			
	612	石核	水晶	C-17	覗	2.6	2.9	1.8	9.4	11186			
	613	石核	水晶	C-16	覗	5.3	3.4	2.0	32.4	3249			
	614	石核	水晶	E-13	鍬	6.5	5.1	4.1	77.3	5052			

第29表 繩文時代の石器観察表2

※()は推定

群団番号	同梱番号	器種	石材	出土年	層位	長さ		幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
						(cm)	(cm)					
124	615	石核	水晶	D-12	鍬	2.3	4.6	1.3	10.5	8223		
	616	石核	ob 鋸尾	E-16	鍬	2.7	2.5	1.7	9.3	4140		
	617	石核	チート	D-11	鍬	2.5	3.1	1.8	8.2	5795		
	618	石核	ob 姦ノ木津留	B-16	鍬	3.7	(1.8)	1.1	4.3	13394		
	619	石核	チート	D-16	鍬	3.1	3.8	2.1	18.4	10546		
	620	石核	水晶	B-16	鍬	5.3	2.7	1.1	16.2	13693		
125	621	石核	ob 鋸尾	B-16	鍬	3.6	2.3	1.8	10.6	13393		
	622	調片石器	ob 日東	C-16	鍬	1.4	1.7	0.5	1.2	3065	二次加工の跡	
	623	調片石器	ob 姟ノ木津留	D-12	鍬	(1.5)	1.7	0.6	1.2	722	二次加工の跡	
	624	調片石器	チート	C-16	鍬	2.6	2.4	0.5	2.5	13372	二次加工の跡	
	625	調片石器	水晶	B-16	鍬	2.2	2.9	0.9	5.7	13421	二次加工の跡	
	626	調片石器	チート	B-16	鍬	2.6	3.0	0.7	5.3	13400	二次加工の跡	
	627	調片石器	眞羽	C-17	鍬	2.2	2.4	0.6	2.8	11197	二次加工の跡	
	628	調片石器	ob 鶴鳥	F-16	鍬	2.6	3.0	0.4	2.2	4414	二次加工の跡	
	629	調片石器	チート	C-14	鍬	(1.8)	(2.6)	1.0	1.0	6487	二次加工の跡	
	630	調片石器	ob 鋸尾	B-16	鍬	1.8	4.2	1.0	7.6	13397	二次加工の跡	
126	631	調片石器	チート	D-14	鍬	2.5	2.3	0.8	4.5	7148	二次加工の跡	
	632	調片石器	八ノリ菅原山岩	D-10	鍬	2.8	2.4	0.7	4.2	9022	二次加工の跡	
	633	調片石器	チート	D-15	鍬	2.6	3.1	1.0	5.6	13608	二次加工の跡	
	634	調片石器	ob 姟ノ木津留	D-9	鍬	(2.1)	(1.1)	0.4	0.8	5036		
	635	調片石器	水晶	C-17	鍬	3.2	1.1	0.8	2.6	9513		
	636	調片石器	ob 三船	C-14	鍬	(2.2)	(1.2)	0.6	1.1	6466		
	637	調片石器	水晶	E-18	鍬	2.9	1.4	0.6	2.8	13358		
	638	調片石器	チート	D-14	鍬	2.9	1.3	1.0	3.7	6417		
	639	調片石器	チート	D-10	鍬	4.1	1.9	1.1	8.6	5784		
	640	調片石器	チート	C-14	鍬	3.3	1.5	0.7	3.3	8517		
127	641	調片石器	チート	D-13	鍬	3.6	1.5	1.0	6.3	1536		
	642	調片石器	ob 鋸尾	D-12	鍬	3.7	1.6	0.7	4.4	9494		
	643	調片石器	ob 日東	B-16	鍬	4.8	1.6	1.1	6.1	13430		
	644	調片石器	チート	B-16	鍬	4.6	1.7	0.8	7.9	13426		
	645	調片石器	ob 鋸尾	E-16	鍬	3.7	1.9	1.0	5.2	4119	二次加工の跡	
	646	調片石器	ob 鶴鳥	C-16	鍬	3.2	1.2	0.6	1.9	12604	二次加工の跡	
	647	調片石器	ob 姟ノ木津留	D-13	鍬	3.6	1.5	0.7	3.5	11333	二次加工の跡	
	648	調片石器	チート	C-13	鍬	4.3	2.0	0.7	6.7	1651		
	649	調片石器	ob 鋸尾	E-12	鍬	6.6	(2.0)	1.5	17.5	12313		
	650	調片石器	チート	D-14	鍬	2.6	2.1	1.2	7.1	8496	二次加工の跡	
128	651	調片石器	八ノリ菅原山岩	B-15	鍬	3.0	2.9	0.9	10.4	13696		
	652	調片石器	水晶	B-17	鍬	(3.7)	3.8	1.2	16.3	3493		
	653	調片石器	眞羽	C-12	鍬	2.8	3.8	1.7	13.2	1858		
	654	調片石器	ob 姟ノ木津留	C-21	鍬	1.8	1.3	0.8	1.3	14197	柳形石器	
	655	調片石器	ob 日東	C-17	鍬	1.9	1.7	0.6	2.0	11196	石錐	
	656	調片石器	玉頭	D-13	鍬	2.3	1.9	0.9	3.6	-	石錐	
	657	調片石器	ob 姟ノ木津留	C-14	鍬	1.5	0.9	0.3	0.3	6527	二次加工の跡	
	658	調片石器	チート	D-15	鍬	2.9	1.9	1.0	5.6	5811	柳形石器	
	659	調片石器	チート	C-16	鍬	2.9	1.9	1.0	5.7	3364	柳形石器	
	660	調片石器	ob 健脚	C-11	鍬	2.3	1.7	0.8	2.9	12654	使用した跡	
129	661	調片石器	チート	D-12	-	2.8	1.7	0.6	3.0	14523	使用した跡	
	662	調片石器	チート	D-14	鍬	2.1	2.4	0.9	4.4	8482	錫器	
	663	調片石器	チート	D-13	鍬	2.2	3.1	1.0	5.9	5425	柳形石器	
	664	調片石器	水晶	E-15	鍬	2.6	2.1	0.8	5.2	4049	錫器	
	665	調片石器	ob 姟ノ木津留	D-14	鍬	2.4	2.0	1.2	4.1	10472	錫器	
	666	調片石器	ob 鋸尾	E-16	鍬	2.4	2.9	1.0	6.4	5359	錫器	
	667	調片石器	ob 鋸尾	B-16	鍬	(3.0)	2.5	1.2	7.6	13809	錫器	
	668	調片石器	ob 鋸尾	D-15	鍬	(4.0)	3.3	1.3	17.5	10325	錫器	
	669	調片石器	八ノリ菅原山岩	D-14	鍬	4.4	6.2	2.0	40.4	6371	錫器	
130	670	調片石器	八ノリ菅原山岩	B-16	鍬	2.7	2.7	0.9	5.9	13811	錫器	
	671	調片石器	ob 姟ノ木津留	D-10	鍬	1.6	1.2	0.3	0.4	4918	錫器	
	672	調片石器	ob 三船	F-12	鍬	1.7	1.0	0.7	1.3	14300	錫器	
	673	調片石器	水晶	C-16	鍬	1.8	1.4	0.5	1.4	11154	錫器	
	674	調片石器	ob 健脚	E-14	鍬	(2.3)	1.7	0.4	1.2	7079	錫器	
	675	調片石器	水晶	E-18	鍬	2.8	(1.5)	0.8	2.7	12372	錫器	
	676	調片石器	ob 鋸尾	D-18	鍬	3.1	(1.7)	0.7	2.6	7826	錫器	
	677	調片石器	八ノリ菅原山岩	D-14	鍬	2.5	2.3	0.6	2.4	6380	錫器	
	678	調片石器	ob 鋸尾	C-17	鍬	1.4	2.1	0.5	0.9	9515	錫器	
	679	調片石器	八ノリ菅原山岩	E-14	鍬	3.8	2.9	1.3	15.3	7081	錫器	
680	681	調片石器	桂賀貝岩	C-17	鍬	3.9	2.3	0.7	6.6	12023	錫器	
	682	調片石器	水晶	C-13	鍬	2.6	2.2	1.1	4.8	10510	錫器	

第30表 繩文時代の石器観察表3

※()は推定

群団番号	群団番号	器種	石材	出土試	層位	長さ		幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
						(cm)	(cm)					
130	662	刮削石器	ハリ黄安山岩	F-16	縫	3.6	2.7	1.0	4.3	10831	網器	
	683	刮削石器	ナゲート	D-12	縫	3.4	3.2	1.1	11.3	4690	網器	
131	684	刮削石器	ハリ黄安山岩	E-14	縫	3.7	3.2	1.4	9.9	6361	網器	
	685	刮削石器	ナビ日東	F-16	縫	3.2	3.5	1.0	7.8	4430	網器	
132	686	刮削石器	ハリ黄安山岩	D-10	縫	7.8	6.1	1.3	62.4	5467	網器	
	687	刮削石器	ホシシフルス	D-11	縫	6.3	3.7	1.0	23.5	6736		
133	688	刮削石器	ホシシフルス	E-10	縫	6.3	3.7	0.7	17.0	5007		
	689	刮削石器	ホシシフルス	C-12	縫	8.2	4.0	1.1	31.0	5134	網器	
134	690	刮削石器	ホシシフルス	E-12	縫	6.5	2.2	0.6	8.0	440		
	691	刮削石器	ホシシフルス	C-11	~	6.4	4.6	1.2	42.0	14380		
135	692	刮削石器	ホシシフルス	D-16	縫	(12.2)	(4.8)	0.7	31.5	~	網器	
	693	磨石	磨石	D-16	縫	7.3	5.0	1.2	51.0	3157		
136	694	刮削石器	ホシシフルス	B-16	縫	(2.6)	4.1	1.3	16.0	14082		
	695	刮削石器	ホシシフルス	B-16	縫	5.3	6.0	1.5	32.5	13419	網器	
137	696	刮削石器	神岩	C-12	縫	6.7	6.9	1.2	46.5	1090		
	697	磨石	磨石	D-15	縫	6.80	(8.2)	1.7	83.0	2866		
138	698	磨石	安山岩	D-10	縫	(8.9)	(10.9)	2.0	205.0	8347		
	699	磨石	磨石	C-11	縫	(12.4)	(15.9)	1.7	310.5	12569		
139	700	磨石	安山岩	C-14	縫	(4.5)	(8.5)	1.9	60.0	8507		
	701	磨石	安山岩	F-16	縫	(4.4)	(6.3)	1.9	60.5	4435		
140	702	磨石	安山岩	C-16	縫	(10.8)	(10.7)	2.4	245.0	3422		
	703	打削石斧	ホシシフルス	D-15	縫	(10.1)	6.3	3.3	342.5	4037		
141	704	打削石斧	ホシシフルス	F-19	縫	9.1	3.9	1.5	59.5	14233		
	705	打削石斧	ホシシフルス	D-10	縫	7.6	7.0	2.0	177.5	9672		
142	706	打削石斧	ホシシフルス	E-11	縫	10.9	3.4	1.3	52.0	7311		
	707	打削石斧	ホシシフルス	C-10	縫	8.7	8.0	2.1	185.0	13584		
143	708	打削石斧	ホシシフルス	C-10	縫	(7.1)	2.9	1.8	44.6	6801		
	709	打削石斧	ホシシフルス	C-16	縫	(8.1)	4.3	1.6	77.5	11127		
144	710	打削石斧	ホシシフルス	C-10	縫	8.2	3.7	1.8	60.2	13600		
	711	剪削石斧	ホシシフルス	C-19	縫	5.8	3.5	1.1	28.1	12774		
145	712	剪削石斧	ホシシフルス	C-15	縫	(6.8)	3.6	2.0	67.0	2008		
	713	剪削石斧	ホシシフルス	B-12	縫	7.1	2.8	1.7	26.1	13046		
146	714	剪削石斧	ホシシフルス	D-16	縫	(5.7)	4.8	1.9	75.7	10567		
	715	剪削石斧	ホシシフルス	E-11	縫	(8.3)	3.7	2.1	68.8	8823		
147	716	剪削石斧	ホシシフルス	E-12	縫	8.1	3.4	1.8	61.5	10130		
	717	剪削石斧	ホシシフルス	D-12	縫	(8.8)	4.9	1.2	53.5	782		
148	718	剪削石斧	ホシシフルス	C-19	縫	7.3	4.1	1.5	75.6	7537		
	719	剪削石斧	ホシシフルス	B-11	縫	9.2	3.4	1.3	46.5	12884		
149	720	剪削石斧	ホシシフルス	D-16	縫	12.3	5.3	1.4	98.0	3842		
	721	剪削石斧	ホシシフルス	D-16	縫	11.6	5.0	1.5	85.5	11522		
150	722	剪削石斧	ホシシフルス	C-12	縫	8.6	5.8	3.4	179.5	1393		
	723	剪削石斧	ホシシフルス	D-10	縫	8.4	3.9	1.4	53.4	9584		
151	724	剪削石斧	ホシシフルス	E-11	縫	(6.2)	4.7	1.5	62.5	10323		
	725	剪削石斧	ホシシフルス	C-11	縫	(6.8)	4.0	1.6	53.5	9878		
152	726	打削石斧	ホシシフルス	C-12	~	(4.8)	4.9	1.5	41.0	14403		
	727	打削石斧	ホシシフルス	D-10	縫	(5.3)	5.3	2.0	59.0	10802		
153	728	打削石斧	ホシシフルス	D-12	縫	8.7	4.0	2.1	62.5	6823		
	729	剪削石斧	ホシシフルス	D-16	縫	(7.0)	(5.0)	2.0	93.5	3838		
154	730	敲打具	ホシシフルス	D-12	縫	8.1	5.2	1.6	102.5	573		
	731	剪削石斧	ホシシフルス	D-11	縫	(5.9)	(7.2)	1.6	57.0	9333		
155	732	剪削石斧	ホシシフルス	E-17	縫	(3.8)	(7.0)	1.2	32.0	12294		
	733	剪削石斧	ホシシフルス	C-17	縫	(3.9)	3.9	1.0	23.5	7666		
156	734	剪削石斧	ホシシフルス	C-12	縫	(7.9)	5.0	2.0	87.5	5971		
	735	剪削石斧	ホシシフルス	D-10	縫	(4.6)	5.1	1.4	48.4	8124		
157	736	剪削石斧	ホシシフルス	D-11	縫	3.8	8.1	1.1	37.5	9356		
	737	剪削石斧	ハリ黄安山岩	D-16	縫	5.8	2.8	1.3	37.0	12528		
158	738	剪削石斧	ホシシフルス	C-12	縫	6.4	2.5	1.5	31.5	2732		
	739	剪削石斧	ハリ黄安山岩	D-14	縫	7.6	3.8	1.6	74.5	8466		
159	740	剪削石斧	ホシシフルス	E-12	縫	(3.5)	3.3	0.8	10.7	7190		
	741	剪削石斧	ホシシフルス	D-12	縫	(4.6)	4.0	1.2	29.0	8259		
160	742	剪削石斧	ホシシフルス	C-15	縫	6.9	3.5	1.1	38.5	13081		
	743	剪削石斧	ハリ黄安山岩	C-17	縫	7.5	3.5	1.0	41.0	3500		
161	744	剪削石斧	ホシシフルス	E-12	縫	8.6	4.2	1.8	90.5	78		
	745	剪削石斧	ホシシフルス	D-11	縫	(8.7)	7.6	2.1	139.0	8205		
162	746	剪削石斧	ホシシフルス	E-16	縫	(4.2)	4.3	1.1	20.3	10855		
	747	剪削石斧	ホシシフルス	C-12	縫	(5.7)	4.3	2.3	53.9	6937		
163	748	剪削石斧	ホシシフルス	F-17	縫	9.4	4.3	1.9	118.0	11360		
	749	剪削石斧	ホシシフルス	C-11	~	7.6	4.3	1.8	23.0	14382		
164	750	剪削石斧	ホシシフルス	D-16	縫	(6.2)	(4.0)	0.7	26.1	10075		

第31表 繩文時代の石器観察表4

※()は推定

邦国番号	品種番号	石種	石材	出土区	層位	長さ		幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
						(cm)	(cm)					
141	751	磨製石斧	砂岩	E-10	見	(5.2)	(6.9)	2.0	64.7	4971		
	752	磨製石斧	ホルンフェルス	D-12	見	(7.0)	4.8	1.7	81.5	12569		
	753	磨製石斧	砂岩	D-18	見	12.8	6.6	1.7	142.0	11281		
142	754	磨製石斧	ホルンフェルス	D-10	見	(5.0)	(4.3)	1.3	23.5	14446		
	755	磨製石斧	ホルンフェルス	E-18	見	(5.2)	3.7	1.4	37.4	13155		
	756	磨製石斧	ホルンフェルス	D-10	見	(4.8)	(4.8)	1.0	24.9	6696		
	757	磨製石斧	ホルンフェルス	D-13	見	(6.5)	(4.0)	0.9	31.8	9774		
	758	磨製石斧	ホルンフェルス	E-11	見	(6.2)	4.4	1.6	57.0	8085		
143	759	磨製石斧	ハリ雲安山岩	E-11	見	(3.2)	5.0	0.6	15.8	6345		
	760	磨製石斧	ホルンフェルス	C-11	見	(5.2)	5.0	1.4	65.9	6262		
	761	磨・磨石	砂岩	D-10	見	6.9	6.1	4.3	244.5	9735		
	762	磨・磨石	砂岩	F-16	見	6.8	5.8	3.9	192.0	10788		
	763	磨・磨石	砂岩	D-16	見	6.9	5.8	3.5	126.0	11515		
	764	磨・磨石	砂岩	D-16	見	11.6	10.0	5.7	890.5	3793		
	765	磨石	砂岩	B-11	見	10.1	8.9	4.6	709.0	7029		
144	766	磨・磨石	砂岩	B-15	見	6.2	5.4	3.2	172.2	13473		
	767	磨・磨石	砂岩	C-12	見	6.8	5.3	5.6	288.0	1118		
	768	磨・磨石	砂岩	C-16	見	7.8	6.7	3.6	244.5	11808		
	769	磨石	礫灰岩	C-10	見	7.4	6.8	5.6	386.5	13946		
	770	磨石	砂岩	E-15	見	7.6	6.7	4.3	299.0	12236		
	771	磨・磨石	砂岩	E-12	見	8.3	8.5	4.8	452.5	294		
	772	磨石	砂岩	D-15	見	8.3	7.2	4.3	366.5	7777		
145	773	磨・磨石	砂岩	C-11	見	9.1	7.8	5.1	667.0	13751		
	774	磨・磨石	花崗岩	E-12	見	8.2	7.2	3.3	291.5	6146		
	775	磨石	砂岩	C-15	見	9.9	9.0	4.0	544.5	8567		
	776	磨石	花崗岩	D-16	見	13.9	10.5	5.8	1047.5	3893		
	777	磨石	安山岩	D-12	見	7.6	4.9	3.4	189.5	2490		
	778	磨・磨石	花崗岩	D-12	見	8.2	5.9	3.0	215.5	2997		
	779	磨石	砂岩	D-14	見	9.1	6.6	4.1	354.5	8471		
146	780	磨・磨石	花崗岩	E-18	見	8.7	6.5	4.0	329.0	13266		
	781	磨・磨石	砂岩	C-11	見	8.5	7.0	3.6	310.0	13561		
	782	磨石	砂岩	D-17	見	8.2	7.0	3.9	313.5	12423		
	783	磨・磨石	礫灰岩	E-16	見	10.4	7.5	5.3	587.0	10835		
	784	磨・磨石	砂岩	B-12	見	9.8	6.5	4.2	448.0	13725		
	785	磨・磨石	砂岩	E-12	見	11.0	8.2	4.7	650.0	8020		
	786	磨・磨石	砂岩	E-13	見	10.7	8.5	4.4	628.0	5391		
147	787	磨・磨石	安山岩	B-11	見	10.6	8.6	4.4	607.5	2182		
	788	磨・磨石	花崗岩	E-13	見	10.6	8.3	5.7	253.5	7078		
	789	磨・磨石	礫灰岩	E-16	見	11.9	9.4	5.1	908.0	12444		
	790	磨・磨石	砂岩	C-11	見	9.3	4.8	2.9	161.7	7209		
	791	磨・磨石	安山岩	C-11	見	8.6	5.8	4.1	265.5	10265		
	792	磨・磨石	花崗岩	B-15	見	7.7	6.3	4.0	261.0	13471		
	793	磨・磨石	砂岩	E-16	見	12.6	6.1	2.1	217.5	10852		
148	794	磨・磨石	砂岩	B-17	見	(8.6)	8.3	3.0	305.5	11594		
	795	磨・磨石	花崗岩	D-20	見	8.8	8.2	4.4	449.0	12103		
	796	磨・磨石	礫灰岩	E-20	見	10.3	9.1	5.8	650.5	13106		
	797	磨・磨石	花崗岩	D-15	見	(6.7)	(5.6)	3.5	150.0	11848		
	798	磨・磨石	砂岩	C-12	見	10.3	8.2	5.0	523.0	5890		
	799	磨・磨石	礫灰岩	B-13	見	7.7	6.2	4.1	265.5	1752		
	800	磨石	砂岩	E-16	見	10.1	8.7	3.3	208.5	9403 - 10836		
149	801	磨石	砂岩	C-15-D-18	見・薄	(9.5)	8.8	4.7	419.5	3011 - 13351		
	802	磨・磨石	砂岩	C-14	見	19.6	14.5	5.3	1760.4	-46		
	803	磨・磨石	砂岩	E-18	見	(6.6)	8.7	5.2	344.0	13339		
	804	磨・磨石	砂岩	C-14	見	(4.5)	6.5	4.4	129.0	7135		
	805	磨・磨石	砂岩	D-11-D-17	見	8.3	7.2	4.5	381.0	8773 - 9433		
	806	磨石	安山岩	D-14	見	7.0	9.0	4.8	312.5	7106		
	807	磨石	砂岩	C-14	-	10.3	8.7	5.2	426.5	14412		
150	808	磨石	砂岩	B-16	見	(4.1)	(8.8)	2.7	111.0	14103		
	809	磨石	砂岩	C-15	見	9.60	(10.5)	3.2	341.5	9918		
	810	石牌	安山岩	C-11	-	4.9	4.1	1.5	45.2	14341		
	811	石牌	安山岩	B-12	見	6.2	4.5	2.1	78.0	13804		
	812	石牌	安山岩	E-11	-	6.6	4.6	2.0	85.3	14602		
	813	石牌	砂岩	D-11	見	(7.3)	3.5	2.0	90.5	9074		
	814	石牌	砂岩	B-11	見	(9.2)	3.7	3.7	207.0	12670		
151	815	石牌	砂岩	D-10	見	(10.0)	6.9	3.0	246.0	9663		
	816	圓形牌	安山岩	C-10	見	7.1	4.3	4.1	144.5	12763		

第V章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

平良上C遺跡の自然科学分析は、平成27年10月にテフラ分析5点をパリノ・サーヴェイ株式会社へ、11月に放射性炭素年代測定10点、及び種実同定13点を(株)加速器分析研究所に依頼した。それぞれの分析結果の詳細は以下に述べる。

第2節 放射性炭素年代

1 測定対象試料

平良上C遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町井俣2521番地ほかに所在し、シラス台地を南北に開析する田原川左岸の台地上に立地する。測定対象試料は、堅穴住居跡や連穴土坑等から出土した炭化物10点である(第32表)。なお、年代測定試料と同じ遺構を含む遺構出土試料の種実同定が実施され、炭化鱗茎等が検出されている(第V章第3節参照)。

試料が出土した遺構はⅣ層、Ⅴ層から検出されている。Ⅳ層が薩摩火山灰、上位のⅤa層がアカホヤ火山灰で、Ⅵ層、Ⅶ層が縄文時代早期の遺物包含層とされる。

2 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l(1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「Aaa」と第32表に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)の測定を行う。測定では、米国国立標準

局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からの差を千分偏差(‰)で表した値である(第32表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) 14C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第32表に、補正していない値を参考値として第33・34表に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第32表に、補正していない値を参考値として第33・34表に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参

考値として第33・34表に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

5 測定結果

試料の測定結果を第32～34表に示す。

計10点のうち、試料9を除く9点の試料の14C年代は、 8950 ± 40 yrBP（試料2）から 8810 ± 30 yrBP（試料5）の狭い範囲にまとまる。暦年較正年代（ 1σ ）は、最も古い試料2が $8250 \sim 7999$ cal BCの間に4つの範囲、最も新しい試料5が $7958 \sim 7796$ cal BCの範囲で示される。

試料9の14C年代は 8280 ± 30 yrBP。暦年較正年代（ 1σ ）は $7452 \sim 7198$ cal BCの間に3つの範囲で示される。

これら10点の試料は、おおむね縄文時代早期前半頃に相当する年代値となっている（小林編2008）。火山灰層との上下関係に整合的な結果である。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337–360
 小林達雄編 2008 縄文遺跡と文化。総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
 Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869–1887
 Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon 19(3), 355–363

第32表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正値）

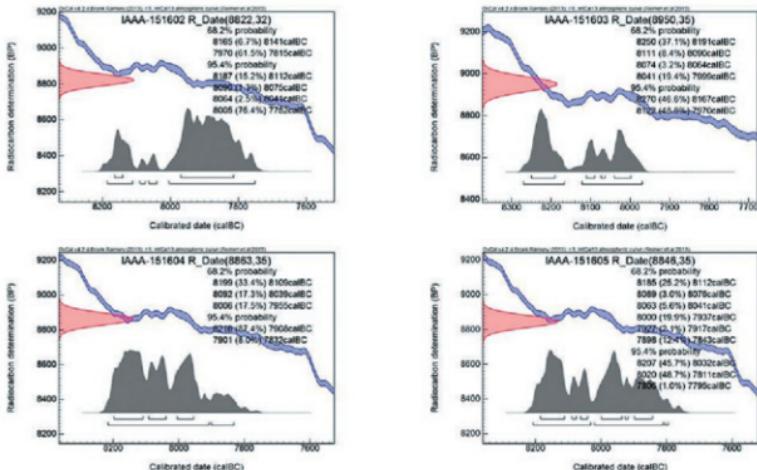
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-151602	1	堅穴遺構1号 墓層（検出面）	炭化物	AaA	-24.25 \pm 0.25	8,820 \pm 30	33.34 \pm 0.13	
IAAA-151603	2	堅穴遺構2号 墓層（検出面）	炭化物	AAA	-27.52 \pm 0.23	8,950 \pm 40	32.82 \pm 0.14	
IAAA-151604	3	堅穴住居跡1号 墓層（検出面）	炭化物	AaA	-25.73 \pm 0.30	8,860 \pm 40	33.18 \pm 0.15	
IAAA-151605	4	堅穴住居跡2号 墓層（検出面）	炭化物	AaA	-26.90 \pm 0.23	8,850 \pm 40	33.25 \pm 0.15	
IAAA-151606	5	堅穴住居跡3号 墓層（検出面）	炭化物	AAA	-27.40 \pm 0.29	8,810 \pm 30	33.40 \pm 0.15	
IAAA-151607	6	連穴土坑1号 墓層（検出面）	炭化物	AAA	-27.13 \pm 0.28	8,920 \pm 40	32.94 \pm 0.15	
IAAA-151608	7	連穴土坑2号 墓層（検出面）	炭化物	AaA	-26.22 \pm 0.25	8,850 \pm 40	33.24 \pm 0.15	
IAAA-151609	8	連穴土坑3号 墓層（検出面）	炭化物	AaA	-23.77 \pm 0.30	8,890 \pm 30	33.06 \pm 0.14	
IAAA-151610	9	集石32号 墓層（検出面）	炭化物	AAA	-27.89 \pm 0.24	8,280 \pm 30	35.67 \pm 0.15	
IAAA-151611	10	土坑3号 墓層（検出面）	炭化物	AAA	-26.31 \pm 0.24	8,840 \pm 40	33.29 \pm 0.15	

第33表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）(1)

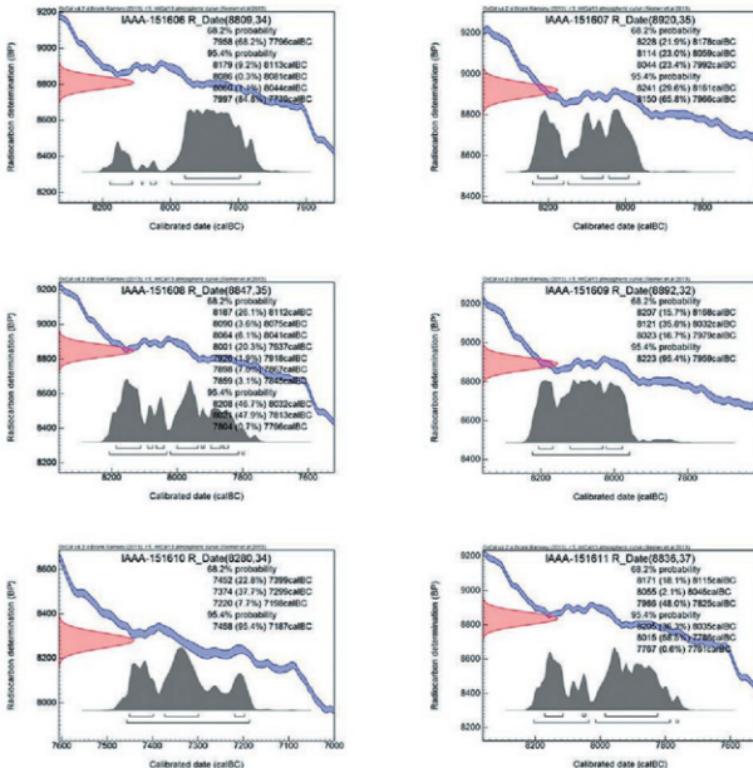
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 未補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151602	$8,810 \pm 30$	33.40 ± 0.13	$8,822 \pm 32$	8165calBC – 8141calBC (6.7%) 7970calBC – 7815calBC (61.5%)	8187calBC – 8112calBC (15.2%) 8090calBC – 8075calBC (1.3%) 8064calBC – 8041calBC (2.5%) 8005calBC – 7752calBC (76.4%)
IAAA-151603	$8,990 \pm 30$	32.65 ± 0.14	$8,950 \pm 35$	8250calBC – 8191calBC (37.1%) 8111calBC – 8090calBC (8.4%) 8074calBC – 8064calBC (3.2%) 8041calBC – 7999calBC (19.4%)	8270calBC – 8167calBC (46.6%) 8122calBC – 7970calBC (48.8%)
IAAA-151604	$8,870 \pm 40$	33.13 ± 0.15	$8,863 \pm 35$	8199calBC – 8109calBC (33.4%) 8092calBC – 8039calBC (17.3%) 8006calBC – 7965calBC (17.5%)	8216calBC – 7908calBC (87.4%) 7901calBC – 7832calBC (8.0%)

第34表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151605	8,880 ± 40	33.12 ± 0.15	8,846 ± 35	8185calBC - 8112calBC (25.2%) 8089calBC - 8076calBC (3.0%) 8063calBC - 8041calBC (5.6%) 8000calBC - 7937calBC (19.9%) 7927calBC - 7917calBC (2.1%) 7898calBC - 7843calBC (12.4%)	8207calBC - 8032calBC (45.7%) 8020calBC - 7811calBC (48.7%) 7806calBC - 7795calBC (1.0%)
IAAA-151606	8,850 ± 30	33.23 ± 0.14	8,809 ± 34	7958calBC - 7796calBC (68.2%)	8179calBC - 8113calBC (9.2%) 8086calBC - 8081calBC (0.3%) 8060calBC - 8044calBC (1.1%) 7979calBC - 7739calBC (84.8%)
IAAA-151607	8,960 ± 40	32.80 ± 0.14	8,920 ± 35	8228calBC - 8178calBC (21.9%) 8114calBC - 8059calBC (23.0%) 8044calBC - 7992calBC (23.4%)	8241calBC - 8161calBC (29.6%) 8150calBC - 7966calBC (65.8%)
IAAA-151608	8,870 ± 30	33.16 ± 0.14	8,847 ± 35	8187calBC - 8112calBC (26.1%) 8090calBC - 8075calBC (3.6%) 8064calBC - 8041calBC (6.1%) 8001calBC - 7937calBC (20.3%) 7926calBC - 7918calBC (1.9%) 7898calBC - 7867calBC (7.0%) 7859calBC - 7845calBC (3.1%)	8208calBC - 8032calBC (46.7%) 8021calBC - 7813calBC (47.9%) 7804calBC - 7796calBC (0.7%)
IAAA-151609	8,870 ± 30	33.14 ± 0.13	8,892 ± 32	8207calBC - 8168calBC (15.7%) 8121calBC - 8032calBC (35.8%) 8023calBC - 7979calBC (16.7%)	8223calBC - 7959calBC (95.4%)
IAAA-151610	8,330 ± 30	35.46 ± 0.15	8,280 ± 34	7452calBC - 7399calBC (22.8%) 7374calBC - 7299calBC (37.7%) 7220calBC - 7198calBC (7.7%)	7458calBC - 7187calBC (95.4%)
IAAA-151611	8,860 ± 40	33.20 ± 0.15	8,836 ± 37	8171calBC - 8115calBC (18.1%) 8055calBC - 8046calBC (2.1%) 7986calBC - 7825calBC (48.0%)	8205calBC - 8035calBC (36.3%) 8015calBC - 7786calBC (58.5%) 7767calBC - 7761calBC (0.6%)



暦年較正年代グラフ1 (参考)



暦年校正年代グラフ2（参考）

第3節 種実同定

はじめに

本分析調査では、平良上C遺跡（鹿児島県曾於郡大崎町井伏2521番地ほか所在）より出土した炭化種実の同定を実施し、当時の植生や植物利用に関する資料を作成する。

1 試料

試料は、集石や堅穴住居等より出土した炭化種実とされる13点（試料番号11～23）26個である（第35表）。試料は全て乾燥しており、表面に泥が付着した状態である。

試料が出土した遺構はVI層、VII層、VIII層から検出され

ている。Ⅷ層が鹿摩火山灰、上位のVa層がアカホヤ火山灰で、VI層、VII層が繩文時代早期の遺物包含層とされる。

なお、種実同定試料と同じ遺構を含む遺構出土試料の放射性炭素年代測定が実施され、火山灰層との上下関係に整合的な結果が得られている（第V章第2節参照）。

2 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な炭化種実等をピンセットで抽出する。炭化種実等の同定は、現生標本や文献等を参考に実施し、結果を一覧表で示す。

3 結果

結果を第35表に示す。全13試料を通じて、同定が可能な炭化種実が確認されなかった。種実以外では、炭化鱗茎、炭化材、土粒、安山岩片などが確認された。炭化鱗茎は、試料番号11より破片が3個、試料番号14より完形未満が1個、破片が2個、試料番号17より完形未満が1個、試料番号19より完形未満が1個、破片が1個、試料番号20より破片が3個の計12個が確認された。

鱗茎は炭化しており黒色、径3~5mm程度の広卵~球体を呈す。上下面観より、鱗茎を構成する薄い葉が中軸から層状に巻いて重なる構造が確認される（第150図-4a）。基部は切形で根が伸びる状況は不明瞭である。鱗片葉の表面には、微細な横長の粒状網目模様が綴列する状況が確認された（第150図-5）。

Rauh, Werner (1950)によれば、「鱗茎植物は、ほとんど全部といつてもよいほど単子葉植物、ことにユリ科に集中しており、ユリ型とネギ型がある」とされる。ユリ科ユリ属やユバユリ属などにみられるような、鱗茎を構成する葉は鱗片状に成長し、細い葉柄で茎に接着して屋根瓦のように重なりあう「ユリ型」と、ユリ科ネギ属やヒガンバナ科スイセン属、ヒガンバナ属などにみられるような、葉柄が鞘状に閉じた筒になり、横断面では重なり合った葉が同心円を描く「ネギ型」のうち、今回確認された炭化鱗茎は後者の「ネギ型」と考えられる。

佐竹ほか（1982）によれば、本地域に分布するネギ属はノビル、ヤマラッキヨウ、ヒガンバナ属はショウキズイセン、ヒガンバナ、キツネノガミソリがある。このうち、ノビルとヒガンバナは鱗茎が食用される有用植物で、古い時代に渡來した説もある。スイセン属にはスイセンがあるが、渡來種で有毒のため、今回の同定候補からは外している。これらの鱗茎の形状は、ヤマラッキヨウが

狹卵形で、ノビルが球形、ショウキズイセンが卵球形、ヒガンバナとキツネノガミソリが広卵形と記載されている（佐竹ほか、1982）が、現生標本には変異がある。出土鱗茎は広卵~球体を呈し、ノビルの形状に似るが、現生標本との比較検討が不十分である。

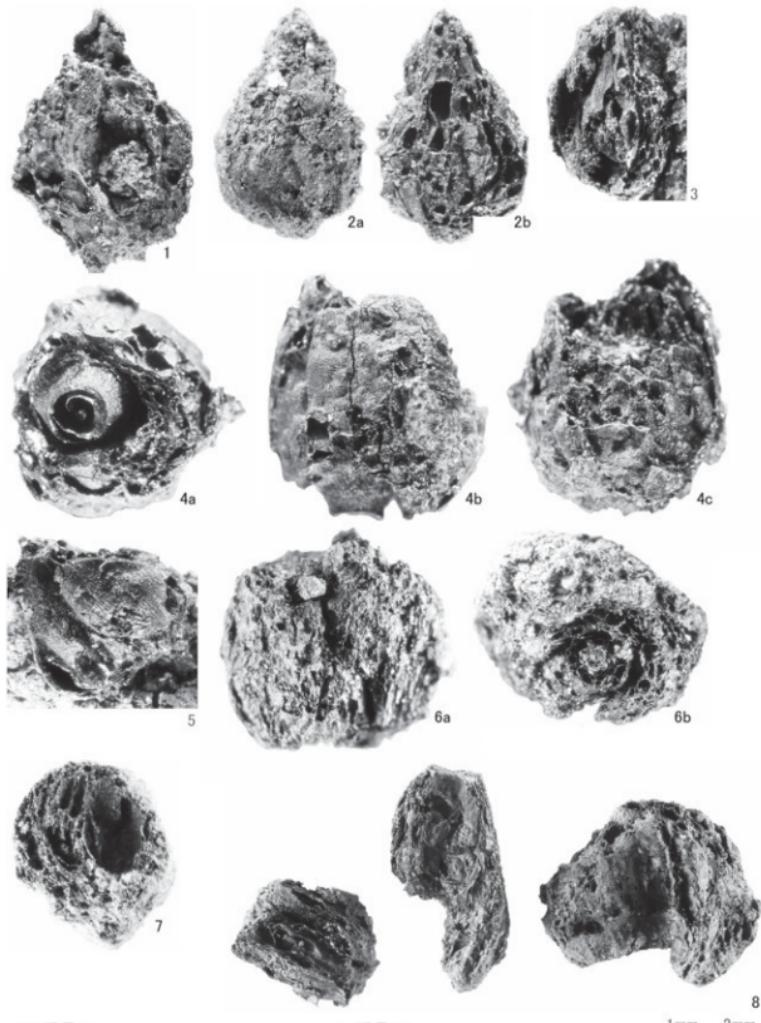
近年では、走査型電子顕微鏡を使用して炭化した鱗茎の葉の組織を観察し、同定する試みも実施されている（佐々木ほか、2014など）。試料を破壊する必要があるため、本分析では、非破壊条件下で可能な限りの記録に努め、ネギ型の可能性を指摘するにとどめる（第150図）。鱗茎類はデンプン質に富むため、古くから採取され、食用に利用されてきた有用植物である（山本、2002など）。今回確認されたネギ型と考えられる炭化鱗茎は、植物質食料として利用され、火を受けた可能性が考えられる。今後の分析精度の向上による分類群の特定と資料蓄積を踏まえた本遺跡周辺における鱗茎の利用状況の検討が望まれる。

文献

- Rauh, Werner. 1950. Morphologie der Nutzpflanzen. 2. Aufl. [中村信一・戸部博(訳), 2009. 植物形態の事典(新装版). 朝倉書店, 340p].
- 佐々木由香・米田恭子・小林和貴. 2014. 遺跡出土炭化鱗茎同定のための識別方法. 第29回日本植生史学会退会講演要旨集, 43.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫. 1982. 日本の野生植物 草本I 単子葉類. 平凡社, 305p.
- 山本直人. 2002. 繩文時代の植物採集活動—野生根茎類食料化的民俗考古学的研究—. 淡水社, 250p.
- ※ 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

第35表 炭化種実同定結果

試料番号	遺構	層位	点数	炭化種実の分類群・部位	炭化種実以外(点数)
11	集石29号	VII	3	未検出	炭化鱗茎(破片3)
12	集石1号	VII	4	未検出	炭化材(4), 土粒(1)
13	集石2号	VIII	4	未検出	炭化材(4)
14	集石14号	VII	3	未検出	炭化鱗茎(完形未満1, 破片2), 土粒(1)
15	堅穴住居2号ベルト埋土⑤	VII	1	未検出	炭化材(1)
16	堅穴住居2号ベルト埋土⑦	VIII	1	未検出	炭化材(1)
17	堅穴住居3号ベルト埋土西側	VIII	1	未検出	炭化鱗茎(完形未満1)
18	連穴土坑2・3号	VII	1	未検出	炭化材(1)
19	No.2924	VII	2	未検出	炭化鱗茎(完形未満1, 破片1)
20	No.13291	VI	3	未検出	炭化鱗茎(破片3)
21	No.13491	VII	1	未検出	炭化材(2)
22	No.13924	VII	1	未検出	安山岩片(1)
23	No.14077	VII	1	未検出	炭化材(1)



1. 番号11

3. 番号11

5. 番号14(横長の細胞が配列)

7. 番号17

2. 番号11

4. 番号14(a:同心円状構造)

6. 番号19

8. 番号20

1mm 2mm
(1-7) (8)

第150図 墓化植物

第4節 テフラ分析

はじめに

曾於郡大崎町に所在する平良上C 遺跡は、非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス（鹿児島県地質図編集委員会、1990）からなる台地上に位置する。台地は、南北方向に流下する田原川の左岸側に広がり、東方を流れる菱田川により区切られている。台地上面の標高は約 40 m とされ、小高い丘を境に東側は緩やかに下る平坦面、西側は田原川の沖積低地に向かう急斜面となっている。発掘調査では、縄文時代早期とされる土器や集石などが確認されているが、約 7,300 年前に起った鬼界カルデラの噴火時に発生した地震による噴砂とされる土層も確認されている。

本報告では、噴砂とされる層位も含めて、分層された各層位におけるテフラの産状を明らかにし、各層の年代観を検証する。

1 試料

試料は、調査区内の土層断面より採取された火山灰土 5 点である。調査区内の基本層序は、発掘調査所見により表土の I 層から基盤のシラスの X 層まで分層されていて。これららのうち、VI 層と VII 層は縄文時代早期の遺物包含層とされ、VII 層は 12,800 年前に桜島より噴出した桜島薩摩テフラ (Sz-S: 小林、1986; 町田・新井、2003) 層とされている。遺物包含層の上位の火山灰土層である V 層は、上位より Va, Vb-a, Vb-b, Vb-c, Vc の各層に細分されている。V a 層は約 7,300 年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ (K-Ah: 町田・新井、1978; 2003) の火山灰層であり、Vb-a 層は、K-Ah 噴出時の地震により発生した液状化に伴い堆積したシラスと K-Ah の火山灰の混在する土層、Vb-b 層は噴砂により堆積したシラスの層、Vb-c 層は白色の軽石をわずかに含む淡黄褐色土層、Vc 層は K-Ah の噴火において最初に噴出した幸屋軽石 (町田・新井、2003) とされる軽石が堆積する黄褐色土層である。

試料は、Vb-b, Vb-c, Vc, VI, VII の各層より 1 点ずつ採取され、順に試料番号 1 ~ 5 が付されている。分析時の観察では、試料番号 1 は径 1 ~ 2 mm の白色軽石が微量含まれ、細粒の火山ガラスが多量に含まれる砂質の褐土、試料番号 2 は最大径 20 mm、多くは径 2 ~ 3 mm の橙色軽石が散在する黄褐色土、試料番号 3 は最大径 15 mm、多くは径 2 ~ 5 mm の橙色軽石が多量に散在する黄褐色土、試料番号 4 は径 1 ~ 1.5 mm の黄色軽石が微量点在する暗褐色土、試料番号 5 は径 2 ~ 3 mm の黄色軽石が極めて微量含まれる黒褐色土である。いずれの試料の軽石も風化して脆弱であり、指で容易につぶせる状態である。(第36 表)

第36表 テフラ組成分析試料一覧

試料番号	採取層位	採取位置	発掘調査所見	
			色調など	特徴
1	Vb-b	E-21 区南壁	乳茶褐色砂質土	噴砂により堆積したシラス
2	Vb-c	E-21 区南壁	淡黄褐色土	白色バニスをわずかに含む
3	Vc	E-21 区南壁	黄褐色土	アカホヤ火山灰の軽石
4	VI	E-21 区南壁	暗茶褐色土	縄文時代早期の遺物包含層
5	VII	E-21 区南壁	黒褐色土	縄文時代早期の遺物包含層 細かい黄白色バニスを含む

2 分析方法

試料より適量を採取し、水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250 メッシュの分析篩にて水洗して粒径が 1/16mm より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径 1/4mm~1/8mm の砂分を、ボリタングステン酸ナトリウム (比重約 2.96 に調整) により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黑色金属光沢を呈するものののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉱物分については、火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の 3 つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた纖維束状のものとする。

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象として、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

3 結果

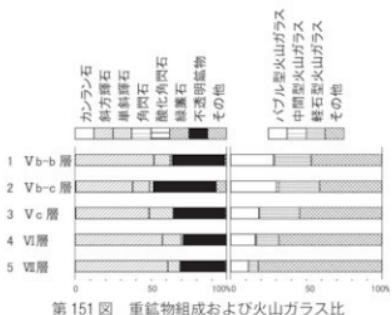
(1) テフラ組成分析

分析結果を第37表、第151図に示す。重鉱物組成は、5 点ともに斜方輝石と不透明鉱物を主体とし、少量の单斜輝石と微量～極めて微量の角閃石を含むという組成である。詳細にみれば、V 層の試料である試料番号 1 ~ 3 では斜方輝石と不透明鉱物とが同量程度であり、VI 層と VII 層の試料である試料番号 4 と 5 では斜方輝石の方が有意に多い。

火山ガラス比では、5点の試料ともにバブル型と軽石型が同量程度に混在する組成であるが、火山ガラス全体の量比は、VII層の試料番号5からVb-b層の試料番号2にかけて上位ほど多くなる傾向を示す。

(2) 屈折率測定

各試料の測定結果を第152~154図に示す。以下に火山ガラスと斜方輝石に分けて述べる。



第151図 重鉱物組成および火山ガラス比

試料番号	層	カラン石	鉄方輝石	鹿島輝石	有闇石	不透明鉱物	極薄石	中間層火山ガラス	輻石	その他	合計			
1 Vb-b 層	0	130	27	3	0	0	87	3	250	71	2	60	117	250
2 Vb-c 層	1	94	28	6	0	1	103	17	250	26	4	67	103	250
3 Vc 層	1	121	40	0	0	0	86	2	250	47	1	66	136	250
4 VI 層	0	144	31	3	0	0	72	0	250	41	2	37	170	250
5 VII 層	0	153	20	0	0	0	75	2	250	30	0	16	204	250

1) 火山ガラス

Vc層の試料番号3以外の4点の試料は、いずれも下限はn1.498または1.497、上限は1.499または1.500でモードはn1.499という狭いレンジに集中する火山ガラスが主体を占める。これらのうち、試料番号1と2では、n1.510から1.513まで範囲を示す高屈折率の火山ガラスが微量混在し、試料番号5ではn1.506から1.513までの範囲を示す高屈折率の火山ガラスが微量混在する。

Vc層の試料番号3では、n1.499~1.500の火山ガラスとn1.510~1.512の火山ガラスが同量程度で混在している。

2) 斜方輝石

V層の試料である試料番号1~3の3点では、下限がγ 1.707または1.708、上限がγ 1.712~1.714、モードがγ 1.710または1.711という特性の斜方輝石と、γ 1.730前後からγ 1.735前後の範囲を示す高屈折率の斜方輝石とが混在する。両者の量比は、Vc層の試料番号3では、前者の方がやや多く、Vb-b層の試料番号1では両者同量程度となる。また、試料番号1にはγ 1.720前後を示す斜方輝石も微量含まれる。

VII層の試料番号4では、γ 1.706~1.712の斜方輝石とγ 1.724~1.734の高屈折率の斜方輝石とが混在し、VII層の試料番号5では、γ 1.704~1.712の斜方輝石とγ 1.732~1.734の斜方輝石とが混在する。

4 考察

Vb-b層の試料番号1およびVb-c層の試料番号2で検出された火山ガラスは、バブル型と軽石型が同量程度に混在する形態組成とn1.499前後の非常に狭いレンジに集中するという屈折率の特徴とから、町田・新井(1976)のいう姶良Tn火山灰(AT)に由来すると考えられる。ATはシラス台地を構成している姶良入戸火碎流から舞い上がった細粒物であるから、Vb-b層およびVb-c層には多量のシラスに由来する碎屑物が含まれていることが確認される。なお、両試料の斜方輝石における高屈折率の方の値もATに一致するものであり、すなわち高屈折率の斜方輝石もシラス由来の碎屑物である。これらの結果は、Vb-b層が噴砂により堆積したシラスとする発掘調査所見を支持すると言える。なお、Vb-b層とVb-c層の層の低屈折率の斜方輝石は、後述するVc層の主体を占める斜方輝石の屈折率とほぼ同様のレンジとモードであることから、下位の幸屋軽石中の碎屑物に由来する可能性が高い。ただし、Vb-b層中にはγ 1.720前後のものも微量含まれているが、これらについては現時点ではその由来は不明である。また、Vb-b層の下位のVb-c層も、火山ガラスと斜方輝石の屈折率の状況から、その母材となっている碎屑物の多くは、シラス由来の碎屑物からなることが推定される。

Vc層では上述したシラス由来の火山ガラスと同量程度の高屈折率の火山ガラスが混在する。この高屈折率のレンジはK-Ahの火山ガラスのレンジとほぼ一致することから、高屈折率の火山ガラスは、幸屋軽石由来の碎屑物である可能性が高い。また、斜方輝石の屈折率において主体を占めるレンジもK-Ahのそれにはほぼ一致する。このこともVc層中には幸屋軽石由来の碎屑物が多量に含まれていることを示している。

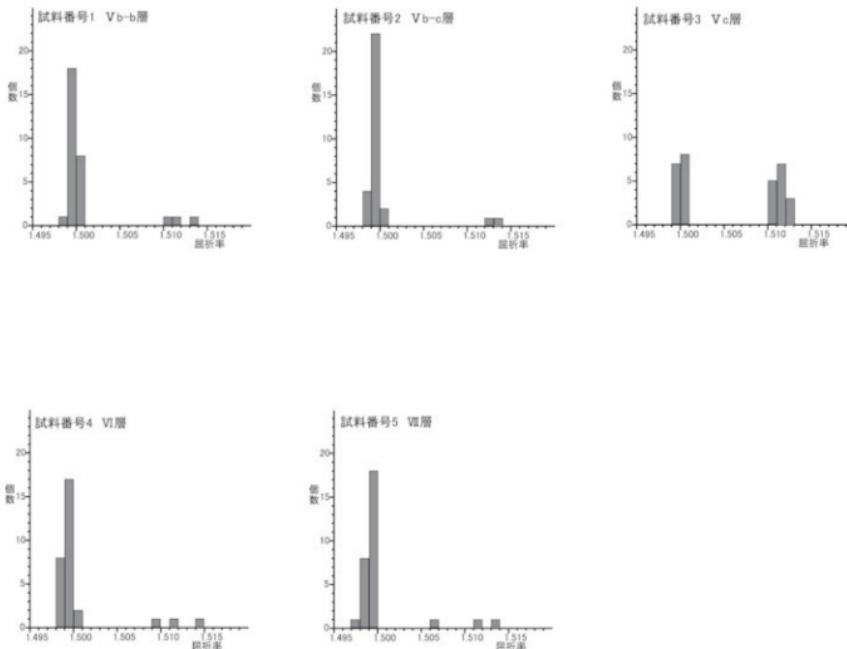
VII層およびVIII層では、火山ガラスの屈折率の状況から、その土壤の母材となっている碎屑物にはシラス由来の碎

屑物が多量に含まれていることが推定される。ただし、火山ガラスにおいてはシラス由来の火山ガラスよりも高屈折率のものが微量含まれ、斜方輝石においてはシラス由来の斜方輝石よりも低屈折率のものが同量程度含まれている。これらの火山ガラスと斜方輝石は、その屈折率の値と発掘調査所見による層位から、Ⅶ層よりも下位のⅨ層に堆積するSz-Sに由来する可能性が高いと考えられる。

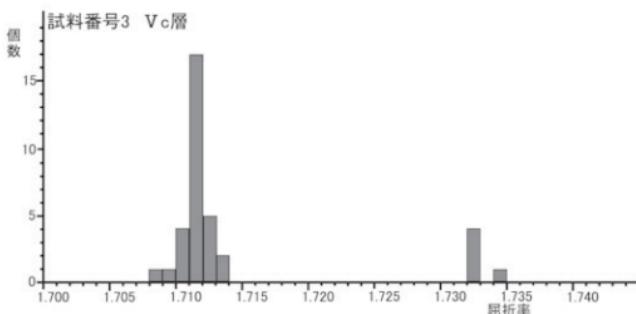
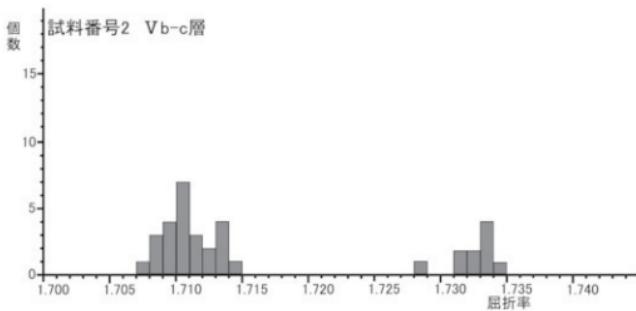
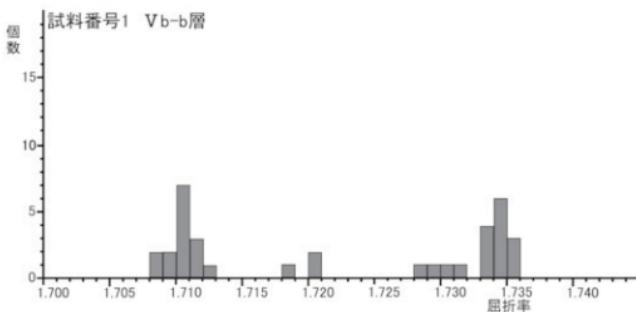
なお、平良上C遺跡の地理的位置を考慮すれば、Sz-SとK-Ahの間には、桜島を給源とする桜島13(Sz-13)、桜島12(Sz-12)、桜島11(Sz-11)のいずれかのテフラ(小林, 1986; 町田・新井, 2003)が降下堆積した可能性があると考えられる。しかし、火山ガラスや斜方輝石の屈折率も含めたこれらのテフラの特性はSz-Sと重複するところが大きいために、今回のような搅乱によるテフラの混在が起こっているなかでの検出状況では、各テフラとSz-Sとの識別は難しい。

引用文献

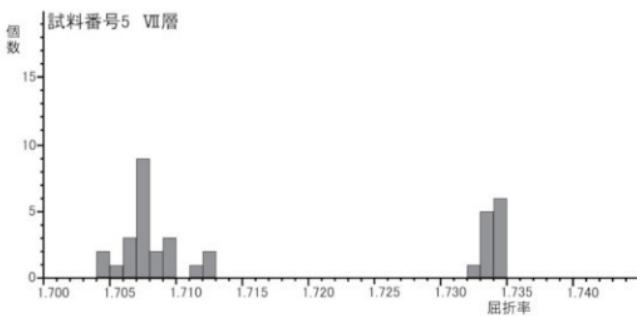
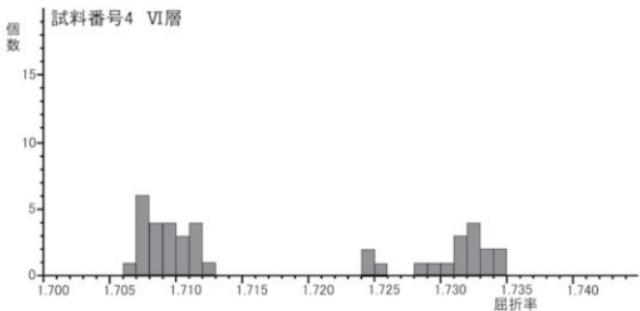
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 鹿児島県地質図編集委員会, 1990, 鹿児島県地質図縮尺10万分の1. 鹿児島県.
- 小林哲夫, 1986, 桜島火山の形成史と火碎流. 文部省科学研究費自然災害特別研究. 計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火碎流等)の特質と災害」(代表者荒牧重雄) 報告書, 137-163.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.



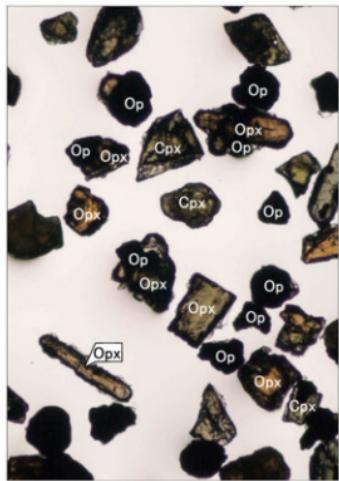
第152図 火山ガラスの屈折率



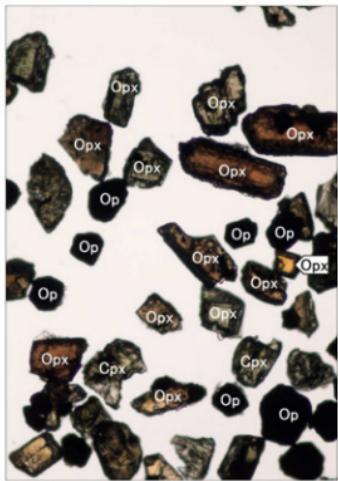
第153図 斜方輝石の屈折率1



第154図 斜方輝石の屈折率2



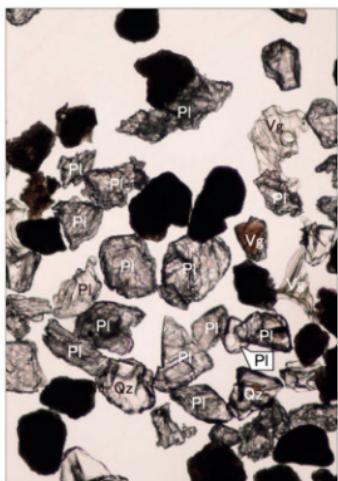
1.重鉱物(Vb-c層;2)



2.重鉱物(VII層;5)



3.火山ガラス(Vb-c層;2)



4.火山ガラス(VII層;5)

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス. Qz:石英. Pl:斜長石.

0.5mm

第155図 重鉱物・火山ガラス

第VI章 総括

第1節 遺構について

本遺跡からは、堅穴住居跡6軒、堅穴遺構2基、連穴土坑3基、土坑15基、集石34基が検出された。

1 遺構の配置

遺構の配置には、次のような特徴が見られる。

- (1) 堅穴住居跡・堅穴遺構・連穴土坑は、調査区東側斜面の同じエリアから検出された。このエリア内には、土器の出土が少ない。
- (2) 集石は14区の尾根部分の東側のエリアと調査区西側の斜面のエリアに大きく分かれる。また、西側斜面の集石は、谷筋状に多く位置する。集石の検出エリアは、全遺物の出土範囲と重なる。
- (3) 土坑は堅穴住居跡を中心とするエリアと集石のエリアの両方に検出されるが、大半は集石エリアにある。
- (4) 堅穴住居跡を中心とするエリアと集石エリアは明確に分かれている。

遺構の時期的な分別がなされていないが、これらの特徴から遺跡内においてエリアの使い分けが行われていたことが窺える。また、明確にエリアが分かれることから時期的な重複は少ないと思われる。さらに、遺構は14区の尾根を取り囲むように位置していることから、遺跡は調査区外の北西方向へ広がる可能性はある。

2 遺構の時代

いずれの遺構においても床面直上からの出土がないなど、遺構の時代を特定する資料はなかった。ここでは、遺構の検出状況、出土遺物等から遺構の時代に関して記述する。

6軒の堅穴住居跡が検出された。内5軒からVI類（下剥峯式土器）が、1軒からは貝殻刺突文を施した土器が埋土中から確認されている。3号堅穴住居跡と4号堅穴住居跡は切り合い関係にあり、後者が新しい。

また、土坑が15基検出されているが、その埋土内からVI類土器が出土したものが5基、遺物が確認されなかつたものが5基で最も多かった。さらに、遺跡内で34基検出された集石のうち、遺物を確認できなかつた集石が10基あった。他の型式の土器と共に伴う集石もあるが、残りの24基中、II類（加栗山式土器）・III類（吉田式土器）・VII類（桑ノ丸式土器）・VI類（土器）がそれぞれ3基、IV類（石坂式土器）が6基、IX類（押型文土器）が1基、VI類土器が13基の集石から確認されている。VI類土器より新しいとされている土器を伴つたものは27号集石だけで、VI類土器であった。つまり、12基の集石ではVI類土器から後の時代の遺物は確認されていない。集石の

多くがVI類土器の時期に伴うものと思われる。

1～3号堅穴住居跡、1・2号堅穴遺構、1～3号連穴土坑、3号土坑から出土した炭化物の年代測定を行った。1～3号堅穴住居跡の埋土中から出土した炭化物の年代測定結果は 8860 ± 40 yrBP～8,810 ± 30yrBP、残りの6点は 8800 yrBP代が4点、 8900 yrBP代が2点という結果であった。遠部慎氏は年代学に基づいた円筒貝殻文土器の大まかな編年的な位置づけを行い、「石坂式は概ね 8900 BP代にまとまり、桑ノ丸式は 8735 ± 35 、 8540 ± 45 BP」という測定値である。（遠部 2009）と述べている。本遺跡の遺構出土の炭化物の年代測定結果は、概ね 8800 yrBP代にまとまり、下剥峯式土器の年代観と符合する。これらのことから本遺跡検出の遺構の多くは下剥峯式土器の時期である可能性が高い。また、本遺跡において、土器の出土量が多いのは下剥峯式土器であり、その圧倒的な量からして一定期間この付近に留まり、生活していたと推測できる。

3 堅穴遺構について

堅穴遺構が2基検出されているが、当初検出した平面プランは堅穴住居跡と同じであった。しかし、床面形状が凹凸であったことから堅穴遺構とした。埋土観察用に遺構内に残したベルトを観察しながら掘り下げたが、平坦な床面は確認できなかった。そのため、床の凹凸面は遺構築成時の掘削痕と推測し、床面を作らなければ構築物として役割を果たせないと思われることから、機能的には堅穴住居跡を想定しているが、詳細は不明である。

第2節 土器について

1 出土状況について

土器はI類からXV類に分類した。の中でもVI類（下剥峯式土器）の出土量は圧倒的に多かった。ここでは、類毎の出土量に違いがあるが、その特徴を述べる。

調査区を9～13区付近の西側斜面、14区付近の尾根部分、15～22区の東側斜面に分けた場合、各類土器により、その出土密度に違いがある。土器の出土密度が高くなるのが西側斜面、次いで東側斜面、密度が明らかに低くなるのが尾根部分という特徴を示すのが、II類（加栗山式土器）・III類（吉田式土器）・IV類（石坂式土器）・VI類（下剥峯式土器）・VII類（桑ノ丸式土器）であった。IX類（押型文土器）は、斜面と尾根部分の出土密度が高く、斜面で低くなる。X類（平柄式土器）は、斜面の出土密度が高く、尾根部分、斜面の順となる。堅穴住居跡等の時期が特定できないことから、遺構との関連性に言及できないが、時代によって生活の場としての機能

に違いがあると思われる。XI類（塞ノ神式土器）とX類（苦浜式土器）は出土地点が限定され、個体数も少ないことから一定期間生活を営んだ状況ではない。人の営みの痕跡は岩本式土器に始まり、加栗山式土器の時期、IV類土器の時期を経てVI類土器の時期にピークを迎える。VII類土器・X類土器の時期に減少し続け、VI類土器・XV類土器の時期には僅かなものとなり、前期以降は全くなくなる。生活の痕跡は、ほとんど縄文時代早期のみに限定されるという特徴のある遺跡である。

また、14区付近には馬の背状の尾根が南東から北西へ延びるが、この尾根を超えて調査区の東側と西側で接する土器がある。本書に掲載した土器分だけであるが、II類土器で1点、III類土器で1点、IV類土器で7点、VI類土器で10点、VII類土器で2点、VIII・IX・X類土器でそれぞれ1点確認した。このうち、VII類土器は、VI類土器とVIII類土器との関連性が考えられるものである。VIII類は無文の土器、XV類は型式不明であり、時代の特定は難しい。これらの状況については第156~159図に示し、VI類については断面図も添えた。調査区の東側緩斜面の土器が馬の背状の尾根を超えて西側の斜面へ流れ込むことは考えにくく、さらに、いくつかの類にわたって見られることから人為的な行為の結果であり、東側緩斜面と西側斜面の役割に違いがあったことが推察される。一つの可能性として、調査区東側の緩斜面は生活の場であって、そこで破損した、もしくは破損させた土器を調査区西側の斜面に移動させたことも考えられる。つまり、ほぼ純粹に人為的な行動の結果として西側斜面、東側緩斜面に土器が出土していると思われる。

2 円筒形以外の器形をもつ土器について

本遺跡から不自然な屈曲部など円筒形以外の器形を窺わせる土器が出土し、X類として掲載した。具体的には円筒形土器の胴部の場合、横方向へは一定の済曲をもつが、途中でその度合いが異なるものがある。また、明確な角部をもつもの及び口唇部が済曲しないで直線的に延びるものがある。その文様からVI類土器・VIII類土器・VII類土器に分類できる。口縁部片の場合、波状口縁となり、波頂部外面から下方へ屈曲が続く。ただし、波状口縁の波頂部外面に薄く粘土を貼り付け、粘土を貼り付けた部分のみに屈曲部を作るものも出土していることから、波頂部付近の小片の場合は、判断できないこともあります。さらに、胴部片には横断面の形状が弧状に屈曲するものと明確な角部を持つものがある。弧状に屈曲する土器のその角度は、多くが 120° ~ 140° であった。明確な角部をもつ3点の土器は 90° ~ 100° で屈曲し、内面は弧状の済曲となる。底部片に関しては、 140° 前後の角度となる。また、口唇部の上面観が直線的に延びるもの、もしくは僅かしか済曲しないものも出土した。さらに、直線的な上面観に加えて扁平な胴部をもつ土器も出土して

いる。

完形品の出土がないことから全体像は明確でないが、口縁部・胴部・底部片に屈曲をもつ土器片があること、上面観の直線的な口唇部、扁平な胴部片から円筒形以外の器形をもつ土器があると思われる。さらに、90度程度に屈曲する胴部片からは、角筒形土器も想定される。

この円筒形以外の器形をもつ一群は、前述のようにVI類土器・VII類土器・VIII類土器に分類できる。そのほとんどがVI類で、VII類土器が1点、VIII類土器が1点であった。VIII類土器には、横長の瘤状突起を貼り付けるもの、全容では不明だが突帯を巡らすと思われるものがある。

3 VI類土器とVII類土器について

(1) 出土状況について

本遺跡における土器の出土量で圧倒的に多いのがVI類土器で、次いで多いのがIV類とVII類土器ではほぼ同量である。ここでは、VI類土器とVII類土器の関係について、その出土状況やVIII類土器等を手掛かりに述べる。

VI類土器とVII類土器の出土状況を平面的に示したもののが第160図である。いずれも調査区の西側斜面にあたる9~12区と東側の緩斜面の15~18区に多く出土し、調査区の東端に向かっては出土量が少なくなり、尾根部分にあたる14区では出土量が少なくなる傾向にある。

次に、調査区の西側斜面と東側緩斜面での出土点数とその割合を示したのが、第38表である。この表では西側斜面と東側緩斜面での出土点数の区別を明確にするために14区から出土した土器は集計から省いてある。

第38表 土器出土割合

	西側斜面 (割合)	東側緩斜面 (割合)
II類	523点 (83%)	107点 (17%)
IV類	680点 (78%)	188点 (22%)
VII類	2438点 (61%)	1554点 (39%)
VIII類	424点 (62%)	257点 (38%)
X類	36点 (14%)	226点 (86%)

第38表からは、VI類土器とVII類土器の出土量は異なるものの、西側斜面と東側緩斜面からの出土割合がほぼ同じであることと、II類土器・IV類土器及びX類土器の出土割合が明瞭に異なることがわかる。

前述のとおり、調査区の西側斜面と東側緩斜面に出土する土器片は流れ込みによる移動がないことを前提にすれば、VI類土器を使用していた集団とVII類土器を使用していた集団の行動パターンが同じか、同じ集団がVI類土器とVII類土器を使用していたことが考えられる。第38表の数値からすると同じ集団か、もしくは近い集団の可能性が高いと思われる。ただし、古い時期の土器など西側斜面から出土する割合が高い。のことから、それぞれの土器を使った集団がそれ以前の集団が遺跡内に放置

した土器片を処理した可能性は否定できない。しかし、VI類土器を使った集団が散乱したIV類土器を処理する一方で、自分達が使用し散乱した土器を処理しないまま生活することは考えづらい。

(2) VII類土器等について

VII類土器はVI類・VIII類土器と強い関連性が窺えることから、ここではその特徴について述べる。

・分布状況

VII類土器の出土点数は少ないが、VI類土器及びVIII類土器の分布状況と同じように14区の尾根部分には相対的に少なく、西側及び東側には多いという特徴がある。

・器形

本類の器形は、胴部から口縁部にかけて直線的に開くかやや内湾するものである。また、口縁部断面が方形となり、口唇部に平坦面を作るものが多い。さらに、平口縁及び波状口縁があり、いずれにも瘤状突起が貼付されるものもある。これらの特徴は、VI類・VIII類土器と共に通する。

・文様

本類の文様は、貝殻刺突文と条痕文や沈線で文様を構成する。貝殻刺突文を全面に施すVI類土器のモチーフと条痕文や沈線で文様を構成するVIII類土器のモチーフを併せ持つものが、本類土器であると思われる。

さらに、VI類土器の刺突文を条痕文に、VIII類土器の条痕文を刺突文に置き換えることで、VII類土器の文様構成となるものがいくつかある。例えば、VII類土器の

407~409(第90・91図)は、口縁部に条痕文を巡らせ、その下位に鋸歯状に条痕文を配して文様を構成する土器である。この口縁部に施される横位の条痕文を刺突文に置き換えるとVII類土器の429・430(第94図)の文様構成となる。また、VI類土器の341(第84図)は胴部に刺突文を横位に巡らせ区画し、その間を斜位の刺突文で充填し文様を構成する。この横位の刺突文を沈線に置き換えることでVII類土器の442~448(第95図)の文様構成に極めて類似する。ただ、全ての文様構成が類似するわけではない。VII類土器の437~439(第94図)のように、縦位の条痕文で胴部を区画し、その間に斜位の貝殻刺突文を施す文様構成は、VI類・VIII類土器にはない。

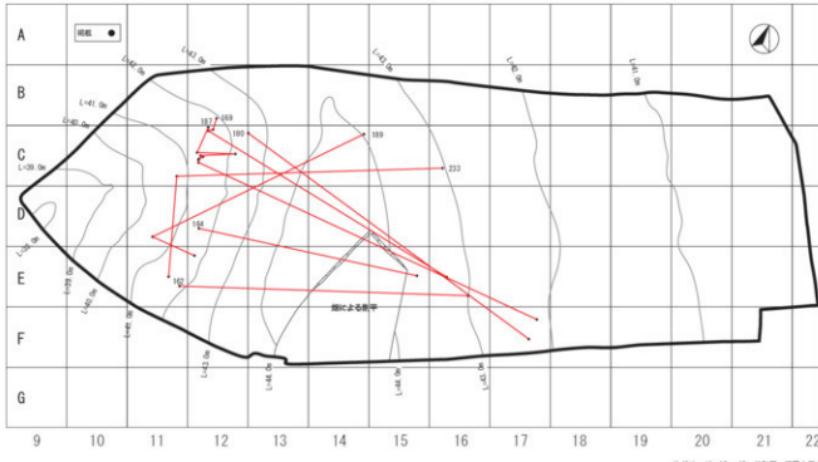
・その他

VII類土器には白色の砂粒を含むものが多い点は、VI類土器とVIII類土器と共通する。

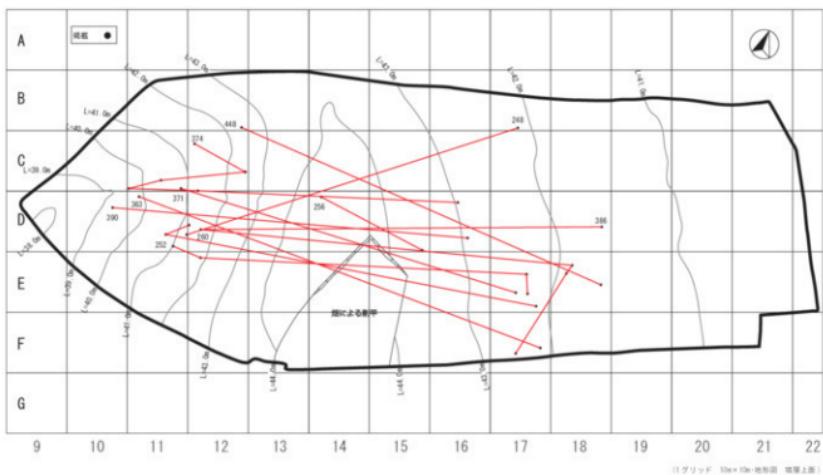
内面調整は、全般的に丁寧なナデ調整が行われ、なかには底部まで及ぶものもある。これは、VI類・VIII類土器とも共通する。

(3) 小結

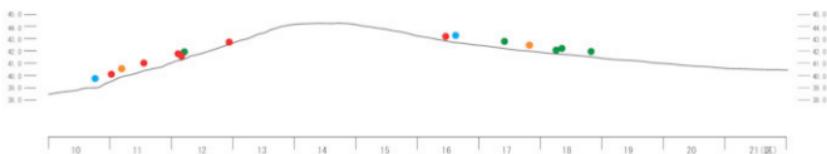
VII類土器はVI類土器・VIII類土器のものも器形や文様等の特徴を備えていること、VI・VIII・VII類土器に円筒形以外の器形をもつものがあることから、VII類土器を介してVI類土器とVIII類土器が近い関係にあると思われる。さらに、VI類土器とVIII類土器の出土状況、それぞれの土器を使用した集団が同じか、非常に近い集団である可能性が指摘できることから、VI類土器とVII類土器の関係は、時



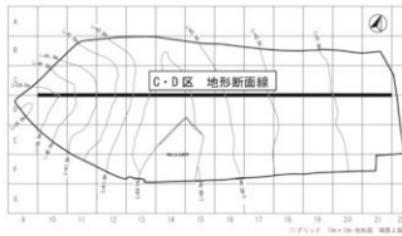
第156図 IV類土器接合状況図



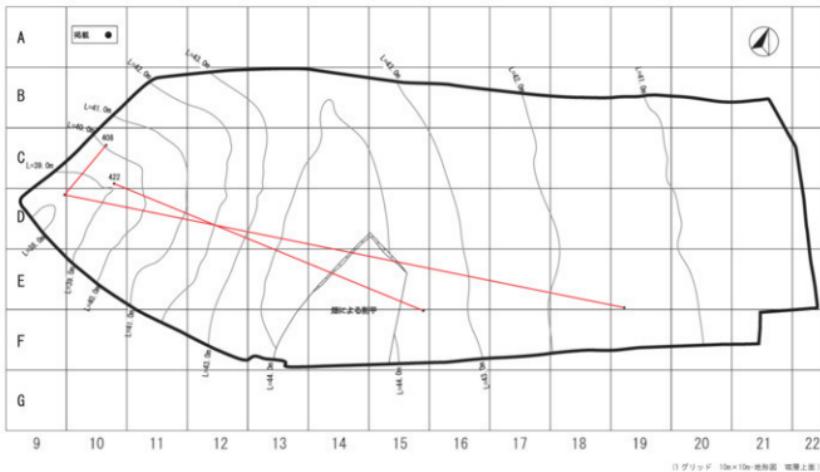
第157図 VI類土器接合状況図



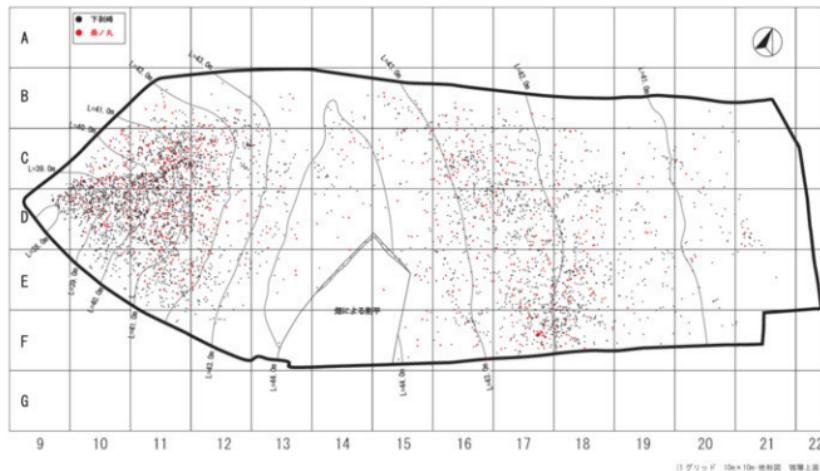
- 363
- 374
- 386
- 390



第158図 VI類土器接合状況図（断面）



第159図 VII類土器接合状況図



第160図 VI・VII類土器出土状況図

間的にも空間的にも非常に関係が深いと窺われる。Ⅵ類土器をⅦ類土器からⅧ類土器への変遷過程と捉えるより、さらに近い関係にあるⅥ類・Ⅶ類・Ⅷ類土器と思われる。

第3節 石器について

平良上C遺跡の縄文時代の石器は剥片石器、礫石器、磨石、敲石など多くの石器が出土した。これらは調査区内で製作・使用・廃棄されたものが多く、石材の素材は様々で総数は1924点であった。

剥片石器では石礫や石核のほか、搔器・削器・楔形石器として利用されたものが出土した。素材は黒曜石、チャート・水晶が多く、珪質頁岩や玉髓などは少量であった。桑ノ木津留産黒曜石が最も多く分布し、C・D-14区やC-16・17区で製品とともに調整剥片が多く出土している。特に石礫を製作する際のプランディングチップが多くみられ、それぞれに一定の集中域がみられるところから、その場での製作行為が考えられる。次に針尾産黒曜石が多くB-16区、C-17区に集中して分布し、桑ノ木津留産黒曜石の分布と比較的類似している。このことから、これらの素材を積極的に利用していたと考えられる。また、日東産黒曜石と三船産黒曜石はF-16区に分布しており、こちらも比較的近い場所に散布している。日東産黒曜石は、石礫とともに調整剥片が確認できる。三船産・腰岳産・姫島産黒曜石は調整剥片がほとんどなく、石礫や削器などの製品のみが出土する傾向であった。そのため、これらの石材は剥片や製品として持ち込まれた可能性が考えられる。石礫は基部が浅く正三角形のものから、基部に抉りが施された二等辺三角形のもの等が出土した。石礫の調整剥片は、打面部分に先行する剥離面を残すもののや貝殻状の不定形な剥片が出土している。堅穴住居跡、連穴土坑、集石の空間とは異なるところで石器の調整剥片や製品のまとまりがみられた。そのことから、石器を製作する空間と居住空間が分けられていたとも想定できる。礫石器ではホルンフェルスを用いた打製石斧や部分肩製石斧の破損品、調整剥片が多く出土している。石斧のほとんどが扁平で、破損品では頭部と刃部(刃先部分)が多く残されている状況であった。その他、線刻繩が出土しているがその意図を理解できるような表現はみられなかった。

第4節 噴砂について

本遺跡では、鬼界カルデラの噴火時の地震による液状化現象で生じた噴砂がみられた。遺跡内で噴出口は確認されなかつたが、アカホヤ火山灰層の間に、明瞭な砂層が堆積していたことから、噴砂が生じたことが推定される。

噴砂は標高の高い尾根部以外の全域でみられ、特に谷

部では厚く、軽石の量も多くなっている。幸屋降下軽石が旧地形に沿って堆積しており、噴砂も同様に堆積している。そして噴砂が堆積した直後にアカホヤ火山灰に覆われたため、類似した状況で保存されたと推定される。

噴砂層のV b層は、色調や軽石の特徴から3つに細分した。V b-a層は主に谷部でみられ、厚さは約10cmで、軽石を主体とし、軽石は最大径が10cm大、多くは3cm大からなる。成尾英仁氏から、軽石の特徴から入戸火山碎流堆積物本体もしくは二次堆積物に由来すると所見を得た。軽石主体となった理由については、液状化で噴出した水に浮遊した軽石が、最終的に沈降して砂層の上位に堆積したものと推定される。また、これと同時にアカホヤ火山灰が降下したため、アカホヤ火山灰と軽石とが混在する特異な堆積構造を形成したと考えられる。V b-b層は尾根部以外の全域でみられ、厚さは約20cmで、1~2mm大の白色軽石を微量含む砂質土である。V b-c層は尾根部の東側のみでみられ、厚さは約2cmで、最大径は2cm大、多くは2~3mm大の橙色軽石を含む砂質土である。自然科学分析(テフラ分析)により、V b-b層及びV b-c層もシラスに由来するという結果を得ている(第V章第3節参照)。

近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって、液状化現象(噴砂)が確認された事例が増加している。大崎町永吉の永吉天神段遺跡、大崎町仮宿の荒園遺跡などでは、いずれも縱横にのびる砂脈がみられた。本遺跡では噴砂の噴出口は確認されず、平面での堆積のみであった。これについて成尾氏は「本遺跡の地下に液状化発生層が存在しなかつたためか、あっても液状化が起こらなかつた、すなわち遺跡外で液状化が起こり、噴出した砂が遺跡内に流れこんできたと推定される。本遺跡は南西へ強く傾斜する地形であることが、液状化に影響した可能性がある。」とした。

一引用参考文献一

- 遠部 憲 2009 「円筒形貝殻文土器群の炭素14年代測定」『南九州縄文通報』
新東 晃一 2008 「早期南九州貝殻文系土器」『縄文総覧』
八木澤一郎 2008 「平格局・塞ノ神式土器」『縄文総覧』
黒川 忠広 2002 「南九州貝殻文系土器1」『南九州縄文研究会』
「永吉天神段遺跡 第1地点」2016 理文調査センター発掘調査報告書(8)
「上野原遺跡(第10地点)」2001 県理文センター発掘調査報告書(28)

写真図版



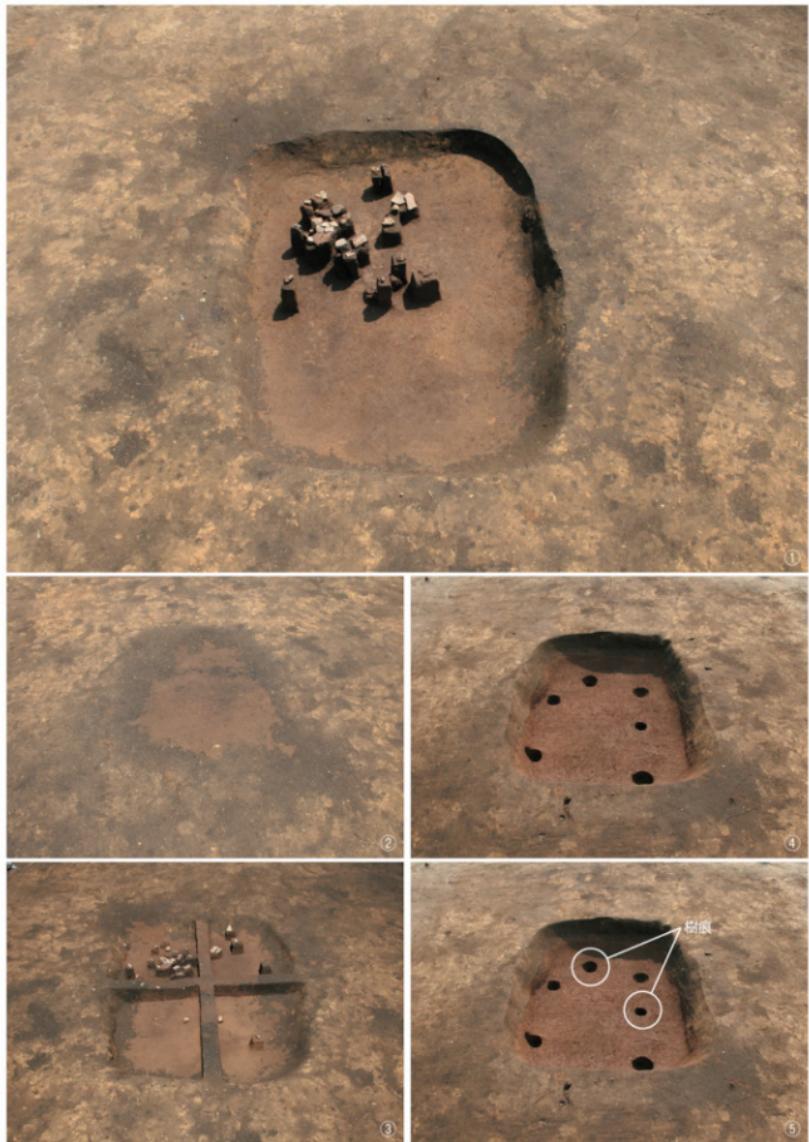
遺跡遠景（志布志方面を望む）

図版2



土層断面ほか

①～③土層断面 ④遺物出土状況 ⑤遺構検出状況 ⑥作業風景 ⑦現地指導

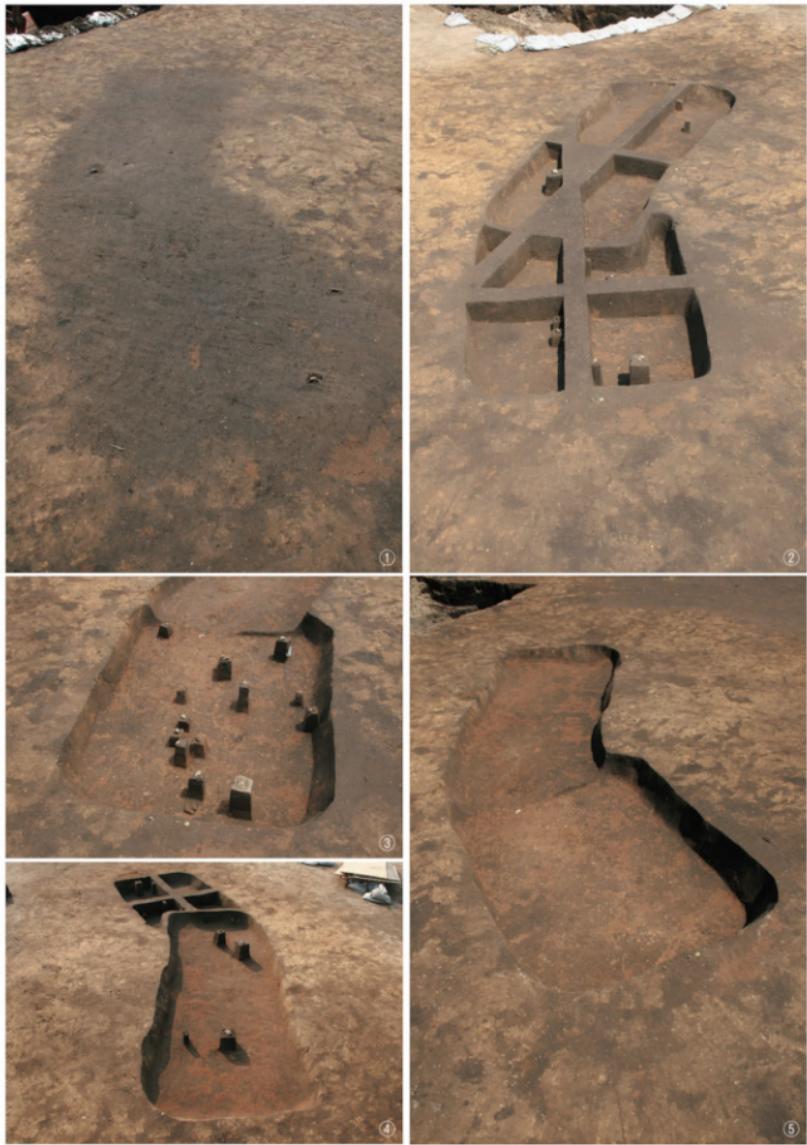


竖穴住居跡 1号
①遺物出土状況 ②検出状況 ③埋土状況 ④⑤完掘状況

図版4



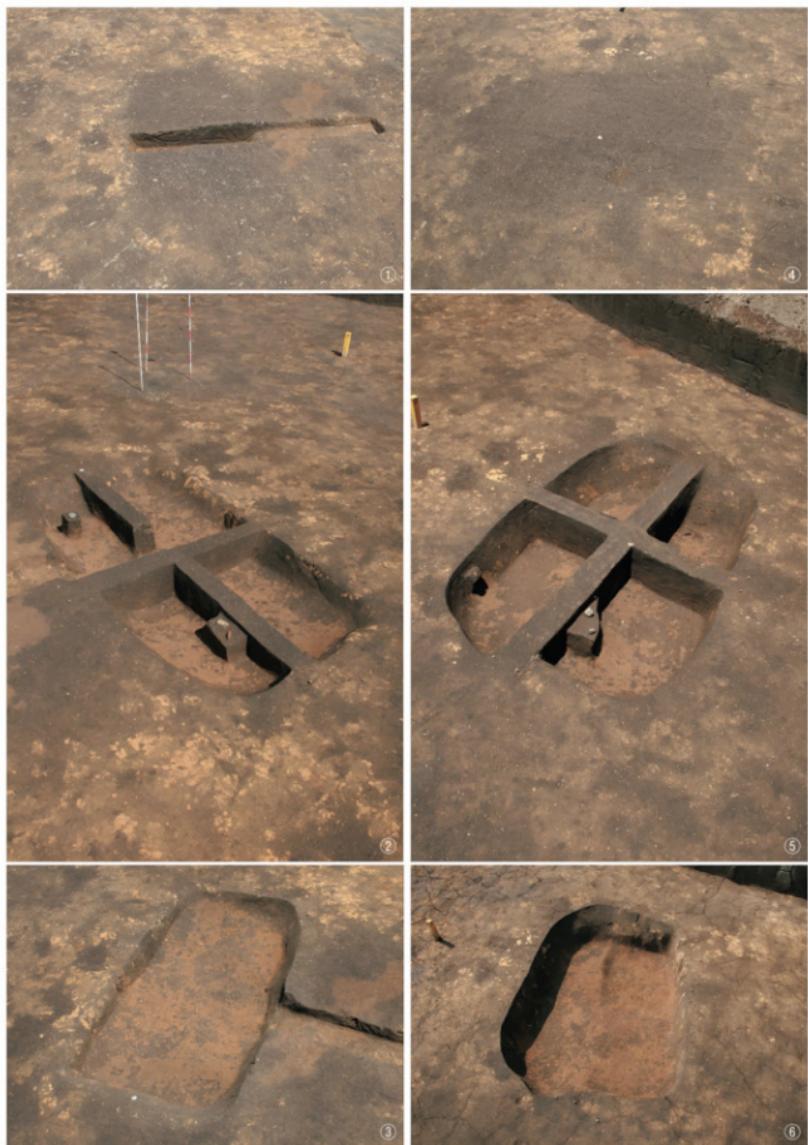
①検出状況 ②埋土状況(全体) ③作業風景 ④埋土状況 ⑤完掘状況 ⑥遺跡遠景



竖穴住居跡3号・4号

①検出状況 ②埋土状況 ③3号遺物出土状況 ④4号遺物出土状況 ⑤完掘状況

図版6



竪穴住居跡 5号・6号

①5号検出状況 ②5号埋土状況 ③5号完掘状況 ④6号検出状況 ⑤6号埋土状況 ⑥6号完掘状況



① 1号·2号検出状況 ② 1号検出状況 ③ 1号埋土状況 ④ 1号完掘状況
⑤ 2号検出状況 ⑥⑦ 2号埋土状況 ⑧ 2号完掘状況

图版8



天穴土坑1号
① 挖出状况 ② 填土状况 ③④ 完掘状况



①2号・3号検出状況 ②2号・3号埋土状況 ③2号・3号完掘状況
④1～3号（手前2号・3号、奥1号）

图版 10



土坑检出状况

- ① 1号土坑埋土状况 ② 2号土坑检出状况 ③④ 3号土坑埋土·完据状况
⑤⑥ 8号土坑埋土·完据状况 ⑦⑧ 13号土坑埋土·完据状况